

筑波大学博士（文学）学位請求論文

元結研究

加藤 敏

二〇一九年度

目次

序章	一
----	-------	---

第一編 時代との対峙

第一章 元徳秀の受容	一一
はじめに	一一
第一節 元徳秀の伝記資料	一三
第二節 李華の元徳秀像	一五
(一) 貧窮と孝養	一五
(二) 出仕と帰隠	一九
(三) 治績	二一
第三節 李華の元徳秀像の継承	二二
第四節 「元魯公墓表」——元徳秀の称賛と世俗の教化	二五
おわりに	三一
第二章 愚者の視座——「自述三篇」	三八
はじめに	三八
第一節 狂者・学者・隠者・愚者	四〇
第二節 愚者の自覚	四八

第三節 愚者の命	五四
第四節 商余山中の世界―癒やしの構造	五八
おわりに	六一
第三章 諷諭の視座―寓言	六六
はじめに	六六
第一節 「喩友」	六七
第二節 『元子』	七四
第三節 元結の寓言―「寢論」	七七
第四節 柳宗元の「斬曲几文」と元結の「悪曲」	八〇
第五節 元子の自称	八九
おわりに	九七
第四章 王朝への求心性―「引極三首」「演興四首」	一〇四
はじめに	一〇四
第一節 「引極三首」―閉塞感の超克	一〇四
第二節 「演興四首」―王朝への求心性	一二
おわりに	二五
第五章 規諷と邂逅（一）―説楚賦三編	二九
はじめに	二九
第一節 「説楚何荒王賦」	三一
第二節 「説楚何惑王賦」と直士の諫言	四〇

第三節	「説楚何惛王賦」と在野の忠臣の規諫	一四六
第四節	在野の士と天子	一五二
おわりに		一五六
第六章	規諷と邂逅（二）——「系楽府十二首」	一六〇
はじめに		一六〇
第一節	歌謡への確信	一六一
第二節	「系楽府十二首」	一六八
第三節	歎怨への着目	一六九
第四節	「系楽府十二首」における歎怨の情の表出	一七五
第五節	表現者の視座	一七八
第六節	君主との邂逅	一八一
おわりに		一八五

第二編 諷諭の展開

第一章	『篋中集』編纂	一九一
はじめに		一九一
第一節	編纂の意図をめぐって	一九二
第二節	「篋中集序」	一九四
第三節	埋もれた詩人たちの顕彰	一九六

第四節	『篋中集』と「系樂府十二首」	二〇三
第五節	諷諭による表現	二一一
おわりに		二一七
第二章	「大唐中興頌」の成立	二二〇
はじめに		二二〇
第一節	「大唐中興頌」の解釈をめぐって	二二一
第二節	制作の背景	二二五
第三節	「時議三篇」の視座	二二八
第四節	頌について	二三五
おわりに		二三九
第三章	「春陵行」と「賊退示官吏」	二四一
はじめに		二四一
第一節	「謝上表」と「奏免科率狀」	二四二
第二節	「謝上表」「奏免科率狀」と「春陵行」の位相	二四八
第三節	「賊退示官吏」における「官吏」	二五六
おわりに		二六二
第四章	「春陵行」・「賊退示官吏」と杜甫「同元使君春陵行」	二六五
はじめに		二六五
第一節	「同元使君春陵行并序」	二六五
第二節	「春陵行」「賊退示官吏」の影響	二七三

おわりに	二七九
第五章 漫叟の視座	二八二
はじめに	二八二
第一節 「自釈」に見られる称呼	二八二
第二節 浪士	二八五
第三節 漫叟	二九〇
第四節 元子と漫叟	二九五
おわりに	二九九

第三編 自適の位相

第一章 初唐における水石の描写	三〇四
はじめに	三〇四
第一節 宮廷詩人の描く水石のたたずまい	三〇六
第二節 初唐の四傑、陳子昂の水石	三一四
第三節 怪石	三一七
第四節 初唐詩における奇と怪	三二二
第五節 張説の山水賞翫	三二九
おわりに	三三四
第二章 怪異な水石への志向	三三八

はじめに	三三八
第一節 奇怪な水石	三三九
第二節 価値を賦与される水石	三四九
第三節 怪石に生じる別乾坤	三五三
第四節 水石と諷諭	三五八
第五節 憂憤を癒やす水石	三六二
おわりに	三六四
第三章 浯溪と「大唐中興頌」	三六七
はじめに	三六七
第一節 浯溪の空間	三六八
第二節 銘の諸相	三七九
(一) 諷諭としての銘	三七九
(二) 感懷の表出としての銘	三八八
第三節 諷諭の内在化	三九四
おわりに	三九七
結章	四〇〇
【初出一覧】	四二五
【参考文献】	四二七

凡例

- 一、本論で引用する元結の作品は、孫望校『元次山集』（中華書局、一九六〇年）による。
- 一、作品の制作年及び元結の経歴は、孫望著『元次山年譜』（古典文学出版社、一九五七年）ならびに楊承祖著『元結研究』（国立編訳館、二〇〇二年）所載の「元結年譜」による。
- 一、元結以外の詩文については、『四部叢刊』初編、『全唐詩』、『全唐文』、遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局、一九八三年）、嚴可均校輯『全上古三代秦漢三國六朝文』等によった。
- 一、使用する漢字は、原則として常用漢字体を用いた。

序章

本論は、唐代の社会派の詩人、文章家とされる元結（七一〇～七七二）、字次山について、その文学を特徴づけている諷諭の表現と尚古的文学観、そして怪奇な水石への志向を考究し、元結の文学の新たな解釈を提示するとともに、彼を盛唐期の諷諭の詩人として位置づけたものである。

諷諭とは、遠回しに、そして婉曲に相手を諭す^{（注）}ことを言い、文学的な営為としては、『詩経』以来の風雅（風雅比興）の文学観に基づいて詩歌を制作し、あるいは寓意を含んだ文章を著して諭すものである。ある表現者の文学的な営為としての諷諭について考える時には、その諷諭の営みがどのような様態であるのか、そして諷諭がその表現者にとって如何なる価値、意味を持つのか、という二つの視座から検討を加えることが必要となる。その上で、諷諭という営みがなぜ可能となったのかということが問われねばならない。

元結について言えば、詩歌の社会的機能を追求することによって確立された諷諭の表現には、『詩経』以来の風雅比興の文学に立脚し、婉曲に諭すということとともに、強く戒め、あるいは忠告するという意識が顕著に窺われる。こうした諷諭の営みを元結自身は特に規諷^{（注）}と称している。規諷とは、規勸諷諭、すなわち婉曲に諭し、戒め忠告することであり、この語は、天宝六載（七四七）に著された「二風詩論」（巻一）において、「二風詩」（巻一）が「系古人規諷之流（古人規諷の流れを系ぐ）」ものであると述べる中に見えている。また元結の場合は、諷諭が単なる表現の方法ではなく、自らのうちに内在化しているところにその特色を認めることができる。そしてこうした諷諭の表現のあり方を可能にしているのは、盛唐期の士人達に共通する、王朝への絶対とも言える信頼と強い求心的志向であった。

元結は、その生卒年が示すように、唐の社会・文化の爛熟とともに成長し、天宝末の安史の乱による国家秩序の崩壊を目の当たりにした詩人であり、その一生は杜甫（七一二～七七〇）とほぼ重なっている。

盛唐の開元七年（七一九）、魯山県（河南省魯山県）に生まれ、やがて親戚の元徳秀に師事し、その影響のもとに自らの思想を形作っていった。天宝六載（七四七）、天下の一芸ある者を採用するという玄宗の詔に応じたが、時の宰相李林甫の画策により落第し、魯山県南の商余山に隠棲した。この隠棲の時期、新楽府の先蹤とされる「系楽府十二首」（巻二）等、諷諭性の強い作品が多く著されている。その後、天宝十三載（七五四）には挙に応じて進士科に登第したものの、任官することなく帰郷した。

天宝十四載（七五五）、安史の乱が起ると、一族を率いて難を逃れ、長江の岸近くの猗玗洞（湖北省黄石市東の飛雲洞）に一時身をひそめ、続いて瀼溪（江西省瑞昌市）に移った。乾元二年（七五九）、肅宗に拝謁し、節度使の参謀として史思明の軍隊の南下を阻止するなど功績を挙げた。この時期には、不遇な詩人たちの詩を集めた『篋中集』が編纂され、また「大唐中興頌」（巻七）が制作されたことも特筆される。やがて宝応元年（七六二）、老母の病をもって免官を請い、著作郎の官を拝して武昌（湖北省鄂城市）樊水の郎亭山のふもとに住んで漫叟と号した。広徳元年（七六三）、道州刺史を授けられ、道州（湖南省道州市）に着任するや、州の人々の惨状を目の当たりにして、代表作「春^{しやう}陵行」（巻三）「賊退示官吏」（巻三）の二編を制作した。大暦三年（七六八）、容州刺史兼御史中丞充本管経略守捉使を授けられた。容州は道州よりもさらに南の地であり、母が老齢のため辞退しようとしたが許されず、赴任している。一方で、道州刺史の任にあった頃、祁陽（湖南省祁陽県）にある溪谷を購入し、自らの所有する自適の空間として浯^ど溪と名づけ、住まいとした。この溪谷の摩崖には、顔真卿（七〇九～七八五）の揮毫による「大唐中興頌」も刻された。大暦四年（七六九）、母の喪のために職を辞し、大暦七年（七七二）、召されて長安の都に滞在中、病没した。

中国文学史において、元結は、尚古的な文学観を持ち、風雅の文学を展開した社会派の詩人として位置づけら

れている。また、韓愈（七六八～八二四）、柳宗元（七七三～八一九）らに先行する前期古文派の一人にも数えられている。しかし一方で「元結、好奇之士也。（元結は、好奇の士なり）」（欧陽脩『集古録』巻七）と指摘されているように、怪異な水石を対象とした多くの詩歌や銘文を制作している。この社会派の詩人としてのあり方と、涪溪という自適の空間の創出、怪異な水石への志向とは、特に諷諭との関係という視点から綿密に検討されなければならない。しかしながら元結のこのような志向は、中唐の詩人たちとの比較において容易に兼済と独善という構造に還元され、把握されてしまうことが多い。

元結の活躍した天宝、大暦年間、文学史的には盛唐の末期から中唐の初期に相当するのであるから、杜甫を盛唐の詩人とするのであれば、元結もまた盛唐の詩人に加えられてしかるべきである。無論、盛唐後期、あるいは天宝大暦間の詩人とする場合もあるが、彼は中唐、すなわち中唐の詩人として記述されることが多い。例えば、小川環樹氏は、大暦期の第三のグループの中心人物として元結を挙げ、「韋応物や劉長卿よりさらに年長で、盛唐の作家と言ってもさしつかえないが、ふつうの習慣によつてしばらく中唐に入れておく。」と、大暦期の詩人として解説している。また、例えば游国恩、王起らの『中国文学史』^(注4)においても中唐前期の詩人として取り上げられている。

彼が中唐の詩人として位置づけられるのは、ただ活躍した時期によるだけではなく、その諷諭の文学の営為が中唐の詩人たちのそれと重なることによるのであろう。殊に「系楽府十二首」などの新楽府による風雅の文学を展開しながら、一方で水石への著しい志向を示すことが、容易に白居易（七七二～八四六）の諷諭、閑適という文学の構造と同一視されることも一因となっているであろう。元結は盛唐の詩人ではなく、中唐の詩人たちと共通点を持つと見なされているのである。

しかし、中唐の詩人たちとの表層的な類似をもって、元結は兼済と独善とを截然と区別しえた詩人であるとする解釈を是とすることができるか否かの判断については、やはり慎重さが求められる。元結における諷諭の文学

の形成の理由とその展開の過程、怪異な水石、自適への志向の構造を明らかにし、この両者が彼の文学的営為においてどのような位相でダイナミックに存在しているのかを闡明することによってのみ、社会的矛盾が救いがたく深刻化していた盛唐末期の厳しい時代を生きた元結の文学の理解が可能となるはずである。

現代中国の中国文学史において、元結は、唐という封建社会の支配者のイデオロギーの中にあつて、人民への視座を明確にし、世を憂い、強い規諷の文学を展開して、封建社会の持つ矛盾を衝き、支配者の悪と腐敗とを暴露した進歩的詩人であると評価されることが多かった。この場合、水石への異常な耽溺と老荘的な思想の表出とは、時代と階級の制約によるものであり、元結の後進的な部分であるとして記述される。^(注5)

その中であつて孫望氏^(注6)は、元結の中に消極的な退隱思想を認めつつも、それは時代を改変する道を絶たれて窮した状況において選り取られたもので、現実に対抗する態度なのであつて、退隱の時期にあつても彼は人々の生活を憂える気持ちを失つてはいなかったとし、さらに元結が唐王朝と皇帝に対する忠心を抱いていたという見解も併せて提示している。これは、元結における兼済と独善の^(注7)関係に一步踏み込み、王朝と皇帝への求心性という彼の文学の重要な特徴をとらえた解釈である。また楊承祖氏^(注7)は、評伝の方法を用いて元結の生涯にわたる文学的営為について丁寧に検討を加えた、現在のところ最も詳細な元結研究の専著である『元結研究』において、元結の隱逸への志向に言及し、彼は初期には自ら「静者」「退者」と言っているが、実は明確な社会への視座を持つており、晩年になって次第に「静者」の境地に到達したと述べている。孫望氏、楊承祖氏の指摘は、新たな元結像を提示するものであろう。

川北泰彦氏^(注8)は、安史の乱以前の元結については、「元結は儒臣としての憤りを以て次々と批判・諷諭の詩文を著している。」としている。元結が、進士科に登第したにも関わらず商余山に隱棲して政治に参画しなかったことについては、「『汚濁の世にあつては、儒臣は隱逸の生活をすべきである』とする自己認識の方が強かったのではあるまいか。」と述べ、尚古載道の文学観に基づいた作品を著してはいたものの、独善の意識によって、世

に出ようとはしなかったとしている。「系楽府十二首」等の著作行為も、そこに述べられたことが実現されねばならないとする強い意識はなく、尚古載道を思想的基盤とした文学上の実践であったとする。そして、安史の乱以後、政治への参画を通してその文学観にも変化が生じ、尚古派の文学の立場を主張するようになり、その継承者としての認識に立って『篋中集』が編纂されたとしている。氏の見解は、政治参画の有無という視点に立って元結の文学的営為をとらえようとするものであり、「系楽府十二首」の制作や『篋中集』の編纂に関する新たな見解を提示している。

市川桃子氏は、^(注9)「春陵行」に焦点を当て、この作品が書かれた時代の状況と、道州刺史としての立場を明らかにし、「春陵行」を時代との関係性において浮かび上がらせようとして、制作の内的な必然性を闡明している。市川氏は、「春陵行」が、税の厳しい取り立てに対する憤りから制作され、「中央に伝えられることによって、民情が朝廷に理解されることを期待して作られたもの」とする。そして諷諭詩としての「春陵行」の特色を、「第一には、主題とする社会問題が第三者的立場から批判されているのではなく、その問題の当事者としての視点から捉えられている点。第二には、その社会問題に対する作者の政治理念及び政治的な態度が極めて明確に提示されている点である。」と、二つの点において捉え、元徳秀の影響のもとに形成された政治的理念が、道州の現実に直面したときに、「春陵行」が成立したとする。そして『春陵行』の中に、官僚としての苦悩と、それに対する自己の関わり方を明示することは、元結にとって必然の行為であった。」と結論づけている。市川氏は、続いて「春陵行」以後における元結の山水への傾斜に関する解釈を提示する。元結は水石の奇怪なたたずまいのなかに理想的な為政者のイメージを見いだしているのであり、それは道州刺史としての体験、政治理念の挫折を通して成立した表現であるとするのである。市川氏の解釈は、兼済、独善とは異なる視点を元結の文学の理解にもたらすものである。

本論は、以上の各氏をはじめ、多くの先行研究から様々な教示を受けた。さらに、元結の研究において示唆を

与えてくれるのは、鈴木修次氏^(注10)である。氏は、中唐を文学の世界における合理主義追求の時代としてとらえ、「中唐の文学思想は、文学はいかにあるべきかということを、理の上において追求し実践することであった。」と述べ、そうした合理意識が重視されたのは、「安祿山の乱による支配体制の変化と、官僚知識人たちが抱いた、王朝再建のための義務感の昂揚とに関係があるであろう。」と言う。そして元結を盛唐と中唐の仲立ちとして位置づけ、中唐における文学の合理主義の追求は元結に始まったとしている。

文学における合理性、すなわち文学の社会的機能の追求は、表現はいかにあるべきかという問いかけとともに表現行為を通して行われる。元結における文学の合理主義の追求は、なぜ行われねばならなかったのか。それはどのように展開したのか。そしてその営みは元結にとってどのような意味を持つものであったのか。本論は考究の基本的な視座をここに定め、元結における諷諭の文学の展開及び怪異な水石への志向について解明することを目指すものである。以下、本論の各編の構成を簡潔に示しておく。

第一編では、天宝五載（七四六）頃から天宝一二載（七五三）頃にかけて、主として商余山中にあった時期における元結の諷諭の視座がどのように成立したかを考究する。元結の諷諭の表現には、社会、政治を正し諫めようとする規諷の意識が殊に強く表れている。先ず、こうした意識は、元徳秀の影響のもとに成立したものであることを確認する。続いて、故郷の商余山に隠棲していた時期の作品である「自述三篇」（巻五）を取り上げ、元結の深い閉塞感と煩悶、そして愚者の意識について考察し、社会に対峙する視座の成立について明らかにする。さらに寓言、辞賦、「系楽府十二首」などの初期の詩文について、諷諭の表現がどのような視点で展開されているかを跡づけ、唐王朝への求心的な志向の分析を通して、彼の初期詩編の構造を明確にする。

第二編においては、主に元結が安史の乱を避けていた時期、及び官にあった時期に焦点を当て、元結独特の諷諭の表現がどのように展開したのかを、『篋中集』の編纂、「大唐中興頌」（巻七）の成立、「春陵行」（巻三）、「賊退示官吏」（巻三）の二編の詩等を中心に考察を進める。先ず、不遇な詩人七名の詩二十四首を集め

た小集である『篋中集』が、従来指摘されているような、尚古的文学観の称揚のみを目的として編纂されたものではないことを論ずる。「大唐中興頌」については、諷諭の意が込められているか否かの議論があるが、これまでに指摘されているものとは異なる諷諭の作であることを説明する。また、元結の代表作である「春陵行」を取り上げ、この樂府が租税の減免を願う上奏文と相補完する関係にあることを指摘し、彼の諷諭の真意の所在を闡明する。一方、「賊退示官吏」については、朝廷の使者を賊にも及ばないとする詩中の表現が朝廷の禁忌に触れた可能性に言及する。殊に杜甫が「春陵行」「賊退示官吏」の二編に唱和したことに注目し、この二編の同時代における受容の一端を明らかにする。加えて、元結が「元子」「漫叟」などいくつもの号を用いていることに注目し、漫叟という号の持つ意味と、それを用いる時の表現上の視座とを説明する。

第三編では、元結が官にあった時期から晩年にかけての作品を主に取り上げ、彼の作品に見られる、怪異な水石への強い志向について考究する。元結の描く水石の怪異なたたずまいは、初唐から盛唐にかけての水石の表現とは大きく異なる。その水石への志向は、諷諭の意識と深く関わるものであり、晩年に「大唐中興頌」を自適の空間であつた浯溪の摩崖に刻したことにも諷諭の意図がこめられていることを論ずる。そして元結にあつては、いわば諷諭が方法ではなく自らに内在化していたのであり、諷諭の文学の営為によって心の安らぎを得ていたことを明らかにし、ここに中唐の詩人たちとの本質的な差異があることを明確にする。

注

(1) 松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年、七二九頁）は、諷諭について「『風』の字は『風』とも書き、風が草を無理なく靡かせるように、対象の中に、自然に滲み込んで感化すること。つまり「諷諭」とは、正面から批判を加えるのではなく、婉曲に君主を諫め諭すことである。具体的には、上奏文

のような正規の公文書によらず、不特定の読者を想定する詩歌の形を取って、それとなく君主の過ちを諷め諭すことを言う。」と定義している。

- (2) 「規諷」の語は、『大唐六典』にも見える。例えば巻八「左散騎常侍」には「左散騎常侍掌侍奉規諷、備顧問應對（左散騎常侍は侍奉規諷を掌り、顧問應對に備ふ）」とある。また、巻二六「太子左諭徳」には「左諭徳掌諭太子以道德也。……其内外庶政有可為規諷者、随事而賛諭焉（左諭徳は太子を諭すに道德を以てするを掌るなり。……其内外の庶政に規諷を為すべき者有れば、事に随ひて賛諭す）」、巻二九「親王府」には「友掌陪侍遊居、規諷道義（友は遊居に陪侍し、道義を規諷するを掌る）」とある。左散騎常侍、太子左諭徳、友は、諷諫、規諫を掌る諫議大夫などの官吏より高い立場から、それぞれ道義、道德をもつて天子、東宮、諸王を諭し忠告する官職である。

- (3) 小川環著『唐詩概説』（岩波書店、一九五八年）六二頁。

- (4) 游国恩、王起、蕭滌非、季鎮淮、費振剛主編『中国文学史』（人民文学出版社、一九六三年）一〇三頁。

- (5) 例えば聶文郁氏は、「元結有上憂国家、下恤人民、積極濟世的一面、也有山林自安、水石相得、消極退隱的一面（元結には上は国家を憂え、下は人民を憐れむという、積極的に人々を救済する一面があり、また山林に自ら安んじ、水石を愛好するという、消極的な退隱の一面もある）」（『元結詩解』（陝西人民出版社、一九八四年）一二頁）と述べている。

- (6) 孫望校『元次山集』（中華書局、一九六〇年）「前言」二四～二六頁。

- (7) 楊承祖著『元結研究』（国立編訳館、二〇〇二年）一九六～一九七頁。

- (8) 川北泰彦「元結に於ける文学的軌跡」（『目加田誠博士古稀記念中国文学論集』、竜溪書舎、一九七四年）二五五～二七五頁。

- (9) 市川桃子「元結社会詩考」（『東大文哲学会報』二号、一九七六年）八八～一〇八頁、及び「元結『春

陵行』考」(『東方学』六〇輯、一九八〇年)四五～六一頁。

(10) 鈴木修次著『唐代詩人論 下卷』(鳳出版、一九七三年)一七〇～一七一頁。

第一編

時代との対峙

第一章 元徳秀の受容

はじめに

元結の文学の根柢に存在する復古の意識、諷諭の表現がいかに形成され、そして展開したかということを考える上で、遠縁の血族^(注1)（族兄）であった元徳秀（六九五〜七五三）^(注2)、字紫芝の影響を無視することはできない。

顔真卿による元結の墓誌銘「唐故容州都督兼御史中丞本管経略使元君表墓碑銘并序」（『顔魯公文集』巻五）は、「君聡悟宏達、倜儻而不羈、十七始知書、乃受学于宗兄先生徳秀^(注3)。（君聡悟宏達、倜儻にして不羈、十七にして始めて書を知り、乃ち学を宗兄の先生徳秀に受く）」と、元結が元徳秀から学問を授けられたことを言う。元結が元徳秀から受けた影響については、例えば、川北泰彦氏が「誤解を恐れずに述べるなら、元結の爾後の在り方を決定的なものにしたのはまさしく元徳秀との出会いによるものであったと言っても過言ではあるまい^(注4)。」と指摘している。楊承祖氏は、李華等の描く仁愛を重んじる元徳秀像に対して、元結は深いレベルにおいて元徳秀の道徳的な精神を受容しており、元徳秀が仁愛を偏重するのに対して義烈を重んじ、それを自らの操行や文学において展開していったのであり、まさにこのことにおいて元徳秀から深い影響を受けたと言える^(注5)としている。そして元結の「元魯県墓表」（巻六）は、慷慨して書かれたものであり、元徳秀の徳を称えて推奨し、世道の衰えを憤り、貴顕の者たちの腐敗、貪欲と好色とを厳しく非難したものである^(注6)としている。また、聶文郁氏^(注7)は、「元結従十七歳起、就向従兄元徳秀『折節向学』」、因而、他従元徳秀跟前所受的師友影響（元結『元魯県墓表』曾有兼師友之分一語）、也是深厚的、巨大的。元結在元徳秀死後所作『元魯県墓表』中、曾称元徳秀為『清徳君子、方直之士』、従四箇方面崇頌元徳秀……（元結は一七歳から従兄元徳秀について『節を屈して学問に志し』

たので、彼が元徳秀の膝下でうけた師友関係の影響「元結の『元魯鼎墓表』には師友の分という一語がある」は深く大きいものであった。元結は元徳秀の死後に制作した『元魯鼎墓表』において元徳秀を尊び『清徳の君子、方直の士』として四つの点から元徳秀を崇拜称揚し……」と言及し、墓表中の、元徳秀が質素な生活をして婦女に惑溺しなかったこと、利を求め人に媚びることをしなかったこと、裕福な生活を求めなかったこと、華美な服装、贅沢な食事を求めなかったこと、の四者がその影響であったとしている。さらに氏は、顔真卿の「元君表墓碑銘」序の「直清臣（直清の臣）」、「嗚呼、君其心古、其行古、其言古、躬是三者而見重於今。（嗚呼、君其の心古、其の行古、其の言古、是の三者を躬らして今に重んぜらる）」、碑銘の「率性直方、秉心真淳。見危不撓、臨難遺身^(注8)。（率性直方にして、心を秉ること真淳なり。危を見て撓^{たじろ}がず、難に臨みて身を遺^すつ）」の語を挙げて、元徳秀の影響として^(注9)いる。

元結が「清独」「方直」「古」「真淳」といったことを元徳秀のうちに見出し、また自らがかくあり、かくあるべきものとして作品のうちに表出しているということにおいて、彼の価値観と人となりが元徳秀からの影響のもとで形成されたことは確かであろう。楊承祖氏の指摘を踏まえてさらに言えば、元徳秀の膝下にあつて、仁愛に満ちた元徳秀を敬慕することを通して、義烈に偏重する自らのあり方を見出していったということこそが、元結における元徳秀の受容なのであつて、彼は決して単なる元徳秀の心酔者ではない。

しかし、本論において更に重要なのは、その文学的営為における表現上の視座である。李華の「元魯山墓碣銘并序」（『全唐文』卷三二〇）と元結の「元魯鼎墓表」の両編は、その表出の視座を異にしており、元結の作には「戒」字が繰り返し用いられ、元徳秀のあり方を称揚することによって世俗を戒めようとする意識が強く表出している。楊承祖氏は「元魯鼎墓表」を世俗への厳しい批判とするが、この墓表は批判に止まるものではなく、称揚することによって世俗を戒めるといふ諷諭の構造を持つものである。後に論ずるように、上元二年（七六一）制作の「大唐中興頌」（卷七）の表現構造がすでにこの墓表にも窺えるのである。元結の文学を基底的に特

色づける諷諭の構造が師である元徳秀の墓表に表れているということは、文学における諷諭の意識もまた元徳秀の影響のもとに育まれたものであったとすることができるであろう。

本章では、李華の「元魯山墓碣銘」及び元結の「元魯県墓表」に描かれた元徳秀像を検討し、その差異を明らかにしつつ、元結の諷諭の文学の原点を確認してゆくこととする。

第一節 元徳秀の伝記資料

元徳秀、字は廷之。幼くして父を失い、母に孝養を尽くしていたが、開元二十一年（七三三）、進士の第に登るとまもなく母が亡くなった。その後、開元二十二年（七三四）に南和県の尉となり、竜武軍録事参軍に転じた。翌開元二十三年（七三五）には魯山県の令に出、任が満ちると陸渾の地に隠遁し、そこで生を終えたとされている。彼についての主要な資料は以下のとおりである。

- ① 李華 「元魯山墓碣銘并序」（『全唐文』卷三二〇）、「三賢論」（『全唐文』卷三一七）
- ② 元結 「元魯県墓表」（卷六）
- ③ 盧載 「元徳秀誄」（『全唐文』卷四三五）
- ④ 『旧唐書』卷一九〇 文苑伝
- ⑤ 『新唐書』卷一九四 卓行伝

さらにこの他に『唐国史補』、『明皇雜録』、『唐語林』、『資治通鑑』、蕭穎士「重陽日陪元魯山徳秀登北城矚对新霽因以贈別」（『全唐詩』卷一五四）、白居易「題座隅」（『白氏長慶集』卷七）、孟郊「弔元魯山十首」（『孟東野詩集』卷一〇）、「寄義興小女子」（『孟東野詩集』卷七）、皮日休「七愛詩」其四などがある。

元徳秀自身の作品といわれるものとしては、『全唐詩外編^{（注10）}』（第四編 全唐詩統補遺）に「帰隠」と題する次

の詩が一首採られているのみである。

緩歩巾車出魯山 緩歩 巾車 魯山を出で

陸渾佳処恣安閑 陸渾の佳処 安閑を恣にす

家無僕妾饑忘爨 家に僕妾無く饑ゑて爨ぐを忘る

自有琴書興不闌 自ら琴書有りて興は闌ならず

出典は『古今圖書集成』卷四八八、職方典汝州部。また『魯山県志』卷九（明嘉靖三一年刊）にもこの作品が元徳秀の作として採られている。ここにうたわれるのは、魯山令の任期が満ち、陸渾に隠棲したときの元徳秀であり、貧窮と飢餓の中にながら琴書を楽しむ隱者の心境が表出している。しかしながらこの作品は、語彙や詩想の展開という点で『新唐書』卷一九四「卓行伝」の元徳秀の記述と一致する部分が多い。卓行伝には、「歳満、笥余一縑、駕柴車去。愛陸渾佳山水、乃定居。不為牆垣局鑰、家無僕妾。歳飢、日或不爨。嗜酒、陶然彈琴以自娛。（歳満つるや、笥一縑を余し、柴車に駕して去る。陸渾の佳き山水を愛で、乃ち居を定む。牆垣局鑰を為らず、家に僕妾無し。歳飢うれば、日或は爨がず。酒を嗜み、陶然として琴を弾じて以て自ら娛しむ）」とあり、「巾車」||「柴車」、「陸渾佳」||「陸渾佳」、「家無僕妾」||「家無僕妾」、「飢…爨」||「飢…爨」、「琴」||「琴」と措辞が酷似し、また文章の展開と詩想の展開も近似する。「帰隱」詩は元徳秀の自作ではなく、『新唐書』の記述の翻案とみるのが妥当であろう。このシンボル化された姿は、元徳秀の一つの解釈なのである。また、彼には「蹇士賦」「季子聴樂論」「于蔦于」「礼咏」「現題」「道演」などの作があったとされるが、今は全て伝わらない。

第二節 李華の元徳秀像

(一) 貧窮と孝養

李華の「元魯山墓碣銘并序」^(注12)は、冒頭に元徳秀が天宝一二載（七五三）、陸渾の草堂で五九歳の生涯を終えたことを述べ、その死は元徳秀を敬慕する者たちにとって心を痛ませるものであったことを語る。

維唐天宝一二載、九月二十九日、魯山令河南元公、終於陸渾草堂。春秋五十九。服名節者、無不痛心。

維れ唐の天宝十二載、九月二十九日、魯山の令河南の元公、陸渾の草堂に終わる。春秋五十九。名節に服する者、心を痛めざるは無し。

次に元徳秀の終焉の地である陸渾の草堂の様子と葬儀の状況を記し、彼が極貧のなかで最期を迎えたことを記述する。

嗚呼、堂内有篇簡巾褐枕履琴杖簞瓢而已。堂下有接賓之位、孤甥受学之室。過是而往、無以送終。名高之士、陸渾尉梁喬潭、賻以清白之俸、遂其喪葬。以明月十二日、窆於所居南岡。礼也。

嗚呼、堂内に篇簡巾褐枕履琴杖簞瓢有るのみ。堂下に接賓の位、孤甥受学の室有り。是を過ぎて往は、以て終を送る無し。名高の士、陸渾の尉梁園の喬潭、賻るに清白の俸を以てし、其の喪葬を遂ぐ。明月十二日を以て、居る所の南岡に窆る。礼なり。

堂内に残されていたものは書と琴と身の回りの品だけであつたという描写は、元徳秀が極貧のうちにあつたことを表している。また「接賓之位」は、彼が人々との交際を断つた生活をしていたのではなかったことを暗示する。「孤甥受学之室」とは、おそらく元結が学を授けられた部屋を指しているであろう。陸渾の草堂における元徳秀の生活は、貧窮の中にありながら、琴書を楽しみ、彼に私淑する者たちとの交流をつづけ、元結に教授する日々であつたことが語られているのである。

盧載の「元徳秀誄」（『全唐文』卷四三五）に「誰為府君、犬必啗肉。誰為府僚、馬必食粟。誰死元公、餒死空腹。（誰か府君為る、犬には必ず肉を啗はす。誰か府僚為る、馬には必ず粟を食はす。誰か元公を死せしむる、餓えて空腹に死す）」とあり、また白居易「題座隅」詩（『白氏長慶集』卷七）の原注^{（注13）}には「元魯山山居阻水、食絶而終。（元魯山山居して水に阻まれ、食絶えて終わる）」とある。これらの記述によれば、元徳秀の最期は、おそらく水に阻まれて食糧を得ることができず、餓死するという悲惨なものであつたと考えられる。盧載の誄は、その死に直面し、「なぜこの人が餓死しなくてはならなかったのか」という悲痛な問いかけをもって結ばれているのである。一方、李華はそうした事情に直接言及しない。

居無局鑰牆藩之禁、達生齊物、従其所好。時属歉歲、涉旬無烟、弹琴読書、不改其樂。好事者携酒食以饋之。
居に局鑰牆藩の禁無く、生に達し物を斉しくし、其の好む所に従ふ。時歉歲に属し、旬に涉りて烟無きも、琴を弾じて書を読み、其の樂しみを改めず。好事の者酒食を携へて以て之に饋る。

と、住居にはかんぬきも垣根も設けず、貧窮と飢餓のなかでも琴書を楽しみ、身世を忘れて生きた元徳秀の像を結ばせているのである。「達生齊物」は、『莊子』の編名でもあり、生の実相を達観し、全ての存在を一とする境地に立つことをいう。

李華はまた元徳秀が貧窮の中に成長し、父母を失い、終生独身であったこと、一族のために出仕し、奉禄は全
て一族の葬祭や孤児のために費やし、富貴を願わなかったことを指摘する。

・公自幼居貧、累服齊斬、故不及親在而娶、既孤之後、單獨終身。

公は幼きより貧に居り、累ねて齊斬を服す。故に親在りて娶るに及ばず、既に孤たるの後、單獨にして
身を終ふ。（「累服齊斬」は、父母三年の喪に服する）

・延州即世之後、昆弟凋落、慈親羸老、無小無大、仰飴於公。

延州即世の後、昆弟凋落し、慈親羸老なれば、小と無く大と無く、飴^{かて}を公に仰ぐ。（「延州」は、元徳秀
の父のこと。延州刺史であったことからいう。）

・以甥姪婚仕為念、授署魯山令。甥姪の婚仕を以て念と為し、魯山の令を授署せらる。

・歴官俸禄、悉以經營葬祭、衣食孤遺。歴官の俸禄は、悉く以て葬祭を經營し、孤遺に衣食せしむ。

・又其惡万金之藏、鄙十卿之禄。又其れ万金の藏を惡み、十卿の禄を鄙しとす。（「十卿之禄」は、卿の
十倍の俸禄。一国の主君にも相当するような俸禄。）

また、墓碣銘は、元徳秀の孝養を称揚する。

① 不忍離親、躬負安輿、往復千里。親を離るるに忍びず、躬ら安輿を負ひ、千里を往復す。

② 丁艱、声動於心。既過苴臬、刺血画仏像写経、以不貲之身、申罔極之報。食無塩酪、居無爪翦者三年。

艱に丁り、声心を動かす。既に苴臬を過ぐるや、刺血して仏像を画き経を写し、不貲の身を以て、罔極の報を申ぶ。食ふに塩酪無く、居るに爪翦無きこと三年なり。（「丁艱」は、丁憂。父母の喪。「苴臬」は、喪服の名。「以不貲之身、申罔極之報」は、大切な我が身を以て極まらない父母の恩に報いる。）

③ 黜陟使以至行上聞、授左竜武軍録事。因墜傷足、樂正之憂、愀然滿容。

黜陟使至行を以て上聞するや、左竜武軍録事を授けらる。墜ちて足を傷つくるに因り、樂正の憂、愀然として容に滿つ。（「黜陟使」は、官吏の昇任、降格を掌る。）

①は、元徳秀が科挙におもむいたとき、母を残しておくにしのびなく、輿を自ら担って千里を往復したことを語るものである。父母のもとで孝養を尽くす色養が大切であることは、例えば次に挙げる、孝子の誉れが高かった唐の皇甫無逸の話（『旧唐書』卷六二 皇甫無逸伝）がよく表している。時に彼は益州大都督府長史に任ぜられていた。

母在長安疾篤、太宗令駟召之。無逸性至孝、承問惶懼、不能飲食、因道病而卒。贈礼部尚書、太常考行、諡曰孝。礼部尚書王珪駁之曰、無逸入蜀之初、自当扶侍老母、与之同去、申其色養、而乃留在京師。子道未足、何得為孝。竟諡為良。

母長安に在りて疾篤く、太宗駟をして之を召さしむ。無逸性至孝にして、承問し惶懼して、飲食する能は

ず、因りて道に病みて卒す。礼部尚書を贈り、太常行を考へ、諡して孝と曰ふ。礼部尚書王珪之を駁して曰はく、無逸蜀に入るの初め、自ら当に老母を扶持し、之と共に去り、其の色養を申ぬべきに、乃ち留めて京師に在らしむ。子の道未だ足らざるに、何ぞ孝と為すを得んや、と。竟に諡して良と為す。

皇甫無逸は母を赴任先に伴い孝養を尽くさなかったことによつて、諡を孝とされなかった。母の危篤を聞いて食事ものを通らず、長安に戻る途中で卒しても、諡を孝とはされなかったのである。母を伴っていった元徳秀の行為は正しく孝道にそつたものであった。②は、母の逝去にあつてから喪に服している時の様子である。やはり三年間塩酪を食わないなど、至孝とするにふさわしい過ごし方をしていたことが語られている。③は、落馬して足を傷つけたときの様子である。誤つて足を傷つけてしまい、孝道を尽くすことができないことを歎いた樂正子春の故事(注14)を引いて、元徳秀の孝心の深さを語っている。

墓碣銘においては、貧窮のうちにありながら、孝を尽くした元徳秀の姿が強調されているのである。

(二) 出仕と帰隠

元徳秀の出仕は、一族の生活を支えるためであり、自ら求めて魯山県の令となつたのも、「以甥姪婚仕為念、授署魯山令。(甥姪の婚仕を以て念と為し、魯山の令を授署せらる)」とあるように、自分を頼りにする一族の甥姪の婚姻と仕官のためであつた。元徳秀が官を辞した経緯については、墓碣銘はただ「代下之日、柴車而返、南遊陸渾、……(代下の日、柴車にして返り、南のかた陸渾に遊び、……)」と、交代の時に粗末な車に乗つて陸渾に遊んだことを述べるのみである。しかし蕭穎士は「重陽日陪元魯山徳秀登北城矚对新霽因以贈別」(『全唐詩』卷一五四)の中で「明時当盛才、短伎安所設。何日謝百里、從君漢之滌。(明時当に盛才あるべし、

短伎安くにか設くる所ぞ。何れの日か百里を謝し、君に漢の濫に従はん」と、明時には優れた才能を有する人間が相応しい地位を得るべきであり、自らの拙い才能を発揮すべき場所はないから、いつかは県令（「百里」）を辞して元徳秀とともに漢水の岸に遊びたいと述べている。そしてこの詩の原注には「時元兄屢有挂冠之意。（時に元兄屢挂冠の意有り）」とあり、元徳秀も魯山の県令を辞する思いを抱き続けていたことがわかる。

李華の墓碣銘は元徳秀の不遇感については、「窮於性命則蹇士賦。（性命に窮すれば則ち蹇士の賦あり）」と言及するのみである。^{（注15）} 銘においては、元徳秀は飢餓に苦しんだのではなく、むしろそれに安んじて琴書を楽しみ、賓客との交友を楽しんでいたとするのである。

先に挙げた盧載の誄には、元徳秀は中央に召され、顕彰され、活躍すべき人であったとする思いが吐露され、それほどの人物をうち捨てておいたまま餓死に到らしめた者に対する憤りが表出していた。李華も次のように言う。

是宜為国老、更論道佐世。而羔雁不至、歿於空山。可勝慟耶。

是れ宜しく国老と為し、更に道を論じ世を佐くべし。而れども羔雁至らず、空山に歿す。慟するに勝ふべけんや。（「羔雁」は、士を招く時の贈り物。）

国家の教化を司る国老となり、政治に関与すべき人物であったにもかかわらず、招かれることなく空山に死んでいったと、不遇な元徳秀に対する耐え難い悲しみの情を吐露するのである。盧載の誄のように露わではないが、やはり元徳秀を招き寄せることなくうち捨てておき、死に到らしめた者に対する憤りも託されていると読むことができるだろう。

(三) 治績

元徳秀の魯山県令としての治績について、墓碣銘は次のような逸話を載せる。

常獲盜未刑。属浜山之郷称、猛獸為害。盜請於庭曰、感明府慈仁。願殺獸贖罪。公哀而許焉。僚佐堅請、公無変慮、乃從破械縱之。盜果屍獸復命。吏人老幼、咨嗟震勤、発於庭宇、播於四隣、則政化之行可知也。

常て盜を獲て未だ刑せず。属たま浜山の郷称すらく、猛獸害を為す、と。盜庭に請ひて曰はく、明府の慈仁に感ず。願はくは獸を殺して罪を贖はん、と。公哀れみてこれを許す。僚佐堅く請ふも、公慮を変ふる無く、乃ち従りて械を破りて之を縱つ。盜果たして獸を屍して復命す。吏人老幼、咨嗟震勤し、庭宇に発し、四隣に播けば、則ち政化の行知るべきなり。

元徳秀が盜賊を捕らえた時、人々が猛獸の被害に苦しんでいると聞いたその盜賊が猛獸を殺して罪を贖いたいと申し出る。元徳秀は哀れんで、周囲の反対を聴かずに盜賊を解き放ってしまう。すると盜賊は猛獸を殺して戻ってきた。この逸話は、元徳秀が仁政を行い、信をもって民に臨んだことを表しており、李華はこの一事に元徳秀の教化を象徴させている。

この他、元徳秀には、開元二三年（七三三）、県令時代の「于蔦于」にまつわるエピソードがある。これは唐・鄭処誨の『明皇雜錄』巻下に見え、『新唐書』卷一九三、『資治通鑑』卷二一四、『太平広記』卷二〇四にも載せるものである。当時よく知られていたと思われるが、李華は「寄情性則于蔦于。（情性を寄すれば則ち于蔦于）」と言及するのみである。なお、この「于蔦于」にまつわる事件は、元結に深い影響を与えたと推測される。詳しくは第六章で扱うこととする。

第三節 李華の元徳秀像の継承

李華は、「三賢論」において、これまで見てきた元徳秀像を総括するかのように、「元奉親孝、居喪哀、撫孤仁、徇朋友之急、莅職明於賞罰、終身貧而樂天知命焉。（元は親を奉じては孝、喪に居りては哀、孤を撫しては仁、朋友の急に徇ひ、職に莅みては賞罰に明らかにして、終身貧なれども天を楽しみ命を知る）」と述べている。また、「瞻其形容、不俟其言而見其仁。（其の形容を瞻れば、其の言を俟たずして其の仁を見る）」と、元徳秀の姿を見るだけで、仁愛が感じられる程であったと言い、さらに房琯の「毎見魯山、則終日嘆息、謂予曰、見紫芝眉宇、使人名利之心尽矣。（魯山を見る毎に、則ち終日嘆息し、予に謂ひて曰はく、紫芝の眉宇を見れば、人をして名利の心尽くさしむ、と）」、および蘇源明の「毎謂當時名士曰、使僕不幸生於衰俗、所不恥者、識元紫芝。（毎に当時の名士を謂ひて曰はく、僕をして不幸にも衰俗に生まれしむるも、恥とせざる所の者は、元紫芝を識ることなり、と）」という言葉を挙げて元徳秀の人物を称揚している。

李華にとって、元徳秀は一生貧窮のうちでありながら、親に孝養を尽くし、残された一族の者たちの生活を支え、官吏としての治績を残し、本来与えられるべき地位につくことはできなかったが、天命を知りつつ悠然と一生を終えた人物として捉えられているということができよう。

元徳秀は、李華・蕭穎士をはじめ、房琯・蘇源明他の士人等にとっても敬慕の対象だったのであり、ことに古文派の人々にとってはシンボリックな存在であったとされる。^(注16) 林田慎之助氏は「唐代の古文運動はこの元徳秀に兄事して敬慕の念をもちつづけた李華・蕭穎士・蘇源明・顔真卿・元結によって、意識的な歩みが始められたのである。その意味で元徳秀の存在が古文改革の思想に与えた影響力は甚大であったといわねばならない。」^(注17)と述べ、いわゆる前期古文派に与えた元徳秀の影響の深さを指摘している。

また、例えば孟郊（七五一〜八一四）や皮日休（八三四？〜八八三？）など後代の詩人も、元徳秀をたたえる作品を残している。皮日休の「七愛詩」其四（『皮子文藪』卷一〇）を挙げる。

吾愛元紫芝 吾は愛す 元紫芝

清介如伯夷 清介なること伯夷のごとし

輦母遠之官 母を輦きて遠く官に之き

宰邑無玷疵 邑に宰たりて玷疵無し

05 三年魯山民 三年にして魯山の民は

豊稔不暫飢 豊稔 暫くも飢ゑず

三年魯山吏 三年にして魯山の吏は

清慎各自持 清慎 各自ら持す

只飲魯山泉 只だ魯山の泉を飲み

10 只採魯山薇 只だ魯山の薇を採る

一室冰檠苦 一室 冰檠苦しく

四遠声光飛 四遠に声光飛ぶ

退歸旧隠来 退きて旧隠に歸り来り

斗酒入茅茨 斗酒もて茅茨に入る

15 鷄黍匪家畜 鷄黍 家に畜ふるに匪ず

琴尊常自怡 琴尊 常に自ら怡しむ

尽日一菜食 尽日 一菜食

窮年一布衣 窮年 一布衣

清似匣中鏡 清なること匣中の鏡に似

20 直如琴上糸 直なること琴上の糸のごとし

世無用賢人 世に賢を用ゐるの人無く

青山生白髭 青山 白髭を生ず

既臥黔婁衾 既に黔婁の衾に臥するや

空立陳寔碑 空しく陳寔の碑を立つ

25 吾無魯山道 吾に魯山の道無く

空有魯山辞 空しく魯山の辞有り

所恨不相識 恨む所は相識らざることなり

援筆空涕垂 筆を援けば空しく涕垂る

「七愛詩」六首は、房玄齡・杜如晦（真相）、李晟（真将）、盧鴻（真隠）、元徳秀（真吏）、李白（真放）、白居易（真才）の七人を詠じたものである。その序には、彼らが敬慕すべき人士として取り上げられた理由が、「立大化者、必有真相。以房杜為真相焉。定大乱者、必有真将。以李大尉為真将。傲大君者、必有真隠。以盧徴君為真隠焉。鎮澆俗者、必有真吏。以元魯山為真吏焉。負逸気者、必有真放。以李翰林為真放焉。為名臣者、必有真才。以白太傅為真才焉。（大化を立つる者には必ず真相有り。房杜を以て真相と為す。大乱を定むる者には必ず真将有り。李大尉を以て真将与為す。大君に傲る者には必ず真隠有り。盧徴君を以て真隠と為す。澆俗を鎮むる者には必ず真吏有り。元魯山を以て真吏と為す。逸気を負ふ者には必ず真放有り。李翰林を以て真放と為す。名臣為る者には必ず真才有り。白太傅を以て真才と為す）」と述べられている。ここでは、「澆俗」すなわち輕

薄な世俗を抑えて、清らかさと純朴さをもたらした真の官吏が元徳秀であるとしているのである。

詩はまず、第二句で元徳秀が伯夷にも比すべき清廉公正で正直な人物であったと言う。次に第三句から第二句まで、母を伴って科擧に応じたことと、官吏としての治績が語られる。彼が魯山県の令となって三年が経過し、任が満ちるころになると、人々の生計は安定し、官吏も清廉で慎み深くなったと述べ、民生の安定と官吏の感化という二つの点が称揚される。また元徳秀が官吏として自らの利をはかることなく、清貧のうちにあったことを皮日休ははっきりと指摘している。民生の安定と魯山の官吏の清廉さ、慎み深さは、元徳秀自身の厳しい自律的な生き方の結果もたらされたものである。続いて、第一三句から二二句までは、県令を退いた後のことが語られる。秩が満ちると、元徳秀は古くからの隠遁の地であった陸渾に隠棲し、貧困の中で酒と琴を楽しみつつ、清らかにそして正直を貫いて老いていったと言う。第二三句の、死に際して体を覆う満足な衾もなかったとする描写は、元徳秀が極貧の状況にあったことを表すとともに、伯夷に比すべきその人物を象徴的に語るものである。第二一句に「世無用賢人（世に賢を用ゐるの人無く）」とあるように、皮日休はまた元徳秀が不遇の士であったことを見逃してはいない。世に賢人を用いる能力のある者がいなかったために元徳秀は結局顕彰されることなく埋もれてゆかざるをえなかったという叙述には、元徳秀に対する深い哀惜がこめられており、「空立」（第二四句）「空有」（第二六句）「空涕垂」（第二八句）という三回の「空」字の繰り返し、社会的に報われることのなかった元徳秀の人生に対する皮日休の思いを十分に伝えている。

この「七愛詩」は、元徳秀が後代の士人からいかに敬慕されていたかをよく物語る。そしてここには李華等の士人達に敬愛された元徳秀像が確かに反映しているのである。

第四節 「元魯公墓表」―元徳秀の称賛と世俗の教化

元結は、開元二三年（七三五）、一七歳で元徳秀に師事した。元徳秀が亡くなったのが天宝一二載（七五三）と考えられるから、一八年にわたって元徳秀から影響を受けていたことになる。元結の元徳秀像は、前節で述べた士人達のものとは大きく異なるものであった。「元魯県墓表」（巻六）を見てみよう。

「元魯県墓表」は、まず元徳秀が亡くなったことを述べ、元結の悲しみの深さを門人叔盈との問答の形で語る。

天宝十三年、元子従兄前魯県大夫徳秀卒。元子哭之哀。門人叔盈問曰、夫子哭従兄也哀。不亦過乎礼歟。対曰、汝知礼之過、而不知情之至。叔盈退謂其徒曰、夫子之哭元大夫也、兼師友之分、亦過矣。元子聞之、召叔盈謂曰、吾誠哀過、汝所云也。（第一段）

天宝十三年、元子の従兄前の魯県の大夫徳秀卒す。元子之を哭して哀しむ。門人叔盈問ひて曰はく、夫子従兄を哭するや哀し。亦た礼に過ぎずや、と。対へて曰はく、汝は礼の過ぐるを知るも、情の至るを知らず、と。叔盈退きて其の徒に謂ひて曰はく、夫子の元大夫を哭するや、師友の分を兼ねるも、亦た過ぎたり、と。元子之を聞き、叔盈を召し謂ひて曰はく、吾誠に哀しむこと過ぎたり。汝の云ふ所なり。（第二段）

次に、元徳秀が幼時より固執するということがなく、人々が耽溺し求めるようなものへの執着は一切なかったことを述べている。

元大夫弱無所固、壯無所專、老無所存、死無所余。此非人情。人情所耽溺喜愛、似可惡者、大夫無之。如戒如懼、如憎如惡。此其無情。此非有心。士君子知焉、不知也。吾今之哀、汝知之焉、而不知也。（第二段）

元大夫は弱にして固なる所無く、壯にして専らにする所無く、老いて存する所無く、死して余す所無し。此れ人情に非ず。人情の耽溺喜愛し、惡むべきに似る所の者は、大夫之無し。如しくは戒め如しくは懼れ、

如しくは憎み如しくは悪む。此れ其れ情無し。此れ心有るに非ず。士君子知らんか、知らざるなり。吾今の哀しみ、汝之を知らんか、知らざるなり。（第二段）

元徳秀は、世俗の価値観によらず、清廉潔白で強い意志を貫いた人物として形象されているのである。そして元結は元徳秀がこのような人物であることを世の士君子は理解していないとするのである。「元魯鼎墓表」は、最後に元徳秀の生き方をもつて世俗を教化したい思いを述べる。

嗚呼、元大夫生六十余年而卒。未嘗識婦人而視錦繡。不頌之、何以戒荒淫侈靡之徒也哉。未嘗求足而言利、苟辞而便色。不頌之、何以戒貪猥佞媚之徒也哉。未嘗主十畝之地、十尺之舍、十歳之童。不頌之、何以戒占田千夫、室宇千柱、家童百指之徒也哉。未嘗皂布帛而衣、具五味而食。不頌之、何以戒綺紈梁肉之徒也哉。於戲、吾以元大夫德行遺来世清独君子方直之士也歟。（第三段）

嗚呼、元大夫は生まれて六十余年にして卒す。未だ嘗て婦人を識りて錦繡を視ず。之を頌せずんば、何を以て荒淫侈靡の徒を戒めんや。未だ嘗て足るを求めて利を言ひ、辞を苟にして色を便にせず。之を頌せずんば、何を以て貪猥佞媚の徒を戒めんや。未だ嘗て十畝の地、十尺の舍、十歳の童に主たらず。之を頌せずんば、何を以て占田千夫、室宇千柱、家童百指の徒を戒めんや。未だ嘗て布帛を皂くして衣、五味を具へて食はず。之を頌せずんば、何を以て綺紈梁肉の徒を戒めんや。於戲、吾元大夫の德行を以て来世の清独の君子・方直の士に遺さんか、と。（第三段）

ここで語られているのは、荒淫や奢侈を好まず、利を求めることも阿ることもしない正直さを有し、富貴を拒絶する元徳秀の姿である。富貴の拒絶は李華の「元魯山墓碣銘」と重なる。しかし、「元魯鼎墓表」では俗人の

情を有しない元徳秀の清廉潔白さと強い精神が際立っており、「元魯山墓碣銘」に称揚されていた、孝養を尽くし、一族の甥姪のために尽くす姿や、魯山県の令としての治績、退隠後の身世を忘れて琴書を楽しむ姿には全く触れていない。無論飢えについても言及されていない。親しく教えるを受ける元結の目に映じたのは、官吏としての治績を挙げ、帰隠後琴書を楽しむ元徳秀ではなく、厳しく自らを律する清廉潔白な姿であったと思われる。

天寶七載（七四八）頃から十二載（七五三）頃にかけて著されたと推測される作品のなかで、元結は繰り返した経験と対する強い警戒心を表出している。例えば、「出規」（巻五）では、長安に遊んだ門人叔将が貴顕と交わった経験を語るといふ設定で、「有向与歆宴、過之可弔。有始賀拜侯、已聞就誅。（向に与に歆宴せしに、之に過りて弔すべき有り。始め侯を拝するを賀せしに、已に誅に就くを聞く有り）」と、貴顕に在るものがいかに容易に失脚するものであるかを言い、「叔将之身、如犬逃者五六、似鼠藏者八九。（叔将の身も、犬の逃ぐるがごとき者五六にして、鼠の藏るるに似る者八九なり）」と、貴顕の者と交わることがいかに危ういことであるかを指摘する。また、「心規」（巻五）では、「子行于世間、目不随人視、耳不随人聽、口不随人語、鼻不随人氣。……不爾、有滅身亡家之禍、傷汚毀辱之患生焉。（子世間を行くや、目は人の視るに随はず、耳は人の聴くに随はず、口は人の語るに随はず、鼻は人の氣に随はざれ。……爾らずんば、滅身亡家の禍、傷汚毀辱の患生ずる有らん）」と世俗の危険を極言する。元結には、世俗を退廃した危険なものとして拒絶する態度や、清廉潔白さと正直さをもって処して行くといった生硬な意識が顕著に見られる。「元魯山墓表」では、こうした自らの生き方を、元徳秀のうちに見ているのである。

しかしながら、この「元魯山墓表」には、元徳秀の清廉潔白で強い意志を称揚する以外に、もう一つの大きな特色がある。それは、「何以戒……徒也哉」という句が四回も繰り返され、元徳秀の正しい生き方を称揚することによって世俗を戒め、感化させたいとの思いが、極めて強い語気を伴って表出されていることである。これは序章に述べた規諷の意識に基づくものとして理解することができる。

天寶六載（七四七）に制作された「二風詩論」（卷一）の序に「吾欲極帝王理乱之道、系古人規諷之流。（吾帝王理乱の道を極め、古人規諷の流れに系けんと欲す）」とある。この論は「二風詩」に附されたものである。「二風詩」は、「治風詩五篇」「乱風詩五篇」からなり、そのうち「治風詩五篇」、「至仁」「至慈」「至勞」「至正」の五首は、それぞれ堯・舜・禹・殷の湯王・周の成王の五人を誉め称え、国を治める要諦を示す作品である。例えば、「至仁」は次のように詠じる。

猗皇至聖兮 猗^{あゐ} 皇は至聖なり

至恵至仁 至恵 至仁なり

徳施蘊蘊 徳施 蘊蘊たり

蘊蘊如何 蘊蘊たること如何

不全不欠 全からず欠けず

莫知所貺^{たま} 貺^{たま}ふ所を知る莫し

猗皇至聖兮 猗 皇は至聖なり

至俛至明 至俛 至明なり

化流瀛瀛 化流 瀛瀛たり

瀛瀛如何 瀛瀛たること如何

不號^{（注18）}不絶 號^{（注18）}ならず絶ならず

莫知其極 其の極を知る莫し

堯帝は、至恵、至仁、至儉、至明であり、その徳化によって、人々は求めるものが全て満たされるわけではなく、また何かが不足するわけでもなく、また裕福でもなく貧しくもなく、純朴で安らかであったとするこの作品は、堯帝とその時代とを称美するものである。

「二風詩」は、それが規諷の作であることを明言した「二風詩論」とともに、叡覧に供してその政に裨益せんと意をこめて朝廷に奉られたものであった。したがって、例えば「至仁」詩は、堯帝の純朴な治世を称美することによって、かくあらざる当世の政のあり方を戒めようとしている作品として読むことができる。この構造は、「元魯鼎墓表」のそれと同一である。

元結の目に映じたのは、生涯、荒淫や奢侈を好まず、正直さを示し続けたあまりに気高い元徳秀の姿であった。そして、確かに元徳秀によって、魯山の民や官吏が感化され、房琯や蘇源明も感服するという現実があった。元結がこうした元徳秀の姿から、道義や道徳をもって諭しあるいは忠告するという意識を育んだことは確かであろう。元徳秀の正しい生き方をもって世俗を戒める、まさしくこのことによって元徳秀の存在は元結自らのうちに確認されているのである。

影響とは、他者を自己のうちに内在化し、その内なる他者と対峙することを通して自らのあり方が見いだされてゆくことである。元結は元徳秀においては顕著ではなかったと思われる規諷する者としての意識を元徳秀を通して自らのうちに形作っていったのであり、ここに元徳秀の影響を見ることができであろう。

また、序章で述べたように、『大唐六典』では、規諷を担当する左散騎常侍、太子左諭徳、友は、規諫を司る官よりも高い立場から、道義や道徳をもって天子、太子、諸王を諭し忠告する官であった。元結は官吏ではなかったが、表現者としては、天子、太子、諸王を諭し忠告するという高い視座から表現を展開していたのである。官吏でない者がこうした視座に立つには元子を名乗らないわけにはいかなかった。このことについては、第三章において論究する。

おわりに

李華の「元魯山墓碣銘」と元結の「元魯県墓表」とは大きく異なる表現の位相において成立している。「元魯山墓碣銘」が描く元徳秀は、貧窮のうちに成長して母に孝養を尽くし、一族のために出仕し、富貴を願うことなく、官吏として仁政を行い、退隠後は貧窮と飢餓のうちにありながら琴書を楽しみ、ゆったりと一生を終えた人物である。元徳秀が顕彰されなかったことやその不遇感はわずかに言及されるのみである。この元徳秀像は、後代の科挙官僚にも受け継がれていった。士人たちは元徳秀の中に、自らの理想とする生き方や自らと共通する不遇感を見、元徳秀の姿に思いを託し、あるいは自らを確認していたのである。

一方、元結の「元魯県墓表」の元徳秀の姿は、これらとは大きく異なる。彼は、元徳秀を、荒淫や奢侈を好まず、利を求めることもおもねることもしない正直さを有し、富貴を拒絶する人物として描いている。この清廉潔白で世俗に染まらぬ強い意志は、すでに指摘されているように元結にも受け継がれている。

しかし、「元魯県墓表」には、さらに、元徳秀の正しい生き方をもって諭し、あるいは忠告するという強い意志が表明されている。この規諷の意識こそ、元徳秀が元結に及ぼした影響といえることができる。それはまた元結が生涯を通して持ち続けたものであり、彼の文学を根柢から支えていた価値観であった。

注

(1) 長部悦弘氏は「元結研究―北朝隋唐時代における鮮卑族の文人士大夫化の一軌跡―」（『中国中世の文物』礪波護編、一九九三、京都大学人文科学研究所、四四八頁）において、「元氏が血族同士協力して子弟に学問を授けた例」として元徳秀と元結を挙げ、元徳秀を元結の「遠縁の血族」としている。また楊承祖氏

は『元結研究』（国立編訳館、二〇〇二年、一〇頁）において、元徳秀は昭成帝什翼犍の嫡孫である太祖珪の系統であり、一方、元結は昭成帝の子である寿鳩の子常山王遵の系統であって、十世以上前に別れているとしている。

（2）元徳秀の卒年について、元結の「元魯県墓表」では、「天宝十三年、元子従兄前魯県大夫徳秀卒。」と記し、『旧唐書』文苑伝、『新唐書』卓行伝も同様である。一方、李華の墓碣銘のみは天宝一二載とする。植木久行氏は墓碣銘の誤訛としており、今これによる。植木久行「唐代作家新疑年録（4）」（『文経論叢』第二六卷第三号、人文学科編VI〔弘前大学人文学部〕、一九九一年）。

（3）顔真卿の「元君表墓碑銘」については、深谷周道訳注『顔真卿』（風媒社、一九七四年）一三〇～一三八頁、小栗英一「元結伝」（小川環樹編『唐代の詩人―その伝記』大修館書店、一九七五年）二七五～二九一頁に詳細な注解がある。ここに引用した「乃授学於宗兄先生徳秀」について、『顔魯公文集』は「先生」の文字を欠く。小栗氏は拓本によってこの二字を補っている。小栗氏にない、表墓銘の拓本によって「先生」の二字を補う。なお顔真卿の碑文は、一部損壊しているものの、魯山県内に現存している。

（4）川北泰彦「元結に於ける文学的軌跡」（目加田誠博士古稀記念中国文学論集編集委員会編集『目加田誠博士古稀記念中国文学論集』竜溪書舎、一九七四年）二五七頁。

（5）楊承祖氏前掲書、一四頁。

（6）楊承祖氏前掲書、七二頁。

（7）聶文郁註解『元結詩解』（陝西人民出版社、一九八四年）一一頁。

（8）『顔魯公文集』は、「直方」を「方直」に作る。また、「淳」を「純」に作る。拓本によって改めた。

（9）聶文郁氏、前掲書。一一頁。

（10）『全唐詩外編』（中華書局、一九八二年）三七六頁。

(11) これらの作品名は、李華「元魯山墓碣銘」に見える。

(12) 元魯山墓碣銘并序（『全唐文』卷三二〇）の全文は以下の通りである。

維唐天宝十二載、九月二十九日、魯山令河南元公、終於陸渾草堂。春秋五十九。服名節者、無不痛心。嗚呼、堂内有篇簡巾褐枕履琴杖簞瓢而已。堂下有接賓之位、孤甥受學之室。過是而往、無以送終。名高之士、陸渾尉梁園喬潭、賻以清白之俸、遂其喪葬。以明月十二日、窆於所居南岡。礼也。公諱德秀、字紫芝、延州使君之子。後魏七葉、易為元。公其裔也。世有明哲、承而述之。幼挺全德、長為律度。神体和、氣貌融。視色知教、不言而信。大易之易簡、黃老之清淨、惟公備焉。延州即世之後、昆弟凋落、慈親羸老、無小無大、仰飭於公。及応府貢、如京師、不忍離親、躬負安輿、往復千里。以才行第一、進士登科。丁艱、声動於心。既過苴臬、刺血画仏像写經、以不貲之身、申罔極之報。食無塩酪、居無爪翦者三年。先人未耐於兆、身迫当室、緘未忘之哀、參調求仕、銓試超等、補南和尉。黜陟使以至行上聞、授左竜武軍録事。因墜傷足、樂正之憂、愀然滿容。以甥姪婚仕為念、授署魯山令。以痼疾不能趨拜。故後長吏僉以客礼待之。常獲盜未刑。属浜山之郷称、猛獸為害。盜請於庭曰、感明府慈仁。願殺獸贖罪。公哀而許焉。僚佐堅請、公無変慮、乃從破械縦之。盜果屍獸復命。吏人老幼、咨嗟震勤、発於庭宇、播於四隣、則政化之行可知也。公自幼居貧、累服齊斬。故不及親在而娶、既孤之後、単独終身。人或以絶後論焉。対曰、兄有息男。不曠先人之祀矣。歴官俸禄、悉以經營葬祭、衣食孤遺。代下之日、柴車而返、南遊陸渾。考一畝之宅、発八笥之直、唯匹帛焉。居無局鑰牆藩之禁、達生斉物、從其所好。時属歉歳、涉旬無烟、彈琴読書、不改其楽。好事者携酒食以饋之。陶陶然脱遺身世、涵泳道德、拔清塵而棲顥氣。中古以降、公無比焉。知我或希、晦而不耀故也。是宜為国老、更論道佐世。而羔雁不至、歿於空山。可勝慟耶。所著文章、根元極則道演、寄情性則于藁于、思善人則礼咏、多能而深則広呉公子観楽、曠達而妙則現題、窮於性命則蹇士賦、可謂与古同轍、自為名家者也。又其惡万金之藏、鄙十卿之禄。富貴之弁、吾得其真。至哉元公、越軼古今、冲邃冥冥、純朗朴渾、範於生靈。凡与門人、

吟慕遺風、諡曰文行先生。從古也。夫誅德銘功、厥義有三。上以簡神明、中以鋪光烈、下以聳示後人。斯文之作、由此志也。其銘曰、

天地元醇、降為仁人。隱耀韜精、凝和葆神。道心元微、消息詘伸。載襲先猷、竭尽報親。貞玉白華、不緇不磷。縱翰祥風、蛻迹泥塵。今則已矣、及吾無身。仰德如在、瞻賢靡因。懷哉永思、泣涕銘云。

維れ唐の天宝十二載、九月二十九日、魯山の令河南の元公、陸渾の草堂に終はる。春秋五十九。名節に服する者、心を痛めざるは無し。嗚呼、堂に篇簡巾褐枕履琴杖簞瓢有るのみ。堂下に接賓の位、孤甥受学の室有り。是を過ぎて往は、以て終を送る無し。名高の士、陸渾の尉梁園の喬潭、賻るに清白の俸を以てし、其の喪葬を遂ぐ。明月十二日を以て、居る所の南岡に窆る。礼なり。公諱は德秀、字は紫芝、延州使君の子なり。後魏の七葉、易へて元と為す。公は其の裔なり。世明哲有り、承けて之を述ぶ。幼くして挺んで徳を全うし、長じて律度と為る。神体和し、氣貌融かなり。色を視れば教を知り、言はずして信あり。大易の易簡、黄老の清浄は、惟だ公のみ備はる。延州即世の後、昆弟凋落し、慈親羸老なれば、小と無く大と無く、飴を公に仰ぐ。府貢に応じ、京師に如くに及び、親に離るるに忍びず、躬ら安輿を負ひ、千里を往復す。才行第一を以て、進士に登科す。艱に丁り、声心を動かす。既に苴臬を過ぐるや、刺血して仏像を画き経を写し、不貲の身を以て、罔極の報を申ぶ。食ふに塩酪無く、居るに爪翦無きこと三年なり。先人未だ兆に附せず、身迫られて室に当たれば、未忘の哀を緘し、調に参じて仕を求め、銓試等を超え、南和の尉に補せらる。黜陟使至行を以て上聞するや、左竜武軍録事を授けらる。墜ちて足を傷つくるに因り、楽正の憂、愀然として容に満つ。甥姪の婚仕を以て念と為し、魯山の令を授署せらる。痼疾を以て趨拝する能はず。故に後長吏僉客礼を以て之を待つ。常て盗を獲て未だ刑せず。属たま浜山の郷称すらく、猛獸害を為す、と。盜庭に請ひて曰はく、明府の慈仁に感ず。願はくは獸を殺して罪を贖はん、と。公哀れみてこれを許す。僚佐堅く請ふも、公慮を変ふる無く、乃ち従りて械を破りて之を縦つ。盜果たして獸

を屍して復命す。吏人老幼、咨嗟震動し、庭宇に発し、四隣に播けば、則ち政化の行知るべきなり。公幼きより貧に居り、累ねて斉斬を服す。故に親在りて娶るに及ばず、既に孤たるの後、単独にして身を終ふ。人或は後を絶つを以て諭す。対へて曰はく、兄に息男有り、先人の祀を曠しくせず、と。歴官の俸禄は、悉く以て葬祭を経営し、孤遺に衣食せしむ。代下の日、柴車にして返り、南のかた陸渾に遊び、一畝の宅を考し、八笥の直を發くに、唯だ匹帛のみなり。居に肩鑰牆藩の禁無く、生に達し物を斉しくし、其の好む所に従ふ。時歉歳に属し、旬に涉りて烟無きも、琴を弾じて書を読み、其の樂しみを改めず。好事の者酒食を携へて以て之に饋る。陶陶然として身世を脱遺し、道德に涵泳し、清塵に拔きんで顥氣に棲む。中古以降、公比する無し。我を知るもの或は希なれば、晦して耀かさざるが故なり。是れ宜しく国老と爲し、更に道を論じて世を佐くべし。而れども羔雁至らず、空山に歿す。慟するに勝ふべけんや。著す所の文章は、元極を根むれば則ち道演、情性を寄すれば則ち于蔦于、善人を思へば則ち礼咏、多能にして深きは則ち広呉公子觀樂、曠達にして妙なるは則ち現題、性命に窮すれば則ち蹇士の賦あり。古と轍を同じくし、自ら名家を爲す者と謂ふべきなり。又其れ万金の蔵を惡み、十卿の禄を鄙しとす。富貴の弁、吾其の真を得たり。至なるかな元公、古今に越軼し、冲邃冥冥たり、純朗朴渾にして、生靈に範たり。凡そ門人と、遺風を吟慕し、諡して文行先生と曰ふ。古に従ふなり。夫れ徳を誄し功を銘するに、厥の義に三有りと。上は以て神明に簡し、中は以て光烈を鋪き、下は以て後人に聳示す。斯文の作は、此に由りて志すなり。其の銘に曰はく、天地の元醇、降りて仁人と爲る。耀を隠し精を韜み、和を凝し神を葆つ。道心元微にして、消息詘伸す。載ち先猷を襲ひ、竭尽して親に報ゆ。貞玉白華、緇まず磷がず。翰を祥風に縦にして、迹を泥塵に脱す。今や則ち已みぬ、吾に身無きに及ぶ。徳を仰ぐことと在すがごとくするも、賢を瞻ること因る靡し。懷ふかな永く思ふ、泣涕し銘して云ふ。

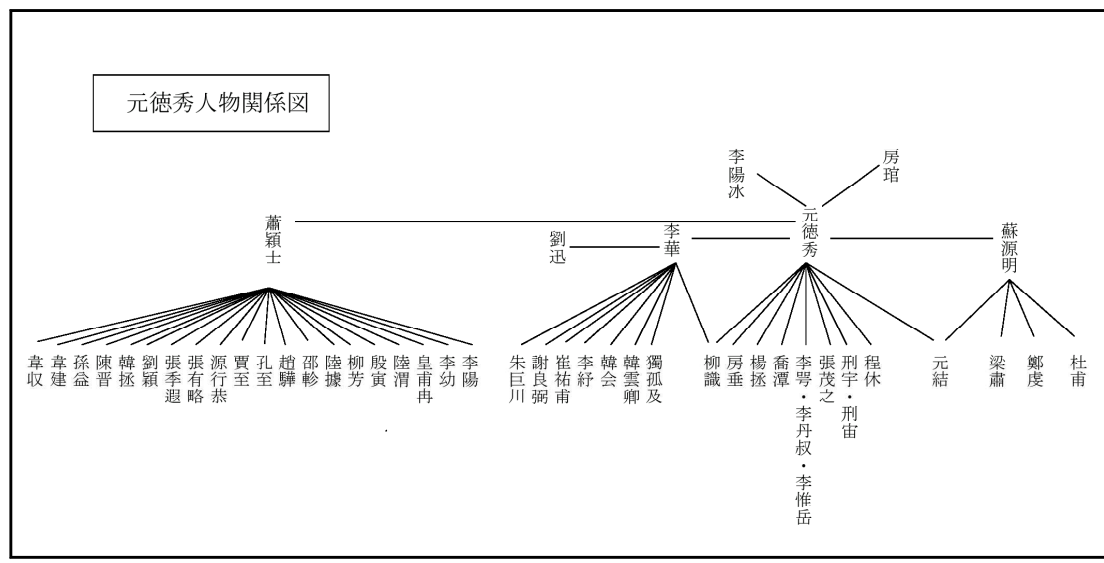
(13) 那波本『白氏文集』は原注を欠く。ここでは南宋紹興年間刊本『白氏長慶集』に拠った。

(14) 樂正子春は、春秋時代の魯の貴族で、曾子の弟子。『礼記』祭義には、樂正子春が足を怪我し、身体を損なったことで道に背いたことを憂えていた話を載せている。

樂正子春下堂而傷其足、数月不出、猶有憂色。門弟子曰、夫子之足瘳矣。数月不出、猶有憂色、何也。樂正子春曰、善如、爾之間也。善如、爾之間也。吾聞諸曾子、曾子聞諸夫子曰、天之所生、地之所養、無人為大。父母全而生之、子全而歸之、可謂孝矣。不虧其体、不辱其身、可謂全矣。故君子頃歩而弗敢忘孝也。今予忘孝之道、予是以有憂色也。

樂正子春堂より下りて其の足を傷つけ、数月出でず、猶ほ憂色有り。門弟子曰はく、夫子の足瘳えたり。数月出でず、猶ほ憂色有るは、何ぞや、と。樂正子春曰はく、善きかな、爾の間ひや。善きかな、爾の間ひや。吾諸を曾子に聞き、曾子諸を夫子に聞くに曰はく、天の生ずる所、地の養ふ所、人より大為るは無し。父母全くして之を生み、子全くして之を歸すは、孝と謂ふべし。其の体を虧かず、其の身を辱しめざるは、全くすと謂ふべし。故に君子は頃歩も敢て孝を忘れざるなり、と。今予孝の道を忘る、予是を以て憂色有るなり、と。

(15) 「蹇士賦」は散逸しているが、『易経』蹇卦の象伝に「蹇、難也。陰在前也。見陰而能止、知矣哉。(蹇は、難なり。陰前に在



るなり。険を見て能く止まるは、知あるかな」とあり、象伝に「山上有水蹇。君子以反身脩德。（山上有水有るは蹇なり。君子以て身に反りて徳を脩む）」とあることからすると、不遇な状況にある士人の賦という意味として用いられていると考えられる。

(16) 元徳秀をめぐる人物関係については、林田慎之助氏が、「唐代古文運動形成過程人脈図」を制作している。

(林田慎之助著「唐代古文運動の形成過程」(『中国中世文学評論史』創文社、一九七九年、四六五頁。)

また、小野四平氏も「唐代古文之源流・系譜(1)」「唐代古文之源流・系譜(2)」の図を制作している。

(小野四平「唐代古文の源流―開元・天宝期を中心に―」(『宮城教育大学紀要』二五、一九九〇年、六七頁)いま、古文運動にかかわらず元徳秀を中心とした人物関係図を示すと前頁下欄のようになる。

(17) 林田慎之助氏、前掲著。四六四頁。

(18) 「不號不絶」は、『全唐詩』による。聶文郁氏が「號」を奢侈、「絶」を貧困の意と解釈する(『元結詩解』七八頁)のに従う。

第二章 愚者の視座——「自述三篇」

はじめに

天寶六載（七四七）、元結は、玄宗の詔に応じて都に赴いたものの李林甫の策謀によって下第し、そのまま魯山県南の商余山に帰郷した。その後、天寶七載（七四八）に一時長安に遊んだことはあったが、天寶一一載（七五二）まで、商余山中にあつた。^{〔注1〕}「自述三編序」（卷五）には「天寶庚寅、元子初習静于商余。（天寶庚寅、元子初めて商余に習静す）」とあり、「心規」（卷五）では「元子病遊世、帰于商余山中。（元子世に遊ぶに病れ、商余山中に帰る）」と、世俗のうちにあって疲弊して商余山に戻ったと言う。天寶庚寅は天寶九載（七五〇）である。また、「自述三篇」（卷五）の「述居」においては「乃相与占山泉、闢榛莽、依山腹、近泉源、始為亭廡、始作堂宇、因而習静、適自保閑。（乃ち相与に山泉を占し、榛莽を闢き、山腹に依り、泉源に近く、始めて亭廡を為り、始めて堂宇を作り、因りて習静し、適自して閑を保つ）」と、商余山中の地相のよい場所を選んで居を定め、「習静」しつつ閑居の日々を過ごしていたことを述べている。さらに、「二風詩序」（卷一）にも、「於是歸于州里。後三歳、以多病習静於商余山。（是に於て州里に歸る。後三歳、多病を以て商余山に習静す）」とある。「習静」は、平静な心性を保って静養すること^{〔注2〕}をいうが、例えば王績「遊北山賦」（『全唐文』卷一三一）に「請息交而自逸、聊習静而為娛。（請ふ交りを息めて自ら逸^{やすん}じ、聊か習静して娛しみを為さん）」とあるように、この語は、静養に努めるのみではなく、世俗との交わりを絶って心を安らかにして自適の日々を楽しむということも含んでいる。

また、商余山に静養していた頃の元結の作品には、社会の現実、価値観に対する厳しい批判、あるいは拒絶の

姿勢が表現されているものがある。例えば、天宝九載（七五〇）から一二載（七五三）にかけて書かれたと思われる「心規」（巻五）は次のように言う。

元子病遊世、帰于商余山中。以酒自肆、有醉歌。里夫公聞之、酩元子之酒、請歌之。歌曰、元子樂矣。俾和者曰、何樂亦然。何樂亦然。我曰、我雲我山、我林我泉。又曰、元子樂矣。俾和者曰、何樂然爾。何樂然爾。我曰、我鼻我目、我口我耳。歌已矣。夫公曰、自樂山林可也。自樂耳目何哉。人誰無此。元子引酒当夫公曰、勸公此杯酒。緩飲之。聽我說。子行于世間、目不隨人視、耳不隨人聽、口不隨人語、鼻不隨人氣。其甚也、則須封包裹塞。不爾、有滅身亡家之禍、傷汚毀辱之患生焉。雖王公大人、亦不能自主口鼻耳目。夫公何思之不熟耶。

元子世に遊ぶに病れ、商余山中に帰る。酒を以て自ら肆にし、酔ひて歌ふ有り。里の夫公之を聞き、元子の酒を酩^{おほ}くして、之を歌はんことを請ふ。歌ひて曰はく、元子樂し、と。和せしむる者曰はく、何の樂しみか亦た然る。何の樂しみか亦た然る、と。我曰はく、我が雲我が山、我が林我が泉なり、と。又曰はく、元子樂し、と。和せしむる者曰はく、何の樂しみか然る。何の樂しみか然る、と。我曰はく、我が鼻我が目、我が口我が耳なり、と。歌已む。夫公曰はく、自ら山林を樂しむは可なり。自ら耳目を樂しむは何ぞや。人誰か此無からんや、と。元子酒を引き夫公に当たりて曰はく、公に此の杯酒を勸めん。緩かに之を飲み、我が説くを聴け。子世間を行くや、目は人の視るに随はず、耳は人の聴くに随はず、口は人の語るに随はず、鼻は人の氣に随はざれ。其の甚だしきや、則ち須らく封包裹塞すべし。爾らずんば、滅身亡家の禍、傷汚毀辱の患生ずる有らん。王公大人と雖も、亦た自ら口鼻耳目に主たる能はず。夫公何ぞ思ふことの熟せざる、と。

ここには、世俗の価値観に従うときには、必ずや身を滅ぼし家を亡ぼすような災い（「滅身亡家之災」）や汚辱にまみれたり誇りを受けたりするような災い（「傷汚毀辱之患」）に見まわれると、世俗に対する厳しい否定の態度が表されている。李林甫と楊国忠の権力抗争の現実をこうした叙述の背後に想定することができる。「滅身亡家之禍、傷汚毀辱之患」をもたらす社会を拒絶して、元結は魯山県南の商余山に身を潜めていたのである。「元子楽矣」という言葉からは、独善の日々を楽しんでいる様子が窺える。

ところが、天宝六載から天宝一一載にかけて、元結は『元子』の諸作品を著し、また蘇源明を感嘆させた「説楚賦三編」、そして「系樂府十二首」を制作するなど、諷諭の意を込めた多くの作品を著して、盛んな創作活動を展開している。

このような厳しい世俗の否定と自適の日々において盛んな創作活動を展開していた元結の姿はどのようにに理解することができるのであろうか。^(注3) 商余山にあった元結の作品にみられる表現、自己表出のあり方には、後に元結の表現の特色となる構造がすでに表れているように思われる。本章では「自述三篇」（巻五）を取り上げて、商余山に静養していた元結が表現者として自らをどのように位置づけたのかを闡明する。

第一節 狂者・学者・隱者・愚者

「述時」「述命」「述居」の「自述三篇」は、天宝九載（七五〇）、商余山静養中に著された。その序では、問答の形で商余山中にある自らの姿が語られている。

天宝庚寅、元子初習静于商余、人聞之非非曰、此狂者也。見則茫然。無幾、人聞之是是曰、此学者也。見則猗然。及三年、人聞之参参曰、此隱者也。見則崖然。有感而問曰、子其隱乎。対曰、吾豈隱者邪。愚者也。窮

而然爾。或者不喻、遂為述時命以弁之。先曾為述居一篇。因刊而次之。總命曰自述。

天寶庚寅、元子初め商余に習靜するや、人之を聞き非非として曰はく、此れ狂者なり。見れば則ち茫然たり、と。幾くも無くして、人之を聞き是として曰はく、此れ學者なり。見れば則ち猗然たり、と。三年に及び、人之を聞き參參として曰はく、此れ隱者なり。見れば則ち崖然たり、と。惑ふもの有りて問ひて曰はく、子は其れ隱るるか、と。對へて曰はく、吾豈に隱者ならんや。愚者なり。窮して然るのみ、と。或は喻らざれば、遂に為に時と命とを述べて以て之を弁ず。先に曾て述居一篇を為る。因りて刊して之を次し、總て命づけて自述と曰ふ。

この序では、商余山に靜養する元子に對する人々の見方として、「狂者」「學者」「隱者」「愚者」という四者が呈示され、それぞれ人々の評價が「非」「是」「參」と、否定から肯定、そして參與へと變化してゆくことが語られる。一方元子は、このうち特に「隱者」について「吾豈に隱者ならんや」と強く否定しつつ、自らを「愚者」として位置づける。この「狂者」「學者」「隱者」「愚者」は、それぞれのよう解釈されるのか。

まず、狂者について見てみよう。

狂者は、通常の社会的判断ができず、狂痴的な行動、生き方をする者を言う。しかし、それが決して否定されるべき存在ではなかったことは、例えば既に『論語』に、次のようにあることから明らかである。

子曰、不得中行而与之、必也狂狷乎。狂者進取、狷者有所不為也。
(子路)

子曰はく、中行を得て之と与にせずんば、必ずや狂狷か。狂者は進み取り、狷者は為さざる所有るなり、と。

子曰、狂而不直、侗而不愿、忼忼而不信、吾不知之矣。

(泰伯)

子曰はく、狂にして直ならず、侗にして愿ならず、忼忼にして信ならざるもの、吾は之を知らず、と。

狂者は、常識はずれではあるが、偽りを知らない一途さを持つ者として評価されるのである。谷口真由実氏は、中国文学における狂の系譜を述べる中で、「『狂夫』や『狂者』『狂生』には、日常の規範からの逸脱、あるいは遊離の感覚が見られる。……同時に、……異能や超越的な知恵に対する畏敬の念がうかがわれる^(注4)。」と指摘する。このうち詩語としての狂夫については、唐詩において新たな生命が吹き込まれたとし、狂夫を超俗的存在として位置づけ、それに対する憧憬が示され、あるいは詩人が自らを狂夫と同一視する表現を見いだすことができる、と細緻に分析する。そして殊に杜甫は自らを狂夫と位置づけたとし、横山伊勢雄氏^(注5)が、狂夫に「自己を疎外する外界を睨み付けている眼」を読むのに加えて、さらに「自己に向けられた眼差しの鋭さ」が読み取れるとする。杜甫には、疎外された自己を客観的に見つめる視座があるとしているのである。また山島めぐみ氏は、「杜甫の『狂』は、冷やかな客観性にとどまりきらない、快感の喜びを伴っている。自分自身を日常から解放することの喜び、精神の高揚が『狂』という言葉で表現されているのである^(注6)。」と、杜甫における「狂」の豊かさを指摘している。

しかし元結の「自述三篇」序における狂者はこのような狂ではなかった。それは、幾分かの畏敬を含みつつも、多分に否定的な意味における狂痴人の「狂」であった。人々の目に映じた元結は、茫然として自らを失った異様な姿をしており、人々にはそれが通常の判断力を無くした狂者と映ったのである。

ところが幾ばくもなく、人々は元結を学者であると言い始めた。「猗然」は、ここでは学問に勤しむ姿がうろわしい様子をいう。当時、元結は『元子』の諸編を制作していたから、その著述する姿を人々が目にしていたのであろう。評価は非から是に変わっていった。やがて三年が経過すると、人々は一転して彼を隠者として慕い、

集まるようになる。

「崖然」の語は、『莊子』天道に「而容崖然、而目衝然。（而が容は崖然たり、而が目は衝然たり）」とあるのに基づく。これは老子が士成綺を評した言葉で、成玄英の疏には「汝莊飾容貌、夸駭於人、自為崖岸、不能舒適。（汝は容貌を莊飾し、人に夸駭し、自ら崖岸たりて、舒適する能はず）」とある。この語は、世に驕る矜恃に満ちた孤高の態度を指しており、その孤高さ故に自適することができないとする意を含むのである。

隠には、仕えることを拒絶する隠か、あるいは仕えることを前提とする隠かという二つの方向性があり、それは既に『論語』に示されている。

① 子路従而後、遇丈人。以杖荷篠。子路問曰、子見夫子乎。丈人曰、四体不勤、五穀不分、孰為夫子。植其杖而芸。子路拱而立。止子路宿、殺鷄為黍而食之、見其二子焉。明日、子路行以告。子曰、隱者也。使子路反見之。至則行矣。子路曰、不仕無義。長幼之節、不可廢也。君臣之義、如之何其廢之。欲潔其身、而亂大倫。君子之仕也、行其義也。道之不行、已知之矣。

（微子）

子路従ひて後れ、丈人に遇ふ。杖を以て篠を荷ふ。子路問ひて曰はく、子夫子を見たるか、と。丈人曰はく、四体勤めず、五穀分たず、孰か夫子と為さん、と。其の杖を植て芸る。子路拱して立つ。子路を止めて宿らしめ、鷄を殺し黍を為りて之に食はし、其の二子を見えしむ。明日子路行きて以て告ぐ。子曰はく、隱者なり、と。子路をして反りて之を見しむ。至れば則ち行けり。子路曰はく、仕へざれば義無し。長幼の節は、廢すべからざるなり。君臣の義は、之を如何ぞ其れ之を廢せん。其の身を潔くせんと欲して、大倫を乱す。君子の仕ふるや、其の義を行はんとするなり。道の行はれざるは、已に之を知れり、と。

② 長沮桀溺耦而耕。孔子過之、使子路問津焉。長沮曰、夫執輿者為誰。子路曰、為孔丘。曰、是魯孔丘與。

曰、是也。曰、是知津矣。問於桀溺。桀溺曰、子為誰。曰、為仲由。曰、是魯孔丘之徒与。対曰、然。曰、滔滔者、天下皆是也。而誰以易之。且而与其從辟人之士也、豈若從辟世之士哉。耰而不輟。子路行以告。夫子撫然曰、鳥獸不可与同群。吾非斯人之徒与而誰与。天下有道、丘不与易也。

（微子）

長沮桀溺耦して耕す。孔子之を過ぎ、子路をして津を問はしむ。長沮曰はく、夫の輿を執る者は誰と為す、と。子路曰はく、孔丘と為す、と。曰はく、是れ魯の孔丘か、と。曰はく、是れなり、と。曰はく、是れ津を知らん、と。桀溺に問ふ。桀溺曰はく、子は誰と為す、と。曰はく、仲由と為す、と。曰はく、是れ魯の孔丘の徒か、と。対へて曰はく、然り、と。曰はく、滔滔たる者は、天下皆是れなり。而るに誰か以て之を易へん。且つ其の人を辟くるの士に従はんよりは、豈に世を辟くるの士に従ふに若かんや、と。耰して輟めず。子路行きて以て告ぐ。夫子撫然として曰はく、鳥獸は与に群を同じくすべからず。吾斯の人の徒と与にするに非ずして誰と与にせん。天下に道有れば、丘与に易へざるなり、と。

また、孔子は仕えることを重視して次のように言う。

子曰、篤信好学、守死善道。危邦不入、乱邦不居。天下有道則見、無道則隱。邦有道、貧且賤焉、恥也。邦無道、富且貴焉、恥也。

（泰伯）

子曰はく、信に篤く学を好み、死を守り道を善くす。危邦には入らず、乱邦には居らず。天下に道有れば則ち見れ、道無ければ則ち隱る。邦に道有り、貧にして且つ賤しきは、恥なり。邦に道無きに、富み且つ貴きは、恥なり、と。

「天下有道則見、無道則隱。（天下に道有れば則ち見れ、道無ければ則ち隱る）」は、仕えることと仕えない

ことが両方あり得ることを意味しているように読めるが、孔子はあくまで仕えることを前提とし、国が乱れている時にのみ、やむを得ず隠れるとしていることは、①の「君臣之義、如之何其廢之。欲潔其身、而乱大倫。（君臣の義は、之を如何ぞ其れ之を廢せん。其の身を潔くせんと欲して、大倫を乱す）」、あるいは②の「鳥獸不可与同群。（鳥獸は与に群を同じくすべからず）」という言葉からも明らかである。①の荷杖人や②の長沮桀溺のように、そもそも天下を否定し、仕えることを拒否して自らを清らかに保つ生き方は、「大倫を乱す」として強く否定される。孔子にとって彼ら隠者の生き方は自らを否定するものであった。また、「危邦不入、乱邦不居。天下有道則見、無道則隱。（危邦には入らず、乱邦には居らず。天下に道有れば則ち見れ、道無ければ則ち隠る）」という言葉には強い自負と社会に対する矜持があることにも注目される。

一方、①の荷杖人や②の長沮・桀溺は、世界を滔滔と混乱したものと見、自己を疎外させた隠者である。彼らを支えているのは、世界を混乱したものとする確固たる認識と、人間として守るべきものをあくまで持ち続けようとする強い意志である。

加賀栄治氏は、後漢から魏にかけての隠者焦先を論じた中で、隠者とは世の中の考え方と合わないために隠遁し、精神の自由を求める者であるといった隠者観を払拭して、次のように述べている。^(注7)

動乱の社会では、ふるい秩序が崩れてゆく過程において、しばしば戦争と殺戮がくりかえされる。そうした動乱の中に、醜く露呈される人間性からみつけた悪、それがまた因となって生ずる残酷と悲惨にみちた人間社会、そこからのがれて、第一には肉体の生をたもち、第二には精神の真を守ろうとする人間の生き方を、中国では、価値ある存在方式として肯定する。……この自己疎外の直接的あるいは具体的契機が、人ごとにことなるものであっても、けっきょくのところ、社会生活からもたらされる悪にたえきれなくなったものが、社会生活と絶縁してまでも自己を保持しようとしていることにおいて、共通性が認められる。そうしてそれが、価

値ある処世態度だとされたのは、社会生活から絶縁することによって、肉体の生をたち得るためだけではなく、人間の生の根源にある人間精神の本来的なもの、真なるものを、たち得ると考えられたためである。隠者とは、少なくとも中国における隠者とは、このような自己疎外者をさす。

加賀氏は、隠者とは、悪に満ちた人間の社会と絶縁することで、自らの生と人間精神の本来的なものを保たんとする者であり、自己疎外者であるとする。さらに加賀氏は、次のように言う。^(注8)

焦先が隠者とされたわけは、もちろん、彼の狂痴的生活ぶりにあつたのではない。彼の中から、人間として畏敬すべき価値が見いだされたからである。しかもその価値は、なみの人間のなかなかし得ないことをも可能にする技術能力をもっていたことにおいて見いだされるばかりでなく、そもそも人間として、その生の根源にあるべき人間精神の本来的なもの、真なるものが、失うべからざるもの、絶対に保持すべきものとして、持ちつづけられていたことに、より根本的理由があると思う。

世人が元結を「崖然」と評しているのは、彼の中に、隠者の持つ世俗への傲りと強靱な意志を認め、「人間精神の本来的なもの」が保持されているのを見たからであろう。しかし元結は、自らを愚者であると言い、「窮而然爾。（窮して然るのみ）」と、それは世界の中で行き詰まった結果なのだという。元結は自己疎外者ではあつたが、截然とした兼済・独善の生き方も、長沮桀溺や荷篠人のあり方も選びとることはしなかったのである。

愚者とは、智の働きが鈍く、通常の人のようには世に適合することができない者をいう。「愚」についても、やはり『論語』において例えば次のように言及されている。

子曰、唯上智与下愚不移。 子曰はく、唯だ上智と下愚とは移らず、と。

(陽貨)

子曰、古者民有三疾。今也或是之亡也。……古之愚也直、今之愚也詐而已矣。

(陽貨)

子曰はく、古へ民に三疾有り。今や或は是れすら之れ亡きなり。……古への愚や直、今の愚や詐るのみ、と。

孔子は、一方で「愚」を否定的に見ながらも、なおそこに「直」という価値を見いだす。「愚」は世界と齟齬を生じている自らを支える価値観に転化しうる可能性を持つのである。松本肇氏は、「愚」の文化史的背景をたどり、「『愚』という言葉には、表面的なおろかという意味の裏側に、積極的な意味がこめられる場合がある」と言い、「社会批判の武器としても、また道と結合する要素としても」高い価値を持つものであるとする。

では、元結の言う愚者とはいかなるものであるのか。元結の「吾豈隱者邪。愚者也。窮而然爾。(吾豈に隱者ならんや。愚者なり。窮して然るのみ)」という言葉に、人々の迷いは深まるばかりである。

元結はそこで人々の惑いを解くために「遂に時と命とを述べ」ることとなる。ところで、「時命」とは、自らが生まれ合わせた時代と自らの命運とをいうが、この言葉は直ちに『楚辞』の「哀時命」を想起させる。「哀時命」は、「忌哀屈原受性忠貞、不遭明君、而遇暗世、斐然作辞、歎而述之。(忌屈原性を忠貞に受くるも、明君に遭はずして、暗世に遇ふを哀しみ、斐然として辞を作り、歎きて之を述ぶ)」とあるように、嚴忌が暗愚の世に生を得た屈原の不遇を悲しんだものである。その冒頭には「哀時命之不及古人兮、夫何予生之不遭時。(時命の古人に及ばざるを哀しむ、夫れ何ぞ予が生の時に遭はざる)」とあり、身の不遇を嘆く自己の姿が描かれている。「時命」について語ることは、疎外された自己という認識と不遇感を伴うのである。元結の場合はどうであったのか。

元結は、まず、「述時」において自らの生きる時代について述べ、続いて「述命」において自らの命運につい

て語る。

第二節 愚者の自覚

「自述三篇」の第一編は「述時」である。

昔隋氏逆天地之道、絶生人之命、使怨痛之声、満于四海。四海之内、隋人未老、隋社未安、而隋国已亡。何哉。奢淫暴虐昏惑而已。烝人苦之、上訴皇天。（第一段）

皇天有命、於我国家、六葉于茲。高皇至勤、文皇至明、身鑑隋室、不敢満溢。清儉之深、聴察之至、仁惠之極、泱泱洋洋、為万代則。（第二段）

聖皇承之、不言而化、四十余年、天下太平。礼樂化於戎夷、慈惠及於草木。雖奴隸齒類、亦能誦周公孔父之書、説陶唐虞夏之道。至於歌頌謳吟、婦人童子、皆抒性情、美辞韻、指詠時物、与糸竹諧会、綺羅当称。況世貴之士、博学君子、其文学声望、安得不顕聞於当時也哉。故冠冕之士、傾当時大利、軒車之士、富当時大農。

（第三段）

由此知官不勝人、逸於司領。使秩次不能損、又休罷以抑之、尚駢肩累趾、授任不暇。（第四段）

予愚愚者、亦当預焉、日覺抵塞、厭於無用、乃以因慕古人。清和蘊純、周周仲仲、瘳然全真、上全忠孝、下尽仁信、内順元化、外娛大和、足矣。如戚促蜚譖、封蒙遏滅、暮為朝貴、心所不喜。亦由金可鎔、不可使為汗腐、水可濁、不可使為塵糞然已。鄙語曰、愚者似直、弱者似仁。予殆有之。夫復何疑。（第五段）

昔隋氏天地の道に逆らひ、生人の命を絶ち、怨痛の声をして、四海に満たさしむ。四海の内、隋人未だ老いず、隋社未だ安んぜざるに、隋国已に亡ぶ。何ぞや。奢淫暴虐昏惑なるのみ。烝人々に苦しみ、上皇天に

訴ふ。(第一段)

皇天命有り、我が国家において、茲に六葉なり。高皇は至勤、文皇は至明にして、身ら隋室に鑑み、敢て満溢せず。清儉の深く、聴察の至り、仁恵の極まり、決決洋洋として、万代の則と為る。(第二段)

聖皇之を承け、言はずして化すること四十余年、天下太平なり。礼樂は戎夷を化し、慈恵は草木に及ぶ。奴隸の齒類と雖も、亦た能く周公孔父の書を誦し、陶唐虞夏の道を説く。歌頌謳吟に至りては、婦人童子も、皆性情を抒し、辞韻を美しくし、時物を指詠し、糸竹と諧会し、綺羅当に称すべし。況んや世貴の士、博学の君子は、其の文学声望、安くんぞ當時に顕聞せざるを得んや。故に冠冕の士は、當時の大利を傾け、軒車の士は、當時の大農よりも富めり。(第三段)

此れに由りて官は人に勝へず、司領に逸するを知る。秩次をして損ふ能はざらしめんとして、又休罷して以て之を抑ふるも、尚ほ肩を駢べ趾を累ね、授任暇あらず。(第四段)

予は愚の愚なる者にして、亦た当に焉に預るべしとし、日び抵塞するを覚え、用無きに厭き、乃ち以て因りて古人を慕ふ。清和蘊純、周周仲仲、愍然として真を全くし、上は忠孝を全くし、下は仁信を尽くし、内は元化に順ひ、外大和に^{たはむ}俟るれば、足れり。戚促して蚩^し諧し、封蒙して遏滅し、暮れに朝貴と為るがごときは、心喜ばざる所なり。亦た金は鎔かすべくも、汗腐を為さしむべからず、水は濁らすべくも、塵糞と為さしむべからざるに由りて然るのみ。鄙語に曰はく、愚者は直に似、弱者は仁に似る、と。予殆ど之有り。

夫れ復た何をか疑はん。(第五段)

「述時」は、まず隋の滅亡に言及し、その原因が煬帝の「奢淫暴虐昏惑」にあつたと断定する。「奢淫暴虐昏惑」は、滅亡に到る原因として、元結の初期の作品である「二風詩論」(巻一)「元謨」(巻四)「演謨」(巻四)「系謨」(巻四)説楚賦三編(巻四)等に繰り返し述べられている。「奢淫」は奢侈と逸樂、いずれも為政

者の戒めるべきことである。「暴虐」は、「元謨」（巻四）に、「繼者先殺而後淫。乃深刑長暴、酷罰恣虐。暴虐日肆、其下須臾。（繼ぐ者は殺を先にして淫を後にす。乃ち刑を深くして暴を長じ、罰を酷にして虐を恣にす。暴虐日びに肆にして、其の下須臾す）」と見える。「昏惑」は、愚昧で政の本道を知らず、女色や甘言に惑うことで、例えば説楚賦三編（巻四）では「何愾（昏）王」「何惑王」という王の名としても用いられている。

「奢淫暴虐昏惑」の故に滅亡した隋に対して、唐王朝はどうであったのか。第二段では、天命を承けた唐の国家が元結の時代まで高祖、太宗、高宗、中宗、睿宗、玄宗の六代を経たことを言い、ことに高祖（高祖）と文皇（太宗）を、万代の礎を築いた皇帝として称えている。第三段は玄宗の治世の描写である。「聖皇承之、不言而化四十余年、天下太平。（聖皇之を承け、言はずして化すること四十余年、天下太平なり）」は、玄宗が太平と繁栄の時代を現出したことを言う。元結にとって玄宗の治世は「礼楽化於戎夷、慈恵及於草木。雖奴隸齒類、亦能誦周公孔父之書、説陶唐虞夏之道。（礼楽は戎夷を化し、慈恵は草木に及ぶ。奴隸齒類と雖も、亦た能く周公孔父の書を誦し、陶唐虞夏の道を説く）」という、礼楽が整い、慈恵に満ちて繁栄する世界であった。詩歌も盛んとなり、婦人や子供までそれぞれの心情を美しい言葉と整った韻律で表現し、時節や景物を詠じては管弦の音に合わせ、貴顕の士や博学の君子たちはいずれもその名を轟かせていると言うのである。

元結の歴史観は下降史観であって、上古こそ人々が純朴であった理想的な時代であるとする極端な尚古的志向を有しているが、太古の純朴さが損なわれてゆく方向として、純朴さが失われながら繁栄してゆく過程（頽弊以昌之道）と、衰退し滅亡に至る過程（頽弊以亡之道）という二つの過程を想定する。「元謨」（巻四）では、この二つの過程を次のように説いている。

上古之君、用真而恥聖。故大道清粹、滋於至徳。至徳蘊淪、而人自純。其次用聖而恥明。故乘道施教、修教設化。教化和順、而人從信。其次用明而恥殺。故治化興法、因教置令。法令簡要、而人順教。此頽弊以昌之道

也。(第一段)

殆乎衰世之君、先嚴而後殺。乃引法樹刑、援令立罰。刑罰積重、其下畏恐。繼者先殺而後淫。乃深刑長暴、酷罰恣虐。暴虐日肆、其下須臾。繼者先淫而後乱。乃乘暴至亡、因虐及滅。亡滅兆鍾、其下憤凶。此類弊以亡之道也。(第二段)

上古の君は、真を用ゐて聖を恥づ。故に大道清粹にして、至徳に滋し。至徳蘊淪して、人自ら純なり。其の次は聖を用ゐて明を恥づ。故に道に乗じて教へを施し、教へを修めて化を設く。教化和順にして、人信に従ふ。其の次は明を用ゐて殺を恥づ。故に化に沿ひて法を興し、教へに因りて令を置く。法令簡要にして、人教へに順ふ。此れ類弊以て昌ゆるの道なり。(第一段)

衰世の君に殆び、嚴を先にして殺を後にす。乃ち法を引き刑を樹て、令を援きて罰を立つ。刑罰積重して、其の下畏恐す。繼ぐ者殺を先にして淫を後にす。乃ち刑を深くして暴を長じ、罰を酷にして虐を恣にす。暴虐日びに肆にして、其の下須臾す。繼ぐ者淫を先にして乱を後にす。乃ち暴に乗じて亡ぶに至り、虐に因りて滅ぶに及ぶ。亡滅兆鍾まり、其の下憤凶す。此れ類弊以て亡ぶの道なり。(第二段)

「元謨」は、先ず、人間の純朴さが失われながらも繁栄してゆく過程を説く。人々が本来の性に従って純朴であつた上古の時代、すぐれた道徳と叡智によつて人々が教化され、和睦温順で信頼し従うようになった時代、明察さが用いられて簡要な法令が設けられ、人々が教化に従つた時代、の三つの段階が構想され、これが衰退でありながら繁栄する過程とされる(第一段)。次に繁栄から滅亡に至る過程が提示される。それは刑罰を伴う厳しい法律が用いられる時代、刑罰が節度を失つて暴虐がほしいままに行われ、人々が怒る時代、刑罰にふけり、混乱が生じて滅亡がきざし、人々が憤つて残忍となる時代、の三段階である。(第二段)

また、「元謨」を敷衍する「演謨」には、「頽弊以昌之道」について次のように述べられている。

頽弊以昌之道、其由上古強毀純朴、強生道德。使興云云、使亡昏昏。始開礼楽、始鼓仁義、乃有善惡、乃生真偽。然後勤儉之風、発而逾扇、嚴急之教。起而逾変。須智謀以引喻、須信讓以敦護。是故必垂清浄、必保公正。……乃見禁而無殺、順而無訛。猗懷優游、尚致平和。

頽弊以て昌ゆるの道は、其れ上古強て純朴を毀ち、強て道德を生ずるに由る。云云たるを興さしめ、昏昏たるを亡ぼさしむ。始めて礼楽を開き、始めて仁義を鼓し、乃ち善惡有り、乃ち真偽を生ず。然る後勤儉の風、発して逾いよ扇んに、嚴急の教へ、起こりて逾いよ変ず。智謀を須めて以て引喻し、信讓を須めて以て敦護す。是の故に必ず清浄を垂れ、必ず公正を保つ。……乃ち禁じて殺無く、順にして訛無く、猗懷優游として、尚ほ平和を致すを見る。

道德が生じ、礼楽や仁義による教化が行われ、やがて法令が設けられる。しかしその法令は簡要であり、それに淫することがない故に太平の世が招来される。「元謨」「演謨」によれば、「述時」にいう太平のうちに繁栄する唐王朝は、太古の純朴さが損なわれ失われてゆく過程にあつて、繁栄に至ったものなのである。また、隋王朝の「奢淫暴虐昏惑」は、そのまま「元謨」の「衰世之君」のイメージと重なる。隋王朝は「頽弊以亡之道」を歩んだのであり、「元謨」「演謨」に示された歴史観は、実は隋王朝の滅亡と唐王朝の繁栄を解釈するためのものであったとすることができよう。

この史観に依れば、ひとたび「奢淫暴虐昏惑」が兆すや、世界は「頽弊以亡之道」を歩み始めることになる。そして「奢淫」が既にこの世界の内に胚胎されていると元結は考えていた。「述時」第三段の「婦人童子、皆抒性情、美辞韻、指詠時物、与糸竹諧会、綺羅当称。況世貴之士、博学君子、其文学声望、安得不踴聞於当時也哉。

（婦人童子も、皆性情を抒し、辞韻を美しくし、時物を指詠し、糸竹と諧会し、綺羅当に称すべし。況んや世貴の士、博学の君子は、其の文学声望、安くんぞ当時に顕聞せざるを得んや）」という当世の文学の状況については、同様の記述が後の乾元三年（七六〇）に書かれた「篋中集序」（巻七）にも見える。そこでは、「近世作者、更相沿襲、拘限声病、喜尚形似、且以流易為辞、不知喪於雅正。然哉。彼則指詠時物、会諧糸竹、与歌兒舞女生汚惑之声於私室可矣。若令方直之士、大雅君子、聽而誦之、則未見其可矣。（近世の作者、更ごも相沿襲し、声病に拘限し、形似を喜尚し、且つ流易を以て辞と為し、雅正に喪ふを知らず。然らんかな。彼は則ち時物を指詠し、糸竹に会諧し、歌兒舞女と汚惑の声を私室に生ずるは可なり。若し方直の士、大雅の君子をして、聴きて之を誦せしめば、則ち未だ其の可なるを見ず）」と、当世の文学の浮艶華美な状況が厳しく批判されている。「述時」の「世貴之士、博学君子」は、「篋中集序」の「方直之士、大雅君子」と等しく、ここに否定されている状況は「述時」に述べられているものと一致する。また、「冠冕之士、傾當時大利、軒車之士、富當時大農。（冠冕の士は、當時の大利を傾け、軒車の士は、當時の大農よりも富めり）」という、貴顕の者たちが天下の利益を独占している状況が指摘されている。元結は、既に「奢淫」が社会を蝕み、王朝は繁栄から退廃、衰亡への道を歩み始めていると考えているのである。

「述時」の第四段では官吏になることの容易な状況が呈示され、それを承けた第五段では、太平でありながら奢淫によって蝕まれ、やがて衰亡に向かう危うさをはらんだ当世にあつて、自ら愚かにも官吏たらんとしたことが語られる。それは具体的には天宝六載（七四七）の詔勅に応じたことを指すのであろう。しかし彼を待っていたのは「日覺抵塞、厭於無用。（日び抵塞するを覚え、用無きに厭く）」という、自らがこの世界において無用な存在でしかない現実と閉塞感であつた。

「愚愚者」とは、こうした思索に伴って生じた悔恨を伴う自己認識である。それは時代の繁栄がすでに頽廃、衰亡への危機を胚胎していることに気づかぬ愚かさというとともに、純朴さや方正忠信といった天下の公理が価

値を失いつつあるのに、当世においてもなお通じるものであるとして、理想を掲げて官吏たらんとした愚かさをも含んでいるのである。「愚愚者」の語は、この二重の意味で愚の愚なる者という自己の姿を浮かび上がらせている。

しかし、この閉塞状況にあつて、元結は忠孝や仁信といった公理を捨て去ることはできなかった。これらは元結を支えていたものであつて、世界と抵触し無用に厭く現実の中で本来的なものとしてより深く自らのうちに自覚されていったのである。一方で、「元化に順ひ」「大和に^{たはむ}娛る」こともまた、この時期の元結を支えていた認識であつた。「元化に順ふ」は、造化の偉大な働きに従うこと、「大和に娛る」は、万物がおのおのその所得たこの世界の調和を楽しみ戯れることを言う。「大和」の語は『易』乾卦の彖伝に「乾道変化、保合大和、乃利貞。（乾道変化し、大和を保合するは、乃ち利貞なり）」と見える。「上全忠孝、下尽仁信、内順元化、外娛大和、足矣。（上は忠孝を全くし、下は仁信を尽くし、内は元化に順ひ、外大和に娛るれば、足れり）」とは、確信に満ちた言葉であり、「鄙語曰、愚者似直、弱者似仁。予殆有之。夫復何疑。（鄙語に曰はく、愚者は直に似、弱者は仁に似る、と。予殆ど之有り。夫れ復た何をか疑はん）」は、愚者として現実に対峙する決意を示している。ここに「愚者」は、社会への対峙を支える視座として成立した。商余山中の元結は決して一人その身を善くしていたのではなく、愚者として忠と孝とを全くし仁と信とを尽くすことをもって社会に向けて多くの作品を著していたのである。これが元結における現実への対峙のあり方であつた。

第三節 愚者の命

愚者として社会に対峙する視座は、同時にまた愚者の命運についての問いかけを生起する。「述命」は元子と清恵先生との問答によって展開されている。

元子嘗問命於清惠先生。先生曰、子欲知命、不如平心。平心不如忘情。喏曰、幸先生教之。（第一段）

先生曰、夫平心能正是非、忘情能滅有無。子何先焉。曰、請先忘情。（第二段）

先生曰、子見草木乎。子見天地乎。草木無心也。天地無情也。而四時自化、雨露自均、根柢自深、枝幹自茂。如是、天地豈醜授而成哉。草木豈憂求而生哉。人之命也、亦由是矣。若夭若壽、若貴若賤、烏可強哉。不可強也。不可強也。不如忘情。忘情當學草木。嗚呼、上皇強化天下、天下化之。養之以道德、道德偽薄、天下亦從而偽薄。嗚呼、後王急濟天下、天下從之。救之以權宜、權宜侈惡。天下亦從而侈惡。故赴貪徇紛急之風、以至于今。聖賢者兢兢然猶傷命性、愚惑者慁慁然遂忘家國。其由不審不通、醜授憂求而已。子不喻乎。（第三段）

元子嘗て命を清惠先生に問ふ。先生曰はく、子命を知らんと欲するは、心を平らかにするに如かず。心を平らかにするは情を忘るるに如かず、と。喏して曰はく、幸はくは先生之を教へんことを、と。（第一段）

先生曰はく、夫れ心を平らかにせば能く是非を正す。情を忘るれば能く有無を滅す。子何れをか先にせん、と。曰はく、先づ情を忘れんことを請ふ、と。（第二段）

先生曰はく、子草木を見るか。子天地を見るか。草木は無心なり。天地は無情なり。而して四時自ら化し、雨露自ら均しく、根柢自ら深く、枝幹自ら茂る。是くのごとくなれば、天地は豈に醜授して成さんや。草木は豈に憂ひ求めて生ぜんや。人の命も、亦た是れに由る。若しくは夭若しくは壽、若しくは貴若しくは賤、烏くんぞ強ふべけんや。強ふべからざるなり。情を忘るるに如かず。情を忘るるには、当に草木に学ぶべし。嗚呼、上皇強ひて天下を化して、天下之に化す。之を養ふに道德を以てし、道德偽薄にして、天下亦た従ひて偽薄なり。嗚呼、後王急に天下を濟ひて、天下之に従ふ。之を救ふに權宜を以てし、權宜は侈惡にして、天下も亦た従ひて侈惡なり。故に貪徇紛急の風に赴き、以て今に至る。聖賢は兢兢然として猶ほ命性を傷ひ、愚惑者は慁慁然として遂に家國を忘る。其の由審らかにせず通ぜずんば、醜授憂求す

るのみ。子喩らざるか、と。(第三段)

ここに展開されているのは道家的な性命観である。自らの命を問う元子に対して、清恵先生は、自らの命運を知るには、心を平静に保つのがよく、そのためには情を忘れるのがよいと言い(第一、二段)、第三段では天地の無情、草木の無心を説く。先の「元謨」においても、「古者純公以僭愚聞。或曰、公知聖人之道。天子聞之。咨而問焉。公謝曰、臣生自山野、順時而老。心如草木、身若鳥獸。(古者純公僭愚を以て聞こゆ。或ひと曰はく、公聖人の道を知る、と。天子之を聞き、咨りて問ふ。公謝して曰はく、臣山野より生まれ、時に順ひて老ゆ。心は草木のごとく、身は鳥獸のごとし)」と言ひ、草木のごとく無心な純公を登場させていた。『周礼』卷三九「冬官考工記」に「草木有時以生、有時以死。……此天時也。(草木は時有りて以て生じ、時有りて以て死す。……此れ天の時なり)」とあるように、草木は天の時に従ひ何も求めることも憂えることもなく、ただ生じ、枯れてゆく。天地もまた意思があるわけではなく、季節が自ら移り変わってゆくのであつて、そこには一切の心の動きがない。この「草木」に学べというのである。

無用無心なゆえに生を全うするものとして用いられる「草」の用例としては、例えば、初唐、王績の「古意六首」其二(『全唐詩』卷三七)がある。

竹生大夏谿 竹 大夏の谿に生じ

蒼蒼富奇質 蒼蒼として奇質に富む

緑葉吟風勁 緑葉 風に吟じて勁く

翠茎犯霄密 翠茎 霄を犯して密なり

05 霜霰封其柯 霜霰 其の柯を封じ

鵲鸞食其実

鵲鸞 其の实を食ふ

寧知軒轅後

寧ぞ知らん 軒轅の後

更有伶倫出

更に伶倫の出づる有らんとは

刀斧俄見尋

刀斧 俄に尋ねられ

10 根株坐相失

根株 坐ろに相失ふ

裁為十二管

裁ちて十二管を為り

吹作雄雌律

吹きて雄雌の律を作す

有用雖自傷

有用 自ら傷ふと雖も

無心復招疾

無心 復た疾を招く

15 不如山上草

如かず 山上の草の

離離保終吉

離離として終吉を保つに

大夏の谿谷に生じた奇質に富む竹は伶倫によって見いだされ、伐採されて笙に作り替えられてしまう。有用であることは自らを損なってしまう。有用であればいかに無心であっても、また災いを招来してしまう。無用無心の山上の草が己の生を遂げるのには及ばない、と語り手はつぶやく。この山上の草は、無用にして無心な者こそ生を全うするという道家的性命觀を表象するものである。

「述命」は無心の草木と無情の天との關係を説く。殊に注目されるのは、「天地豈醜授而成哉。草木豈憂求而生哉。（天地は豈に醜授して成さんや。草木は豈に憂ひ求めて生ぜんや）」という表現である。「醜授」とは天地が特定の対象に恵みを施すこと、「憂求」とは憂えつつ慈恵を求めることと解することができる。天地は「無情」であって、あまねく万物を生育するのであり、特定の対象に恵みを施すことはせず、草木も「無心」で、憂

えつつ天地に対して慈恵を求めることもないというのが、天地と草木の関係である。この関係は、唐王朝と栄達を求める士人との「醜授」「憂求」の関係を暗示しているであろう。清恵先生は、太古の純朴さが失われて衰退し、「貪徇（財を貪り求めること）」「紛急（政令が乱れ厳しくなること）」が起こっている今の世においては、草木に学んで自らの夭寿貴賤を憂えることなく、「無情」であらねばならないと言う（第三段）。「鳥可強哉。不可強也。不可強也。（鳥くんぞ強ふべけんや。強ふべからざるなり。強ふべからざるなり）」と言い、また「嗚呼」の語を繰り返して語りかける清恵先生の言葉の激越さは、自らを「愚愚者」であるとした元結が「憂求」せぬ者としてあることを自らの中に確認しようとする情動の表出であるとともに、世俗に対して「憂求」「醜授」を戒めようとする強い意志をも表すものである。「述命」は、自らの性命観を人々に示すものであると同時に、諷諭の作ともなっているのである。

第四節 商余山中の世界―癒やしの構造

愚者として社会に対峙する元子によって、商余山はいかなる世界として形象されたのであろうか。「述居」（巻五）は、その問いかけに対する答えである。序に「先曾為述居一篇。因刊而次之、……（先に曾て述居一篇を為る。因りて刊して之を次し、……）」とあるのによれば、この作品は、「述時」「述命」二編よりも先に作られていたものである。

天宝庚寅、元子得商余之山。山東有谷、曰余中。谷東有山、曰少余。山谷中有田、可耕藝者三数夫。^(註10)有泉停浸、可畦稻者数十畝。泉東南合肥溪。溪源在少余山下。溪流出谷、与潞水合匯于澧。（第一段）

将成所居、故人李才聞而来会。乃歎曰、吾未始知夫子之所至焉、今知之矣。吾聞、在貧思富、在賤思貴、人

之常情也。聖賢所有、然而知貧賤不可苟免、富貴不可苟取。上順時命、乘道御和、下守虛澹、修己推分。称君子者、始不忝乎。乃相与占山泉、闢榛莽、依山腹、近泉源、始為亭廡、始作堂宇、因而習静、適自保閑。（第二段）

夫人生於世、如行長道。所行有極、而道無窮。奔走不停、夫然何適。予当乘時和、望年豐、耕藝山田、兼備藥石、与兄弟承歡於膝下、与朋友和樂於琴酒。寥然順命、不為物累、亦自得之分在於此也。（第三段）

天宝庚寅、元子商余の山を得たり。山東に谷有り、余中と曰ふ。谷の東に山有り、少余と曰ふ。山谷の中に田有り、耕藝すべき者三数夫なり。泉有りて停浸し、稻を畦すべき者数十畝なり。泉の東南は肥溪に合す。溪の源は少余山の下に在り。溪流谷を出で、潦水と合し湫に匯る。（第一段）

將に居る所と成さんとするや、故人李才聞きて来会す。乃ち歎じて曰はく、吾未だ始めより夫子の至る所を知らず、今之を知る。吾聞く、貧に在りて富を思ひ、賤に在りて貴を思ふは、人の常情なり、と。聖賢の有る所にして、然り而うして貧賤の苟にも免るべからず、富貴の苟にも取るべからざるを知る。上は時命に順ひ、道に乘じ和を御し、下は虚澹を守り、己を修めて分を推す。君子と称する者にして、始めて忝なくせざるか、と。乃ち相与に山泉を占し、榛莽を闢き、山腹に依り、泉源に近く、始めて亭廡を為り、始めて堂宇を作り、因りて習静し、適自して閑を保つ。（第二段）

夫れ人世に生まるるや、長道を行くがごとし。行く所極まる有るも、道は窮まり無し。奔走して停まらず、夫れ然して何くにか適く。予当に時和に乘じ、年豐を望み、山田を耕藝し、藥石を兼備し、兄弟と膝下に承歡し、朋友と琴酒に和樂すべし。寥然として命に順ひ、物の為に累はされず、亦た自得の分此に在るなり。

（第三段）

第一段において、まず自らが居を定めた空間が語られてゆく。彼が居を定めたのは、魯山県の東南、商余山と

少余山の谷あいを流れる川の源であった。元結は晩年、祁陽（湖南省祁陽県）の浯溪に居を定めた。浯溪もまた泉水の流れる地であった。彼の著しい山水への志向はすでに初期の「述居」にも現れているのである。

彼はここで富貴を求めることなく貧賤に甘んじ、己の運命と共に生きてゆこうとするのであり、この地において四時の順調なめぐりに従い、純朴さを保ち、豊かな実りを願いつつ、兄弟、朋友たちと和やかに日々を過ごすというその生の営みが語られてゆく。

楊承祖氏は、「述居」について、「『述居』頗能彷彿陶淵明・元徳秀帰向田園的境趣。如此從容澹蕩・情景事理・兼包並匯、写到家庭与生涯展望的作品、在元結実不多見、大概初入山中、確有一種寧適^{（注1）}的心境吧。」（「述居」は、すこぶる陶淵明や元徳秀が田園に向かう心情や情景を彷彿とさせる。このようなゆったりとして心地よく、情景と理念とが一つとなって日々の生活と人生観を語った作品は、元結において多くは見られない。おそらく山中に入ったばかりの頃には、きっとやすらかに自得した心境があったのだろう）と述べ、この作品が陶淵明や元徳秀の田園に対する境地を彷彿とさせるとし、静養の始めの頃、元結に自適の心境があったとする。

「寥然として命に順ひ、物の為に累はされず、亦た自得の分此に在るなり。」という意識は、「述命」の「忘情」に等しいものであり、この商余山中において、元結は「述命」に言う「無情」の日々、運命に安んじて「憂求」することのない日々を過ごしていたのである。

この「述居」の世界は、例えば「右溪記」（巻一〇）など、後の元結の山水遊記の先蹤となっている。「右溪記」（巻一〇）は次のような作品である。

道州城西百余步。有小溪。南流数十步合营溪。水抵兩岸。悉皆怪石。欹嵌盤屈。不可名状。清流触石。洄懸激注。佳木異竹。垂陰相蔭。此溪若在山野。則宜逸民退士之所遊。处在人間。則可為都邑之勝境。静者之林亭。而置州已来。無人賞愛。徘徊溪上。為之悵然。乃疏鑿蕪穢。俾為亭宇。植松与桂。兼之香草。以裨形勝。為溪

在州右。遂命之曰右溪。刻銘石上。彰示來者。

道州城西百余歩に小溪有り。南流すること数十歩にして營溪に合す。水兩岸に抵り、悉く皆怪石にして、欹嵌盤屈し、名状すべからず。清流石に触れ、洄懸激注し、佳木異竹、陰を垂れ相蔭ふ。此の溪若し山野に在らば、則ち逸民退士の遊ぶ所に宜しく、処りて人間に在らば、則ち都邑の勝境、静者の林亭と為すべし。而るに州を置きて已來、人の賞愛する無し。溪上を徘徊し、之が為に悵然たり。乃ち蕪穢を疏鑿し、亭宇を為らしめ、松と桂とを植ゑ、之に香草を兼ねて、以て形勝を裨く。溪は州の右に在るが為に、遂に之に命づけて右溪と曰ふ。銘を石上に刻して、來者に彰示す。

道州の西にある小溪の景勝の地に亭宇をしつらえ、「右溪」と名付けたことを記したものである。ここに見られる水を中心とした空間の描写の方法、また雑木の類を取り除いて建物を建てるという行為、「蕪穢」を取り除き、清らかな世界を現出せんとする意識は、「述居」のそれと等しい。「右溪記」では、こうして作り上げられた世界は、「右溪」と命名されることで元結自身のものとなっていく。対象に命名することを通してその世界を自らのものとする意識が表出されているのである。この商余山の地も、元結自らのものであり、この世界のうちにあることによって、彼は、はじめて「述時」「述命」に表出されていた自らの煩悶をいやすことができた。兄弟、朋友との交わりの歎びに満たされ、豊年を願う商余山の地は、自適して自らを解放し、「元化に順ひ」「大和に^{たはむ}娛る」ことのできる、いわば癒やしの空間であったのである。

おわりに

商余山に静養していた時期の元結の作品には、天宝六載の制科によって直面した閉塞状況のうちにあった彼の

心情がよく表れている。「自述三篇」では、自らを狂者でも学者でも隠者でもなく、愚者として位置づけてゆく過程が語られ、また道家的性命観が展開されていた。その「述時」において、元結が自らを「愚愚者」としたのは、唐王朝がすでに頹廢、衰亡へと向かおうとしていることに気づかず、純朴さや方正忠信などが価値を失いつつあるのに、当世においても通じるものであるとして、官吏になろうとしたことを指している。彼は自らを愚愚者として位置づけ、太古の純朴さを理想とし、忠信や仁信を守りつつ生きてゆくことを選んだのであった。

本章の冒頭に引用したように、孫望氏は「自述三篇」に着目し、商余山における元結に深い苦悶を見ている。商余山に習静していた元結の閉塞感と煩悶は氏の指摘の通りであろう。しかしながら、本章で検討してきたように、むしろ元結は「用舎行蔵」の間の矛盾とそこから生じる苦悶を止揚して愚愚者の視座を得、世俗に対峙していたと理解した方がよいであろう。

「述居」に描かれた商余山の田園は、愚愚者として生きていく覚悟を固めた元結にとって、自らを解放することのできる唯一の空間であったが、この空間は現実の社会との厳しい対峙によって成立したものであるが故に、元結は商余山中にあっても常に現実を見据えないわけにはいかなかった。この時期の作品に見られる、現実に対する否定と拒絶、そして規諷の意識の表出は、こうした構造がもたらしたものであるとして理解することができよう。

注

(1) 孫望氏『元次山年譜』及び楊承祖氏「元結年譜」による。

(2) 「習静」について、例えば王維「積雨輞川莊作」(『王右丞集』卷一〇)には、「山中習静觀朝槿、松下清齋折露葵(山中習静朝槿を觀、松下清齋露葵を折る)」とあり、また白居易「酬裴相公見寄二絶」其一

（『白氏長慶集』卷五七）には「習静心方泰、勞生事漸稀（習静心方に泰く、生を勞す事漸く稀なり）」とある。都留春雄氏（『王維』中国詩人選集六、岩波書店、一九五八年、一四一頁）は、王維のこの詩の「習静」に「坐禅を組んで悟りを求めること。梁の朱超の詩に『夏に当たって炎埃に苦しみ、習静花台に対す』とある。」と注する。さらに陳鉄民氏（『王維集校注』中華書局、一九九七年、四四四頁）も、「習静、猶静修。類如静坐、坐禅。」と言う。王維の場合には坐禅という解釈が可能になるであろう。

（3）この時期の元結については、研究者によって異なった見解が提示されている。例えば孫昌武氏は、「在安史之乱以前、他已無意仕途、習静于商余山。一方面、這固然是全身遠害之道、但更重要的、却是出于对現實的絶望。（安史の乱以前においては、元結はもはや仕える気持ちもなく商余山に習静していた。これは一方では身を全くして禍を避けるという生き方であったが、さらに重要なのは、こうした生き方が現實に対する絶望によるものだったことである）」（『読元結文札記』〔『社会科学戦線』第三期、一九八五年〕二九三頁）と述べ、元結は安史の乱以前にあつては、権謀渦巻く現實に絶望し、自らの生を全うすることに努め、出仕の気持ちがなかったと推測している。また、川北泰彦氏も「『汚濁の世にあつては、儒臣は隠逸の生活をすべきである』とする自己認識の方が強かったのではあるまいか。」（「元結に於ける文学的軌跡」〔目加田誠博士古稀記念中国文学論集編集委員会編集『目加田誠博士古稀記念中国文学論集』竜溪書舎、一九七四年〕二六一頁）と、元結が独善兼濟という価値観によつていたとする。これに対して孫望氏は、この時期の元結に深い苦悩を読み、「元結自己曾說、『吾豈隱者耶。愚者也、窮而然耳。』（「自述序」）。這正好說明了他对于『用舍行藏』之間的矛盾心理。不難理解、元結所說的『窮』、主要是指在政治上無法實現自己的政見、無力改變紛乱黑暗的現狀、因而感到苦悶的問題。（元結は自ら「吾豈に隱者ならんや。愚者なり、窮して然るのみ。」と言っている。この言葉は「用舍行藏」の間の彼の矛盾した心を表している。元結の「窮」は、主に政治において自らの政見を實現するすべがなく、乱れた暗黒の現狀を改変する力もないこと

がもたらした苦悶の問題であることは容易に理解できる」(「前言」(『元次山集』中華書局、一九六〇年)二四頁)と述べ、元結は自己の政治的主張を実現することができず、混乱した社会の状況を改めることができないことによって苦悶していたと解釈している。また、楊承祖氏は、元結が政治や上層社会の腐敗と墮落に憤慨し、商余山に静養して時を待ったとし、「他對国家政治・人間疾苦、始終極為關心。敝屣冠冕、是對当国者の姦惡与官場汚濁憤恨、對玄宗荒淫失道不滿、還山養靜、並非要遺世子立、独善其身。在道德的強烈驅動下、不忍緘默、幾年之間、寫了不少規世箴俗・刺譏朝廷的文章、還著了一本『元子』、完成於天寶一二載(七五三)。(彼は国家の政治や人間の苦しみについて、終始強い関心を抱き続けた。官吏となることを軽視したのは、国政を掌る者たちの姦惡と官界の腐敗に対する憤りと、玄宗が荒淫のあまり正道を失ったことに対する不満からであり、山に帰って静養したのは、決して世俗を忘れて孤立し、独り其の身を善くするためではなかった。道徳に突き動かされ、沈黙したままできず、何年かの間に世俗を戒め正し朝廷を諷刺した少なからぬ文章を書き、また『元子』を著し、天寶一二載に完成した)」(『元結研究』[国立編訳館、二〇〇二年]四五頁)と、元結は政治ならびに玄宗に対する憤慨や不満を持ち、多くの諷諭、諷刺の文章を書いていたのであり、それは独善とは異なるものであったと解釈している。

(4) 谷口真由実「狂夫」(後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ―唐詩を読むために』東方書店、二〇〇〇年) 三六七頁。

(5) 横山伊勢雄「詩人における『狂』について―蘇軾の場合」(横山伊勢雄著『宋代文人の詩と詩論』創文社、二〇〇九年) 一〇〇頁。

(6) 山島めぐみ「杜甫における『遊び』―『狂』の用例を中心に」(『中国文化』第六四号、中国文化学会、二〇〇六年) 三五頁。

(7) 加賀栄治「中国の隠者について―焦先のばあいを手がかりとして―」(『語学文学会紀要』一号、北海道

学芸大学語学文学会、一九六三年）一〇二頁。なお、中国の隠者については、小尾郊一著『中国の隠遁思想——陶淵明の心の軌跡』（中公新書、中央公論社、一九八八年）、神楽岡昌俊著『中国における隠逸思想の研究』（ぺりかん社、一九九三年）、上田武「中国古代の隠逸思想と陶淵明（上）」（『人文学科論集』茨城大学人文学部、第二十九号、一九九六年）、同氏「中国古代の隠逸思想と陶淵明（下）」（『人文学科論集』茨城大学人文学部、第三十一号、一九九八年）、櫻田芳樹「隠逸の伝統——酒と田園」（安藤信廣・大上正美・堀池信夫編『陶淵明 詩と酒と田園』、東方書店、二〇〇六年）などがある。

（8）加賀栄治氏、前掲論文。五頁。

（9）松本肇著『柳宗元研究』（創文社、二〇〇〇年）三八〇四六頁。

（10）『元次山集』の原注に「一夫百畝（二夫は百畝なり）」とある。

（11）楊承祖著『元結研究』（国立編訳館、二〇〇二年）四二頁。

第三章 諷諭の視座―寓言

はじめに

元結の文学は、「二風詩論」に言う規諷の意識を根柢に据えてその営みが始まっている。そして天宝六載（七四七）の制科下第、商余山習静を経て愚愚者として王朝や世俗に対峙することを自覚するとともに、より豊かな諷諭の文学が展開されてゆくことになる。

商余山中にあった頃の元結の散文について、孫望氏は、「其写作目的大多数都是為了揭破人間詐偽、抨擊腐敗政治、暴露黑暗現實、反映人民疾苦^{（注1）}。（その著作の目的は、大部分が人間の欺瞞を暴露し、腐敗した政治を批判攻撃し、暗黒の現実を暴露し、人民の苦しみを反映することにあつた）」と指摘し、また「元結通過這種創作、形象地刻劃、嚴重地揭穿、同時也深刻而尖銳地諷刺了當時那箇公理毀棄、人道滅絕、正義消歇的万惡的中上層社会。……這樣的作品、應該說是具有豐富的現實意義的^{（注2）}。（元結はこれらの著作を通して、公理が捨て去られ、人道が滅び、正義が途絶えた極悪な当時の上層社会をイメージ豊かに描き出し、厳しく暴き出し、同時に深刻にまた鋭く諷刺している。……このような作品は、豊かな現実的意味を持つと言わねばならない）」のように、人民の苦しみを描き、社会の悪を暴露する諷刺の作として評価している。

この見解は、元結の散文に対する評価として継承されている。例えば、喬象鍾氏、陳鉄民氏ら中国文学通史編纂委員会による『唐代文学史』は、元結の散文を、国を憂い民を思う作者による、世を憂い憤った諸編であるとし、「元結散文的主要思想内容、是对当时黑暗政治尖锐猛烈的抨擊和对澆漓世風深刻广泛的揭露^{（注3）}。（元結の散文の主な思想的内容は、当時の暗黒の政治に対する鋭い猛烈な批判と攻撃であり、頹廢し乱れた世相に対する深刻

で広範な暴露である」と、当時の腐敗した政治や質朴さを失った世情に対する批判として位置づける。またこの時期の散文に用いられた諷刺の手法については、「元結以漫画般的手法、展現出官場的各種醜態。……這些作品、或嘻笑怒罵、或冷嘲熱諷、或直指要害、或旁敲側擊、写法都很奇特^(注5)」(元結は漫画のような手法によって官僚世界の様々な醜態を描き出している。……これらの作品は、あるいは笑いのしり、あるいは辛辣に嘲笑諷刺し、あるいは直接に急所を突き、あるいは遠回しに述べており、その表現は独特である)」と指摘している。

しかしながら、元結の散文の作品が統治階級の腐敗と社会の悪の暴露や指弾を指すものであるとする解釈は、少なくとも規諷を標榜する元結の文学の姿を十全に捉えているとはいえないであろう。

本章では、先ず元結が商余山に習静する契機となった天宝六載の制科下第の体験を元に書かれた作品「喻友」(巻四)を取り上げ、彼の諷諭の根柢的な表現の構造を確認し、次に習静時に制作された寓言と元子の自称とに注目し、諷諭の表現の様相を明らかにしてゆく。

第一節 「喻友」

天宝六載、玄宗は詔を下して広く天下の士を求め、元結はこれに応じて都に至った。

この年、彼は、「皇謨」三編(「元謨」、「演謨」、「系謨」各巻四)及び「二風詩」(巻一)を著している。その「二風詩序」(巻一)に、「天宝丁亥中、元子以文辞待制闕下。著皇謨三篇、二風詩十篇、将欲求于司匭氏、以裨天監。会有司奏待制者悉去之。於是帰于州里。……(天宝丁亥中、元子文辞を以て制を闕下に待つ。皇謨三篇、二風詩十篇を著し、将に司匭氏に求めて、以て天監に裨せんと欲す。会たま有司奏して待制の者悉く之を去らしむ。是に於て州里に帰る。……)」とあるのによれば、これらの作品は、この制科に際して司匭氏(献納院)、すなわち朝廷に献じられたものであった。玄宗の詔に応じた元結は、治と乱とに対する自らの認識とその

規諷の表現とを世に問うたのである。しかしこの制科においては、「待制の者悉く之を去らしむ」とあるように、結局一人の合格者もなかった。『資治通鑑』卷二一五には次のようにある。

上欲広求天下之士、命通一芸以上皆詣京師。李林甫恐草野之士对策斥言其姦惡、建言、举人多卑賤愚瞶、恐有俚言汚濁聖聰。乃令郡県長官精加試練、灼然超絶者、具名送省、委尚書覆試、御史中丞監之、取名実相副者聞奏。既而至者皆試以詩賦論、遂無一人及第者。林甫乃上表、賀野無遺賢。

上広く天下の士を求めんと欲し、命じて一芸以上に通ずるものは皆京師に詣らしむ。李林甫草野の士対策して其の姦惡を斥言せんことを恐れ、建言すらく、举人多く卑賤愚瞶にして、恐らくは俚言有りて聖聰を汚濁せん、と。乃ち郡県の長官をして精しく試練を加へしめ、灼然として超絶する者は、名を具して省に送り、尚書に委ねて覆試せしめ、御史中丞をして之を監せしめ、名実相副ふ者を取りて聞奏せしむ。既にして至る者皆試みるに詩賦論を以てし、遂に一人の及第する者無し。林甫乃ち上表して、野に遺賢無しと賀す。

玄宗の詔に应じて、全国から一芸以上に通じる者が京師に集まった。しかし、李林甫は、自らの姦惡が批判されるのを恐れて、举人は卑賤で無知であり、洗練されていない言葉で天子の耳を汚すと上申し、巧妙な画策によって一人の合格者も出さないようにしたことを記す。

「喻友」（卷四）は、元結がこの制科に落第して帰郷した時に制作したとされる。これは、元結とともに京師に至り、下第後、長安に止まって官界への道をさぐろうとしている郷里の友人を諭した作品である。

天宝丁亥中、詔徴天下士人有一芸者、皆得詣京師就選。相国晋公林甫以草野之士猥多、恐洩漏当时之機、議於朝廷曰、举人多卑賤愚瞶、不識礼度。恐有俚言、汚濁聖聰。於是奏待制者悉令尚書長官考試、御史中丞監之、

試如常吏。已而布衣之士無有第者、遂表賀人主、以為野無遺賢。（第一段）

元子時在挙中、將東歸。鄉人有苦貧賤者、欲留長安依託時權、徘徊相謀。因諭之曰、昔世已來、共尚丘園潔白之士、蓋為其能外独自全、和不就、飢寒切之、不為勞苦、自守窮賤、甘心不辭。忽天子有命聘之、玄纁束帛以先意、薦輪^{（注）}擁簪以導道。欲有所問、如咨師傅、聽其言、則可為規戒、考其行、則可為師範、用其材、則可約經濟、与之權位、乃社稷之臣。君能忘此、而欲隨逐駑駘、入棧櫪中、食下廐贅斃、為人後騎、負卑隸、受鞭策耶。人生不方正忠信以顯榮、則介潔靜和以終老。鄉人於是与元子偕歸。（第二段）

於戲、貴不專權、罔惑上下、賤能守分、不苟求取、始為君子。因喻鄉人、得及林甫。言意可存、編為喻友。（第三段）

天宝丁亥中、詔して天下の士人に一芸有る者を徴し、皆京師に詣りて選に就くを得しむ。相国晋公林甫草野の士猥多なるを以て、當時の機を洩漏せんことを恐れ、朝廷に議して曰はく、挙人多く卑賤愚瞶にして、礼度を識らず。恐らくは俚言有り、聖聽を汚濁せん、と。是に於て奏して待制の者は悉く尚書の長官をして考試せしめ、御史中丞をして之を監せしめ、試みることを常吏のごとくせしむ。已にして布衣の士に第する者有ること無し。遂に表して人主を賀し、以て野に遺賢無しと為す。（第一段）

元子時に挙中に在り、將に東歸せんとす。郷人に貧賤に苦しむ者有り、長安に留まりて時權に依託せんと欲し、徘徊して相謀る。因りて之に諭して曰はく、昔世已來、共に丘園潔白の士を尚ぶは、蓋し其の能く外独り自ら全くし、和せず就かず、飢寒之に切なるも、労苦と為さず、自ら窮賤を守り、心に甘んじて辞せざるが為なり。忽ち天子命有りて之を聘するや、玄纁束帛以て意に先んじ、輪に薦し簪を擁して以て道を導く。問ふ所有らんと欲するや、師傅に咨るがごとく、其の言を聴けば、則ち規戒と為すべく、其の行を考すれば、則ち師範と為すべく、其の材を用ゐれば、則ち經濟を約すべく、之に權位を与ふれば、乃ち社稷の臣とす。

君能く此を忘れて、驚駭に随逐し、棧櫪の中に入り、下厩の贅麤を食ひ、人の後騎と為り、阜隸を負ひ、鞭策を受けんと欲せんや。人生まれて方正忠信以て顕榮ならずんば、則ち介潔静和以て終老せん。郷人は是に於て元子と偕に帰る。(第二段)

於戲、貴は権を専らにせず、上下を惑はす罔く、賤は能く分を守り、苟くも取るを求めずして、始めて君子と為る。郷人を喩すに因りて、林甫に及ぼすを得たり。言意存すべく、編して喩友と為す。(第三段)

「喩友」の制作年については、冒頭に「天宝丁亥中」とあることから、諸氏ともに天宝六載に編年している。しかしこの作品は以下の二つの理由から天宝六載の作とするには無理があると考えられる。

その第一は、宰相の地位にあつて李林甫が権勢を振るっている時期に、「相国晋公林甫」「林甫」と名指して非難する文章を著すことは難しいということである。例えば、この制科に応じた杜甫は天宝一一載(七五二)一月に制作された「奉贈鮮于京兆二十韻」(『杜詩詳注』巻一)詩において、「三大礼賦」を奉った際の李林甫の専横について「破胆遭前政、陰謀独秉鈞(破胆す前政の、陰謀独り鈞を秉るに遭ふに)」と批判的に言及しているが、李林甫はこの年の一月に亡くなっている。また独孤及は大暦四年(七六九)に「唐故朝散大夫潁川郡長史贈秘書監河南独孤霊表」(『全唐文』卷三九三)を著し、その中で「初公為御史、嘗以直忤吏部侍郎李林甫。是時林甫当国、常欲騁憾於我。(初め公御史為りしとき、嘗て直を以て吏部侍郎李林甫に忤ふ。是の時林甫国に当たり、常に憾みを我に騁^{ほし}にせんと欲す)」と、名指して李林甫に言及している。元結の「喩友」も、天宝六載ではなく、李林甫の死後に著されたと推定すると、第一段の叙述及び李林甫の呼称のことが無理なく理解できる。

また、第一段に制科の経緯が史実として記すかのように叙述されていることである。もし友を論すことを中心とするのであれば、この友も同じく制科に応じているのであるから、ことの経緯をこのように詳らかに叙述する

ことは必要ないであろう。「天宝丁亥中」のこととして記述する必要が生じるのは、ある程度の時間が経過した後であつたとする可能性を考慮しなくてはならない。あるいは天宝六載に制作されたのは、おそらく友を諭す部分のみであり、第一段と第三段は後に編集の段階で加えられたとも考えられる。

本論では、李林甫は天宝一二載（七五三）二月に在身の官爵を剥奪されているから、天宝一一載（七五二）から一二載にかけて制作されたと想定し、元結が愚愚者の視座から天宝六載の制科にまつわる出来事を元にして著した作品として読むこととする。

この「喻友」は、友人を諭すことに仮託して宰相李林甫を批判し、朝廷に抗議したものとして読まれている。楊承祖氏は、「不僅揭發林甫之姦、也強調君子固窮守道、高尚自全之義^{（注7）}」（李林甫の奸悪を暴くだけでなく、君子はもとより窮するものであるとして道を守り、気高く自らを全うするという道理を強調している）」^{（注8）}と言い、「直諫天子、譏責時權、可稱一篇抗議朝廷・敝屣富貴的宣言^{（注8）}」（天子を直諫し、時の権力者を責め譏っており、朝廷に抗議し、富貴を価値のないものとする宣言とすることができよう）」と述べる。制作時期を李林甫逝去後とした場合、「喻友」は、果たして楊承祖氏の指摘のごとく、天子を直諫し、朝廷に抗議する作品として読めるのであろうか。

前述のように、第一段はこの制科の顛末を客観的に記している。天宝六載、詔によって一芸ある者は都に至り、待制の者として朝命を待つことができるようになったこと、宰相李林甫は民間の人士がやたらに多いので、皇帝の機密が漏洩するのを恐れたこと、上奏して尚書省の長官に命じて、待制の者たちに通常と同様の試験をさせたこと、そして一人の合格者もなかったことが述べられ、李林甫が「野無遺賢^{（野に遺賢無し）}」と賀したこと^{（『資治通鑑』）}を記す。「恐草野之士对策斥言其姦惡（草野の士対策して其の姦惡を斥言せんことを恐れ）」^{（『資治通鑑』）}のように李林甫の狡猾さをはっきりと述べてはいないが、第一段の表現の背後には鬱積した怨嗟を窺うことができるであろう。殊に「野無遺賢^{（野に遺賢無し）}」の句は、梁、丘遲「荅舉秀才啓」^{（『全梁文』卷五六）}に

「故已天下不愛宝、野無遺賢。（故に已に天下宝を愛せず、野に遺賢無し）」とある他、陳、徐陵「冊陳公九錫文」（『全陳文』卷六）、隋、許善心「梁史序伝論述」（『全隋文』卷一五）、唐、張説「文昌左丞陸公墓誌」（『全唐文』卷二二一）、李嶠「大周降禪碑」（『全唐文』卷二四八）、王維「裴僕射齊州遺愛碑」（『全唐文』卷三二六）などの先行例が見られる。それらを襲い、玄宗の治世を賛美した李林甫の上表の言葉が、彼の奸悪さを象徴している。

第二段は、都に残って伝を求めようとする郷里の友人に向かって、処士のあり方を述べ、続いてあるべき賢者の招き方と遇し方を語り、そして今回の制科に対する処し方を示している。先ず、在野の士は、節操を固く保ち、人と妥協することなく、高潔で飢寒も貧賤も苦にしない者であると言い、さらにあるべき賢者の招き方と待遇とについて述べてゆく。「玄纁束帛」は、賢者を招聘する際の引き出物である。『旧唐書』卷一三九「張士衡伝」に「貞観中、幽州都督燕王靈夔備玄纁束帛之礼、就家迎聘、北面師之。（貞観中、幽州都督燕王靈夔玄纁束帛の礼を備へ、家に就きて迎聘し、北面して之を師とす）」とあるように、唐代においても貞観年間に燕王靈夔が学者張士衡を招聘する際に玄纁束帛を用いた例が見られる。「薦輪」は、車輪になめし革を巻き、さらに綿を入れて車が揺れないようにすることをいう。「薦輪」は用例を見ないが、蒲で車輪をつつむ「蒲輪」は用例が多い。「安車」とともに用いられる。『後漢書』卷五三「徐穉伝」に、後漢の陳蕃等が上疏して徐穉他を推薦した時のこととして、「桓帝乃以安車玄纁、備礼徴之、並不至。（桓帝乃ち安車玄纁を以て、礼を備へて之を徴すも、並びに至らず）」とみえる。唐代においても『旧唐書』卷一八三「武攸緒伝」に「中宗即位、以安車備礼徴之。（中宗即位するや、安車を以て礼を備へて之を徴す）」とあるように、中宗が隠者武攸緒を安車を以て召している。「擁篲」は、箒を持って掃き清めることで、これも賢者を招く際に行うものである。「玄纁束帛」「薦輪」（蒲輪）は唐代においても隠者や処士を招聘する際の礼として用いられることがあったのである。元子は、ひとたび天子に賢者を招くようにとの命があった場合には、それに相応しい礼を尽くして招くようにしなければならず、

招聘したからには相応しい待遇を与えねばならないとして、天宝六載の制科が賢者を招くには全く相応しくないものであったことを明確にしてゆく。

第二段の後半は、続いて節操を失って下位の役人になろうなどとしてはならないと言い、「方正忠信」を以て仕官するのでなければ、「介潔静和」を以て一生を終えるべきであると論している。ここでは処士の守るべきこととして「方正忠信」「介潔清和」ということが強調されている。「方正忠信」とは、正直で真心を尽くし偽りのないこと、また「介潔清和」は、気骨があり高潔さを保ち、物静かで穏やかなことをいう。正直に真心を尽くし、偽りなく身を処することをもって仕官し、在野にあつては高潔さを保って生きるという士のあり方に言及しつつ、正しい士の招き方が行われぬ状況にあつては、截然と独善の生き方をすべきであると、友人を諭すのである。

第三段は、貴顕の地位にある者は権力を恣にせず、下々の者を惑わすことなくしてはじめて君子となるのである。また下位にある者は自らの分を守り、かりそめにも官位を求めるようなことをしないことによつてはじめて君子となるのであると言ひ、貴顕の地位にある者と布衣の士とのあるべき姿を提示する。

「因諭郷人、得及林甫。（郷人を諭すに因りて、林甫に及ぼすを得たり）」、郷里の友人を諭すことによつて李林甫に及ぼすことができたと言うのであるから、本編は、賢者の本来の招き方、君主と布衣の士のあり方を述べて友人を諭したものであり、そのことによつて李林甫のことに及んだのであつて、直接に李林甫の姦惡を暴きたてようとするものではないことになる。

天宝九載（七五〇）に書かれた「二風詩序」にも「此亦古之賤士不忘尽臣之分耳。（此れ亦た古の賤士臣の分を尽くすを忘れざるのみ）」とあり、「二風詩」という規諷の意図を強く持つ著作が、処士としての分を尽くすという意識のもとに制作されたものであることを述べている。元結は、朝廷の官吏として直接に王朝の政に関われないのであるから、著作によつて天下の公理を示し、王朝のあり方、政の是非を明らかにすることを通して王

朝の士人としての役割を果たすことを処士である自らの信念としていたのである。「喻友」も、単なる李林甫批判、朝廷に対する抗議としてではなく、歴史的事実である天宝六載の制科を取り上げ、朝廷に対する忠告、戒めの意をこめた作として読まれなければならないであろう。「喻友」は、商余山中にあった元結が、自らの体験をも規諷の作とし、世人に対して積極的な創作活動を展開していたことを窺わせる作品なのである。

第二節 『元子』

『元子』は商余山中で著された元結の著作である。「自釈」(巻八)には次のようにある。

少居商余山、著元子十篇。故以元子為称。

少くして商余山に居り、元子十篇を著す。故に元子を以て称と為す。

この『元子』は散逸しているが、すでに指摘されているように、宋、高似孫の『子略』^(注9)巻四に、「初、結居商余山著書。其序謂天宝九年庚寅至十二年癸巳、一万六千五百九十五言、分十卷。……(初め、結商余山に居りて書を著す。其の序に謂ふ、天宝九年庚寅より十二年癸巳に至る、一万六千五百九十五言、十卷に分かつ。……)」とあり、また宋、洪邁『容齋隨筆』巻一四にも、「又有元子十卷。李紆作序。予家有之。凡一百五篇。其十四篇已見於文篇。(又元子十卷有り。李紆序を作る。予が家に之有り。凡そ一百五篇なり。其の十四篇は已に文篇に見ゆ)」と見える。これらの記述によれば、『元子』一〇巻は、一〇五編、一六五九五字からなる著作であった。同時期には『文編』(散佚)も著されており、元結がこの時期盛んな著作活動を展開していたことが窺われる。「文編序」(巻一〇)には、進士に挙げられた天宝一二載(七五三)のことを次のように記している。

侍郎楊公見文編、歎曰、以上第汚元子耳。有司得元子是賴。

侍郎楊公文編を見、歎じて曰はく、上第を以て元子を汚すのみ。有司元子を得是れ賴る、と。

侍郎楊公は、礼部侍郎楊浚、天宝一二載、一三載の知貢舉であつた。彼が元結の「文編」に感嘆して發した言葉の中に「元子」とあることは、元結がこの著を世に問い、元子と呼ばれていたことを推測させる。また、『元子』の片鱗は、先に挙げた洪邁の『容齋隨筆』に窺える。洪邁は次のように言う。

余者大抵澶漫矯亢。而第八卷中所載皆方国二十国事、最為譎誕。其略云、方国之僇、尽身皆方、其俗惡円。設有問者曰汝心円、則両手破胸露心曰、此心円耶。円国則反之。言国之僇、三口三舌。相乳国之僇、口以下直為一竅。無手国足便於手、無足国膚行如風。其說頗近山海經、固已不韙、至云惡国之僇、男長大則殺父、女長大則殺母、忍国之僇、父母見子如臣見君、無鼻之国、兄弟相逢、則相害、触国之僇、子孫長大則殺之。如此之類、皆悖理害教、於事無補。次山中興頌与日月争光。若此書、雖不作可也。惜哉。

余は大抵澶漫矯亢なり。而して第八卷中載する所の皆方国二十国の事は、最も譎誕為り。其の略に云へらく、方国の僇、尽く身皆方なり、其の俗円きを惡む。設し問ふ者有りて、汝が心円からん、と曰はば、則ち両手もて胸を破り心を露して曰はく、此の心円きか、と。円国は則ち之に反す。言国の僇は、三口三舌なり。相乳国の僇は、口以下は直ちに一竅を為す。無手国は足手よりも便なり、無足国は膚行くこと風のごとし。其の説頗る山海經に近く、固より已に韙しからざるに、惡国の僇は、男長大すれば則ち父を殺し、女長大すれば則ち母を殺し、忍国の僇は、父母子を見ること臣の君を見るがごとく、無鼻の国は、兄弟相逢へば、則ち相害し、触国の僇は、子孫長大すれば則ち之を殺す、と云ふに至る。此のごときの類、皆理に悖り教を害

し、事に於て補ふ無し。次山は中興の頌日月と光を争ふ。此の書のごときは、作らずと雖も可なり。惜しいかな。

『元子』の中には、全身が四角く、円いものを憎み、心臓が円いと言われると自ら胸を割いて心臓が四角いことを示す方国の生き物をはじめ、円国、言国等、「官方」の国々の異様な生き物たちの姿が描かれている作品があったというのである。「僵」字は他に用例を見ないが、悪国や忍国、無鼻の国、触国の描写からすると、獣のごとき人を意味すると考えられる。洪邁はこの異様な国々の描写を『山海経』に類似する奇怪で不正なものであり、道理に悖り教化を害するとして退ける。しかし、本章の冒頭に挙げた孫望氏が『山海経』に類似するという洪邁の解釈を否定して「按照我的推测、这一部分很可能是一种介乎雜文、寓言与小説之間的作品。元結通過這種創作、形象地刻劃、嚴重地揭露、同時也深刻而尖銳地諷刺了當時那箇公理毀棄、人道滅絕、正義消歇的万惡的上層社会^(注10)」。(私の推測では、まちがいにこの一部分は雜文、寓言と小説との中間にある作品である。元結はこうした創作を通して生き生きと描写して厳しく暴露し、同時に公理が捨て去られて正義が消失した当時の極悪非道な上層社会を深刻に鋭く諷刺したのである)」と、この奇怪な国々が現実の社会のメタファーなのであり、この作が鋭い諷刺を含むことを指摘している。確かに、方国、円国の者たちは自らの信念に殉ずる人間の姿であろうし、言国のそれは口舌の徒を想起させる。また、悪国、忍国、無鼻国、触国の者たちは倫理観を失った人々の浅ましい姿を描いているようである。ただ、洪邁が挙げているのは官方国二〇国の全文ではなく、特に「譎誕」(奇怪で荒唐無稽)である箇所に着目したものであるから、官方国二〇国の荒唐無稽な表現がどのような文脈の中で展開されているのか、上層社会の諷刺であるとして、その背後にはどのような意識の構造があるか、洪邁の引用から推し量ることは困難である。

洪邁が「澶漫矯亢(意をほしいままにしていと他と異なる)」としている『元子』の内容は、この記述以外不

明であるが、第五節で検討するように、現存する元結の作品のうち商余山習静期のものはほとんど元子を名乗っており、孫望氏や楊承祖氏は、その中のいくつかを『元子』の一部であると推定している。例えば孫望氏は『元次山年譜』天宝九載（七五〇）の条に、「心規、戯規、処規、為此三年中作品、疑皆元子中篇目。又悪円、悪曲、水楽説、訂司楽氏、所述俱饒山野味。並浪翁観化四篇及時化、世化二篇、疑亦此際作品、且皆為元子之一部分^(注11)。（「心規」、「戯規」、「処規」は、この三年間の作品であり、皆元子中の編目であろうか。また「悪円」、「悪曲」、「水楽説」、「訂司楽氏」は、内容が山野の趣を持っており、「浪翁観化」四編及び「時化」、「世化」二編はともにこの頃の作品であり、皆元子の一部であろうか）」と言う。氏は、天宝九載（七五〇）から天宝一二載（七五三）までの作品の何編かを『元子』の一部としている。

第三節 元結の寓言―「寢論」

商余山習静期の作品で元子と名乗るものには寓言が多い。寓言とは、主に道德的、教訓的な寓意を含んだ短編の詩文をいい、その寓意が直感的に理解されるという構造を持つ。例えば、松本肇氏は柳宗元の寓言を考察するにあたり、この概念を拡張させ、「寓言と呼ぶのは、寓意性を含む作品のことであり、おもに短い物語によつて教訓を示すたとえ話を指すが、物語のかたちは取らなくても、表面上の意味とは別の意味を認め得る作品は寓言として扱う^(注12)。」としている。

商余山習静期の元結の散文作品のうち、松本氏の言う寓言としての形式を備えたものには、例えば「^{げい}寢論」（卷四）がある。

元子天宝中曾預讌於諫大夫之座。酒尽而無以続之。大夫歎曰、諫議散冗者、貧無以繼酒。嗟哉。元子醉中議

之曰、大夫頗能用一謀、令大夫尊重如侍中、威權等司隸。何若。大夫問謀。（第一段）

対曰、得瘵婢一人在人主左右、以瘵言先諷、則可。請有所說。大夫不聞古有郤侯。侯家得瘵婢。寐則瘵言。言則侯輒鞭之。如是一歲、婢瘵如故。侯無如婢何。有夷奴、每厭勞辱。寐則佯瘵。其言似不怨而若忠信。侯問、問之。則曰、素有瘵病。寐中瘵言、非所知也。引瘵婢自弁、辭說云云。侯疑学婢、鞭之不止。髡之鉗之。奴瘵愈甚。奴於是重窺侯意、先事瘵說、說侯之過、警以禍福。又無如奴何。客有知侯禍機。因瘵奴之先、扣侯門、諫侯以改過免禍。侯納客為上賓、復其奴、命曰瘵良氏。子孫世在于郤。（第二段）

大夫誠能学奴効婢、佯瘵言以譏諫人主、俾悔過追誤、与天下如新、大夫見尊重、威權何止侍中司隸。大夫乃歎曰、嗚呼、吾謂今之士君子、曾不如郤侯夷奴耶。（第三段）

元子天宝中曾て譙に諫大夫の座に預かる。酒尽きて以て之を續くる無し。大夫歎きて曰はく、諫議は散冗なる者なれば、貧にして以て酒を繼ぐ無し。嗟、と。元子醉中に之を議して曰はく、大夫頗る能く一謀を用ゐなば、大夫をして尊重せらるること侍中のごとく、威權司隸に等しからしめん。何若、と。大夫謀を問ふ。

（第一段）

対へて曰はく、瘵婢一人を得て人主の左右に在り、瘵言を以て先づ諷せしむれば、則ち可なり、と。請ふ説く所有らんことを、と。大夫古に郤侯有るを聞かずや。侯が家瘵婢を得たり。寐ぬれば則ち瘵言す。言へば則ち侯輒ち之を鞭つ。是くのごとくすること一歲、婢瘵すること故のごとし。侯婢を如何ともする無し。夷奴有り、毎に勞辱を厭ふ。寐れば則ち佯瘵す。其の言怨まざるに似て忠信のごとし。侯聞きて、之に問ふ。則ち曰はく、素瘵病有り。寐中の瘵言は、知る所に非ざるなり、と。瘵婢を引きて自ら弁じ、辭說云云たり。侯婢に学ぶかと疑ひ、之を鞭ちて止めず。之を髡し之を鉗す。奴の瘵愈甚だし。奴是に於いて重ねて侯の意を窺ひ、事に先んじて瘵説し、侯の過ちを説き、警むるに禍福を以てす。又奴を如何ともする無し。客に侯の禍機を知るもの有り。瘵奴の先に因りて、侯の門を扣き、侯を諫めて以て過ちを改め禍ひを免かれしむ。

侯客を納れて上賓と為し、其の奴を復し、命づけて臧良氏と曰ふ。子孫世邵に在り。（第二段）

大夫誠に能く奴に学び婢に効ひ、寢言に仮りて以て人主を譏諫し、過ちを悔い誤りを追ひ、天下と与に新たなるがごとくならしめば、大夫尊重せられ、威権は何ぞ侍中司隸に止まらんや、と。大夫乃ち歎じて曰はく、嗚呼、吾謂へらく、今の士君子、曾ち邵侯の夷奴に如かざるか、と。（第三段）

「寢」とは、寢言、「諫大夫」は、諫議大夫のことである。元子は、諫議大夫に対して、寢言によつて主君を諫めた古代の奴隸の話を引き、主君に忠告し諫めること（譏諫）を勧めるのである。まず第一段で、元子が諫議大夫の宴席に招かれたおり、酒が尽きてしまったことがあったと語りだす。諫官の職が閑職であつて、俸給が少ないことを嘆く諫議大夫に対して、元子は、諫議大夫が重んじられ、大きな権威を持つことができる方法があると言う。諫議大夫は、その方法を問う。

第二段は諫議大夫に対する寓言の部分である。邵侯の家に寢言を言う婢がいて、寢言を言うたびに鞭打つが、寢言は一向にやまない。するとある奴隸がそら寢言を言い始める。それは、主人に対する真心を述べるかのごときものであつた。邵侯は厳しく鞭打つのだが、そら寢言はますますひどくなり、しまいには邵侯の過ちを説き、禍福をもつて戒めるようになる。やがて邵侯に禍が兆していることを知る者が、この奴隸の導きで邵侯に会い、彼を諫めて禍を免れさせ、その結果、その奴隸は臧良氏となつた。

第三段では、元子は諫議大夫に向かつて、臧良氏にならない、そら寢言で君主を遠回しに諫めることを勧めている。『大唐六典』巻八に、「諫議大夫掌……規諫諷諭。（諫議大夫は……規諫諷諭を掌る）」とあるように、諫議大夫は本来「規諫諷諭」を掌る官である。「規諫」とは、規準、規範を示して諫めることを言う。太宗の時代においては重用されていた諫官は、元結の時代には名ばかりのものとなっており、「規諫諷諭」が機能しなくなっていた。そうした状況の中、宴席に招かれた元子は、諫議大夫に対して、奴隸がむち打たれてもそら寢言をや

めずに主人を諫めたように、規諫諷諭を尽くせと勧めているのである。

この作品について、劉国盈氏は「在這箇故事中、元結要人們学奴効婢、假寐言以譏諫人主、而他個人則的確有点夷奴・寢婢精神的、他譏諫人主、无所畏惧、堅持不懈、……対極暴極惡的君主、進行了針砭^(注13)」。(この話の中で元結は人々が奴に学び婢に効い、寢言に仮りて以て人主を譏諫することを求めているのであって、彼自身は明らかに夷奴や寢婢の精神を有しており、人主を譏諫して何ものも恐れず、倦まずたゆまず、……極めて凶惡な君主を厳しく批判し戒めている。)と解釈している。しかし、ここには元子のシニカルな笑いと現実に対する苦々しさが流露しており、「凶惡な君主」に対する厳しい批判は明らかに背後に退いている。「寢論」には、諫官に規諫諷諭を勧めることによって、王朝において諫官が機能しなくなっている状況を明らかにし、為政者がその状況を改めるように願う意が寓されていると言うことができる。

この作品では、そら寢言で人主を諫めるというアイロニカルな構造とシニカルな笑いが表面に出てきており、忠告や戒めという規諷の意は明示的ではない。このことは規諷から出発した元結の諷諭の文学が豊かに展開していることを表していると見ることができるであろう。

第四節 柳宗元の「斬曲几文」と元結の「惡曲」

唐代の詩人、文章家では柳宗元(七七三―八一九)も多様な寓言を著している。松本肇氏は^(注14)、「柳宗元の文学は政治運動における敗北の所産」であるという視点に立ち、その寓言を敗北の情況から生み出されたものであるとして、社会批判の意図を込めた「社会への憤激」、自らへの戒めの意を寓した「自戒のために」、愚であることの優越性を言う「愚者の文学」、敗北者の視点から高邁な理想の追求を述べた「理想と敗北」の四種に大きく分類している。また、「社会への憤激」については、さらに、醜い人間を諷刺した「讒言・へつらい」、外見よ

りも中身が大切であるとした「外見と中身」、さまざまな欲望のために自滅する人間を諷刺した「欲望」、権力の恐ろしさを描いた「権力」、反語の構造を用いて諷刺を展開する「反語による諷刺」、の五つに分けている。そして「柳宗元の寓言には、政治社会を諷刺した作品もあれば、愚者の美を讃えた作品もあった。その根底に流れているのは、高邁な理想を追求して敗れた人間の自負であったと考えられる。」^(注15)と述べ、豊かな寓言の根柢に自らを愚者と位置づけた自負心があったとしている。

第二章に述べたように、元結は天宝六載（七四七）の制科に応じたものの、李林甫の策略によって下第して帰郷し、商余山に静養していた。いわば貴族階層を中心とする価値観、イデオロギーから排除されたのである。深い煩悶のうちにあった元結は、自らが制科に応じたことは時代を見誤ったことであるとし、自らを愚者である位置づけていった。そして愚者として、忠や直という、時代が顧みることのない公理を自らの価値観として時代に対峙しようとした。そのためには、エクリチュールとして貴族階層のイデオロギーを体現する駢文ではない、愚者の文体が必要だったのである。^(注16)元結においては、それが古文であった。商余山中にあった時期の元結は古文による諷諭の表現を駆使し、作品を多く著した。彼の寓言もこうして成立したのである。

一方、柳宗元も愚者としての自負を抱き、自らを疎外した政治社会を見つめる視座が成立した時、その表現はやはり駢文ではないスタイルを要求し、古文が選り取られたのである。

以下、両者の寓言を比較しつつ、元結の寓言の特色を確認してゆく。

松本氏は、社会に対する憤りを表す寓言の例として、讒言やへつらいを事とする人間を諷刺した「斬曲几文」^(注17)（『柳宗元集』巻一八）を挙げている。これは、曲がった肘掛けを斬ることを言う文である。

后皇植物、所貴乎直。聖主取焉、以建家国。亘為棟楹、齊為闔闕。外隅平端、中室謹飭。度焉以几、維量之則。君子憑之、以輔其德。（第一段）

末代淫巧、不師古式。断茲揉木、以限肘腋。欹形詭狀、曲程詐力。制類奇邪、用絶繩墨。勾身陋狭、危足僻側。支不得舒、脅不遑息。余胡斯蓄、以乱人極。(第二段)

追咎厥始、惟物之殘。稟氣失中、遭生不完。託地塊垤、反時燠寒。鬱悶結澁、癰蹇艱難。不可以遂、遂虧其端。離奇詰屈、縮惡嶢峴。含蝎孕蠹、外邪中乾。或因先容、以售其蟠。病夫甘焉、制器以安。彼風毒敗形、陰沴遷魄。禍氣侵骨、淫神化脉。体仄筋倦、榮乖衛逆。乃喜茲物、以為己適。器之不祥、莫是為敵。烏可昵近、以招禍癖。(第三段)

且人道甚惡、惟曲為先。在心為賊、在口為愆。在肩為僂、在膝為攣。戚施踣跂、匍匐拘拳。古皆斥遠、莫致於前。問誰其類、惡木盜泉。朝歌迴車、簡牘載焉。昭王市骨、樂毅歸燕。(第四段)

今我斬此、以希古賢。諂諛宜惕、正直宜宣。道焉是達、法焉是專。咨爾君子、曷不乾乾。既和且平、獲祐於天。去惡在微、慎保其伝。(第五段)

后皇の植物は、直を貴ぶ所なり。聖主取りて、以て家國を建つ。亘して棟楹と為し、斉へて閭闔と為す。外隅は平端にして、中室は謹飭す。焉を度るに几を以てするは、維れ量の則なり。君子之に憑りて、以て其の徳を輔く。(第一段)

末代淫巧にして、古式を師とせず。茲の揉木を断ち、以て肘腋を限る。欹形詭狀、曲程詐力なり。制は奇邪に類して、用て繩墨を絶つ。勾身陋狭にして、危足僻側す。支は舒ぶるを得ず、脇は息ふに遑あらず。余胡ぞ斯を蓄へて、以て人極を乱さんや。(第二段)

厥の始めを追咎するに、惟れ物の残なり。氣を稟くること中を失ひ、生に遭ふこと完からず。地の塊垤に託し、時の燠寒に反す。鬱悶結澁し、癰蹇艱難たり。以て遂ぐべからず、遂に其の端を虧く。離奇として詰屈し、縮惡して嶢峴たり。蝎を含み蠹を孕み、外は邪まにして中は乾く。或は先づ容るに因りて、以て其の

蟠を售る。病夫焉に甘んじ、器を制して以て安んず。彼の風毒形を敗り、陰沴魄を遷す。禍氣骨を侵し、淫神脈を化す。体仄きて筋倦み、榮は乖き衛は逆す。乃ち茲の物を喜びて、以て己が適と為す。器の不祥なる、是より敵為るは莫し。烏くんぞ昵近して、以て禍癖を招くべけんや。（第三段）

且つ人道甚だ惡むは、惟だ曲を先と為すのみ。心に在りては賊と為り、口に在りては愆と為る。肩に在りては僂と為り、膝に在りては攣と為る。戚施踣跂し、匍匐拘拳す。古皆斥け遠ざけ、前に致す莫し。誰か其の類なるかを問はば、惡木と盜泉なり。朝歌迴車、簡牘焉を載す。昭王骨を市ひ、樂毅燕に帰す。（第四段）

今我此を斬りて、以て古賢を希ふ。諂諛は宜しく惕るべく、正直は宜しく宣ぶべし。道は是れ達し、法は是れ専らならん。咨爾君子、曷ぞ乾乾たらざる。既に和し且つ平らかにして、祐を天に獲ん。惡を去ること微に在り、慎み保ちて其れ伝へん。（第五段）

語り手は、まず天の生み出した植物は直であることを貴び、聖主はこの直に基づいて国家を築いたと述べ、凡は、室内を測るときの基準とするものであり、君子の徳を助けるものであったことを言う。第二段では、曲がった木で肘掛けを作るようになったために、肘や脇が自由にならず、窮屈で手足も伸ばすことができないとして、曲がった木でできた肘掛けを非難する。第三段は、曲がった木がいかにしてできあがったか、それを病弱な人間が肘掛けにすることがいかに不祥なことであるかを述べる。さらに第四段では、曲ということが人道において最も憎むべきものであることを言い、第五段で、この肘掛けを斬り、阿諛追従する者が懼れ、正直な者が評価されるようにするという寓意の内容を示して結ぶ。阿諛追従する者への激しい憤りが表出された寓言である。

この文は、読者が第五段落に示された寓意を読むことによって、はじめて曲がった肘掛けを切るという寓意の意味が明瞭に理解できるように構成されている。韓醇の注には「其文蓋指當時以諂曲獲用者。又謂上之人不明、

棄直而用曲、則不才者進。其旨微矣。（其の文蓋し当時の諂曲を以て用ゐらるるを獲る者を指す。又上の人不明にして、直を棄てて曲を用ゐれば、則ち不才の者進むを謂ふ。其の旨微なり）」とあるが、阿諛追従して君主の側近くに仕える者を指弾するという寓意の内容は、前節で取り上げた元結の「寢論」のように直接的、明示的ではない。觀念の形象化のレベルが高いのである。有名な「三戒」（『柳宗元集』卷一九）や「蝟蝓伝」（同、卷一七）等もそうであり、柳宗元は觀念を生き生きと形象化して叙述することに執着するのである。

一方、元結にもやはり曲がつたことを憎むことを述べた文、「惡曲」（卷五）がある。

元子時与隣里会、曲全当時之權、以順長老之意。歸泉上。叔盈問曰、向夫子曲全其權。道然也、苟為爾乎。

元子曰、叔盈視吾、曲其心以徇財利、曲其行以希名位、當過吾。吾苟全一權於隣里。無惡然可也。（第一段）

東邑有全直之士。聞元子対叔盈、恐曰、吾聞、元次山約其門人曰、無惡我之小曲。真昏鄙惡辭也。吾輩全直三十年、未嘗曲氣以転声、曲辞以達意、曲歩以便往、曲視以回目、猶患於古人。古人有惡曲者、不曲臂以取物、不曲膝以便坐。見天下有曲於君、曲於民、曲於鬼神者、往劫而之死之。今元次山苟曲言矣。強全一權、以為不喪其直。恩哉。若能苟曲於隣里、強全一權、豈不能苟曲於郷県、以全言行。能苟曲於郷県、豈不能苟曲於邦国、以彰名譽。能苟曲於邦国、豈不能苟曲於天下、以揚德義。若言行名譽德義皆顯、豈有鍾鼎不入門、權位不在己乎。嗚呼、曲為之、小為大之漸。曲為之也、有何不可。姦邪凶惡其鬪乎。（第二段）

元子聞之、頌曰、吾以顔貌曲全一權、全直君子之惡我如此。猶有過於此者、何以自免。（第三段）

元子時に隣里と会し、曲げて当時の權を全くして、以て長老の意に順ふ。泉上に歸る。叔盈問ひて曰はく、向に夫子曲げて其の權を全くす。道然るか、苟めに爾するを為すか、と。元子曰はく、叔盈吾を視るに、其の心を曲げて以て財利に徇ひ、其の行ひを曲げて以て名位を希はば、當に吾を過むべし。吾苟めに一權を隣里に全くす。惡然たること無くして可なり、と。（第一段）

東邑に全直の士有り。元子の叔盈に対ふるを聞き、恐れて曰はく、吾聞く、元次山其の門人に約して曰はく、我の小曲を惡む無れ、と。真に昏鄙の惡辭なり。吾輩直を全くすること三十年、未だ嘗て氣を曲げて以て声を転じ、辭を曲げて以て意を達し、歩を曲げて以て往に便にし、視を曲げて以て目を回らさざるも、猶ほ古人を患ふ。古人に曲を惡む者有り、臂を曲げて以て物を取らず、膝を曲げて以て坐に便にせず。天下に君に曲に、民に曲に、鬼神に曲なる者有るを見れば、往きて劫して之を死す。今元次山苟めに言を曲げたり。強ひて一權を全くして、以て其の直を喪はずと為す。愚なるかな。若し能く苟めに隣里に曲げて、強ひて一權を全くせば、豈に苟めに郷県に曲げて、以て言行を全くすること能はざらんや。能く苟めに郷県に曲げなば、豈に苟めに邦国に曲げて、以て名譽を彰す能はざらんや。能く苟めに邦国に曲げなば、豈に苟めに天下に曲げて、以て徳義を揚ぐる能はざらんや。若し言行名譽徳義皆顯れなば、豈に鍾鼎門に入らず、權位己に在らざること有らんや。嗚呼、曲げて之を為すは、小大と為るの漸なり。曲げて之を為すや、何の不可なる有らんや。姦邪凶惡其の關なるか、と。（第二段）

元子之を聞き、頌して曰はく、吾顔貌を以て曲げて一權を全くするすら、全直の君子の我を惡むこと此くのごとし。猶ほ此に過ぐる者有らば、何を以て自ら免れん、と。（第三段）

元子がある時、村の集まりに出、自らの意を曲げて長老の意にしたがい、歎びを尽くして帰ってきたことがあった。すると早速に疑問を呈した弟子の叔盈に対して、元子は、心を曲げて利益を求めたり、行いを曲げて名譽や位を希ったりするのであれば、私を責めてしかるべきだが、今回は、かりそめに歎びを尽くしたただけである、と答えた（第一段）。しかし、この輕微な曲がったことを東の村の「全直之士」が厳しく批判する。もし隣村で曲がったことをすれば、郷県、邦国、天下というふうには、自らを曲げてその言行を全うし、譽れを明らかにし、徳を顯すこととなり、やがて富貴が訪れる。どのように小さいことでも、曲がったことをすれば、やがて

いかなることでもよしとし、どのようなことでもするという事になってしまふ。それはまさしく邪悪さのおとりのようなものなのだ、と言うのである（第二段）。それを聞いた元子は、「全直之士」の言葉をほめたたえる（第三段）。

この作品は、いかに些細なことでも正直さを曲げて相手におもねることを戒める意を寓したものである。元子と叔盈、「全直之士」との問答によつて正直さを曲げることが否定され、どのように軽微な曲がつたことでも一度許してしまえば、やがてはどのようなことでもしてしまうようになるという戒めが説かれてゆく。「寢論」と同様に、柳宗元のように見事に形象化された構造を元結の作品は持たず、その表現はより直接的に現実に向けているのである。寓言が現実からある観念を抽出し、それを豊かな形象を伴つて物語るという構造を持つ様式であることからすると、この「悪曲」は、やはりその形象化のレベルにおいて柳宗元に一步譲る。

しかしながら両者は共通する特色を持つ。それは表現にさまざまな感情がまつわりついていることである。愚者の視座から現実に対峙し凝視する営みは、多分に批判的なまなざしを伴わざるを得ない。自らが見据えた現実から寓意を抽出するとき、そこには憤り、憎悪、悔悟、冷笑など様々な感情がまわりつき、時には捨象されることなく叙述の中に溶かし込まれることになる。元結の「寢論」には、現実の社会に対する否定や苦渋の心情を窺うことができる。「悪曲」における「全直之士」の厳しい批判の言辞は、その否定や苦渋さの頂点において発せられており、現実に対する強い戒めを読むことができる。一方、柳宗元「斬曲几文」の、曲がつた木に対する執拗なまでの否定的描写の背後にも、権力におもねる者たちへの沈潜した憎悪が窺われる。このことが、現実を凝視する営みを伴わず、単に教訓を述べるだけのものとは異なる元結と柳宗元の寓言に共通する特徴である。

さらに「丐論」（巻四）を見てみよう。

天宝戊子中、元子遊長安、与丐者為友。或曰、君友丐者、不太下乎。（第一段）

対曰、古人郷無君子、則与雲山為友。里無君子、則与松竹為友。坐無君子、則与琴酒為友。出遊於国、見君子則友之。丐者今之君子。吾恐不得与之友也。丐者丐論、子能聴乎。（第二段）

吾既与丐者相友。喩求罷。丐友相喩曰、子羞吾為丐耶。有可羞者、亦曾知之未也。嗚呼、於今之世、有丐者。丐宗屬於人、丐嫁娶於人、丐名位於人、丐顔色於人。甚者則丐樵家奴齒以售邪妄、丐樵家婢顔以容媚惑。有自富丐貧、自貴丐賤。於刑丐命、命不可得、就死丐時、就時丐息、至死丐全形、而終有不可丐者。更有甚者。丐家族於僕圉、丐性命於臣妾。丐宗廟而不取、丐妻子而無辭。有如此者、不為羞哉。吾所以丐人之棄衣、丐人之棄食、提豐倚杖、在於路傍、且欲与天下之人為同類耳。不然、則無顔容行於人間。夫丐衣食、貧也。以貧乞丐、心不慙。迹与人同、示無異也。此君子之道。君子不欲全道耶。幸不在山林、亦宜具豐杖随我。作丐者之状貌、学丐者之言辞、与丐者之相逢、使丐者之無恥、庶幾時世始能相容。吾子無矯然取不容也。（第三段）

於戯、丐者言語如斯。可編為丐論、以補時規。（第四段）

天宝戊子中、元子長安に遊び、丐者と友たり。或ひと曰はく、君丐者を友とするは、太だ下ならずや、と。

（第一段）

対へて曰はく、古人は郷に君子無くんば、則ち雲山と友たり。里に君子無くんば、則ち松竹と友たり。坐到君子無くんば、則ち琴酒と友たり。国に出遊し、君子を見れば則ち之を友とす。丐者は今の君子なり。吾之と友たるを得ざるを恐るるなり。丐者の丐論、子能く聴くや。（第二段）

吾既に丐者と相友たり。喩して罷めんことを求む。丐友相喩して曰はく、子吾丐たるを羞づるか。羞づべき者有り、亦た曾ち之を知るや未だし。嗚呼、今の世に於て、丐ふ者有り。宗属を人に丐ひ、嫁娶を人に丐ひ、名位を人に丐ひ、顔色を人に丐ふ。甚だしき者は則ち樵家の奴の齒を丐ひて以て邪妄を售り、樵家の婢の顔を丐ひて以て媚惑を容る。自ら富みて貧に丐ひ、自ら貴くして賤に丐ふ有り。刑に於て命を丐ひ、命得べからざれば、死に就きて時を丐ひ、時に就きて息を丐ひ、死に至りて形を全くせんことを丐へども、終に

丐ふべからざる者有り。更に甚だしき有者り。家族を僕圉に丐ひ、性命を臣妾に丐ふ。宗廟を丐へども取られず、妻子を丐ひて辞する無し。此くのごとき者有るは、羞と為さざらんや。吾人の棄衣を丐ひ、人の棄食を丐ひ、豊を提げ杖に倚り、路傍に在る所以は、且く天下の人と同類たらんと欲するのみ。然らずんば、則ち顔容の人間に行く無し。夫れ衣食を丐ふは、貧なればなり。貧を以て乞丐するは、心に慙ぢず。迹人と同じきは、異なる無きを示せばなり。此れ君子の道なり。君子は道を全くせんと欲せざらんや。幸ひに山林に在らずんば、亦た宜しく豊杖を具へて我に随ふべし。丐者の状貌を作し、丐者の言辞を学び、丐者の相逢ふと与にし、丐者の恥無きを使^{もち}ひなば、時世始めて能く相容るるに庶幾からん。吾子孺然として容れられざるを取る事無れ、と。(第三段)

於戯、丐者の言語斯くのごとし。編して丐論を為りて、以て時規を補ふべし。(第四段)

この「丐論」は、名誉や権勢、富貴を追求する当代にあつて、貧窮であるがゆえに衣食をもとめる丐者(乞食)こそ君子であることを述べ、丐者を称揚することを通して醜い社会を諷刺した作品である。

第一段で、丐者を友としていることを非難された元子は、第二段で、丐者こそ君子であると言い、丐者の論を展開してゆく。第三段は、丐者が語る論の部分である。丐者は、先ず、世の人々は、姻戚、婚姻、名誉、地位など様々なものを乞い求め、甚だしい場合には処刑に臨んで命乞いをする、実に恥ずべき存在である、と言い、さらに、自分たちは人として社会の中で生きようとするが、貧窮故に人の捨てた衣服や食物を乞うのであつて、心に恥じることはなく、自分たちこそ君子なのである、と主張する。そして元子に対して、世に容れられない者として生きるのではなく、自分たち丐者に学ぶように諭す。

現実社会の醜惡な姿を丐者の物語として語ることは十分可能であつただろう。しかし元子は、ダイアローグの形式を用い、激しくたたみかけるような丐者の論によつて、富貴を求める人々のありさまを物乞いする人間たち

の姿として描き、世人の醜さを浮かびあがらせるという方法を選択した。現実の社会の醜さをより直接に指摘しようとするのである。これが元結の表現の基本的な視座であった。

第五節 元子の自称

これまで検討してきた作品には、いずれも元子という自称と問答形式が用いられていた。このことはどのような意味を持つのか。

川合康三氏は、自称について、「『○子』というかたちで自称することは特殊ではない。そもそも一人称、三人称という区分が西欧の概念であって、『○子』は三人称的な一人称とでも言うべきものだ。自分自身をひとたび自分から離れて他人の立場から称したものである。^(注18)」と述べている。元子もやはり三人称的な一人称であるが、他者の立場から自らを称したものであるということは、「○子」という呼称が他者との関係において成立しているということである。殊に元結の場合、元子がそのまま書名になっていることからしても、この自称は表現者としての元結が設定した語り手であるということができる。

商余山習静期に編年される作品のうち、「閑荒詩」、「系楽府十二首序」、「喻友」、「癡論」、「丐論」、「心規」、「戯規」、「処規」、「出規」、「悪円」、「悪曲」、「水楽説」、「訂司楽氏」、「浪翁観化序」、「時化」、「世化」、「自述」、「訂古序」、「七不如序」、「自箴」には元子の自称が用いられている。また、科挙及第後も、「元魯県墓表」（天宝一三載 七五四）、「送張玄武序」（天宝一四載 七五五）、「管仲論」（至徳二載 七五七）、「哀丘表」（上元元年 七六〇）、「与党評事序」（上元元年 七六〇）、「別韓方源序」（上元二年 七六一）、「与党侍御序」（上元二年？ 七六一）、「与瀼溪隣里序」（上元二年 七六一）、「退谷銘序」（宝応元年 七六二）の諸作において用いられている。元結は『元子』を著した後、官吏となつて

からも、元子の自称を使い続けていたのである。^(注19)

元子と称する作品に顕著な表現上の特色は、作品中に弟子や友人、あるいは第三者を設定し、その他者に対して主張を述べる、あるいは他者との対話、問答によって論を明確に展開するという構造が多く用いられていることである。これまで取り上げた作品にも見られたが、さらに「悪円」（巻五）を見てみよう。

元子家有乳母。為円転之器以悦嬰兒。嬰兒喜之。母使為之聚孩孺助嬰兒之樂。（第一段）

友人公植者、聞有戲兒之器、請見之。及見之、趨焚之、責元子曰、吾聞、古之惡円之士歌曰、寧方為阜、不円為卿。寧方為汚辱、不円為顯榮。其甚者、則終身不仰視、曰、吾惡天円。或有喻之以天大無窮、人不能極、遠視四垂、因謂之円、天不円也。対曰、天縦不円、為人稱之、我亦惡焉。次山奈何任造円転之器、恣令悦媚嬰兒。少喜之、長必好之。教兒学円、且陷不義。躬自戲円、又失方正。嗟嗟次山、入門愛嬰兒之樂円。出門当愛小人之趨円。吾安知次山異日不言円行円動円静円以終身乎。吾豈次山之友也。（第二段）

元子召季川謂曰、吾自嬰兒戲円、公植尚辱我言絶。忽乎。吾与汝円以応物、円以趨時、非円不預、非円不為、公植其操矛戟刑我乎。（第三段）

元子の家に乳母有り。円転の器を為りて以て嬰兒を悦ばしめんとす。嬰兒之を喜ぶ。母之が為に孩孺を聚めて嬰兒の楽しみを助けしむ。（第一段）

友人公植なる者、戲兒の器有りと聞き、之を見んことを請ふ。之を見るに及び、趨^{すなや}かに之を焚き、元子を責めて曰はく、吾聞く、古の円を惡むの士歌ひて曰はく、寧ろ方にして阜と為るとも、円にして卿と為らざれ。寧ろ方にして汚辱せらるるものと為るとも、円にして顯榮と為らざれ、と。其の甚だしき者は、則ち終身仰視せずして、曰はく、吾天の円なるを惡む、と。或ひと之を喻すること有り、天大にして窮まり無きを以て、人極むる能はず、遠く四垂を視て、因りて之を円と謂ふにして、天は円ならざるなり、と。対へて曰

はく、天縦ひ円ならずとも、人之を称するが為に、我亦た焉を惡む、と。次山奈何ぞ円轉の器を造るに任せて、恣に嬰兒を悦媚せしむるか。少くして之を喜ばば、長じて必ず之を好まん。兒をして円を学ばしむるは、且に不義に陥れんとするなり。躬自ら円に戯れて、又方正を失はん。嗟嗟次山、門に入りて嬰兒の円を楽しむを愛せば、門を出でては当に小人の円に趨くを愛すべし。吾安くんぞ次山異日言円行円動円静円ならずして以て身を終ふるを知らんや。吾豈に次山の友ならんや、と。(第二段)

元子季川を召して謂ひて曰はく、吾自ら嬰兒をして円に戯れしむるすら、公植尚ほ我を辱しめて絶を言ふ。忽なるかな。吾汝と円以て物に応じ、円以て時に趨き、円に非ざれば預からず、円に非ざれば為さずんば、公植其れ矛戟を操りて我を刑せんか、と。(第三段)

ここでは、元子と友人公植(植は、直の意)、そして元季川との問答によって円いことを憎むという論が余裕のあるユーモアを伴って展開されている。第一段は、元子の家の乳母が、ころころと転がる遊具を作って子どもたちを楽しませた、という些細な出来事を述べる。すると公植が、その遊具を焼いて元子を責める。公植の言葉の中には、さらに円いことを憎む古人とある人との問答が設定され、いかに僅かであっても、円いことを好めばやがて方正さを失ってしまうという主張が展開される(第二段)。公植の批判に対して、元子は元季川を召し、公植はこのような些細なことでも絶交するといふのであるから、もし円いことを第一として生きたならば、私を処刑するであろうか、と諧謔を含みつつ述懐する(第三段)。

このような元子とそれ以外の人物に対する述懐や対話、問答によって主張を展開してゆく形式は、先秦の諸子を彷彿とさせる。元結の文が先秦諸子に倣ったものであることについて、例えば章学誠は「元之面目、出於諸子、人所共知。(元の面目、諸子に出づるは、人の共に知る所なり)」「(『章氏遺書』卷一三)と述べ、また李建崑氏は、それを敷衍し、道家、法家、莊子の寓言に淵源を持つものであることを明らかにしている。^(注20)また、好んで

問答を用いることについても、李建崑氏は「次山論体之作若稗論・丐論・漫論皆遭時感物、設為問答、以抒胸中所蓄者、故特具子書之遺形^(註)」。(元次山の論文体の著作、稗論・丐論・漫論などは皆時に遭い物に感じ、問答を設けて胸中の蓄積した思いを述べたものである。だから諸子の書の形を残している)―と、元結の論が胸中の様々な思いを問答の形で述べたものであり、諸子の文体を残していることを指摘している。

第一章第四節で取り上げた「元魯墓表」(巻六)も墓表でありながら問答の形式を用いており、その形式は確かに次にあげる『論語』や『礼記』などの記述に近い。

顔淵死。子哭之慟。従者曰、子慟矣。曰、有慟乎。非夫人之為慟、而誰為。

(『論語』先進)

顔淵死す。子之を哭して慟す。従者曰はく、子慟せり、と。曰はく、慟せること有るか。夫の人の為に慟せるに非ずして、誰の為にせん、と。

顔淵死。門人欲厚葬之。子曰、不可。門人厚葬之。子曰、回也、視予猶父也。予不得視猶子也。非我也。夫

二三子也。

(『論語』先進)

顔淵死す。門人之を厚葬せんと欲す。子曰はく、不可なり、と。門人之を厚葬す。子曰はく、回や、予を視ること猶ほ父のごときなり。予視ること猶ほ子のごときを得ざるなり。我に非ざるなり。夫の二三子なり、と。

曾子弔於負夏。主人既祖。奠徹推柩而反之、降婦人而后行礼。従者曰、礼与。曾子曰、夫祖者且也。且胡為其不可以反宿也。従者又問諸子游曰、礼与。子游曰、飯於牖下、小斂於戸内、大斂於阼、殯於客位、祖於庭、葬於墓、所以即遠也。故喪事有進而無退。曾子聞之曰、多矣乎。予出祖者。

(『礼記』檀弓上)

曾子負夏に弔す。主人既に祖す。奠を徹し柩を推して之を反し、婦人を降して後に礼を行ふ。従者曰はく、礼か、と。曾子曰はく、夫れ祖は且なり。且は胡為れぞ其れ以て反宿すべからざらんや、と。従者又諸を子游に問ひて曰はく、礼か、と。子游曰はく、牖下に飯し、戸内に小斂し、阼に大斂し、客位に殯し、庭に祖し、墓に葬るは、遠きに即く所以なり。故に喪事に進む有りて退くこと無し、と。曾子之を聞きて曰はく、多れるかな。予が出祖するという者に、と。

墓表は死者を顕彰することを目的とするものであり、例えば明、徐師曾『文体明弁』卷五六は、「按墓表自東漢始。安帝元初元年、立謁者景君墓表、厥後因之。其文体与碑碣同、有官無官皆可用、非若碑碣之有等級限制也。（按ずるに墓表は東漢より始まる。安帝の元初元年、謁者景君の墓表を立て、厥の後之に因る。其の文体は碑碣と同じきも、有官無官皆用ゐるべく、碑碣の等級限制有るがごときに非ざるなり）」という。ただ、墓表においてこれほどの問答を用いることは特異である^(注22)。

元子の自称が用いられる作品にあつては、読者はあたかも元子という先秦の諸子の言葉に接しているかのごとく、あるいは戒めや忠告、あるいは世俗に対する諷刺の言葉を読むということが生じている。それは、元結の立場からすれば、元子と自称することによって、世界に対峙する視座と強い自負を抱きつつ、社会に対する戒めや忠告を表明することになるのであり、元子は、そうした表現者としての視座を示す自称であつたと考えられる。では、官吏となつた後の元結においても、やはり元子の自称はこのような表現者としての態度を示すものであつたのだろうか。

上元二年（七六一）、荊南節度判官として荊南の兵を領して九江にあつた元結は、「与瀼溪隣里」詩（卷二）と「寄源休」詩（卷二）の二首を制作している。このうち「与瀼溪隣里」詩には「元子」の自称が用いられている。

与灋溪隣里（并序）

乾元元年、元子将家自全於灋溪。上元二年、領荊南之兵鎮於九江。方在軍旅、与灋溪隣里不得如往時相見遊。又知灋溪之人、日轉窮困。故作詩与之。

乾元元年、元子家を將ゐて自ら灋溪に全くす。上元二年、荊南の兵を領して九江に鎮す。方に軍旅に在り、灋溪の隣里と往時のごとく相見て遊ぶを得ず。又灋溪の人、日に轉た窮困するを知る。故に詩を作りて之に与ふ。

昔年苦逆乱 昔年 逆乱に苦しみ

举族来南奔 族を挙げて来りて南に奔る

日行幾十里 日び行くこと幾十里

愛君此山村 君が此の山村を愛す

5 峰谷呀回映 峰谷 呀として回映し

誰家無泉源 誰が家か泉源無からん

修竹多夾路 修竹 多く路を夾み

扁舟皆到門 扁舟 皆門に到る

灋溪中曲浜 灋溪 中曲の浜

10 其陽有閒園 其の陽に閒園有り

隣里昔贈我 隣里 昔我に贈り

許之及子孫 之を子孫に及ぼすを許す

我嘗有匱乏 我嘗て匱乏有り

隣里能相分 隣里 能く相分かつ

15 我嘗有不安 我嘗て安んぜざる有り

隣里能相存 隣里 能く相存す

斯人転貧弱 斯の人 転た貧弱なり

力役非無冤 力役 冤無きに非ず

終以瀼浜訟 終に瀼浜の訟を以て

20 無令天下論 天下をして論ぜしむること無かれ

乾元元年（七五八）、元結は一族を率いて安史の乱を避け、瀼溪（江西省瑞昌市）に身を寄せたことがあった。詩は、先ず自らがかつて乱を瀼溪に避けたことを言う。続いて瀼溪のたたずまいを詠じ、瀼溪の人々が自らを受け入れて援助してくれたことを述べ、現在、瀼溪の人々がいよいよ貧窮に苦しめられ、労役に堪えかねて怨嗟の声を上げていることに言及する。第一九、二〇句について、聶文郁氏は、「它們的意思是、我希望終于通過為瀼溪人弁訴冤怨、再不使全中国人民在這些事上有什麼評論才好。」（この二句の意味は、私は瀼溪の人々のためにその怨みを弁明することを通して、再び中国の人々がこうしたことではいかなる議論も無いようにしたい、ということである）と解している。また、明本が「無令」を「作之」に作るのによれば、この二句は、「瀼溪の人々の訴えを以て天下の議論としたい。」と解釈される。いずれにしても語り手の視線は瀼溪の人々から最後には為政者に向けられ、民生を安んじることを求めているのである。

乾元三年（七六〇）の「哀丘表」（巻七）においても「元子」の自称が用いられている。

乾元庚子、元子理兵于有泌之南。泌南、至德丁酉為陷邑、乾元己亥為境上、殺傷勞苦、言可極耶。街郭乱骨如古屠肆。於是収而藏之、命曰哀丘。或曰、次山之命哀丘也、哀生人将尽而乱骨不藏者乎。哀壯勇死而名跡不顕者乎。対曰、非也。吾哀凡人不能絶貪争毒乱之心、守正和仁讓之分。至令吾有哀丘之怨歟。

乾元庚子、元子兵を有泌の南に理む。泌南は、至德丁酉陷邑と為り、乾元己亥境上と為り、殺傷勞苦、言極むべけんや。街郭の乱骨は古の屠肆のごとし。是に於て収めて之を藏し、命づけて哀丘と曰ふ。或ひと曰はく、次山の哀丘と命づくるや、生人将に尽きんとして乱骨藏せざる者を哀しむか。壮勇死して名跡顕れざる者を哀しむか、と。対へて曰はく、非なり。吾凡そ人貪争毒乱の心を絶ち、正和仁讓の分を守る能はざるを哀しむ。吾をして哀丘の怨み有らしむるに至るか、と。

『文体明弁』卷二四が表について「有論諫、有請勸、有陳乞、有進獻、有推薦、有慶賀、有慰安、有辞解、有陳謝、有訟理、有弾劾、所施既殊、故其詞亦異。（論諫有り、請勸有り、陳乞有り、進獻有り、推薦有り、慶賀有り、慰安有り、辞解有り、陳謝有り、訟理有り、弾劾有り、施す所既に殊なり、故に其の詞も亦た異なり）」と述べるように、表はその目的も内容も多様な文体である。その表においても特異な、しかし初期の元結の作品にはよく用いられたダイアローグの文体によって、戦乱のため野に晒されたままの骸骨を収めて葬り、それを「哀丘」と命名する行為とその意図とが明らかにされてゆく。そしてこの悲惨な情況をもたらした、「貪争毒乱」の心を絶ち「正和仁讓」の分を守ることができない人間への哀しみが吐露されるのである。「哀丘表」は、「元魯公墓表」と同様の構造を持っており、規諷の意を込めた作品である。

これらの作品からも明らかのように、元結は、世界に対峙する視座と愚者としての自負を抱きつつ、自らを元子と称し、当世に向けて戒めや忠告を表明しているのである。元結は、元子と名乗ることによって、社会に対する諷諭の表現をつむぎだすことができたと言えることができる。

おわりに

元結の諷諭の文学は、朝廷や世俗に対する忠告や戒めの意を強く表出する規諷の意識を根柢に据えて、その営みが始まった。やがて天寶六載（七四七）の制科下第を経て、商余山に習静し、愚愚者を自覚するや、王朝や世俗に対する諷諭の作品が元子の自称のもとに数多く著され、『元子』としてまとめられた。この時期の作品には、「喻友」や「丐論」など規諷の作の他、アイロニーやシニカルな笑いを含んだ寓言の諸作が見られるようになり、元結の諷諭の文学はその様相を豊かにしていったのである。

柳宗元もまた現実と対峙する過程で生じた観念を生き生きと形象化した優れた寓言作品を多く著している。松本肇氏が指摘するように、彼の寓言の根底には「高邁な理想を追求して敗れた人間の自負」がある故に、その寓言は、豊かな内包性を有していると言うことができる。一方、元結は、寓言においても、より直截に現実の持つさまざまな問題を指摘し、忠告し戒め、あるいは諭すという傾向が認められ、ここに元結の寓言の特色がある。

諷諭の表現が可能になるためには、王朝や世俗を客観視して対峙する視座が求められる。その視座を有するのが元子であった。また、元子は強い自負を込めた自称であり、表現者としての態度を示すものであった。特に愚愚者を自覚した時期の元結は、元子と称することによってのみ諷諭の表現を展開することが可能だったのである。

注

（１）孫望著『蝸叟雜稿』（上海古籍出版社、一九八二年）一二五頁。

（２）孫望氏、前掲書。一三一頁。

- (3) 喬象鍾、陳鉄民主編『唐代文学史』（人民文学出版社、一九九五年）五七五頁。
- (4) 喬象鍾、陳鉄民氏、前掲書。五七五頁。
- (5) 喬象鍾、陳鉄民氏、前掲書。五七八頁。
- (6) 「輪」、底本は「論」に作り、孫望氏は「疑為輪字之譌。」と注する。いまこれに従う。
- (7) 楊承祖氏『元結研究』（国立編訳館、二〇〇二年）三四頁。
- (8) 楊承祖氏、前掲書。三五頁。
- (9) 例えば、孫望著『元次山年譜』（古典文学出版社、一九五七年）二二頁。
- (10) 孫望氏、前掲書。一三一頁。
- (11) 孫望著『元次山年譜』（古典文学出版社、一九五七）二二頁。
- (12) 松本肇著『柳宗元研究』（創文社、二〇〇〇年）二二頁。
- (13) 劉国盈著『唐代古文運動論稿』（陝西人民出版社、一九八四年）五四頁。
- (14) 松本肇氏、前掲書。二一―五五頁。
- (15) 松本肇氏、前掲書。五五頁。
- (16) 林田愼之助氏は『中国中世文学評論史』（創文社、一九七九年）第六章第二節「当代古文運動の形成過程」において、「前駆的古文家のおおむねは安史の乱前後の政治的要請のなかで官界に登場してきた中小地主層出身の文人官僚であった。それだけに、魏晋以来貴族官僚が独占してきた駢儷文の美文脈の弊害を実感していた。美文脈の枠組みの中に士大夫の意識が閉ざされている限り、貴族官僚が維持してきた旧体制を改革して、新しい現実に対応することは不可能であることを知っていた。……文学それ自体の問題としては、必然的に自らを含めて士大夫の思想の文脈となっていた駢文体を変革する作業に取組まねばならなかったのである。」と述べている（四八〇頁）。氏の指摘は、唐代古文運動を考える際の基本的な視座を提示する。

元結は、この貴族官僚の世界の外側にあり、そして天宝六載の制科において排除され、エクリチュールとしての古文を選んだのである。

(17) 松本肇氏、前掲書。二二頁。

(18) 川合康三著『中国の自伝文学』（創文社、一九九六年）一六二頁。

(19) 孫望氏、楊承祖氏の編年によって天宝五載（七四六）から広徳二年（七六四）までの主な作品を一覧にしてみると、次のようになる。＊印は、元子の自称を含む作品である。

習			
天宝九載	説楚何荒王賦（？）	孫望	楊承祖
天宝八載	＊出規		
天宝七載	＊心規		
天宝六載	＊戲規	孫望	楊承祖
天宝五載	＊巧論		
天宝四載	＊自箴		
天宝三載	＊出規・＊処規・＊戲規	孫望	楊承祖
天宝二載	＊心規		
天宝一載	＊愚円		
天宝	説楚何荒王賦（？）	孫望	楊承祖
天宝	＊出規		
天宝	＊心規		
天宝	＊戲規	孫望	楊承祖
天宝	＊巧論		
天宝	＊自箴		
天宝	＊出規・＊処規・＊戲規	孫望	楊承祖
天宝	＊心規		
天宝	＊愚円		

[illegible]

乾元二年	与李相公書 *与党評事序 *哀丘表 篋中集序
乾元三年	*与党侍御序 寄源休序 *灋溪隣里序 招孟武昌序 漫歌八曲序 *退谷銘
上元二年	漫歌八曲序 *退谷銘 漫酬賈沔州序 春陵行序 賊退示官吏序
宝応元年	漫酬賈沔州序 春陵行序 賊退示官吏序
宝応二年	
広徳二年	

(20) 李建崑著『元次山之生平及其文学』（人人文庫、台湾商務印書館、一九八六年）一〇八頁。

(21) 李建崑氏、前掲書。一一〇頁。

(22) 墓表の例として李華「著作郎贈秘書少監權君墓表」（『全唐文』卷三二一）を以下にあげる。

君姓權氏、諱皋、字士繇、天水人。苻秦尚書僕射翼之後、世為著姓。祖某、某官、父某、某官、咸有令徳。君既冠、進士及第、試臨清尉。時節將兼本道使籍君高名、表為薊隰尉、充判官。無何、主將以逆節露、君乃詐死、扶親涉江、既免禍累。知機其神。先帝聞而歎之、除評事御史。方議大用、属太夫人病危、將侍奉憂勞、

因中痼疾。無何、太夫人終。君泣血三年、厥疾用加。服除、遷起居舍人著作郎。大曆元年四月某日、不幸逝於丹徒。因殯焉。享齡四十二。嗚呼、識者慟哭、聞者痛心。君有大節不可奪、大名不可掩、大才不可及、大行不可名。天与之仁、不与之年。哀哉。自開元天寶以來、高名下位、華方疾、不能備舉。然所憶者曰河南元君德秀。元終十年而南陽張君有略。張沒二年而君夭。元之志、如其道德、張之行、如其經術、君之才、如其声望。人倫其瘁乎。公素与昌黎韓幼深・京兆王鎮卿泊華友善。韓評君曰、可以為宰輔。王評君曰、可以為師保。華評君曰、可以分天下之善惡、一人而已矣。夫人隴西李氏、仁賢。有一子某、生七年矣。哀礼成人。嗚呼、有後哉。朝廷贈君以秘書少監。悼賢也。華因病風、扶曳而往哭之。嘗聞師乙之言曰、溫良而能斷者、宜歌齊。權君可謂溫良而能斷者也。故為齊風、表君之墓云、忠於而国、孝於而家。潔而不滓、瑜而不瑕。仁胡不寿、為善者何。君不幸耶、時不幸耶。

君姓は權氏、諱は皋、字は士繇、天水の人なり。苻秦の尚書僕射翼の後にして、世著姓と為る。祖某、某官、父某、某官、咸令德有り。君既に冠するや、進士に及第し、臨清の尉に試みらる。時に節將兼本道使君が高名を籍し、表して薊県の尉と為し、判官に充つ。何くも無くして、主將逆節を以て露るるや、君乃ち死を詐り、親を扶けて江を渉り、既にして禍累を免る。機を知ること其れ神なり。先帝聞きて之を歎じ、評事御史に除す。方に大用を議するに、属太夫人病危く、侍奉憂勞するを将て、因りて痼疾に中る。何くも無くして、太夫人終わる。君泣血すること三年、厥の疾用て加はる。服除し、起居舍人著作郎に遷る。大曆元年四月某日、不幸丹徒に逝き、因りて殯す。享齡四十二。嗚呼、識る者慟哭し、聞く者心を痛ましむ。君に大節の奪ふべからざる、大名の掩ふべからざる、大才の及ぶべからざる、大行の名づくべからざる有り。天之に仁を与ふるも、之に年を与へず。哀しいかな。開元天寶より以來、高名にして下位にあるものは、華方に疾めば、備さに挙ぐる能はず。然れども憶ふ所の者は、曰はく河南の元君德秀あり。元終わりて十年にして南陽の張君有略あり。張没して二年にして君夭す。元の志は、其の道德のごとく、

張の行は、其の経術のごとく、君の才は、其の声望のごとし。人倫其れ瘁るるか。公素昌黎の韓幼深・京兆の王鎮卿泊び華と友善たり。韓君を評して曰はく、以て宰輔と為すべし、と。王君を評して曰はく、以て師保と為すべし、と。華君を評して曰はく、以て天下の善惡を分かつべきは、一人のみ、と。夫人隴西の李氏、仁賢なり。一子某有り、生まれて七年なり、哀礼人と成る。嗚呼、後有るかな。朝廷君に贈るに秘書少監を以てす。賢を悼むなり。華風を病むに因りて、扶曳して往きて之を哭す。嘗て師乙の言を聞くに曰はく、温良にして能く断ずる者は、宜しく斉を歌ふべし、と。権君は温良にして能く断ずる者と謂ふべきなり。故に斉風を為りて、君の墓に表して云ふ、而が国に忠にして、而が家に孝なり。潔にして滓せず、瑜にして瑕あらず。仁なるに胡ぞ寿ならざる、善為る者は何ぞや。君不幸なるか、時不幸なるか。

この墓表は、栄達を前に逝去した権皋の生前の大事を挙げ、徳を称揚し、顕彰したものである。墓表の典型と言ってよい。この作には問答の形式は用いられておらず、「華方疾」、「華評君曰」「華因病風、扶曳而往哭之」のように李華の視点から詠じられている。

(23) 聶文郁注解『元結詩解』(陝西人民出版社、一九八四年) 一六三頁。

第四章 王朝への求心性―「引極三首」「演興四首」

はじめに

前章において元結における諷諭の表現の視座について明らかにした。彼は世界と対峙する元子の視座において諷諭の表現を展開していたのであるが、商余山中にあった彼の表現には、もう一つの特色が顕著に窺われる。それは、唐王朝への求心性とも言うべき心情の表出である。例えば市川桃子氏は、盛唐の詩人達に共通する志向性を析出して、「社会の発展を具現していく朝廷と、個性の強い天子とは、当時の社会の精神的な支えであり、強い求心力を持っていたであろう。李白杜甫を初めとする盛唐の主要な詩人たちの作品を読むと、苦しい生活の中で不遇な境遇に不平を述べながらも、朝廷に対する強いあこがれを終生持ち続けていた様子を見て取ることができる。^(注1)」と述べている。元結の作品にもこうした心情が表出しているのに気づく。それは現実の朝廷に対するあこがれというよりは、天子に表象されている王朝そのものへの求心性として捉えることができそうである。そして彼の諷諭の表現は、天子を含む支配階層の悪を暴き立てることにその目的があるのではなく、朝廷に対する忠告、あるいは戒めという方向に向かうと考えられる。

商余山習静期には、「引極三首」(巻一)「演興四首」(巻一)といった激情的な感情の吐露を特色とする作品が制作されている。本章ではこの「引極三首」と「演興四首」を取り上げ、元結の王朝への求心性がどのような構造をもつて表出しているのかを明らかにする。

第一節 「引極三首」―閉塞感の超克

本節では「引極三首」を取り上げるが、その構造を把握するに際して、盛唐期の隠者盧鴻一の「嵩山十志」（『全唐詩』卷一二三）と比較しつつ、考察を進めてゆくこととする。

盧鴻一（また盧鴻に作る）は、開元年間の著名な隠者であり、開元六年（七一八）、玄宗に諫議大夫として召されたものの、固辞して嵩山に帰るのを許された人物である。『旧唐書』卷一四二「隱逸」、『新唐書』卷一九六「隱逸」に伝がある。^{（注2）}現存するのは、隠者の表現の位相をよく表した「嵩山十志」（『全唐詩』卷一二三）のみであるが、この作品が王維の「輞川集」の成立に影響を及ぼしていたことは、すでに入谷仙介氏によって明らかにされている。^{（注3）}

この「嵩山十志」は騷体の作であり、「草堂」「倒景台」「樾館」「枕煙庭」「雲錦淙」「期仙磴」「滌煩磯」「冪翠庭」「洞元室」「金碧潭」の一〇編からなる。各編とも九句で統一され、第一・二句、第三・四句、第五・六句、第七・八・九句がそれぞれ押韻する。また、各作品には序が付され、さらに、それぞれの序は、「草堂者……」のように題名によって始まり、各編の題名が第五句末に読み込まれるという極めて整った構造を持つ。

例えば第一首の「草堂」は、次のような作品である。

草堂者、蓋因自然之谿阜、前当墉洫、資人力之締構、後加茅茨、將以避燥湿、成棟宇之用、昭簡易、叶乾坤之德。道可容膝休閒、谷神同道、此其所貴也。及靡者居之、則妄為剪飾、失天理矣。詞曰、

草堂は、蓋し自然の谿阜に因り、前は墉洫に当たり、人力の締構を資とし、後茅茨を加へ、將に以て燥湿を避け、棟宇の用を成し、簡易を昭らかにし、乾坤の徳に叶はしめんとす。道は膝を容れて休閒すべく、谷神と道を同じす。此れ其の貴ぶ所なり。靡なる者之に居るに及べば、則ち妄りに剪飾を為し、天理を失はん。

詞に曰はく、

山為宅兮草為堂

山を宅と為し 草を堂と為す

芝蘭兮葯房

芝蘭と葯房と

羅蘼蕪兮拍薜荔

蘼蕪を羅ねて薜荔を拍す

荃壁兮蘭砌

荃の壁と蘭の砌と

05 蘼蕪薜荔兮成草堂

蘼蕪薜荔もて草堂を成す

陰陰邃兮馥馥香

陰陰として邃く 馥馥として香る

中有人兮信宜常

中に人有り 信宜常なり

読金書兮飲玉漿

金書を読み玉漿を飲む

童顏幽操兮不易長

童顏幽操 易長せず

序においては、草堂が世俗を超越した空間として位置づけられる。乾燥や湿気を避けるだけで、一切の煩雑さを去った狭い草堂は、もし世人が関われれば、いたずらに手を加えてたちまち価値を失ってしまうのであった。「及靡者居之、則妄為剪飾、失天理矣。（靡なる者之に居るに及べば、則ち妄りに剪飾を為し、天理を失はん）」には、世俗を否定し拒絶する視座が明確に提示されている。そしてこの視座は十志の序それぞれの末尾にも示されている。例えば、「倒景台」序では、「及世人登焉、則魂散神越、目極心傷矣。（世人登るに及べば、則ち魂散じ神越し、目極まり心傷まん）」と言い、また「滌煩磯」序には「可為智者説、難為俗人言。（智者の為に説くべくも、俗人の為に言ひ難し）」、「枕煙庭」序には「及機士登焉、則寥闐儻恍、愁懷情累矣。（機士登るに及べば、則ち寥闐儻恍として、愁懷情累^{まっわ}る）」とある。

「草堂」の本文には、「芝」、「蘭」、「葯房」、「蘼蕪」、「薜荔」といった『楚辞』に基づく語彙が用いられている。例えば「葯房」は、『楚辞』「九歌、湘夫人」に「蓀壁兮紫壇、播芳椒兮為堂。桂棟兮蘭橈、辛夷楣兮葯房。（蓀の壁 紫の壇、芳椒を播きて堂を為す。桂の棟 蘭の橈、辛夷の楣 葯の房）」とあり、また「薜荔」も、同じく「湘君」に「采薜荔兮水中、攀芙蓉兮木末。（薜荔を水中に採り、芙蓉を木末に攀る）」とある。『楚辞』の世界を彷彿とさせる語を用いながら、世俗を離れた神仙世界のものとして草堂がしだいに形象化されてゆくのである。

第五句は、第一句から第四句までを総括する役割を果たしている。他の作品においても第五句の機能は同じであり、用いられる語句も「蘼蕪薜荔」のように前の句中のものをそのまま使用することが多い。

盧鴻一は、この草堂に一人の住人を措定する。それは、「金書」を読み、「玉漿」を飲む神仙のごとき人である。この人物は、十志の世界のなかで、「皎皎之子兮独立（皎皎の子独り立つ）」（倒景台）、「幽人構館兮在其中（幽人館を構へて其の中に在り）」（樾館）「山中人兮好神仙（山中の人神仙を好む）」（期仙磴）等、さまざまに変奏され、その姿はまた容易に盧鴻一自身の姿と重なる。世俗を隔絶し、完結した世界を形象化した「嵩山十志」は、隠者である自己を確認し肯定する作として読むことができるであろう。盧鴻一は嵩山に自らの世界を構築し、その中に居ることを選んだ。「嵩山十志」は、言わばそうした自己への讃歌であったのである。

一方、元結の「引極三首」（巻一）は、「思元極」「望仙府」「懷潜君」の三首よりなる。序に、「引極、興也。喩也。引之言演、極之言尽。演意尽物、引興極喩、故曰引極。（引極は、興なり。喩なり。引の言は演、極の言は尽なり。意を演べ物を尽くし、興を引き喩を極む、故に引極と曰ふ）」とあるのによれば、この三首は、物に託して自らの意を展開し尽くす、という意図のもとに制作されたものである。

先ず「思元極」を取り上げる。元極とは、万物の本源、また天を言う。

天曠莽兮杳泱茫 天は曠莽として杳として泱茫たり

気浩浩兮色蒼蒼 気は浩浩として色は蒼蒼たり

上何有兮人不測 上に何か有る 人測らず

積清寥兮成元極 清寥を積みて元極を成す

05 彼元極兮靈且異 彼の元極 靈にして且つ異なり

思一見兮藐難致 一たび見んことを思へども藐として致り難し

思不従兮空自傷 思へども従はず 空しく自ら傷む

心慄悞兮意惶懷 心慄悞として意惶懷たり

思仮翼兮鸞鳳 思ふ 翼を鸞鳳に仮りて

10 乗長風兮上羗 長風に乗じて上羗せんことを

揖元氣兮本深実 元氣に揖し 深実を本とし

餐至和兮永終日 至和を餐し 永へに日を終へん

「引極三首」もやはり整った構成を持つ。三首とも一二句からなり、しかもその各句の構造は、三首それぞれほぼ等しいものとなっている。就中、各首の第三、五、六、七句は共通した措辞を持ち、さらに第四、五句には詩題の一部が読み込まれるという構造になっている。その構成の緊密さは「嵩山十志」と類似すると言つてよい。ところが「嵩山十志」と異なり、「思元極」には万物の根源、あるいは天への強い求心的感情が表出している。「思一見兮藐難致、思不従兮空自傷。（一たび見んことを思へども藐として致り難し、思へども従はず空しく自ら傷む）」は、その強い思慕の情と、見ることのかなわぬ悲哀とを言う句である。語り手はその悲哀を振り払うかのように、鸞鳳に翼を借りて飛翔し、元極に至らんとする心情を述懐している。激しい感情の表出の器である

騷体は、自己表出にふさわしいものだったと言えよう。

さらに、第二首「望仙府」では、「仙府」への思慕と到達できない悲哀とが語られる。「仙府」とは、仙人の住まいを言う。

山鑿落兮眇嶽岑

山は鑿落として眇として嶽岑たり

雲溶溶兮木怱怱

雲は溶溶として木は怱怱たり

中何有兮人不睹

中に何か有る 人睹ず

遠敲差兮閼仙府

遠く敲差として仙府を閼す

05 彼仙府兮深且幽

彼の仙府 深くして且つ幽なり

望一至兮藐無由

一たび至らんことを望めども藐として由る無し

望不從兮知如何

望めども從はず 知んぬ如何せん

心混混兮意渾和

心は混混として意は渾和たり

思仮足兮虎豹

思ふ 足を虎豹に仮りて

10 超阻絶兮凌越

阻絶を超えて凌越せんことを

詣仙府兮從羽人

仙府に詣り 羽人に從ひ

餌五靈兮保清真

五靈を餌して清真を保たん

「思元極」が天への思慕を言うのに対して、この作は、広漠として高く聳える山、雲が湧き樹木の繁茂する世界に「仙府」が措定されている。語り手はその「仙府」への思慕を吐露するものの、そこは至り得ない世界であって、心は乱れて平静を失ってゆく。しかし、再び気を奮い立たせ、虎豹の足を借り、険しい峰や断崖を超え、

遙かな「仙府」に至り、飛仙に従い、鱗・鳳・龜・竜・白虎を養って純真さを保とう、と「仙府」への強い思慕を表明するのである。感情の起伏は、上昇、下降、そして上昇と鋭角的な軌跡を描いている。

第三首「懷潜君」においては、潜君への強い思慕と、邂逅のかなわぬ悲哀とが次のように描かれる。

海浩森兮汨洪溶 海は浩森として汨として洪溶たり

流蘊蘊兮濤洶洶 流れは蘊蘊として濤は洶洶たり

下何有兮人不聞 下に何か有る 人聞かず

深溢漭兮居潜君 深く溢漭として潜君居り

05 彼潜君兮聖且神 彼の潜君 聖且つ神なり

思一見兮藐無因 一たび見えんことを思へども藐として因る無し

思不従兮空踟躕 思へども従はず 空しく踟躕す

心回迷兮意縈紆 心は回迷として意は縈紆たり

思仮鱗兮鯢竜 思ふ鱗を鯢竜に仮りて

10 激沆浪兮奔従 沆浪を激して奔従せんことを

拝潜君兮索玄宝 潜君に拝して玄宝を索め

佩元符兮軌皇道 元符を佩して皇道に軌したがはん

大波の立つ、果てしない海原の下に潜君がいる。聶文郁氏は、潜君について水神を指すと言注4い、また『漢語大詞典』には「指神話伝説中深居海底的神仙。」とある。その水神あるいは神仙に見えようとするのであるが、そこに至るすべはなく、心は迷い、ただ行きつ戻りつするだけである。しかし語り手は鯢や竜の力を借りて潜君に

拝し、その信を得て大いなる道に従おうという強い意志を表明する。この作品においても、感情は鋭角的な軌跡を描いており、上昇、下降、そして上昇と激しく揺れ動いている。

聶文郁氏は「引極三首」を遊仙詩であるとし、「游仙詩是借 仙境 仙人 的事来寄托作者思想感情的詩歌^(注5)」(遊仙詩は「仙境」「仙人」のことを借りて作者の思想と感情を托する詩歌である)と述べている。遊仙詩が現実を超越し、神仙の世界に遊ぶことに托して自らの心情を述懐するものであることは確かである。しかし例えば、郭璞等の遊仙詩が、神仙への敬慕の情を率直に表白し、神仙の世界を豊かに描こうとする傾向が強いのに対して、「引極三首」は、神仙世界への敬慕が同時に遙かな距離の覚醒と絶望とをもたらし、その絶望を超越して再び強い求心的心情が吐露されるというダイナミックで激しい自己表出の構造を持っているのであり、ここにその表現の特色があると言わねばならない。

さらに、盧鴻一が嵩山の中に完結した隱者の世界を構築し、その中に安らぎを見いだしているのに対し、「引極三首」においては、元結の思念は、天(万物の根元たる元極)、地(山中奥深くにある仙府)、海(海中に住む潜君)と、遙かな存在に次々に向けられている。次節で検討する「演興四首」と合わせ考えると、ここに描かれている世界は、それぞれ理念としての唐王朝、朝廷、そして天子の表象であると考えることができ、元結は商余山の外にある世界を希求し、そしてその中心にある存在に対する著しい求心的志向を表白しているのである。

聶文郁氏は、「本詩的思想意義、就在于它通過求見天神一事的叙述、反映了作者積極向上的要求与學習進取的^(注6)精神。(この詩の思想的意義は、天神に会おうとする叙述に作者の積極的に向上しようという要求と、學習し積極的にとりくむ精神が反映されているところにある)」「(「思元極」)、「本詩抒發了作者不滿現實的思想感情^(注7)」(この詩は作者の現実に対する不滿の思想や心情を表現している)」「(「望仙府」)、「這首詩、雖然它描写的^(注8)是訪拝水神、索討玄宝的事、但它寄托了作者積極問世的思想情緒、……(この詩は、水神に会い、宝を求めるこ

とを述べているが、自らを積極的に世に問おうとする作者の考えと心情が托されており、……」(「懷潜君」と、三首を解している。氏の解釈も可能であろうが、三編の構成は緊密で、元結の意識は、閉塞感の超克への情動と著しい求心的心情とを伴って表出しているのであり、ここに「引極三首」の特色があると読みたい。

第二節 「演興四首」―王朝への求心性

商余山習静期にはやはり騷体の詩編である「演興四首」(巻一)が著されている。前節で検討したような閉塞感と著しい求心的な志向は、この作品においても見られるのであろうか。

「演興四首」序は次のように言う。

商余山有太靈古祠。伝云、參竜氏祠大帝所立。祠在商余西乳之下。邑人修之以祈田。予因為招祠訟閔之文以演興。

商余山に太靈の古祠有り。伝に云へらく、參竜氏大帝を祠りて立つる所なり、と。祠は商余の西乳の下に在り。邑人之を修めて以て田を祈る。予因りて招・祠・訟・閔の文を為りて以て演興す。

この序によれば、「演興四首」は、太靈の祠を村人が修復した際に書かれたもので、「招太靈」「初祀」「訟木魅」「閔嶺中」の四編からなっている。「太靈」は「大帝」、すなわち天帝をいう。その祠は商余山の西の頂き辺りにあった。聶文郁氏は、「乳」を小山の峰とする。^(註9)

また、「演興」とは、「引極三首」序に「演意尽物、引興極喩。(意を演べ物を尽くし、興を引き喩を極む)」とあることからすると、自らの感懷を託し、比興の表現を展開してゆくという意味であると考えられる。

「演興四首」では、商余山の西の峰で執り行われた太霊の祭祀において生じた感懐が展開されてゆく。
第一首「招太霊（太霊を招く）」は、鋭くそびえる山の頂きで太霊を招く、迎神の作である。

招太霊兮山之顛

太霊を山の顛に招く

山屹岬兮水淪漣

山は屹岬として水は淪漣たり

祠之瀨兮眇何年

祠の瀨くること眇として何れの年ならん

木修修兮草鮮鮮

木は修修として草は鮮鮮たり

05 嗟魍魅兮淫厲

嗟 魍魅は淫厲なるも

自古昔兮崇祭

古昔より崇祭す

禧太霊兮端清

太霊の端清なるを禧とし

予願致夫精誠

予夫の精誠を致さんことを願ふ

久惕兮恍恍

久しく惕ひて恍恍たり

10 招拊拊兮呼風

招き拊拊して風を呼ぶ

風之声兮起颼颼

風の声起ること颼颼たり

吹玄雲兮散而浮

玄雲を吹き 散じて浮かぶ

望太霊兮儼而安

太霊を望めば儼にして安らかなり

澹油溶兮都清閑

澹として油溶 都しくして清閑たり

詩は、鋭くそびえる山の頂において太霊を招く、上昇的で鋭角的なイメージとともに始まる。太霊の祠は毀たれて久しいが、その地は木が美しく茂り、草が鮮やかに覆っている（第一句、第四句）。魍魅が跋扈する世界の

中であって、この地のみは太霊を祀ってきたのであると、ここが太霊を招くにふさわしい地であることを言い（第五、六句）、『楚辞』九歌「雲中君」の如き構造において、太霊が訪れてくれぬ憂いと、その降神の喜びとがほとばしるように表出している。この祭祀の場合こそ太霊との邂逅がかなう空間なのである。

「演興四首」は、太霊を招き、饗し、自らの至誠を太霊に訴えるという構成で、「太霊」「魑魅」「精誠」を主要なモチーフとして展開し、「太霊」への強い求心的な心情が詠じられてゆく。

太霊の降臨を喜ぶ第一首に続いて、第二首「初祀（初めて祀る）」は、太霊の祠のありさまと、そこで執り行われる祭祀の様子を描く饗神の作である。

山之乳兮葺太祠　山の乳　太祠を葺く

木孫為桷兮木母榱　木孫を桷と為し　木母を榱とし

雲纓為楣兮愚木栢　雲纓を楣と為し　愚木を栢とし

洞淵禪兮揭巍巍　洞は淵禪として掲たかくして巍巍たかたかたり

05 塗水蘭兮蒔糝薦　塗に水蘭あり　蒔は薦まじはに糝まじはる

被弱草兮禘祔聯　弱草に被はれ　禘祔に聯なる

伋渾洪兮馥闐闐　伋として渾洪にして馥闐闐たり

管化石兮洞剗天　管は石に化し　洞は天を剗き

翹修鈇兮掉蕪爰　翹鈇を翹げ　蕪爰を掉ひ

10 靈巫謬兮舞顒于　靈巫謬し　舞顒おどろ于す

薦天鯨兮酒陽泉　天鯨を薦め　酒は陽泉

献水芸兮飯霜秣　水芸を献じ　飯は霜秣

与太靈兮千万年　太靈と与に千万年ならん

第一段（第一句～第四句）は、太靈の祠を葺く様子を描く。木孫や木母、雲纓や愚木といった樹木によって組み上げられた祠が、太靈の降臨と安居にふさわしい空間であることが示される。第二段（第五句～第八句）は、祭祀の場の情景および祭祀の始まりをうたと解釈した。塗みちには木蘭（「水」字について聶文郁氏（注10）は「木」字の誤りとする。これに従う。）が生え、蒔蘿が紅い花に雜じり、柔らかな草で覆われ、禘祫（祭壇）に連なっている。やがて祭祀が始まると、強い香りがあたりに満ち、管楽器は金石の音を奏で、洞簫は天を切り開くように響き渡る。第三段（第九、一〇句）は、祭祀の場に鈇（大鎌）や蕪豆（雑多なたてぼこ）が掲げられている様子を描く。そして第四段（第十一句～第十三句）では、巫が登場し、続いて舞が始まり、供物をそなえて降臨した太靈に祈りが捧げられる。『楚辞』の世界を彷彿とさせる、精诚を尽くした祭祀が執り行われているのである。聶文郁氏は、「初祀」について「本篇只是一篇祭文式的詩歌、我們也看不出有什麼演興的地方。（注11）」（本編は祭文様式の詩歌であり、いかなる演興の箇所も見いだすことができない）」と述べるが、元結の興は迎神、饗神に伴って生じ、太靈への著しい求心的な心情を中心として展開してゆくのであって、この「初祀」の「与太靈兮千万年（太靈と与に千万年ならん）」は、祭文としての表現であるのみならず、太靈への求心的な敬慕の心情を表すものとして理解しなければならない。

第三首の「訟木魅（木魅を訟ふ）」は、太靈の祭祀において生じた感懷が展開され、惡木・善木・木魅・魍魎等のイメージを連ねながら、太靈に訴えるかのように自らの心情が表出されてゆく。

登高峰兮俯幽谷

高峰に登りて幽谷に俯し

心惻惻兮念群木

心惻惻として群木を念ふ

見樗栲兮相陰覆

憐侵榕兮不豐茂

05 見榛梗之森梢

閔縱樺兮合蠹

褶橈橈兮未堅

樟根根兮可屈

密圍樽兮不香

10 拔丰茸兮已実

豈元化之不均兮

非雨露之偏殊

諒理性之不等

於順時兮不如

15 瘳吾心以冥想

終念此兮不怡

怡予莫識天地之意兮

願截惡木之根

傾鼻獍之古巢

20 取□童以為薪

割大木使飛焰

俟枯腐之燒焚

樗栲の相陰覆するを見

侵榕の豊茂せざるを憐れむ

榛梗の森梢たるを見

縱樺の合はせて蠹まるるを閔れむ

褶は橈橈として未だ堅からず

樟は根根として屈すべけんや

密圍は樽のごとくにして香らず

拔（拔）は丰茸として已に実る

豈に元化の均しからざらんや

雨露の偏に殊なるに非ず

諒に理性の等しからず

時に順ふに於て如かず

吾が心を瘳めて以て冥想し

終に此を念ひて怡しまず

怡として予天地の意を識る莫きも

惡木の根を截たんことを願ふ

鼻獍の古巢を傾け

□童を取りて以て薪と為さん

大木を割きて焰を飛ばしめ

枯腐の燒焚するを俟たん

実非吾心之不仁恵也

豈恥夫善惡之相紛

25 且欲畚三河之膏壤

裨濟水之清漣

將封灌乎善木

令櫛櫛以挺挺

尚畏乎衆善之未茂兮

30 為衆惡之所挑凌

思聚義以為曹

令敷扶以相勝

取方所以柯如兮

吾將出於南荒

35 求壽藤与蟠木

吾將出於東方

祈有德而來歸

輔神櫪与堅香

且憂顒之翩翩

40 又愁獵之奔馳

及陰陽兮不和

惡此土之失時

実に吾が心の仁恵ならざるに非ざるなり

豈に夫の善惡の相紛るるを恥づるか

且に三河の膏壤を畚し

濟水の清漣を裨することを欲せんとす

將に善木を封灌し

櫛櫛として以て挺挺たらしめんとす

尚ほ衆善の未だ茂らずして

衆惡の挑凌する所と為るを畏る

義を聚めて以て曹と為し

敷扶して以て相勝たしめんことを思ふ

方を柯えをきること如いかんせんとする所以に取り

吾將に南荒に出でんとす

壽藤と蟠木とを求め

吾將に東方に出でんとす

有德に祈して來歸し

神櫪と堅香とを輔せん

且つ顒の翩翩たるを憂ひ

又獵の奔馳するを愁ふ

陰陽の和せざるに及び

此の土の時を失ふを惡む

今神櫨兮不茂

今神櫨茂らず

使堅香兮不滋

堅香をして滋らざらしむ

45 重嗟惋兮何補

重ねて嗟惋するも何をか補はん

每齐心以精意

毎に心を斉へて以て意を精にせん

切援祝於神明

切に神明に援祝し

冀感通於天地

天地に感通せんことを冀ふ

猶恐衆妖兮木魅

猶ほ恐る衆妖と木魅と

50 魍魎兮山精

魍魎と山精と

上誤惑於靈心

上靈心を誤惑し

経紆于言兮不聴

経に言を紆きて聴かざらしむるを

敢引佩以指水

敢て佩を引きて以て水を指し

誓吾心兮自明

吾が心自ら明らかにせんことを誓はん

ここでは、高い峰に登り、俯して幽谷を見つめ、木々に思いを馳せ、憂いに沈む語り手元子の姿が提示される（第一、二句）。「招太霊」の上昇的なベクトルの描写に対して、「訟木魅」の表現は下降のベクトルをもって始まる。

彼の目に映じたのは、材木や香木である善木（榎、榕、樅、榲、櫟、楸）が茂らず、悪木（樗、栲、榛、梗、樟、拔へ校）ばかりが繁茂する世界であった（第二句、第一〇句）。

語り手は、この樹木のありさまを眺めつつ、造化のはたらきが等しくなかったわけではなく、また雨や露がこゝとに多かったのでもなく、本来の性が等しくなかったために、四時のめぐりによってこのようになってしまったと言

い、沈鬱な思いを抱くのであった（第一一句～第一六句）。

次に、悪木を除き、善木を繁茂させ、善なる世界に変えてゆこうとする思いを述べる（第一七句～第三八句）。この段の描写は、二〇句に及び、全五四句の半分近くを占める。第一九句から第二二句では、悪木の根を断ち切り、生まれて母を食うという悪鳥の梟の巢や、生まれて父を食うという悪獣の獍の住処をこぼち、ことごとく火を放って悪木を焼き払いたいと願う。表現は激越で、高揚してゆく心がそのままに吐露されている。続いて、河内、河東、河南三郡の土を運び、済水を注いで善木を培い、高く長く生長させ、善木を繁茂させると言う（第二五句～第二八句）。こうして善木の生長を願うのであるが、まだ善木が茂らないうちに悪木が跳梁することを恐れ、正しき者たちを集め、助け合って勝利を得るようにさせ、「柯（斧の柄）」を作るためには、手元の斧の柄の寸法に合わせて木を切ればよいように徒に方策を練ることなく、直ちに自ら南の辺境に出向き、あるいは長寿の藤や万乗の君主の用いる器となる蟠木などを求めて東の地にも行き、有徳の者を招き、檀と檀香を補佐したい、と思いを述懐するのである（第二九句～第三八句）。

この二〇句に及ぶ願望の表白は、語り手の夢想である。「思聚義以為曹、令敷扶以相勝。（義を聚めて以て曹と為し、敷扶して以て相勝たしめんことを思ふ）」のように、後に元結が義軍を招集して史思明の南進を防いだことを想起させるような句があることは確かである。しかし、ここに描かれたたたみかけるようなイメージは、悪木を駆逐し、善木の栄える世界を現出させると言うのみでは満たされない心情を、言葉を費やしイメージを展開することによって癒やしていたことを示しているよう。

「訟木魅」詩は、さらに怪鳥が翔け猛獣が駆け回るのを恐れ、陰陽の気が和せず善木が茂らないとしても、心を専一にして、神明に祈って加護を求めたいと言い、自らの至誠が天地をも動かすことを願う（第三九句～第四八句）。さらに、そうした自らの至誠が太霊に通じることを願うが、その疎通を阻む存在である「衆妖」「木魅」「魍魎」「山精」の形象が提示される。これらの存在は、「上誤惑於靈心、經給于言兮不聴。（上靈心を誤

惑し、経に言を結きて聴かざらしむ」、すなわち、巧みに太霊の心を誤らせ惑わして、詐りを言って、思いが太霊に届くのを阻害してしまうのであった。それは、現実においては李林甫等、朝廷の中枢にあつて権力を弄ぶ者たちの姿と、天宝六載（七四七）の制科に応じた時のことを容易に想起させるものである。

この作品に描かれた樹木の世界について、楊承祖氏は朝廷を喩えたものであるとしている。^{〔注12〕} 氏の指摘のように、李林甫等権力をもてあそぶ者たちが繁栄を極め、有能な人材が受け入れられない朝廷のメタファーとして、この世界を解釈することは可能である。商余山にあった頃の作品「出規」（巻五）には、「有向与歆宴、過之可弔。

有始賀拜侯、已聞就誅。豈不裂封、疆土未識。豈無印綬、懷之未暖。其客得禄位者随死、得金玉者皆卒、参遊宴者或刑或免。（向に与に歆宴せしに、之に過りて弔すべき有り。始め侯を拝するを賀せしに、已に誅に就くを聞く有り。豈に裂封せざらんや、疆土未だ識らず。豈に印綬無からんや、之を懷くも未だ暖まらず。其の客禄位を得る者は随ひて死し、金玉を得る者は皆卒たり、遊宴に参ずる者は或は刑せられ或は免る）」と、都が権謀のうずまく危険な世界として描かれている。しかしながら、河内、河東、河南の土を運ぶといった表現からすると、この樹木の世界は朝廷に限定されるものではなく、より広く天下の状況を喩えているようである。例えば、同時期の作品である「系謨」（巻四）は、純公が天子に対して為政のあり方を説くという形で展開されている作品である。この中で、純公は、「道德」「風教」「衣服」「飲食」「器用」「宮室」「苑囿」「賦役」「刑法」「兵甲」「畋獵」「声乐」「嬪嬙」「任用」「郊祀」「思慮」それぞれについて、その要諦を説いている。また、「時化」（巻五）及び「世化」（巻五）では、「人民為征賦所傷、州里化為禍邸。（人民征賦の傷ふ所と為り、州里化して禍邸と為る）」（「時化」）、「人民暗夜盜起求食、昼遊則死傷相及。日月非虎豹也耶。人民相与寄見命於絶崖深谷之底、始能声呼動息。山沢非州里也耶。……（人民暗夜盜起こり食を求め、昼遊べば則ち死傷相及ぶ。日月は虎豹に非ずや。人民相与に身命を絶崖深谷の底に寄せ、始めて能く声呼動息す。山沢は州里に非ずや。……）」（「世化」）と、苦しみのうちにある無事の人々に対する視座を明確にしている。このような、商

余山中にあった頃の元結の作品からすると、この悪木のはびこる樹木の世界も、やはり天下の状況を喩えたものとして解釈するのがふさわしいであろう。

末二句で、語り手は再び心を高揚させ、自らの至誠を明確にする。精神が下降、上昇と波打ちながら、上向きに鋭角的に昂揚して行き、その頂点で締めくくられるのである。「訟木魅」に示された太霊への求心的な志向は、唐王朝への強い敬慕を表すものとして読むことができる。

次の第四首「閔嶺中（嶺中に閔ふ）」においても、上昇、下降と激しく揺れる精神の表出が全編を貫いている。

□群山以延想

群山を□以て延く想ひ

吾独閔乎嶺中

吾独り嶺中に閔ふ

彼嶺中兮何有

彼の嶺中に何か有る

有天含之玉峰

天含の玉峰有り

05 殊閔絶之極顛

殊に閔絶の極顛

上聞産乎翠茸

上に翠茸を産すと聞く

欲采之以将寿

之を采りて以て寿を将^{なが}くせんと欲するも

眇不知夫所従

眇として夫れ従る所を知らず

大淵蘊蘊兮

大淵蘊蘊として

10 絶棧岌岌

絶棧岌岌たり

非梯梁以通險

梯梁以て險を通ずるに非ざれば

当無路兮可入

当に路の入るべき無かるべし

彼猛毒兮曹聚

彼の猛毒は曹聚し

必憑託乎阻修

必ず阻修に憑託す

15 常儼儼兮伺人

常に儼儼として人を伺へば

又如何兮不愁

又如何ぞ愁へざらん

彼妖精兮變怪

彼の妖精と變怪と

必仮見於風雨

必ず風雨に仮りて見る

常閃閃而伺人

常に閃閃として人を伺へば

20 又如何兮不苦

又如何ぞ苦しからざらん

欲仗仁兮託信

仁に仗り 信に託せんと欲し

將徑往兮不難

將に徑ちに往かんとすれば難からざらん

久懷懷以淒惋

久しく懷懷として以て淒惋し

却遲迴而永歎

却って遲迴して永歎す

25 懼太靈兮不知

太靈の知らざるを懼るるも

以予心為永惟

予が心を以て永惟と為さん

若不可乎遂已

若し遂げ已むべからずんば

吾終保夫直方

吾終に夫の直方を保たん

則必蒙皮篋以為矢

則ち必ず皮篋を蒙りて以て矢と為し

30 絃母箴以為弧

母箴を絃として以て弧と為さん

化毒銅以為戟

毒銅を化して以て戟と為し

刺棘竹以為殳

棘竹を刺として以て殳と為さん

得猛烈之材

猛烈の材を得て

獲与之而並驅

之と与にして並び驅くるを獲ん

35 且春刺乎惡毒

且に惡毒を春刺し

又引射夫妖怪

又引きて夫の妖怪を射んとす

尽群類兮使無

群類を尽くして無からしめ

令善仁兮不害

善仁をして害せざらしめん

然後采椽榕以駕深

然る後椽榕を采りて以て深きに駕し

40 收樅櫨兮梯陰

樅櫨を収めて陰に梯せん

躋予身之飄飄

予が身を躋らすことの飄飄たり

承予步之蹠蹠

予が歩を承ぐことの蹠蹠たり

入嶺中而登玉峰

嶺中に入りて玉峰に登り

極閼絶而求翠茸

閼絶を極めて翠茸を求めん

45 將吾寿兮随所從

吾が寿を將くせんとして從る所に随はんとするも

思未得兮馬如竜

思ひは未だ馬の竜のごときを得ず

獨翳蔽於山顛

独り山顛に翳蔽せられ

久低迴而慍瘡

久しく低迴して慍瘡す

空仰訟於上玄

空しく仰ぎて上玄に訟ふれば

50 彼至精兮必応

彼の至精は必ず応へん

寧古有而今無

寧ぞ古に有りて今に無からんや

將与身而皆亡

將に身と与にして皆亡びんとす

豈言之而已乎

豈に之を言ふのみならんや

第一、二句に呈示されるのは、「訟木魅」と同じく商余山中で憂いに沈む語り手の姿である。商余山中に天然の玉峰があり、その絶頂に長寿の薬「翠茸」を産するのであるが、階梯をかける以外に、そこに至る術は無かつた（第三句、第一二句）。しかも猛獣や毒蛇の類が群れになつて遙かな道により、人をうかがつており、また妖怪や精霊が風雨とともに姿を現し、ゆらゆらと動きながら人をうかがっているのであつた（第一三句、第二〇句）。彼らは玉山の絶頂に至ろうとする者を、必ずや妨げて葬ってしまうのである。

語り手はまたも「直方」を貫き、彼らを滅ぼし、排除して玉峰をめざして上昇することを夢想するが（第二一句、第三八句）、その夢想は忽ち覚め、山の頂に出口もなく置かれている現実が立ち現れ、閉塞の中にある自らの姿を認識せざるを得ないのである（第四五句、第四八句）。第二章第一節で検討した「自述」序には、「窮而然爾。（窮して然るのみ）」とある。この「窮」（閉塞）の認識がここには明白に表れている。楊承祖氏は「嶺中」を宮廷に擬えているとし、「太霊」は玄宗を指し、「猛毒」・「妖怪」は李林甫や楊貴妃の輩を直接に批判しているとして^{（注13）}いる。楊氏の指摘のとおり、「嶺中」は、商余山中にある元結にとつて遙か彼方に存在する現実の朝廷のメタファーとして理解できる。第一三句の群れをなして集まっている猛毒の者たち、第一七句の「妖精」や「変怪」は、「玉峰」に至らんとする者の動静を窺う狡猾な者たちとして描かれているのであるから、朝廷にはびこる悪しき者たちのイメージとして理解した方がよい。「訟木魅」と「閔嶺中」に展開される世界は、そのまま元結の置かれた現実のメタファーなのであつて、李林甫・楊国忠らが権力闘争を繰り広げている朝廷において、自らの王朝に対する「精誠（忠誠）」の貫通は不可能であり、元結は煩悶のうちに商余山中に在らざるを得なかつたのである。「演興四首」に表された感情の昂揚と頓挫の繰り返し、その煩悶の深さを物語っている。

おわりに

商余山習静期の作品の根柢には、王朝に対する激しい求心的な志向と、閉塞状況を超克しようとする強い意志とが発露している。「引極三首」は、天の高みにある元極、山奥にある仙府、海中にいる潜君を思い慕うものであり、ここには理念としての唐王朝、朝廷、天子に対する求心的な心情が表出している。また、「訟木魅」詩が、自らの至誠が必ずや太霊に通じるであろうことを述べて結ばれているように、「演興四首」全体を貫くのも、太霊への求心的な志向であり、それはとりもなおさず、この太霊に仮託された、唐王朝に対する強い求心的な敬慕の心情である。「演興四首」は、現在の閉塞状況を超克し、李林甫を始めとする朝廷の妖怪や精霊を滅ぼし、この世界を純朴なものとしたいという願いと、自らの至誠を王朝の象徴たる天子に伝えたいというひたすらな願望とを述懐したものであった。こうした王朝への志向が元結の初期詩編の底流にあり、その表現を特色づけているのである。

注

(1) 市川桃子著『中国古典詩における植物描写の研究』（汲古書院、二〇〇七年）二六九頁。

(2) 盧鴻一について『旧唐書』卷一四二「隱逸伝」は、次のように記す。

盧鴻一、字浩然。本范陽人、徙家洛陽。少有學業、頗善籀篆楷隸、隱於嵩山。開元初、遣備礼再徵不至。五年、下詔曰、……鴻一赴徵。六年、至東都、謁見不拜。宰相遣通事舍人問其故、奏曰、臣聞、老君言、礼者、忠信之所薄、不足可依。山臣鴻一敢以忠信奉見。上別召升内殿、賜之酒食。詔曰、盧鴻一応辟而至。訪之至道、有会淳風。爰举逸人、用勸天下。特宜授諫議大夫。鴻一固辞、又制曰、……。

將還山、又賜隱居之服、并其草堂一所、恩礼甚厚。

盧鴻一、字は浩然。本范陽の人なり、徙りて洛陽に家す。少くして学業有り、頗る籀篆楷隸を善くし、嵩山に隠る。開元の初め、礼を備へて再び徴せしむるも至らず。五年、下詔して曰はく、……鴻一徴に赴く。六年、東都に至り、謁見するも拝せず。宰相通事舎人をして其の故を問はしむるに、奏して曰はく、臣聞く、老君言へらく、礼は、忠信の薄ずる所にして、依るべきに足らず、と。山臣鴻一敢て忠信を以て奉見す、と。上別に召して内殿に升せ、之に酒食を賜ふ。詔して曰はく、盧鴻一辟に応じて至る。之に至道を訪へば、淳風に会ふ有り。爰に逸人を挙げ、用て天下に勸めん。特に宜しく諫議大夫を授くべし、と。鴻一固辞するや、又制して曰はく、……。將に山に還らんとするや、又隱居の服、并びに其の草堂一所を賜ひ、恩礼甚だ厚し。

また、『新唐書』卷一九六「隱逸伝」は、

盧鴻、字顯然、其先幽州范陽人。徙洛陽。博学、善書籀。盧嵩山。玄宗開元初、備礼徴再、不至。五年、詔曰、……。鴻至東都、謁見不拝。宰相遣通事舎人問状、答曰、礼者、忠信所薄。臣敢以忠信見。帝召升内殿、置酒。拝諫議大夫、固辞。復下制、許還山、歲給米百斛、絹五十、府県為致其家、朝廷得失、其以状聞。將行、賜隱居服、官營草堂、恩礼殊渥。鴻到山中、広学廬、聚徒至五百人。及卒、帝賜万錢。鴻所居室、自号寧極云。

盧鴻、字は顯然、其の先は幽州范陽の人なり。洛陽に徙る。博学にして、書籀を善くす。嵩山に廬す。玄宗開元の初、礼を備へて徴すること再びなるも、至らず。五年、詔して曰はく、……。鴻東都に至り、謁見するも拝せず。宰相通事舎人をして状を問はしむるに、答へて曰はく、礼は、忠信の薄んずる所なり。臣は敢て忠信を以て見ゆ、と。帝召して内殿に升せ、置酒す。諫議大夫を拝するも、固辞す。復た制を下し、山に還るを許し、歳ごとに米百斛、絹五十を給し、府県為に其の家に致り、朝廷の得失は、

其れ状を以て聞せしむ。将に行かんとして、隱居の服、官營の草堂を賜ひ、恩礼殊に渥し。鴻山中に到り、学廬を広くし、徒を聚むること五百人に至る。卒するに及び、帝万錢を賜ふ。鴻居る所の室は、自ら寧極と号すと云ふ。

と記している。

(3) 入谷仙介著『王維研究』（創文社、一九八一年）六二〇頁。入谷氏は、「騷体と五絶と、詩体こそ違え、美しく神秘的な、しかも人工の建築を含んだ大きな風景を長い連作によって全面的にとらえようという方法を、王維が盧鴻一から学んだことは疑いない。……嵩山には王維も隠棲した、少なくとも滞在したことがあったのであるから、直接の交際も考えられないではない。そうでないまでもこの一世代前の高潔の士に十分な尊敬を抱き、「嵩山十志」の遺構も目のあたりに見ていたことは疑いないであろう。そうして「嵩山十志」から「輞川集」の構想を得たものと思われる。」と述べている。

(4) 聶文郁注解『元結詩解』（陝西人民出版社、一九八四年）九八頁。聶氏は「潜君、指水神。（潜君は、水神を指す）」と解釈している。

(5) 聶文郁氏、前掲書。九五頁。

(6) 聶文郁氏、前掲書。九六頁。

(7) 聶文郁氏、前掲書。九七頁。

(8) 聶文郁氏、前掲書。九九頁。

(9) 聶文郁氏、前掲書。一〇〇頁。聶氏は、「乳、幼小。……這里乳指小山峰。（乳は、幼小。……ここでは乳は小山の峰を指す）」と解している。

(10) 聶文郁氏、前掲書。一〇四頁。聶氏は、「水闌、応為木蘭之訛。水与木形似。（水闌は、木蘭の訛りとすべきである。水と木とは形が似ている）」と解している。

(11) 聶文郁氏、前掲書。一〇六頁。

(12) 楊承祖著『元結研究』（国立編訳館、二〇〇二年）五四頁。楊氏は、「顕然以樗栲・惡木比喻群小蟠踞朝廷、……（明らかに樗栲や惡木をつまらぬ者たちが朝廷にわだかまっていることに喩え、……）」と言う。

(13) 楊承祖氏、前掲書。五四～五五頁。楊氏は「『嶺中』、蓋比宮廷、『太靈』則喩玄宗、『猛毒』、『妖怪』直斥李甫、楊妃輩、……」と解釈している。

第五章 規諷と邂逅（一）——説楚賦三篇

はじめに

元結が商余山中にあった時期に制作された作品に説楚賦三篇（「説楚何荒王賦」、^{（注1）}「説楚何惛王賦」、^{（注2）}「説楚何惑王賦」）がある。この三篇の賦については、孫望氏、楊承祖氏をはじめとして、いずれも玄宗を諷刺する作として解釈している。例えば孫望氏は「在説楚賦里、他把矛頭更直接指向了昏君本人。昏君成年累月沈溺于女色、迷恋于歌舞、為了遨遊享樂、不惜役使人民……當時的情況就是如此。在元結的描繪下、一箇百孔千瘡、靡爛透頂的封建王朝、逼真地呈現在人們眼前了。……誰都看得出、這是在諷斥有名的荒唐天子李隆基^{（注1）}。（説楚賦において、彼は矛先を直接に昏迷な主君本人に向けている。昏迷な主君は長い間女色に溺れ、歌舞にうつつをぬかし、遊歴と享樂のために人民を使役することを惜しまず、……當時の状況はこのようであった。元結の表現によつて、満身創痍で爛れきつた封建王朝が真に迫つて人々の眼前に現れたのである。これが放縦な天子李隆基を諷刺したものであることは、誰もが見てとることができる）」と述べる。また楊承祖氏は「統觀三『賦』、都是切於時事、專為玄宗耽蠱淫樂・重失君道而發、……。雖未直書玄宗、實際不待指而可名、至於所斥楊貴妃姊妹・高力士・李林甫等、均呼之欲出。這可說是針對現實、批判性極強的作品^{（注2）}、……（三篇の賦を全体として見れば、すべて時事に即し、専ら玄宗が淫樂に耽り惑い、その上君主の道を失っているがために発したものであり、……。直接に玄宗と記してはいないが、実際には指さすまでもなく明らかであり、楊貴妃姉妹、高力士、李林甫らを咎め退けているところは、いずれも真に迫つて描かれている。これは現實に對峙した、極めて批判性の強い作品であると言うことができ、……。）」^{（注3）}と言い、「説楚何荒王賦」については、「正好比照玄宗天宝以来耽溺後宮・厭

於聽斷、更令人聯想到李園教坊、李龜年・黃幡綽等妓官諧奴。總之、是写内廷生活的荒淫^(注3)。(玄宗が天宝以来後宮に耽溺し、政治をとるのに倦んでいたことにぴたりと照合し、さらに李園の教坊、李龜年や黃幡綽等の樂官や俳優を連想させる。総じて言えば、宮廷の荒んだ生活を映し出しているのである。)」と、玄宗が後宮に淫し、政治に厭きた状況を表しているとしている。

諸氏の指摘のように、この三篇の賦に描かれている三人の王の形象から玄宗を想起することは可能であろう。しかし、直接に玄宗を嘲笑し批判しようとするものなのか、あるいは遠回しに諭し、戒めようという規諷の意図が込められたものなのかについては、やはり検討が必要である。

また、説楚賦三篇に登場する三人の王には、悔悟の有無という大きな相違がある。後に検討するように「説楚何荒王賦」の何荒王は悔悟することがない王であるのに対して、「説楚何惑王賦」の何惑王と「説楚何惛王賦」の何惛王は、それぞれ在野の「直士」「忠臣」の直諫によって自ら悔い改めているのである。両賦の該当部分を挙げる。

臣何惑王悟之、於是使嬖臣挾玉鼓与鸛樂、使閹尹抱天靈鸛額、鎖以金索、繫於石人、沈之深淵、飛檝而旋。

(説楚何惑王賦)

臣が何惑王之を悟り、是に於て嬖臣をして玉鼓と鸛樂とを挾ましめ、閹尹をして天靈と鸛額を抱かしめ、鎖すに金索を以てし、石人に繋ぎ、之を深淵に沈め、檝を飛ばして旋る。

臣何惛王聞之、讙居化心、諷誦斯言、終身為箴。遂罷已成之事、寢未成之謀、廢所賈之官、復所鬻之孤。敢諫者侯、贊謀者誅。

(説楚何惛王賦)

臣が何愍王之を聞き、讜居して心を化し、斯の言を諷誦して、終身箴と為す。遂に已に成るの事を罷め、未だ成らざるの謀を寝め、賈^うる所の官を廃し、鬻^うぐ所の孤を復す。敢て諫むる者は侯とし、謀に賛する者は誅す。

このように悔悟の有無において表現の位相を異にする説楚賦三篇は、すべてが玄宗を諷刺するものである。少なくとも、隋の煬帝を容易に想起させる表現が見られる「説楚何荒王賦」については、他の二篇とは異なる解釈の可能性も指定できるように思われる。本章では、前章まで究明してきた元結の初期作品の特色を踏まえながら、この三篇の賦それぞれの諷諭の構造について改めて考察する。先ず、「説楚何荒王賦」を取り上げる。

第一節 「説楚何荒王賦」

「説楚何荒王賦」は、梁の寵王が史官の君史を召して、仕官の記録に残されていないことはないのか、と尋ねるところから始まる。君史は、あります、と答え、楚の何荒王が水に浮かぶ宮殿である浮宮を置くのにふさわしく、また巨大な魚網を張るのにふさわしい場所を釣翁に探させたことを語ってゆく。

昔聞、臣何荒王使釣翁相水。相置浮宮之所、相用罟釣之处。

昔聞く、臣が何荒王釣翁をして水を相、浮宮を置くの所を相、罟釣を用ゐるの处を相しむ。

釣翁は、湘水の流れがふさわしいと告げ、その様子を語る。しかし、何荒王は、釣翁の進言を退けて洞庭湖に巨大な浮宮を造営する。

荒王眺歎曰、釣翁阜父。其思隘歟。乃欲置吾於湘水一曲、釣羅病魚。吾自相水、洞庭可矣。於是命造浮宮。令眾釣所至、淵無藏竜、令浮宮所狀、与仙府比同。

荒王眺めて歎じて曰はく、釣翁は阜父なり。其の思隘なるかな。乃ち吾を湘水の一曲に置き、病魚を釣羅せしめんと欲す。吾自ら水を相るに、洞庭可なり、と。是に於て命じて眾釣を造らしめ、是に於て命じて浮宮を造らしむ。眾釣の至る所をして、淵に藏竜無からしめ、浮宮の状る所をして、仙府と比同せしめんとす。

その浮宮の有様は、次のようなものであつた。

宮有天舩竜殿、当居史端、実霊巫鬼、祝女司宮、侍何荒王、而公族国卿、莫得至焉。宮有艗台掲拔、類擬天都。薰珍鈿塗、纓佩垂紆。金珠玉炉、蕭寥清冷、苾馥芬敷。臣何荒王於此台上、与妊女嫫姁、双歌閑徐、娛然自娛。宮有絳堂髹房、舳館縹廊、載戲兒妓官、諧奴内臣、宮姥優倡、及翫器不名、毆維宮傍。宮有聯舳、負土以為艗囿。囿多天草媚木、淫禽醜獸。宮有海舩之闕、伫倔鮮懸。左曰瑞風、右曰祥煙。宮有四門、青氣、白雲、丹景、玄寒。然後始為鷁城、匝宮屯備、交戰禁御、怛羅攢峙。其余駭鯨之艗、飛竜之舩、鳧舳鶴舩、羅宮上下者、千里相望。

宮に天舩の竜殿有り、当に史の端に居るべき実霊巫鬼、祝女司宮、何荒王に侍して、公族国卿、焉に至るを得る莫し。宮に艗台の掲拔なる有り、天都に類擬す。薰珍鈿塗し、纓佩垂紆す。金珠玉炉、蕭寥清冷にして、苾馥として芬敷す。臣が何荒王此の台上に於て、妊女嫫姁と、双歌して閑徐たり、娛然として自ら娛しむ。宮に絳堂髹房、舳館縹廊有り、戲兒妓官、諧奴内臣、宮姥優倡を載せ、及び翫器の名あらざるもの、宮傍に毆維す。宮に聯舳有り、土を負ひて以て舳囿と為す。囿に天草媚木、淫禽醜獸多し。宮に海舩の闕有り、

伋偲として鮮懸す。左は瑞風と曰ひ、右は祥煙と曰ふ。宮に四門有り、青氣、白雲、丹景、玄寒なり。然る後始めて鷁城を為り、宮を匝りて屯備し、交戦禁御し、柵羅攢峙す。其の余の駭鯨の艤、飛竜の舫、鳧舩鶴舩、宮の上下に羅る者、千里相望む。

造営された浮宮には、船を動かす「天帆竜殿」があり、巫鬼や祝女がいて何荒王に侍し、公卿等は近づくことができなかった。また、巨大な台があり、何荒王はこの台上で「妊女嫖姝（懐妊した女やみめよい女）」と楽しむのであった。さらに堂や房、廊には、「戯児」「妓官」「諧奴」「内臣」「宮姥」「優姥」「優倡」がおり、禽獣で満たされた禁苑、千里相望むような巨大な無数の船舶があった。楊承祖氏は「浮宮」を玄宗の後宮を譬えるとき、「『浮宮』除了影射後宮、料也必有浮迷失本的寓意。」（「浮宮」は暗に後宮を指す以外に、必ずや迷つて根本を失っているという寓意も含まれていると考えられる）と指摘している。しかし、賦に描かれた浮宮の様子は後宮の規模を遙かに超えた、まさしく水上に造営された宮城なのである。

この「浮宮」という語は、元結以前には用例のみられない語で、元結の用例もこの一例のみである。しかし、隋の煬帝^(注5)のことを描いた「閔荒詩」^(注6)（巻一）には「舩艦状竜鷁、若負宮闕浮（舩艦は竜鷁に状り、宮闕を負ひて浮くがごとし）」の句がある。煬帝が江都に行幸するときの竜舟の様子はあたかも舟が宮殿を負って浮かんでいるようだと詠じた句である。

『隋書』巻三「煬帝上」には、江都に行幸する際の船団について「八月壬寅、上御竜舟、幸江都。以左武衛大將軍郭衍為前軍、右武衛大將軍李景為後軍。文武官五品已上給樓船、九品已上給黃蔑。舩艦相接、二百余里（八月壬寅、上竜舟に御し、江都に幸す。左武衛大將軍郭衍を以て前軍と為し、右武衛大將軍李景を後軍と為す。文武官五品已上は樓船を給し、九品已上は黃蔑を給す。舩艦相接すること、二百余里なり）」と記す。この行幸は、先頭から最後尾まで二百里に及ぶ船団をしたてた、贅の限りを尽くしたものであった。

また、『資治通鑑』卷一八〇は、竜舟及び行幸の船団について更に詳細に記している。

竜舟四重、高四十五尺、長二百丈。上重有正殿、内殿、東西朝堂、中二重有百二十房、皆飾以金玉、下重内侍处之。皇后乘翔螭舟、制度差小、而裝飾無異。別有浮景九艘、三重、皆水殿也。又有漾彩、朱鳥、蒼螭、白虎、玄武、飛羽、青鳧、陵波、五楼、道場、玄壇、板枇、黄篋等数千艘、後宮、諸王、公主、百官、僧、尼、道士、蕃客乘之、及載内外百司供奉之物。

竜舟は四重、高さ四十五尺、長さ二百丈。上重に正殿、内殿、東西の朝堂有り、中は二重にして百二十房有り、皆飾るに金玉を以てし、下重は内侍之に処り。皇后は翔螭の舟に乗り、制度差小なれども、裝飾は異なる無し。別に浮景の九艘有り、三重にして、皆水殿なり。又漾彩、朱鳥、蒼螭、白虎、玄武、飛羽、青鳧、陵波、五楼、道場、玄壇、板枇、黄篋等数千艘有り、後宮、諸王、公主、百官、僧、尼、道士、蕃客之に乗り、及び内外百司供奉の物を載す。

『資治通鑑』の竜舟の記述が基づくところは明らかでないが、元結の「若負宮闕浮（宮闕を負ひて浮くがごとし）」の「宮」のイメージは、正殿、内殿、朝堂までを含んだ宮殿のごとき竜舟と重なるものである。「説楚何荒王賦」の「浮宮」の描写もこの煬帝の竜舟を彷彿とさせる。「浮宮」の描写から直ちに想起される王は玄宗ではなく、煬帝であったと言うことができよう。

さて、何荒王は浮宮には満足したが、「罟釣（巨大な漁網を用いた漁）」がまだできないので、浮宮を御して洞庭の南に行幸するのであった。

浮宮可御、而罟釣無成。臣何荒王乃浮浮宮于都竜之漩沅、出洞庭之南漢、将觀蛮師夷父、与漁者試罟釣於沅

湘会渥。臣何荒王始見積魚之山、而喜色未起。又見罟猶畜委、釣未施已、漈洄淵湫、周表千里、罟中之魚、皆触蹙鰕駭、投跳委壘、可以薦車。臣何荒王輦於其上、而心始喜。

浮宮は御すべし、而れども罟釣成る無し。臣が何荒王乃ち浮宮を都竜の漩冷に浮かべ、洞庭の南漢に出で、將に蛮師と夷父を覩、漁者と罟釣を沅湘の会渥に試みんとす。臣が何荒王始め積魚の山を見て、喜色未だ起こらず。又罟猶ほ畜委し、釣未だ施し已はらざるに、漈洄淵湫し、周表千里、罟中の魚、皆触蹙鰕駭し、投跳委壘して、以て車を薦むべきを見、臣が何荒王其の上に輦して、心始めて喜ぶ。

何荒王は、漁を試み、積み上げられた魚の山を目にしても喜ばなかったが、網がまだかけられたままで、漁をしていないのに、千里四方、おびただしい魚が跳んだりはねたりして積み重なり、車をつらねることができるところであるのを見て、その上に乗り物を進めて、はじめて喜んだのである。ここに描かれているのは、事に耽り、自らの欲望を満足させようとする者の極限の姿である。

君史からこの話を聞いた寵王は、大いに喜び、次のようにつぶやく。

寵王聞之喜曰、吾国無有長流激湍、平湘大淵、而不知有此樂也。始知城池宮館、為拘我之邸、山沢鷹犬、為勞我之方。当誦記所聞、帰学而主。

寵王之を聞き喜びて曰はく、吾が国に長流激湍、平湘大淵有ること無くして、此の楽しみ有るを知らざるなり。始めて城池宮館は我を拘ふるの邸為りて、山沢鷹犬は、我を勞するの方為るを知る。当に聞く所を誦記し、帰り学びて主とすべし、と。

政道の根幹を知らぬ寵王は、何荒王のすさまじい逸樂のあり方に心から感動し、自らそれに倣おうとするので

ある。君史は、寵王の言葉を受けて次のように告げる。

君史証曰、不然。須臣言已、或可聴焉。臣聞浮宮之成也、臣何荒王令群臣有後為浮司不為浮茅者族、百姓能率為浮家共為浮鄉者復、男子能湍游上下者為王賓、女子能淵居移日者為王嬪。未及一年、遂變楚俗。川原有楚室之鄉、江湖有駢舟之曲。家見湍上之悲、戸聞臨淵之哭。

時野有歎曰、嗚呼、有国者非喜愛亡国、有家者非喜愛亡家、当取其亡也、如喜愛者耶。今君上喜愛浮宮罽釣、令臣下喜愛浮司浮鄉。吾恐君臣各迷、而家国共亡。此実楚正士歎臣何荒王。臣願君王驚懼為心、指此為箴。

君史証めて曰はく、然らず。臣が言の已るを須たんことを。或は聴くべし。臣聞く、浮宮の成るや、臣が何荒王群臣をして後有り浮司と為りて浮茅を為らざる者は族し、百姓をして能く率ゐて浮家を為り共に浮郷を為る者は復し、男子をして能く湍に遊ぎて上下する者は王賓と為し、女子をして能く淵に居りて日に移す者は王嬪と為さしむ。未だ一年に及ばずして、遂に楚の俗を變ず。川原に楚室の郷有り、江湖に駢舟の曲有り。家に湍上の悲を見、戸に臨淵の哭を聞く。

時に野に歎くもの有りて曰はく、嗚呼、国を有つ者は国を亡ぼすを喜愛するに非ず、家を有つ者は家を亡ぼすを喜愛するに非ざるに、其の亡を取るに当たりては、喜愛する者のごときか。今君上浮宮と罽釣を喜愛し、臣下をして浮司と浮郷を喜愛せしむ。吾君臣各迷ひて、家国共に亡ぶを恐る、と。此れ実に楚の正士臣が何荒王を歎く。臣願はくは君王驚懼を心と為し、此を指して箴と為さんことを。

君史は、何荒王がおのれの欲望を恣にしたことによつて楚国の習俗が一變し、人々は水上に住むようになり、やがて家人を亡くした人々の慟哭が満ちるようになって楚国が危殆に瀕したことを述べる。そして野に嘆く楚国の正士の言葉を語って、寵王に何荒王の話を戒めとするよう願うのである。

ここに描かれた何荒王のイメージの原型は、「二風詩論」（巻一）に挙げられた「荒王」、夏の太康である。「二風詩」（巻一）のうち「乱風詩五篇」は、廢乱に至る原因を五人の王（「荒王」「乱王」「虐王」「惑王」「傷王」）に託して詠じた作品であり、「二風詩論」には、「夫至乱之道、先之以逸惑、故閔太康為荒王。壞之以苛縦、故閔夏桀為乱王。覆之以淫暴、故閔殷紂為虐王。危之以用乱、故閔周幽為惑王。亡之於累積、故閔周赧為傷王。（夫れ至乱の道は、之に先んずるに逸惑を以てす、故に太康を閔みて荒王と為す。之を壞するに苛縦を以てす、故に夏桀を閔みて乱王と為す。之を覆すに淫暴を以てす、故に殷紂を閔みて虐王と為す。之を危くするに乱を用ゐるを以てす、故に周幽を閔みて惑王と為す。之を累積に亡ぼす、故に周赧を閔みて傷王と為す）」とある。これによれば、「荒王」以下の五人は、それぞれ、夏の太康、夏の桀王、殷の紂王、周の幽王、周の赧王を指す。この五首の中、特に「至荒」詩の表現は、「閔荒詩」に描かれた煬帝のイメージと近似している。「至荒」詩は次のような作品である。

古有荒王、忘戒慎道、以逸予失国、故為至荒之詩一章。

（古荒王有り、戒慎の道を忘れ、逸予を以て国を失ふ、故に至荒の詩一章を為る。）

国有世謨 国に世謨有り

仁信勤敷 仁信勤か

王実昏荒 王実に昏荒

終亡此乎 終に此を亡ふか

焉有力恣^注諂惑 焉くんぞ力めて諂惑を恣にして

而不亡其国 其の国を亡ぼさざるもの有らんや

嗚呼亡王 嗚呼 亡王

忍為此心 忍んで此の心を為す

敢正亡王 敢て亡王を正し

永為世箴 永く世の箴と為さん

禹の孫である夏の太康は、狩獵に耽つて民を憂えず、羿に追放され、国に帰ることができなかった王である。詩では、太康が、世謨である仁と信と勤に違い、惑い乱れて事に耽り、国を亡ぼしたとしている。『尚書』「五子之歌」に禹の訓戒として「内作色荒、外作禽荒、……有一于此、未或不亡。（内は色荒を作し、外は禽荒を作し、……此に一有りて、未だ亡びざる或らず）」とある。内では女色に惑い、外では狩獵に耽る者は、皆滅びるというのである。

太康は、洛水の南に狩りに出かけ、一〇旬（一〇〇日）の間、帰ってこなかった。そのイメージは、おのれの欲望を恣にし、運河を開削して江都へ行幸し、逸樂を極めた煬帝に重なるものである。「閔荒詩」中の「隋徳滋昏幽（隋徳滋昏幽たり）」「荒娛未央極（荒娛未だ央極せず）」「奈何昏王心（奈何ぞ昏王の心）」「昏昏誰与儔（昏昏誰か与に儔せん）」といった煬帝にかかわる描写も「王実昏荒」「逸予」「恣諂惑」という語句の持つイメージとほぼ等しいであろう。語り手は荒王について明らかにし、それを世の戒めにしようと言う。元結においては、荒王のより具体的なイメージが煬帝の姿として実感されているということであろう。

ただ、なお詳細に検討すると、次に掲げる「乱風詩五首」の「至虐」詩に示されている殷の紂王の姿も何荒王と重なるところがある。

古有虐王、昏毒狂忍、無惡不及、故為至虐之詩二章。

（古虐王有り、昏毒狂忍にして、悪として及ばざるは無し、故に至虐の詩二章を為る。）

夫為君上兮 夫れ君上と為らば

慈順明恕 慈順明恕にして

可以化人 以て人を化すべし

忍行昏恣 忍びて昏恣を行ひ

独樂其身 独り其の身を樂しましむ

一徇所欲 一に欲する所に徇ひ

万方悲哀 万方 悲哀す

於斯而喜 斯に於て喜ぶ

当云何哉 当に云何すべき

夫為君上兮 夫れ君上と為らば

兢慎儉約 兢慎儉約にして

可以保身 以て身を保つべし

忍行荒惑 忍んで荒惑を行ひ

虐暴于人 人を虐暴す

前世失国 前世 国を失ふは

如王者多 王のごとき者多し

於斯不寤 斯に於て寤らず

当如之何 当に之を如何すべき

殷の紂王を詠ずるこの「至虐」詩において、虐王は、愚昧でほしいままに悪事を行い、世界が悲哀の中にあるのに、かえってそれを喜び、すさんだ愚かなことを行つて人々を虐げた王として描かれている。この序の「狂忍」、「万方悲哀（万方悲哀す）」の句は、「閔荒詩」の隋人の遺歌「四海非天獄、何為非天囚。天囚正凶忍、為我万姓讎。人将引天鈇、人将持天鋸。所欲充其心、相与絶悲憂。（四海天獄に非ざるに、何為れぞ天囚を非とする。天囚正に凶忍、我万姓の讎と為ればなり。人将に天鈇を引かんとす、人将に天鋸を持たんとす。欲する所は其の心を充たし、相与に悲憂を絶たんとすることなり）」に言う、煬帝の「凶忍」さ、そして四海の人々が悲哀のうちにあることと等しいものであろう。

以上のことからすると、説楚賦三篇のうち、「説楚何荒王賦」は、決して直接に玄宗の姿を想起させるように書かれていないことは明らかである。元結が楚何荒王の形象に仮託したのは、夏の太康、殷の紂王、そして直接には煬帝であった。唐、張文瓘の「諫造蓬萊上陽宮疏」（『全唐文』卷一六二）に「殷鑑不遠、近在隋朝。（殷鑑遠からず、近く隋朝に在り）」とあるように、初唐の士人にとって、隋王朝、とりわけ煬帝は、自らの戒めとすべき帝王として位置づけられていた。

元結は、玄宗の姿を直接想起させて指弾しようとしているのではなく、唐の士人たちが容易に想起する、煬帝の嗜慾のすさまじさを何荒王の形象において諧謔を以て展開し、婉曲に帝王の嗜慾を戒めているのであって、そこに彼の諷諭の表現が成立しているのである。

第二節 「説楚何惑王賦」と直士の諫言

何荒王は、己の欲望の限りを尽くし、臣下の諫言を聞き入れることのない荒んだ王である。賦の末には在野の「正士」の嘆きの言葉が展開されていた。その「正士」の言葉は慨嘆であり、諫言ではない。彼は在野の士であって、何荒王に諫言する術を持たないのである。「主君は決して国を滅ぼそうとは思っていないにもかかわらず、自らの欲望を恣にすれば臣下もその意にしたがい、やがて国家はあたかも滅び去ることを喜ぶかのように滅亡への道程を歩んでゆく。」と歎く在野の「正士」は、楚国が滅亡に向かうのを止める術もなく、ただ憂え歎息するしかなかった。

「説楚何惑王賦」（巻四）及び「説楚何惛王賦」（巻四）も、「説楚何荒王賦」と同様、それぞれ「何惑王」「何惛王」が己の欲望を恣にして楚国を危殆に瀕せしめ、最後に「直士」「忠臣」が登場するという、共通した構成になっている。

「説楚何惑王賦」は、君史が梁の寵王の問いかけに答えて何惑王について語るところから始まる。

寵王矚然、復問君史曰、更有記乎。曰、有之。甚妖怪也何。故不説。寵王曰、当必為吾説之。対曰、臣聞、天鄙有山、山有玉鼓。実有天醜、扣之歌舞。声媚金石、韻便宮羽。寵王曰、生休矣。吾将購之。君史証曰、不可。臣所不欲説者、懼君王好之。君誠不忘歟。臣請備説。其可好乎。

寵王矚然として、復た君史に問ひて曰はく、更に記すること有るか、と。曰はく、之有り。甚だ妖怪なること何ぞや。^(注8)故に説かず、と。寵王曰はく、当に必ず吾が為に之を説くべし、と。対へて曰はく、臣聞く、天鄙に山有り、山に玉鼓有り、と。実に天醜^{れい}有り、之を扣ちて歌舞す。声は金石に媚び、韻は宮羽に便^{べん}ふ、と。寵王曰はく、生休めよ。吾将に之を購はんとす、と。君史証^{いさ}めて曰はく、不可なり。臣の説かんと欲せざる所の者は、君王之を好むを懼るればなり。君誠に忘れざるか。臣請ふ備さに説かんことを。其れ好むべけんや。

天の果ての辺鄙な地の山に玉鼓があり、天醜（人面獸身の山神）がこれを打って歌い舞い、その声は金石の音に媚びるようであり、宮羽の音調にへつらうかのである、という。何惑王は、この玉鼓と天醜を手に入れようとする。

昔臣何惑王用闇嬖之謀、肆極荒淫、更經年歲、鑿陰填深、轉餽通千里、万金五訳。臣妾借喻其心、然後云獲。非靈女撫鼓、而天醜不舞、非靈女引和、而天醜不歌。天醜舞、一容化、一分眇、一祥檐、一宛袂。臣何惑王見之、舒舒曳曳、若多醇酎而不知所制。天醜歌、一化顔、一主顧、一更声、一換氣。臣何惑王聽之、娛娛懿懿、若已酤昏而不知所至。天醜歌舞、臣何惑王氣如陽春、始霽時雨。天醜不歌舞、臣何惑王心若已喪、而頽壞不主。嗚呼、天醜、惑人至此。嗚呼、天醜、媚人至斯。加有醜顔、牲牲輔之、使臣何惑王之心無所不欲、使臣何惑王之意無所不為。

昔臣が何惑王闇嬖の謀を用ゐ、肆に荒淫を極め、更に年歳を経、陰を鑿ち深きを填め、餽を転じて千里を通じ、万金もて五訳す。臣妾其の心を借喻し、然る後云に獲たり。靈女鼓を撫するに非ずんば、而ち天醜舞はず、靈女引きて和するに非ずんば、而ち天醜歌はず。天醜舞ふや、あるい一は容化し、一は分眇し、一は祥檐あり、一は宛袂あり。臣が何惑王之を見、舒舒曳曳として、醇酎多くして制する所を知らざるがごとし。天醜歌ふや、一は顔を化し、一は主のために顧み、一は声を更め、一は氣を換ふ。臣が何惑王之を聴き、娛娛懿懿として。已に酤昏して至る所を知らざるがごとし。天醜歌舞すれば、臣が何惑王氣陽春にして、始めて時雨霽るるがごとく、天醜歌舞せざれば、臣が何惑王心已に喪はれて、頽壞して主らざるがごとし。嗚呼、天醜、人を惑はすこと此に至れり。嗚呼、天醜、人に媚ぶること斯に至れり。加へて醜顔ひん有り、牲牲として之を輔け、臣が何惑王の心をして欲せざる所無からしめ、臣が何惑王の意をして為さざる所無からしむ。

何惑王は手に入れた天醜に魅了されてゆく。玉鼓を打つのは嬖女（女官）であり、彼女が打ち和さなければ天醜は歌舞しないが、一度歌舞するや、何惑王はたちまちのうちに心を奪われる。さらに醜顔なる者がいて様々に天醜を補佐し、何惑王の欲望を増長させ、恣にさせるようになってゆくのである。

独言選女、於余可知。其選女也、豈止嬖嬖嫫嫫。及嬖未笄、將醜將醜、將嫫將嫫。可喜美者、母姨負抱、姑姉引提、詣於王宮、字籍王閨。

然後割楚国廟右、为天醜作宮、分楚国社陽、為醜顔作館。悉楚国之好、奉之已窮、於所奉之心、其猶未滿。楚国之人、已悲咨冤怨、日苦其毒。其臣何惑王尚熙懷敷娛、日思未足。

独り女を選ぶを言へば、余に於ては知るべし。其の女を選ぶや、豈に嬖嬖嫫嫫に止まらんや。嬖未だ笄せざるに及びては、將た醜將た醜、將た嫫將た嫫なり。喜美すべき者は、母姨負抱し、姑姉引提し、王宮に詣り、王閨に字籍す。

然る後楚国の廟右を割きて、天醜の為に宮を作り、楚国の社の陽を分かちて、醜顔の為に館を作る。楚国の好きを悉くして、之に奉ずること已に窮まるに、奉ずる所の心に於て、其れ猶ほ未だ満たざるがごとし。楚国の人、已に悲咨冤怨し、日び其の毒に苦しむ。其れ臣が何惑王尚ほ熙懷敷娛し、日び未だ足らざるを思ふ。

ここでは、「使臣何惑王之心無所不欲、使臣何惑王之意無所不為。（臣が何惑王の心をして欲せざる所無からしめ、臣が何惑王の意をして為さざる所無からしむ）」の具体例として、宮中に入れる女性を選ぶことを挙げ、王の常軌を逸したありさまを描く。宮中に入れる女性のみめよい女性だけではなく、まだ成人しない女性として

齒も生えそろっていない幼児や嬰兒も含まれるという状況であつたと、何惑王の欲望のすさまじさを語るのである。何惑王は宮館を造つてひたすら天醜と醜顔に尽くし、楚国の人々が悲しみ嘆いて怨嗟し、塗炭の苦しみをなめていても、自らの楽しみに耽り、満足することがなかった。

ここに在野の直士が登場する。彼は「説何荒王賦」の正士とは異なり、何惑王に直諫するのである。

野有直士、触而証曰、大王溺於天醜、惑於醜顔、不顧宗廟、遂亡人民、如何下命。其令且云、舞者能変一度、歌者能変一声、応醜樂之節数、充寡人之性情、且能富其親族、又能貴其父兄、至於母姨姑姉、皆能与之封邑、以為世榮。令行逾月、楚俗皆化。女忘蚕織、男忘耕稼。里開学歌之館、郷築教舞之榭、遂使黄鐘大呂、生溺惑之声、孤竹空桑、起怨離之調、変風俗於一歛、忘正始於一笑。大王未覚、遂不節損。此所謂鑿顛覆之源、造乱亡之本。今之所好則妖惡之物、所為又怪醜之事。義軒之耳必不肯聴、堯禹之心必不肯喜。

野に直士有り、触りて証めて曰はく、大王天醜に溺れ、醜顔に惑ひ、宗廟を顧みず、人民を遂亡するに、如何ぞ命を下す。其の令且つ云ふ、舞ふ者は能く一度を變じ、歌ふ者は能く一声を變じ、醜が樂の節数に応じ、寡人の性情を充たさば、且に能く其の親族を富まし、又能く其の父兄を貴くし、母姨姑姉に至りては、皆能く之に封邑を与へて、以て世榮と為せ、と。令行はれて月を逾え、楚の俗皆化す。女は蚕織を忘れ、男は耕稼を忘る。里には学歌の館を開き、郷には教舞の榭を築き、遂に黄鐘大呂をして、溺惑の声を生じ、孤竹空桑をして、怨離の調を起こさしめ、風俗を一歛に變じ、正始一笑に忘る。大王未だ覺らず、遂に節損せず。此れ所謂顛覆の源を鑿ち、乱亡の本を造るなり。今の好む所は則ち妖惡の物にして、為す所も又怪醜の事なり。義軒の耳必ず聴くを肯んぜず、堯禹の心必ず喜ぶを肯んぜず、と。

直士の諫言は、五諫のうちの直諫に当たる。直諫は、『大唐六典』卷八「諫議大夫」に「直言君之過失。必不

得已然後為之者。（君の過失を直言す。必ず已むを得ずして、然る後之を為す者なり）」とあるように、主君の過失を直言するものであって、やむを得ずして行うものである。

この直諫は、賦全体の三分の一を占めている。直士は、何惑王が天醜に迷い民生を顧みず、楚国の音楽を変え、自らの心を満足させることを求め、その結果、女は蚕織を忘れ、男は耕すことを忘れ、郷里には歌舞教習のための学館が建てられて楚国の風俗が一変したことを指摘する。何惑王は政の根本を忘れ、それを悟らずにいと、王の過失を直言し、厳しく諫めるのである。

本来であれば諫官がやむを得ずして行う直諫を、この賦では在野の直士が行っている。何惑王は、この直諫を受け容れて自らの過ちを悔い、玉鼓と天醜、醜顔を深い淵に沈めてしまっているのであった。

臣何惑王悟之、於是使嬖臣挟玉鼓与醜樂、使閹尹抱天靈醜顔、鎖以金索、繫於石人、沈之深淵、飛櫂而旋。

臣が何惑王之を悟り、是に於て嬖臣をして玉鼓と醜樂とを挟ましめ、閹尹をして天靈醜顔を抱かしめ、鎖すに金索を以てし、石人に繋ぎ、之を深淵に沈め、櫂を飛ばして旋る。

「説楚何惑王賦」では、一人の在野の直士が何惑王の惑いを解き、楚国の危殆を救う。何惑王が、名もない在野の直士のただ一度の直諫を受け容れて悔悟するというこのプロットは、直士の直諫が一国の王を悔悟させるものであることを示すとともに、何惑王が直諫によって悔悟することのできる王であること、諫議大夫ではなく在野の無名の者であっても、その直諫を受け容れることができる王であることを示唆しているであろう。

何惑王のモデルは周の幽王である。「二風詩論」（卷一）に「危之以乱、故閹周幽王為惑王。（之を危くするに乱を以てす、故に周の幽王を閹みて惑王と為す）」とあり、「二風詩」乱風詩五篇「至惑」序に「古有惑王。用姦臣以虐外、寵妖女以乱内。内外用乱、至於崩亡。（古に惑王有り。姦臣を用ゐて以て外を虐し、妖女を寵し

て以て内を乱す。内外用て乱れ、崩亡に至る」とあるように、周の幽王は、號石父を用い褒姒を寵愛し、やがて国を滅ぼしたのであった。ただ、「二風詩論」に「子頌善、上不及義軒湯武、閔惡、又不及始皇哀靈、焉可称極帝王理乱之道。対曰、於戲、吾敢言極、極其中道者也。（子は善を頌するに、上は義軒湯武に及ばず、惡を閔れむに、又始皇哀靈（前漢の哀帝、後漢の靈帝）に及ばざれば、焉んぞ帝王理乱の道を極むと称すべけんや、と。対へて曰はく、於戲、吾敢て極を言ひ、其の中道を極むる者なり）」と述べるように、この何惑王には、例えば張貴妃に迷った陳後主のような惑王達の形象が重ねられているとすることができる。楊承祖氏は、天醜の形象を楊貴妃に重ね、この賦を玄宗諷刺の作として解釈している。^(註9)李園の弟子や楊貴妃のことをも想起させるであろう何惑王の形象が暗に玄宗を指しているとする指摘は頷けるものである。しかしながら、前節で検討した「説楚何荒王賦」が玄宗ではなく煬帝を想起させること、また、何惑王が一直士の諫言によつて悔悟する王として描かれていることをふまえると、「説楚何惑王賦」が果たして玄宗を遠回しに批判することのみを意図した諷刺の作であるか否かについては、なお検討の必要がある。

次に、説楚賦の第三篇「説楚何惛王賦」を取り上げる。

第三節 「説楚何惛王賦」と在野の忠臣の規諫

「説楚何惛王賦」には前節の「説楚何惑王賦」における周の幽王のような明確なモデルはない。「惛」は、道理に暗いことをいい、「昏」に通じる。元結には、

・古者純公以惛愚聞。（古者純公惛愚を以て聞こゆ）

（元謨）

・惛好無窮。（惛好窮まり無し）

（系謨）

・前輩刺史、或有貪猥昏弱。（前輩の刺史、或は貪猥昏弱有り）

（道州刺史庁壁記）

・真昏鄙惡辭也。（真に昏鄙の惡辭なり）

（惡円）

・父子為昏慾所化、化為禽獸。（父子昏慾の化する所と為り、化して禽獸と為る）

（時化）

等の例があり、いずれも事理に明らかなでない意味で用いられている。また「閔荒詩」（卷二）には「奈何昏王心、不覺此怨尤……昏昏誰与儔（奈何ぞ昏王の心、此の怨尤を覺らざる……昏昏誰か与に儔たぐひせん）」と、隋の煬帝を指して「昏王」という例がある。昏王とは、天下を治める道理を知らぬ王をいう。何昏王は治世の根本を知らず、己の欲望を恣にする王として描かれている。

楚国は浮宮と醜の音楽のためにほとんど滅びるところであつたと驚嘆する寵王に対して、君史はさらに甚だしい君王として何昏王について語り始める。何惑王は惑っているものであるから直諫によつて悔悟するが、何昏王はそもそも道理に暗いのであり、直諫によつては悔悟させることができない。したがつて何昏王は、何荒王、何惑王よりもさらに楚国を危殆に瀕せしめた王ということになる。

寵王曰、殆哉、楚国幾為浮宮碁樂所亡。君史曰、幾亡楚国、有甚於是。昔臣何昏王極暴極虐、使臣下得肆姦肆佞、肆兇肆惡。臣何昏王不知如此、亡可待矣。而乃歎曰、於戲、堯実皐帝、禹実隸王。殷周君長、并夫可方。焉有慘然劳苦、而為人主。焉有隘然九州、而裂封諸侯。吾必合外荒夷狄、海内人民、悉奉我為主、欲世世臣臣。此臣何昏王所云。

寵王曰はく、殆きかな、楚国幾ど浮宮・碁樂の亡ぼす所と為る、と。

君史曰はく、幾ど楚国を亡ぼすは、是よりも甚だしき有り。昔臣が何昏王暴を極め虐を極め、臣下をして姦を肆にし佞を肆にし、兇を肆にし惡を肆にするを得しむ。臣が何昏王此のごとくんば、亡ぶこと待つべき

なるを知らずして、乃ち歎じて曰はく、於戯、堯は実に皐帝、禹は実に隸王なり。殷周の君長は、並びに夫れ方ぶべし。焉くんぞ惨然として労苦して、人主と為ること有らんや。焉くんぞ隘然たる九州にして、諸侯を裂封すること有らんや。吾必ず外荒の夷狄、海内の人民を合し、悉く我を奉じて主と為さしめ、世世臣臣たらしめんと欲す、と。此れ臣が何憚王云ふ所なり。

何憚王はまことにすさまじい王であり、為政者としての政の根本を知らず暴虐を極め、臣下にも姦惡を恣にさせて堯や禹も取るに足らぬ存在であるとし、殷周の王を輕侮し、封建を否定して地の果てまで直接自らに隸属させようとした。

又謀変先王之典礼、更万物之名号、列官官於海外、窮天地而徧到。而復思稽極变化、徵驗怪異、尽難得之物、充無窮之意。荒娛厭怠、思計所為、度国土之不大、料財力之不支。乃令人曰、吾欲劳汝人民、休汝人民。汝人民豈知。今悉汝丁壮、婦人繼之、童翁分力、負載而隨。我已老謀、我已名師。人民聽我、当無二思。所举既甚、所資不足、乃署官而賈、鉗孤而鬻。始令國中、絶人謗讟、賛謀者侯、敢諫者族。其令朝行、其俗暮改。有以逃罪、正言不發、万口如封、諂媚相与、千顔一容。

又先王の典礼を変へ、万物の名号を更め、官官を海外に列し、天地を窮めて徧く到らんことを謀る。而して復た変化を稽極し、怪異を徵驗し、得難きの物を尽くして、窮まること無きの意を充たさんことを思ふ。荒娛厭怠して、為す所を思計し、国土の大ならざるを度り、財力の支へざるを料る。乃ち人に令して曰はく、吾汝ら人民を勞し、汝ら人民を休ましめんと欲す。汝ら人民豈に知らんや。今汝ら丁壯を悉くし、婦人之に繼ぎ、童翁は力を分かち、負載して隨へ。我已に老謀あり、我已に名師なり。人民我を聴き、当に二思無かるべし、と。挙ぐる所既に甚だしく、資とする所足らざれば、乃ち官を署して賈り、孤を鉗して鬻がしむ。

始め国中に令するや、人の謗讟を絶ち、謀に賛する者は侯たり、敢て諫むる者は族す。其の令朝に行はれて、其の俗暮れに改まる。以て罪を逃るる有り、正言発せず、万口封^とづるがごとく、諂媚相与にし、千顔一容なり。

また、何愾王は、社会の制度を改め、万物の名称を変え、天地神霊の世界を極め、得がたい宝物を手に入れて、自らの尽きることのない欲望を満たそうとするのである。そして人々を欺き批判の口を塞ぎ、楚国は阿諛追従する者ばかりとなってゆく。

そしてこの篇にも、在野の忠臣が登場し、次のように諫める。

野有忠臣、負符矯謁。偽為齊客、紿而証曰、臣入君王之封域、見君王之風化、踟躕路隅、不覺泣下。或聞哀号、或聞悲呼。訊於閭里、必鰥寡惻孤。或見凶侈、或見驕奢。訊於左右、必公侯之家。

客説未已、臣何愾王曰、然乎、謂何。対曰、噫、君王不知、忠正不植、姦佞駢生、能焞^い姑仁恵、冒蓋聰明、令巧媚得口為矛戟、令姦凶得心為甲兵。此皆明跡甚於鬼神、発機有若雷霆。実畏君王已芻於牢圈、実恐君王已暴夫乾枯。君王如何不是念乎。臣恐楚国化為荒野、臣恐君臣不如犬馬。

臣何愾王於是眇容而慚、撫身而哀。仰為客曰、君幸憐之。得無戒哉。

君王為臣化心、心化身、身化人。嗚呼、通化之道、在制於内外。外之入也、有視聽言聞、内之出也、有性情嗜慾。出入相応、必有禍福。

臣何愾王聞之、讌居化心、諷誦斯言、終身為箴。遂罷已成之事、寢未成之謀。廢所賈之官、復所鬻之孤、敢諫者侯、賛謀者誅。

野に忠臣有り、符を負ひて矯り謁す。偽りて齊の客と為り、紿きて証^{いさ}めて曰はく、臣君王の封域に入り、

君王の風化を見、路隅に踟蹰し、覚え泣下る。或は哀号を聞き、或は悲呼を聞く。閭里に訊ねれば、必ず鰥寡惻孤あり。或は凶侈を見、或は驕奢を見る。左右に訊ぬるに、必ず公侯の家なり、と。

客説くこと未だ已まざるに、臣が何愾王曰はく、然らんか。何をか謂ふ、と。対へて曰はく、噫、君王知らず、忠正植たざれば、姦佞駢び生じ、能く仁恵を焔殆し、聡明を冒蓋し、巧媚をして口を矛戟と為すを得、姦凶をして心を甲兵と為すを得しむるを。此皆明跡鬼神よりも甚だしく、機を發すること雷霆のごとき有り。実に君王已に牢圈に芻かうがごときを畏れ、実に君王已に暴夫乾枯するがごときを恐る。君王如何ぞ是れ念はざるか。臣楚国の化して荒野と為るを恐れ、臣君臣の犬馬に如かざるを恐る、と。

臣が何愾王是に於て容を眄みて慚ぢ、身を撫して哀しむ。仰ぎて客の為に曰はく、君幸に之を憐む。戒むること無きを得んや、と。

君王臣の為に心を化し、心身を化し、身人を化す。嗚呼、通に化するの道は、内外を制するに在り。外の入るや、視聴言聞有り、内の出づるや、性情嗜慾有り。出入相応じ、必ず禍福有らん、と。

臣が何愾王之を聞き、讜居して心を化し、斯の言を諷誦し、終身箴と為す。遂に已に成るの事を罷め、未だ成らざるの謀を寝む。賈る所の官を廃し、鬻ぐ所の孤を復し、敢て諫むる者は侯たり、謀に賛する者は誅す。

忠臣の諫言は全篇の半分近くを占めるものであり、語り手がこの諫言の部分を重視していたことを窺わせる。

「説楚何惑王賦」の直士が直接王に相對して諫める直諫を行ったのに対して、忠臣は齊からの客として何愾王に謁見する。そして婉曲に楚の国で見聞したことから語り始める。楚国では庶民が塗炭の苦しみをなめ、公侯が裕福な生活をしていると言う忠臣に対して、その言わんとする所が理解できない何愾王は、「そうか、君は何を言いたいのだ」と問いかける。

忠臣は忠正の大切さを強調し、自らが心を改めれば、やがては人を教化することになるとし、人は見聞するものと自らの感情や欲望とによって禍福が訪れるのであるから、まず見聞を制し、自らの感情や欲望を制御しなくてはならないと、道理を説いて諫めるのである。

楊承祖氏は、「試看天宝以来、不但宫廷糜耗無節、同時開疆、連年用兵、雖然揚威遠域、能除辺患、但軍費不貲、賦役益重、兼之林甫当道、鉗制衆口、專用酷吏、屢興冤獄、与賦中的指叙、真是若合符節^(注10)」(天宝以来を見ていると、宫廷が際限なく浪費していたばかりではなく、辺境を拓き、毎年戦をし、遠く王朝の威力を示し、辺境地帯の憂慮を除くことができたものの、軍費は莫大であり、賦役は益々重くなっていた。加えて李林甫が権力を握り、衆口を塞ぎ、酷吏を用いてしばしば冤獄を起こしており、賦の中の指摘とぴたり一致している)」と述べて、この賦も玄宗を諷刺した作であると解釈している。

しかしながら、何厩王の形象のうち、封建の否定、万物の名称の変更、売官といったことは、秦の始皇帝、前漢の哀帝、隋の煬帝といった亡国の君主の所為であり、特に莫大な軍費、重い賦役などは「荒娛厭怠」の語が示すように、煬帝の姿を彷彿とさせる。例えば陳子昂は「上軍国利害事」の「人機」(『陳伯玉文集』巻八「人機」)において次のように言う。

近者隋煬帝不知天下有危機、自以為威徳広大、欲建万代之業、動天下之衆、殫万人之力。兵役相仍、転輸不絶、北討胡貊、東伐遼人。於是天下百姓窮困、人不堪命。

近者隋の煬帝天下に危機有るを知らず、自ら以て威徳広大なりと為し、万代の業を建てんと欲し、天下の衆を動かし、万人の力を殫くす。兵役相仍り、転輸絶えず、北のかた胡貊を討ち、東のかた遼人を伐つ。是に於て天下の百姓窮困し、人命に堪へず。

ここに批判されている、自らの威徳が宏大であると思い込み、人民を使役し、夷狄の利を得ようとして派兵する煬帝の姿は、何愾王と重なっている。

「説楚何愾王賦」は、表層的には玄宗という特定の形象ではなく、政治の根幹を知らぬ王の欲望のすさまじさを描く作品として読むことができる。無論、元結の視線は、過去の愾王たちのことを描くことに注がれるのではなく、玄宗を視野に入れていることは明らかであり、当代においても愾王の所為が生じている、あるいは生じる可能性があることを述べているのは言うまでもないが、その叙述が玄宗を諷刺することに収斂してゆくという解釈には疑問が残る。

「説楚何愾王賦」においても、王は忠臣の諫言を容れ、政を改め、忠臣の言葉を終身戒めとしているのであって、この諫言を受け入れるという構造は先の「説楚何惑王賦」と軌を一にする。玄宗を諷刺することが唯一の目的であれば、在野の士が諫言を堂々と展開し、王がそれを受け入れて悔悟するという場面は不要なのではあるまいか。いったいこのプロットはどのような意味を持つのであろうか。

第四節 在野の士と天子

元結の初期作品の中では天宝六載（七四七）の制科に応じた際に奉った皇謨三篇も在野の士が王に語るという構成を持つ。第二章第二節で述べたように、皇謨三篇のうち「元謨」は、人間の社会が太古の純朴さを失って頽廃してゆく過程を、「頽弊以昌之道」（頽廢の過程にありながら繁榮してゆく道）と「頽弊以亡之道」（頽廢しつつ滅びゆく道）という二つの流れで捉えて論を展開する作品である。論述に關係で該當箇所のみ再び掲出する。

「元謨」は、聖人の道を知る純公が天子の諮問に答える形で展開する。

古者純公以昏愚聞。或曰、公知聖人之道。天子聞之、咨而問焉。公謝曰、臣生自山野、順時而老。心如草木、身若鳥獸。主君所問、臣安能知。請說所聞。惟主君聽之。……

古者純公昏愚を以て聞こゆ。或ひと曰はく、公聖人の道を知る、と。天子之を聞き、咨りて問ふ。公謝して曰はく、臣山野より生まれ、時に順ひて老ゆ。心は草木のごとく、身は鳥獸のごとし。主君の問ふ所、臣安くんぞ能く知らんや。請ふ聞く所を説かん、と。惟だ主君之を聴け。……

純公から「類弊以昌之道」と「類弊以亡之道」を聞いた天子は、自らは繁榮の道を称え、それを戒めとしたいと、末尾に次のように言う。

其君歎曰、嗚呼、真聖之風、没無象耶。明順之道、誰為嗣耶。嚴正之源、開已竭耶。殺淫之流、日深大耶。吾其頌昌人之道、為戒心之宝。

其の君歎じて曰はく、嗚呼、真聖の風は、没して象無きか。明順の道は、誰か嗣と為らんや。嚴正の源は、開きて已に竭くるか。殺淫の流れは、日に深く大いなるか。吾其れ昌人の道を頌して、心を戒むるの宝と為さん、と。

「演謨」では、純公から「類弊以昌之道」と「類弊以亡之道」について聞いた天子が、楽しまず沈思して「類弊以昌之道」についてさらに説明するように請い、純公がそれに答える形で展開する。

天子聞之、惕然不娛、冥然深思。乃曰、昌人之道、豈無故歟。公其演之。其故何如。公曰、……

天子之を聞き、惕然として娛まず、冥然として深思す。乃ち曰はく、昌人の道、豈に故無からんや。公其

れ之を演ぜよ。其の故は何如と。公曰はく、……

さらに「系謨」では、天子は慨嘆しつつ次のように述べる。

天子聞之惘然。思而歎曰、太皇之道、於今已亡。衰季之徳、吾不忍当。将学殺而不淫、罰而不重、戒其虐惑、制其昏縦。行之之道、惟公教之。

天子之を聞きて惘然たり。思ひて歎じて曰はく、太皇の道は、今に於て已に亡ぶ。衰季の徳は、吾当たるに忍びず。将に殺して淫ならず、罰して重からず、其の虐惑を戒め、其の昏縦を制するを学ばんとす。之を行ふの道、惟だ公之を教へよ、と。

天子は、「戒其虐惑、制其昏縦（其の虐惑を戒しめ、其の昏縦を制する）」ことを学びたいと純公に請う。「虐惑」は何惑王の、「昏縦」は何惛王の特性である。天子は、何惑王、何惛王と対極の為政者のあり方を問うのであつて、純公は、天子の問いに答えて、「道徳」、「風教」、「衣服」、「飲食」、「器用」、「宮室」、「苑囿」、「賦役」、「刑法」、「兵甲」、「畋獵」、「声楽」、「嬪嬙」、「任用」、「思慮」それぞれについていかにあるべきかを説くのである。

最後に天子は、謝して次のように言う。

天子謝曰、公之所述、真王者之謨。必当篆刻、置之座隅。

天子謝して曰はく、公の述ぶる所は、真に王者の謨なり。必ず当に篆刻して、之を座隅に置くべし、と。

純公の皇謨三篇は、天子に嘉納されたのである。

皇謨三篇の純公の姿には、在野の士である元結自らが投影されており、純公が天子に対して聖人の道を説き、天子が純公の言を座隅に置こうと感嘆しているということは、元結が天子と自らの邂逅を皇謨三篇に託していることを意味している。天子との関係においてこのような邂逅の構造を構想していた元結が、説楚賦三篇において玄宗を諷刺することのみを意図していたとは考えにくい。

また、皇謨三篇の天子は、惑虐と昏縦を制限する術を純公に諮問している。「頽弊以昌」の道を進むにはいかすべきか、その大いなるはかりごとを示すのが三篇の趣旨なのであって、「系謨」では一五の具体的な事柄に關してそれぞれ基本的な指針を示している。一方、「説楚何惑王賦」「説楚何昏王賦」の二篇もまた惑王と昏王に對して、それぞれ惑虐と昏縦を制するよう忠告し戒めるものであった。

このような構造に着目すると、説楚賦三篇の主たる制作の意図は、玄宗を諷刺することにあるのではなく、玄宗を「頽弊以昌」の道を進むべき君主と位置づけ、正しい道を示すことにあるということができらるだろう。

「説楚何昏王賦」の末尾は、三篇の結びとして、君史の言が終わった後、客人が寵王の寿を祈念し、君史の言葉を鑑とすることを願って終わっている。

君史言已。王客捧酒、為寵王寿。起而賛曰、君史説楚、似欲戒梁。敢願君王、示鑑不忘。

君史言已む。王の客酒を捧じ、寵王の寿を為す。起ちて賛して曰はく、君史楚を説くは、梁を戒めんと欲するに似たり。敢て願はくは君王、鑑を示して忘れざらんことを、と。

説楚賦三篇の意図を明確に述べるものである。

おわりに

説楚賦三篇は、「説楚何荒王賦」が隋の煬帝を形象化した作品であることからすると、三篇すべてが直接玄宗を想起させるように書かれているという解釈は不十分である。

何惑王と何惛王は、政の本質を忘れ、惛虐を極めた王達の典型として描かれ、皇謨三篇に言う、頽廢して滅亡する道を歩んだ者の姿として提示されている。元結は、唐王朝が頽廢して繁栄する道にあるものの、既に滅亡の危機を胚胎していると捉えていた。したがって、為政者は政の根幹を忘れて逸楽に耽り、己の欲望のままにふるまうことを厳に慎まねばならなかった。説楚賦三篇は国家を衰亡に至らしめた過去の王達の典型をあげて、そのことを訴えたものであって、そのうちの玄宗を彷彿とさせる表現は、決してその非を暴き立て指弾するということに主意があるのではない。

両賦が玄宗を徹底的に指弾し諷刺するのであれば、何荒王のごとく悔悟しなかった王として描くほうがより効果的であつただろう。ところがこの二人の王は一介の在野の「直士」「忠臣」の諫言を聞き入れて悔悟する王として描かれているのである。

元結は同時期の皇謨三篇においても在野の純公が天子に説くという設定を用いて、論を展開している。第一編第三章で明らかにしたように、「引極三首」「演興四首」に王朝への著しい求心的志向が窺われたことを考えると、この在野の「直士」「忠臣」、そして野に嘆いた「楚の正士」に仮託されているのは、やはり商余山中にあった在野の元結自らの姿であることができるであろう。王が在野の士の諫言を聞き入れ悔悟したことを描くことによって、元結は為政者と自身の邂逅を作品の中において実現させている。説楚賦三篇にも王朝への強い求心性が表出しているのである。

説楚賦三篇は、王朝への強い求心性から発し、為政者と邂逅して諫め、その諫言が容れられることを託した作

であると解釈できる。この構造は、初期の元結における諷諭の作品の特色なのである。

注

- (1) 孫望著『元次山集』（中華書局、一九六〇年）一三〇―一四頁。
- (2) 楊承祖著『元結研究』（国立編訳館、二〇〇二年）六五―六六頁。
- (3) 楊承祖氏、前掲書。五九頁。
- (4) 楊承祖氏、前掲著。五九頁。
- (5) 隋は、煬帝が己の欲望を恣にし、運河の開鑿と出兵による人心の離反、国力の疲弊を招来して滅亡した王朝とされ、初唐の士人にとって隋王朝は殷鑑であった。例えば魏徵（五八〇―六四三）は、「論時政疏」（『全唐文』卷一三九）のなかで時政の得失を論じ、「殷鑑不遠、可得而言。（殷鑑遠からず、得て言ふべし）」として、次のように述べている。

昔在有隋、統一寰宇、甲兵強盛、三十余年、風行万里、威動殊俗、一旦挙而棄之、尽為他人之有。彼煬帝豈惡天下之治安、不欲社稷之長久、故行桀虐、以就滅亡哉。蓋恃其富強、不虞後患、驅天下以從欲、罄万物以自奉、採域中之子女、求遠方之奇異、宮宇是飾、台榭是崇、徭役無時、干戈不戢。外示威重、内多隘忌、讒邪者必受其福、忠正者莫保其生、上下相蒙、君臣道隔。人不堪命、率土分析、遂以四海之尊、殞於匹夫之手、子孫殄滅、為天下之笑。深可痛矣。

昔在有隋、寰宇を統一し、甲兵は強盛なること、三十余年、風は万里に行はれ、威は殊俗を動かすも、一旦挙げて之を棄て、尽く他人の有と為る。彼の煬帝豈に天下の治安を惡みて、社稷の長久を欲せず、故に桀虐を行ひて、以て滅亡に就かんや。蓋し其の富強を恃み、後患を虞らず、天下を驅りて以て欲を

従にし、万物を罄くして以て自ら奉じ、域中の子女を採り、遠方の奇異を求めて、宮宇を是れ飾り、台榭を是れ崇くし、徭役に時無く、干戈戢まらず。外は威重を示し、内は隘忌多く、讒邪の者は必ず其の福を受け、忠正の者は其の生を保つこと莫く、上下相蒙き、君臣道隔たる。人は命に堪へず、率土分析して、遂に四海の尊きを以て、匹夫の手に殞し、子孫殄滅して、天下の笑ひと為る。深く痛むべきかな。

また陳子昂（六五九〜七〇〇）は「諫政理書」（『陳伯玉文集』卷九）において、次のように論じている。

近有隋氏、亦不克終厥初。隋高帝之有天下也、以六合為家、方将对越天人、伝之万代。至煬帝承平、自以貴為天子、富有四海。欲窮宇宙之觀、極遊宴之樂、以為人主之急務也。于是乃鑿御渠、決黄河、自伊洛之間而属之揚州。生人之力既弊、天地之藏又洩。煬帝方忻然以為得計、将後宮綵女数百千人、遂泛竜舟、遊三江五湖之間。当其得意也、視天下如脱屣爾。其後百姓騷弊、災変数興、吏人貪暴、其政日乱、陰陽感怒、彗孛以出。煬帝不悟、自以為天下安於泰山。方率百万之師、而有事于遼東、当時山東、父子不得相保也。天厭暴政、人懷乱亡。故遼東之役未帰、而中国之難已起、身死逆手、宗廟以隳。

近有隋氏も、亦た厥の初めを終ふるを克くせず。隋の高帝の天下を有つや、六合を以て家と為し、方に将に天人に対越し、之を万代に伝へんとす。煬帝承平するに至り、自ら以へらく貴くして天子と為り、富四海を有つと。宇宙の觀を窮め、遊宴の楽しみを極めんと欲して、以て人主の急務と為すなり。是に於て乃ち御渠を鑿ち、黄河を決し、伊洛の間よりして之を揚州に属ぐ。生人の力は既に弊し、天地の藏も又洩す。煬帝方に忻然として以て計を得たりと為し、後宮の綵女数百千人を将て、遂に竜舟を泛べて、三江五湖の間に遊ぶ。其の意を得るに当たりては、天下を視ること屢を脱するがごときのみ。其の後百姓騷弊し、災変数しば興り、吏人貪暴にして、其の政日びに乱れ、陰陽感怒し彗孛以て出づ。煬帝悟らず、自ら以為へらく天下泰山よりも安しと。方に百万の師を率ゐて遼東に事有り、当時山東、父子相保つを得ざるなり。天は暴政に厭き、人は乱亡を懷く。故に遼東の役未だ帰らずして、中国の難已に起

こり、身は逆手に死して、宗廟は以て隳つ。

この「諫政理書」では古代より煬帝にいたるまでの帝王を論じ、政のあり方を明らかにしている。煬帝については、彼が世界を自らのものとし、遊楽を極めることを自らの急務としていたと言う。揚州への運河を開鑿して天地の姿を大きく変え、人々が疲弊するのにも顧みず、数百人から千人もの女官を引き連れて竜舟を浮かべ、江都に行幸したこと、遼東に出兵したことを挙げ、国力が疲弊し、人心が乖離して滅亡に至ったことを指摘している。

(6) 天宝五載(七四六)、隋の煬帝の開鑿した運河に浮かび、水害に遭った人々が歌う隋代の歌五編を得て制作したとされる作品である。運河開削と常軌を逸した行幸とを取り上げ、煬帝が人々の歌謡のなかに今も残る深い怨嗟に気づくことなく、政治を顧みずに国を滅ぼしたことを詠じている。詳しくは次の第六章で扱う。

(7) 「諂」字について底本は「諂」に作り、「明本原作諂。此從全唐詩。」と注するが、ここでは明本に従い、「疑う」「違う」の意とする。

(8) 「甚妖怪也何、故不説」の句読について、「甚妖怪也。何故不説」とするのが自然であるが、後文に「臣所不欲説者、…」とあることから、底本の句読に従った。しかしこの箇所は錯簡があるとして「有之。甚妖怪也。寵王曰、何故不説。当必為吾説之。」とするか、もしくは「何」を衍字として「有之。甚妖怪也。故不説。寵王曰、当必為吾説之。」とすべきところである。

(9) 楊承祖氏、前掲書。六四頁。楊氏は、何惑王と天醜の關係が玄宗と楊貴妃の關係に重なりと指摘し、「就此諸証、断定「説楚何惑王賦」專刺玄宗之寵溺楊妃、応属灼然可信。(これらの証拠からすると、「説楚何惑王賦」は専ら玄宗が楊貴妃を溺愛しているのを諷刺したものであると断定しても、必ずや首肯できるであろう)」と述べる。

(10) 楊承祖氏、前掲書。六五頁。

第六章 規諷と邂逅（二）——「系樂府十二首」

はじめに

諷諭の表現を理論的に支えているのは、詩の六義に基づいた風雅（風雅比興）の文学観である。^{（注1）}唐代においては、陳子昂（六五九～七〇〇）、李白、杜甫、元結らが、いずれも風雅に言及しており、初唐から盛唐にかけての風雅の文学観の流れは、詩人が自らの政治的社会的な意識を表出するものとして文学を考えることから、それを自らの政治的社会的な発言の手段とすることへの過程として跡づけることができる。

初唐の陳子昂は、「風雅不作（風雅作らず）」（『修竹篇序』）と唱え、齊梁以来の修辞技巧と形式美追求の潮流に対して、社会的政治的な意識を述べる風雅の文学を提唱した。彼の代表作「感遇三十八首」（『陳伯玉文集』卷一）はその実践であり、武后朝の官吏として過ごすなかで生じた深い苦悩から生み出されたものである。盛唐の李白は明確に陳子昂の文学観を受け継ぎ、「古風五十九首」（『分類補註李太白詩』卷二）を著した。その「大雅久不作（大雅久しく作らず）」（『古風五十九首』其一）という認識は、陳子昂のそれと軌を一にする。「古風五十九首」をはじめ、樂府題を用いた李白の作品には、現実の社会、政治に対する諷諭を展開しようとする意識が、陳子昂よりも顕著に窺われる。

杜甫は、六朝や初唐の詩人達を一概に否定するのではなく、その優れたところは自らの骨肉としてゆかなければならないとする認識を強く持っていた。それとともに「別裁偽体親風雅（別に偽体を裁して風雅に親しむ）」（『戲為六絶句』其六、『杜詩詳注』卷一一）と詠うように、風雅の文学を重視し、「兵車行」（『杜詩詳注』卷二）、三吏三別をはじめとする諷諭の作品を残している。

元結もやはり「風雅不興、幾及千歳。（風雅興らざること、幾ど千歳に及ばんとす）」（「篋中集序」卷七）と、風雅の文学を提唱した。彼は、詩を、王朝に対する戒めや忠告の手段として明確に位置づけており、本章で取り上げる「系楽府十二首」（卷二）は、『詩経』以来の風雅比興の文学観を歌謡という形で体现したものである。こうした楽府が成立するには、歌謡という様式への信頼が不可避であろう。また、元結は特に歎怨の情に注目し、歎怨の情を極めた楽府が採取され、天子に嘉納されることを願っており、「系楽府十二首」にも王朝への求心的志向が表出していると考えることができそうである。

「系楽府十二首」は、白居易らの新楽府の先蹤として位置づけられている。^(注2)本章では、元結における諷諭の表現の特色を踏まえ、彼の楽府に対する認識と表現への志向とを考察し、「系楽府十二首」がなぜ成立したのかを明らかにし、その特色を説明する。

第一節 歌謡への確信

第一章で述べたように、元結は、開元二三年（七三五）、一七歳で魯山県の令であった族兄元徳秀に師事し、彼から強い影響を受けるようになった。あたかもこの年の正月、洛陽にあった玄宗は、藉田を耕し、祝宴を開き、近隣の刺史・県令を召集して各地の声楽を競わせた。そのおり、元徳秀が数人の楽人に自作の「于蔦^{うい}」を歌わせたところ、懷州刺史が更迭されるということがあった。^(注3)『資治通鑑』卷二一四には次のように記されている。

時命三百里内刺史県令、各帥所部音楽集於楼下、各較勝負。懷州刺史以車載樂工数百、皆衣文繡、服箱之牛皆為虎豹犀象之狀。魯山令元徳秀惟遣樂工数人、連袂歌于蔦。上曰、懷州之人、其塗炭乎。立以刺史為散官。徳秀性介潔質樸、士大夫皆服其高。

時に三百里内の刺史県令に命じ、各所部の音楽を帥^{きそ}ゐて楼下に集まり、各勝負を較^{きそ}はしむ。懷州刺史車を以て樂工数百を載せ、皆文繡を衣、服箱の牛皆虎豹犀象の状を為す。魯山令元徳秀惟だ樂工数人をして、袂を連ねて于蔦を歌はしむ。上曰はく、懷州の人、其れ塗炭なるか、と。立ちどころに刺史を以て散官と為す。徳秀は性介潔質樸にして、士大夫皆其の高きに服す。

洛陽、五鳳楼下で行われた祝宴における余興として企図されたであろうこの歌謡の催しには、宮中のものではなく、地方の樂曲が求められた。その意図については「各較勝負（各勝負を較はしむ）」と記されているが、『明皇雜錄』卷下は、「或謂令較其勝負而賞罰焉。（或ひと謂へらく、其の勝負を較はしめて賞罰せんとす、と）」と、若干異なる記述をしている。玄宗が賞罰を意図したのか、人々がどのように考えたのかは定めがたい。しかし、いずれにしても集められた各地の県令・刺史によつて披露された樂曲は、懷州刺史の華美な樂団の描写が象徴的に物語るように、それぞれに贅を尽くしたものであつたろうと推測される。ところが魯山県令元徳秀の場合は、樂団の規模においても、歌曲の内容においても、それらの対極にある異質なものであつた。

元徳秀の制作した「于蔦」はすでに散逸しており、その内容は不明であるが、「蔦」が懷州の古名^(注4)であること、また玄宗の「懷州之人、其塗炭乎。（懷州の人、其れ塗炭なるか）」という言葉からすると、この作品は懷州の人々の苦しみを歌つたものであつたことが推測される。

この歌謡「于蔦」の制作は風雅比興の文学觀に基づいていたことが考えられる。『毛詩』大序には次のようにある。

故詩有六義焉。一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。……是以一國之事繫一人之本。謂之風。言天下之事、形四方之風。謂之雅。雅者正也。言王政之所由廢興也。政有小大、故有小雅焉、有大雅焉。

故に詩に六義有り。一に曰はく風、二に曰はく賦、三に曰はく比、四に曰はく興、五に曰はく雅、六に曰はく頌。……是を以て一国の事を一人の本に繋ぐ。之を風と謂ふ。天下の事を言ひて、四方の風を形す。之を雅と謂ふ。雅とは正なり。王政の由りて廃興する所を言ふなり。政に小大有り、故に小雅有り、大雅有り。

風は、諸国の政治、社会に対する詩人の意識を述べるものであり、雅は、天下のあり方について、詩人の意識をもとに述べ、天下の政治の興廃する所以を示すものである。「于蔦」は、正しく「一国之事繫一人之本（一国の事を一人の本に繋ぐ）」もの、すなわち風であった。

この「于蔦」の事件は、元徳秀に師事していた元結にも影響を及ぼしたことであろう。それは歌謡が社会的な機能を持つことに対する確信であり、また歌謡が社会的に機能しうる時代に生きているという認識であったに相違ない。そのことは、次に挙げる彼の初期の作品からも窺うことができる。

天宝五載（七四六）、元結は、隋代に開かれた運河を利用して淮陰に至った。そのおり、洪水による被害を被った淮陰の地で、偶然に隋代の怨みの歌謡を耳にし、荒んだ天子であった煬帝がその民歌に込められた怨恨を悟らず、終に滅亡したことを詠じた「閔荒詩」（卷二）を制作した。^{（注5）}すでに第五章において言及したが、いま全詩を掲げる。

煬皇嗣君位 煬皇 君位を嗣ぐや

隋徳滋昏幽 隋徳 滋昏幽たり

日作及身禍 日びに身に及ぶの禍を作し

以為長世謀 以て長世の謀と為す

05 居常恥前王 居常 前王に恥ぢ

	不 思 天 子 遊	天 子 の 遊 び を 思 は ず
	意 欲 出 明 堂	明 堂 を 出 で
	便 登 浮 海 舟	便 ち 海 に 浮 か ぶ 舟 に 登 ら ん と 意 欲 す
	令 行 山 川 改	令 行 は れ て 山 川 改 ま り
10	功 与 玄 造 侔	功 は 玄 造 と 侔 し
	河 淮 可 支 合	河 淮 支 合 す べ く
	峰 嶮 生 回 溝	峰 嶮 回 溝 を 生 ず
	封 隕 下 沢 中	下 沢 の 中 に 封 隕 し
	作 山 防 逸 流	山 を 作 り て 逸 流 を 防 ぐ
15	舡 艚 状 竜 鷁	舡 艚 は 竜 鷁 に 状 り
	若 負 宮 闕 浮	宮 闕 を 負 ひ て 浮 く が ご と し
	荒 娛 未 央 極	荒 娛 未 だ 央 極 せ ず
	始 到 滄 海 頭	始 め て 滄 海 の 頭 に 到 る
	忽 見 海 門 山	忽 ち 海 門 の 山 を 見 れ ば
20	思 作 望 海 樓	海 を 望 む 樓 を 作 ら ん と 思 ふ
	不 知 新 都 城	知 ら ず 新 都 城 の
	已 為 征 戰 丘	已 に 征 戰 の 丘 と 為 る を
	当 時 有 遺 歌	当 時 遺 歌 有 り
	歌 曲 太 冤 愁	歌 曲 太 だ 冤 愁 す
25	四 海 非 天 獄	四 海 天 獄 に 非 ざ る に

何為非天囚 何為れぞ天囚を非とする

天囚正凶忍 天囚 正に凶忍

為我万姓讎 我万姓の讎と為ればなり

人将引天鈇 人将に天鈇を引かんとす

30 人将持天鍔 人将に天鍔を持たんとす

所欲充其心 欲する所は其の心を充たし

相与絶悲憂 相与に悲憂を絶たんとすることなり

自得隋人歌 隋人の歌を得てより

每為隋君羞 毎に隋君の為に羞づ

35 欲歌当陽春 歌はんと欲して陽春に当たるに

似覺天下秋 天下の秋を覺ゆるに似たり

更歌曲未終 更に歌ひて曲未だ終はらざるに

如有怨氣浮 怨氣の浮かぶ有るがごとし

奈何昏王心 奈何ぞ昏王の心

40 不覺此怨尤 此の怨尤を覺らざる

遂令一夫唱 遂に一夫をして唱はしめ

四海忻提矛 四海をして忻びて矛を提らしむ

吾聞古賢君 吾聞く 古の賢君

其道常静柔 其の道常に静柔たり

45 慈惠恐不足 慈惠 足らざるを恐れ

端和忘所求 端和 求むる所を忘ると

嗟嗟有隋氏 嗟嗟 有隋氏

惛惛誰与儔 惛惛 誰か与に儔せん

詩は、先ず、煬帝が位に即くや隋の国運が急速に衰えたことを提示し、「日々に身に及ぶ災いをなしながら、それを永久の治世の謀であるとして前王に従わず、天子の遊びを思わない。（日作及身禍、以為長世謀。居常恥前王、不思天子遊）」と歌い起こす。続いて第二〇句までを費やし、煬帝の身に及ぶ禍のうちの顕著な例、運河の開削と江南への行幸とを具体的に述べてゆく。この部分の描写は多くの誇張を含み、煬帝に対する批判の感情をあらわにしている。第二五句から第三〇句の「世界は監獄ではないはずなのに、なぜ天子をそしめるのか。天子は凶悪残忍で、われわれ万民のあだであるから。人々は天の大鎌を手にとろうとし、人々は天の刀や斧を握ろうとする（四海非天獄、何為非天囚。天囚正凶忍、為我万姓讎。人将引天鉞、人将持天鋤）」は、隋人の遺歌である。「天囚」は、徳の衰えた周の天子をいう語だが、ここでは煬帝を指す。「天鉞を引く」「天鋤を持つ」は、凄惨なイメージを伴う語句である。この歌謡は、隋の滅亡からすでに一〇〇年以上を経たにもかかわらず、うらかな春に歌っても、身の引き締まるような秋気の厳しさを感じるごとく、隋代の人々の怨みが伝わってくるのであった（第三五句〜第三八句）。なぜ煬帝はこの歌に示されている人々の凄まじい怨嗟を理解しなかったのか。それは、第四三句から第四六句に示されるように、「静柔」（安静で柔和）「慈恵」「端和」（きちんとしていて温和）という賢君の資質を欠いていたからであり、それが「日作及身禍、以為長世謀。（日びに身に及ぶの禍を作し、以て長世の謀と為す）」という状態をもたらし、やがては隋王朝の滅亡を招来したと、語り手は言うのである。

初期の元結における理想的な為政者のイメージは、*天寶六載（七四七）*に書かれた「*二風詩*」（*卷一*）及び

「二風詩論」（卷一）に窺うことができる。そのうち「二風詩論」に、「夫至理之道、先之以仁明、故頌帝堯為仁帝。安之以慈順、故頌帝舜為慈帝。成之以勞儉、故頌夏禹為勞王。修之以敬慎、故頌殷宗為正王。守之以清一、故頌周成為理王。此理風也。（夫れ至理の道は、之に先んずるに仁明を以てす、故に帝堯を頌して仁帝と為す。之を安んずるに慈順を以てす、故に帝舜を頌して慈帝と為す。之を成すに勞儉を以てす、故に夏禹を頌して勞王と為す。之を修むるに敬慎を以てす、故に殷宗を頌して正王と為す。之を守るに清一を以てす、故に周成を頌して理王と為す。此れ理風なり）」とあるように、理想的な為政者のイメージは、「仁明」「慈順」「勞儉」「敬慎」「清一」という価値を有する堯・舜・禹・殷の湯王・周の成王に集約されている。さらに「二風詩」の「治風詩、至仁」（卷一）では「猗皇至聖、至惠至仁（猗皇至聖にして、至惠至仁なり）」とうたい、「治風詩、至正」序（卷一）では、「古有正王。能正慎恭和以安上下。（古に正王有り。能く正慎恭和にして以て上下を安んず）」と述べている。「閔荒詩」中の「端和」は、「至正」序の「正慎恭和」に相当する。こうした古代の聖王に付与された価値観は、そのままこの「閔荒詩」の「古賢君」のそれと重なる。

広徳二年（七六四）、元結の文学の代表作とされる「春陵行」（卷三）が制作された。その序に「吾将守官、静以安人、待罪而已。（吾将に官を守り、静以て人を安んじ、罪を待たんとするのみ）」とあり、詩中に、道州の人々の言葉として、「所願見王官、撫養以惠慈（願ふ所は王官の、撫養するに惠慈を以てするを見んことなり）」とあるところからも、元結は、「静」や「惠慈」を為政者にとって必須のものであるとしていたことがわかる。

元結は、天子が「静柔」「慈惠」「端和」を欠いたならば、国家の衰亡は当代においても起こりうることを言外に述べようとしており、「閔荒詩」序にはその意図が明確に示されている。

天寶丙戌中、元子浮隋河、至淮陰間。其年、水壞河防、得隋人冤歌五篇。考其歌義、似冤怨時主。故広其意、

采其歌、為閔荒詩一篇。其余載於異錄。

天寶丙戌中、元子隋河に浮かび、淮陰の間に至る。其の年、水河防を壊するに、隋人の冤歌五篇を得たり。其の歌義を考ふるに、時主を冤怨するに似たり。故に其の意を広め、其の歌を采り、閔荒の詩一篇を為る。其の余は異録に載す。

隋人の遺歌は洪水に遭った人々が「時主」である煬帝を怨嗟したものであった。しかし、「広其意（其の意を広む）」と言う時、その言葉は、直接には煬帝を対象としつつも、元結の生きた時代に向けられることとなる。ここに諷諭の表現が成立しているのである。

歌謡の持つ諷諭の機能に対する認識という点からすると、この「閔荒詩」において注目されるのは、「煬帝は、この歌謡に込められている凄まじい怨嗟をなぜ悟らなかったのか（奈何昏王心、不覺此怨尤）」という第三九、四〇句の二句である。元結の視線は、歌謡が持つ怨嗟のすさまじさを見ている。歌謡に込められた人々の怨嗟を悟っていれば煬帝は身を滅ぼすことはなかった、と考える元結にとって、隋人の歌謡は、その怨嗟の強さ故に為政者の心に訴える力を持つものとして位置づけられていたのである。

元結は、天寶六載の制科に際して「二風詩」を奉っていた。この十編は観念的な美刺の作であるが、当時、彼が歌謡に対して強い関心を懷いていたことを窺わせる。歌謡の機能に対する確信がなかったならば、「閔荒詩」や「二風詩」などは制作されなかったであろう。

第二節 「系樂府十二首」

「系樂府十二首」（卷二）は、「思太古」「隴上嘆」「頌東夷」「賤士吟」「歛乃曲」「貧婦詞」「去鄉悲」

「寿翁興」「農臣怨」「謝大龜」「古遺嘆」「下客謠」の一二首よりなる連作であり、本章の冒頭で述べたように盛唐期における新樂府の先蹤として評価されている。また、陶文鵬氏は、「系樂府十二首」が、国家に対する憂慮と人民の苦難への同情を表明したものであり、支配者階級への譴責、また支配者階級内部の状況の暴露と腐敗の糾弾が展開されているとし、深刻な体験と思索、そして詩によって人々のために立言し嘆願するという尊ぶべき精神が明確に示されている、と指摘している。さらには、杜甫の「三吏」「三別」の成立に影響を与えた可能性もすでに示唆されている^(注8)。

「系樂府十二首」には指摘されているような支配者階級に対する譴責や糾弾が表層の構造としてうかがわれることは確かである。しかし、「系樂府十二首」は、商余山習静期における元結の表現の構造において見るとき、王朝への求心性が吐露された諷諭の作として理解することが可能なものではあるまいか。本章では、「系樂府十二首」における表現の構造を確認し、改めて初期詩編としての解釈を考究する。

なお、「系樂府十二首」の制作年は、その序中に「天宝辛未中」とあるものの、天宝年間に「辛未」の年が無いことから、「辛未」を「辛卯」の誤りとし、天宝一〇載（七五一）とされることが多い。これに対して楊承祖氏は、「系樂府十二首」が朝廷や政治の崩壊に言及しておらず、民間の困苦は反映されてはいるものの、決して激しいものではないことを挙げ、「辛未」を「癸未」の誤りであろうとし、天宝二年（七四三）に編年している。しかしながら、後に述べるように、「系樂府十二首」には天宝六載の制科に応じた際の「遺賢」に対する思いが語られていると読める作品が含まれており、ここではやはり通説に従い、天宝一〇載の作として位置づけ、「演興四首」（卷一）が書かれたのとはほぼ同時期、商余山にあった時期に作られたものとして考察してゆくこととする。

第三節 歎怨への着目

元結は「閑荒詩」の第三五句から第三八句で、「欲歌当陽春、似覺天下秋。更歌曲未終、如有怨氣浮（歌はんと欲し陽春に当たるに、天下の秋を覺ゆるに似たり。更に歌ひて曲未だ終はらざるに、怨氣の浮かぶ有るがごとし）」と詠じている。これは、隋人の歌謡に表れた怨嗟に対する驚きを詠じた句である。元結は感情の激しい流露に着目しているようである。「系樂府十二首」序（卷二）においては次のように言う。

天宝辛未中、元子将前世嘗可称歎者、為詩十二篇、為引其義以名之、總命曰系樂府。古人詠歌不尽其情声者、化金石以尽之。其歎怨甚耶戲。尽歎怨之声者、可上感於上、下化於下。故元子系之。

天宝辛未中、元子前世の嘗に称歎すべき者を将て、詩十二篇を為り、為に其の義を引きて以て之に名づけ、総て命づけて系樂府と曰ふ。古人は詠歌して其の情声を尽くさずんば、金石に化して以て之を尽くす。其の歎怨甚だしきかな。歎怨の声を尽くす者は、以て上は上を感ぜしめ、下は下を化すべし。故に元子之を系ぐ。

この序の背後にあるのも『毛詩』大序に示された文学観である。本章においても既に一部を引用したが、論述の関係で再び掲出する。

詩者志之所之也。在心為志、發言為詩。情動於中、而形於言。言之不足、故嗟歎之。嗟歎之不足、故永歌之。永歌之不足、不知手之舞之、足之蹈之也。情發於声、声成文、謂之音。治世之音、安以樂。其政和。乱世之音、怨以怒。其政乖。亡国之音、哀以思。其民困。故正得失、動天地、感鬼神、莫近於詩。先王以是經夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗。故詩有六義焉。……上以風化下、下以風刺上。主文而譎諫、言之者無罪、聞之

者足以戒。故曰風。……

詩は志の之く所なり。心に在るを志と為し、言に発するを詩と為す。情中に動きて、言に形る。之を言ひて足らず、故に之を嗟歎す。之を嗟歎して足らず、故に之を永歌す。之を永歌して足らず、手の之を舞ひ、足の之を蹈むを知らざるなり。情は声に発し、声は文を成す、之を音と謂ふ。治世の音は、安んじて以て樂しむ。其の政和す。乱世の音は、怨み以て怒る。其の政乖く。亡国の音は、哀しみ以て思ふ。其の民困しむ。故に得失を正し、天地を動かし、鬼神を感じしむるは、詩よりも近きは莫し。先王是を以て夫婦を経し、孝敬を成し、人倫を厚くし、教化を美にし、風俗を移す。故に詩に六義有り。……上は風を以て下を化し、下は風を以て上を刺る。文を主として諷諫し、之を言ふ者罪無く、之を聞く者以て戒しむるに足る。故に風と曰ふ。……

孔穎達が好悪喜怒哀楽の「六志」について、「此六志、礼記謂之六情。在己為情、情動為志。情志一也。（此の六志は、礼記之を六情と謂ふ。己に在るを情と為し、情動くを志と為す。情と志とは一なり）」（『春秋左伝正義』卷五一）と述べるように、志と情との関係は同一とも解釈され、詩は志と情、すなわち心中のさまざまな感懐や情念を表出するものと認識されていた。「詩は人間の感情の純粹な発露」^(注10)等と解釈される所以である。

この「系樂府十二首」の序においては、殊に歎びと哀怨の情の強い流露に着目し、詩は歎びと哀怨の情をその極限において流露するものであつてはじめて、為政者を感化し人民を教化することができる、すなわち歌謡の持つ社会的機能を果たすことができるのである。

詩文における歎怨の情の表出に関する言及は、例えば唐・駱賓王の「上吏部裴侍郎書」（『駱賓王文集』卷七）に見える。駱賓王は「夫怨於中者、哀声可以応木石、感於情者、至性可以通神明。（夫れ中に怨む者は、哀声以て木石に応ずべく、情に感ずる者は、至性以て神明に通ずべし）」^(注11)と言い、哀怨の情の表出に着目している。

また王昌齡の『詩格』は「娛樂哀怨、皆張于意而处于身、然後馳思、深得其情。（娛樂哀怨、皆意に張りて身に処り、然る後思ひを馳せ、深く其の情を得）」と、歡樂や哀怨の情の大切さを説いている。しかし「歡怨の声を尽くす」のように歡びや哀怨の極限の表出を言う者は無いようである。

元結の作品には、「引極三首」（卷一）「演興四首」（卷一）を初めとして歡びや哀怨を極めた表現が見られる。また、歡びや哀怨の情を尽くすことへの着目は、撰詩の営みにもはつきりと窺うことができる。彼の撰による『篋中集』は、不遇な詩人達の詩二四首を集めた小集であるが、採られている詩の多くには、哀怨の感情が痛々しいまでに流露している。今、王季友「寄韋子春」詩を挙げる。

出山秋雲曙 山を出づれば秋雲曙け

山木已再春 山木 已に再び春なり

食我山中藥 我が山中の藥を食ふも

不憶山中人 山中の人を憶はざらん

05 山中誰余密 山中 誰か余と密なる

白髮惟相親 白髮 惟だ相親しむ

雀鼠昼夜無 雀鼠 昼夜無し

知我廚廩貧 我が廚廩の貧しきを知ればなり

依依北舍松 依依たり 北舍の松

10 不厭吾南隣 吾が南隣するを厭はず

有情尽棄捐 有情 尽く棄捐し

土石為同身 土石を同身と為す

これとほとんど同一の作品が殷璠撰『河岳英靈集』卷上に「山中贈秘書山兄」詩として採られている。

出山秘芸署 山を出でて秘芸の署にあり

山木已再春 山木 已に再び春なり

食我山中藥 我が山中の藥を食ふも

不憶山中人 山中の人を憶はざらん

05 山中誰余密 山中 誰か余と密なる

白髮日相親 白髮 日び相親しむ

雀鼠昼夜無 雀鼠 昼夜無し

知我廚廩貧 我が廚廩の貧しきを知ればなり

有情尽捐棄 有情 尽く捐棄し

10 土石為同身 土石を同身と為す

依依舍北松 依依たり 舍北の松

不厭吾南隣 吾が南隣するを厭はず

夫子質千尋 夫子 質は千尋にして

天沢枝葉新 天沢 枝葉新たなり

15 今以不材寿 今不材の寿を以て

非智免斧斤 智に非ざれば斧斤を免る

『四庫全書』集部、『篋中集』の提要は、「即七人所作、見于他集者、亦不及此集之精善。蓋汰取精華、百中存一、特不欲居刊薙之名、故託言篋中所有僅此云爾。其沈千運寄秘書十四兄一首、較河岳英靈集所載、顛倒一聯、又少後四句、亦小有異同、而均以此本為勝。疑結亦頗有所点定。（即ち七人の作る所、他の集に見ゆる者は、亦た此の集の精善なるに及ばず。蓋し精華を汰取し、百中に一を存するも、特だ刊薙の名に居らんと欲せず、故に託言して篋中に有る所は僅かに此れのみと爾云ふのみ。其の沈千運の秘書十四兄に寄するの一首は、河岳英靈集に載する所に較ぶれば、一聯を顛倒し、又後四句少く、亦た小しく異同有り、而して均しく此の本を以て勝れりと為す。疑ふらくは結亦た頗る点定する所有るか）と述べ、元結が沈千運を始めとする詩人たちの小集を編むに際し、詩歌の綿密な選択を行っていたことを推測し、さらにここに挙げた二首を例証として、作品に周到に手を入れていた可能性に言及している。

この王季友の作について提要が沈千運のものであるとするのは誤りであるが、その指摘のように、両作品は第八句までは同一であり、『篋中集』の第九、一〇句（依依北舎松、不厭吾南隣）、第一一、一二句（依依北舎松、不厭吾南隣）が、『河岳英靈集』では入れ替わり、かつ第一三句以降の四句が加えられている。

この両作品を比較すると、表現の位相が全く異なることに気付く。

『河岳英靈集』の「山中贈秘書山兄」詩は、先ず秘書山兄が山を出、今、秘芸の署、すなわち秘書省にあり、山中にはまた春が訪れたことを言う。「秘芸署」は、他に例を見ない語で、王克讓^{〔註1〕}氏は、未詳として『唐詩紀事』『全唐詩』の「秋雲曙」をよしとする。一方傳璇琮^{〔註12〕}氏は、唐代、秘書省は芸署と呼ばれていたとして、秘芸署が正しいようであると注する。ここでは傳璇琮氏の説に従う。第三、四句は、相手に対する問いかけである。第五句から第一〇句までは、山中における自らについて語る部分である。山中でただ老いゆく自らの姿、雀や鼠すら姿を見せぬ極貧の生活、そして様々な思いを捨て去り、土石と化した心が描き出されてゆく。それは「山中の人のことなど心にかけないであろう」という呼びかけに対応している。「夫子質千尋、天沢枝葉新（夫子質は

千尋にして、天沢枝葉新たなり」の「夫子」は、王克讓氏^(注13)が「夫子、謂舎北松。（夫子は、北舎の松をいう）」と解釈するように、直接には離れがたく、また慕わしい舎北の松に対する呼びかけなのであるが、それは同時に朝廷の秘書山兄の姿に重なる。そして朝廷で恩沢に浴している秘書山兄の姿に不材の自らを対比させて詠いおさめるのである。他者に贈るということを意識した作品である。

一方、『篋中集』の作は、「有情尽棄捐、土石為同身（有情尽く棄捐し、土石を同身と為す）」（第一一句、一二句）と強い口調で言い切る。ここでは北舎の松は韋子春ではなく、自らの象徴に変容している。詩の表現から他者が消え、極貧の中で孤高に生きる者の姿が浮かび上がってくるのである。山中の者を思うこともなく、秘書省にある韋子春に対して、孤独のうちに自らの姿を強く対峙させるような措辞の背後には、絶望と憤り、そして深い哀怨が広がっている。

この例は『篋中集』の編者としての元結の文学的な感性をよく物語るものであろう。伊藤正文氏^(注14)は、「詩においては内容を重視すべきで、声律などの形式美にとらわれることは、意志及び感情の自由な発露を妨げ、かえって詩の本質を見失わせることになる」と、彼は考える。（元結は「情性を吟詠」することには反対しない。……）。この点、元結はやはり唐代の文人である。」と述べる。氏の指摘をさらに進め、元結の文学の底流には歎びや怨み、哀しみの情を極める表現への強い志向があると言いうことができるだろう。

第四節 「系楽府十二首」における歎怨の情の表出

前節で指摘した歎びや哀怨の情の激しい流露を重視する意識は、「系楽府十二首」の叙述にどのように反映しているのだろうか。先ず、「系楽府十二首」のうち、其六「貧婦詞」（卷二）を取り上げる。

誰知苦貧夫 誰か知らん 貧に苦しむ夫

家有愁怨妻 家に愁怨の妻有るを

請君聽其詞 請ふ君 其の詞を聴かんことを

能不為酸嘶 能く酸嘶を為さざらんや

05 所憐抱中児 憐む所の抱中の児は

不如山下麁 山下の麁にも如かず

空念庭前地 空しく念ふ 庭前の地の

化為人吏蹊 化して人吏の蹊と為るを

出門望山沢 門を出でて山沢を望み

10 回顧心復迷 回顧して心復た迷ふ

何時見府主 何れの時か府主に見え

長跪向之啼 長跪して之に向かひて啼かん

語り手である元子は、貧窮に苦しむ夫の妻の言葉に耳を傾けている。第三、四句で、読者にこの妻の言葉を聴いてほしいと呼びかけ、家に残された妻の悲痛な哀怨の声を聞けば、痛み悲しまないわけにはいかないという。

第五句から第一〇句までは妻の言葉である。第五、六句について、^(注15) 聶文郁氏は『礼記』曲礼下の「士不取麕卵。

(士は麕卵を取らず)」を引き、人は鹿の子孫を断絶しないのに、抱いている子どもはそうではないと解釈する。しかし、例えば曹丕「短歌行」に「呦呦遊鹿、銜草鳴麁。翩翩飛鳥、挟子巢棲(呦呦たる遊鹿、草を銜みて麁に鳴く。翩翩たる飛鳥、子を挟みて巢棲す)」とあるように、山下の麁は幸福な親子の姿の比喻として理解した方がよいであろう。夫がおらず、極貧のうちにあって母親に抱かれているわが子は、山の鹿の子にも及ばないとい

う言葉には、深い悲嘆を窺うことができる。第八句の「人吏蹊」は、意味するところがわかりにくく、聶文郁氏^(注16)は官吏となる道の意味で解し、楊承祖氏^(注17)は、夫は労役に行き、家に残された妻のもとに取り立ての役人が訪れる、としている。今、楊氏の解釈に従う。第一一、一二句「何時見府主、長跪向之啼（何れの時か府主に見え、長跪して之に向かひて啼かん）」は、妻の言葉とも夫の言葉とも、また語り手の言葉としても読める。「府主」は、唐詩の用例としては杜甫を嚆矢とし、州郡の長官の意味で用いられる語彙である。この二句が妻の言葉であるとすれば、自らの窮状を長官に訴えようとしている彼女の激しい哀怨の情の表出として読むことになる。

また「農臣怨」（卷二）も「貧婦詞」と同様の表現の構造を持つ作品である。

農臣何所怨 農臣 何の怨む所ぞ

乃欲干人主 乃ち人主に干めんと欲す

不識天地心 識らず 天地の心

徒然怨風雨 徒然として風雨を怨む

05 將論草木患 將に草木の患ひを論ぜんとし

欲說昆虫苦 昆虫の苦を説かんと欲す

巡迴宮闕傍 宮闕の傍らを巡迴するも

其意無由吐 其の意由りて吐する無し

一朝哭都市 一朝 都の市に哭し

10 淚尽歸田畝 淚尽きて田畝に歸る

謠頌若採之 謠頌 若し之を採らば

此言当可取 此の言 当に取るべし

農臣について、聶文郁氏は「指農民代表。（農民の代表を指す）」とする。楊承祖氏^(注19)は農夫と解釈するが、詩中に「將論草木患、欲説昆虫苦」とあり、農臣は農民の患苦を論説しようとするのであり、一農民とするのには無理がある。また、『漢語大詞典』は「古代主管農事的官（古代の農事をつかさどる官）」と解するが、第一〇句「涙尽帰田畝」の「帰田畝（田畝に帰る）」という語句からすると、やはり農民の代表としたほうがよい。ここでは聶文郁氏の解釈に従う。第一二句の「此言」は、第三句（第一〇）を指すとして読むことができる。農民の代表は、風雨・草木・昆虫に苦しめられるその窮状を主君に訴えようと、都に至り、宮城の傍らをめぐったが、自分たちの訴えは届かず、結局都の市場で涙尽きるまで泣き、帰って行くのだと語る。「貧婦詞」と同様、ここにも哀怨の限りを尽くす者の姿が描かれている。語り手は、この哀怨に満ちた言葉をこそ採取すべきであると言う。ここには、序に「尽歎怨之声者、可上感於上、下化於下。（歎怨の声を尽くす者は、以て上は上を感じしめ、下は下を化すべし）」という文学観が確かに反映されている。

第五節 表現者の視座

「系樂府十二首」には、前節で検討したように元子という語り手が直接に語る作品（「思太古」「隴上歎」「頌東夷」「寿翁興」「謝大龜」「欵乃曲」「貧婦詞」「去鄉悲」「農臣怨」「古遺歎」）と、元子がある人物を設定し、その人物の視点から語る作品がある。「賤士吟」「下客謠」の二首がそうである。

「賤士吟」の「賤士」は、在野の士、未だ出仕していない微賤の士人を言い、この作品には、華美に流れる爛熟した社会に対峙する者の意識が賤士の視座から表出されている。

南風發天和 南風 天和を發し

和氣天下流 和氣 天下に流る

能使万物榮 能く万物をして榮えしむるに

不能變羈愁 羈愁を變ずる能はず

05 為愁亦何爾 愁ひを為す 亦た何ぞ爾る

自請說此由 自ら請ふ 此の由を説かんことを

諂競実多路 諂競 実に路多くして

苟邪皆共求 苟邪 皆共に求むればなり

常聞古君子 常て聞く 古の君子は

10 指以為深羞 指して以て深く羞づと為す

正方終莫可 正方 終に可なる莫ければ

江海有滄洲 江海に滄洲有り

南風が吹き、和らいだ気が世界に流れるという第一、二句には、泰平の唐王朝のイメージが託されている。それは「述時」（巻五）に「……天下太平。礼樂化於戎夷、慈恵及於草木。（……天下太平なり。礼樂は戎夷を化し、慈恵は草木に及ぶ）」と述べられている唐王朝の姿である。しかし、この泰平の世にあつて賤士は憂いに沈んでいる。それは第七、八句にあるように、人々が阿つては名利を競い、邪惡と不正の中にあることを志向するようになっていたからなのである。王朝は既に繁榮から衰亡への道をたどり始めているのであり、賤士はこの世界に方正さが受け入れられる場所を見いだすことができず、「江海」に去らざるを得ない。その賤士の形象は、
天寶六載（七四七）の制科に応じたものの李林甫の策謀によつて下第し、「人生不方正忠信以顯榮、則介潔靜和

以終老。（人生まれて方正忠信以て顕榮ならずんば、則ち介潔静和以て終老せん）」（「喻友」）と、友を諭して帰郷した元結自身の姿に重なってゆく。

次に掲げる「古遺歎」（巻二）は、元子が直接に語る作品であるが、やはり商余山にあった頃の元結の心境が鮮明に表出している。

古昔有遺歎　古昔　遺歎有り

所歎何所為　歎く所は何の為す所ぞ

有国遺賢臣　国を有つに賢臣を遺つれば

万世為冤悲　万世　為に冤悲す

05 所遺非遺望　遺つる所は望あるを遺つるに非ず

所遺非可遺　遺つる所は遺つべきに非ざらんや

所遺非遺用　遺つる所は用あるを遺つるに非ず

所遺在遺之　遺つる所は之を遺つるに在り

嗟嗟山海客　嗟嗟　山海の客

10 全独竟何辞　独りを全くするに竟に何をか辞せん

心非膏濡類　心は膏濡の類に非ざれば

安得無不遺　安くんぞ遺てられざる無きを得んや

「古遺歎」とは、捨て去られ、忘れ去られた古の賢臣の歎きという意味である。第三、四句で国家が賢臣を捨て去り忘れ去れば、万世にわたって消えぬ怨みや悲しみを残すことになる、と言い、その「冤悲」が第五句から

八句にかけて展開されている。「所遺……」の形を四句も連ね、「捨て去られたのは声望の無い者であり、捨て去られるべき者だったのだ。捨て去られたのは有用でないものであり、捨て去られる者だったのだ。」と屈折した叙述によって、賢臣を捨て去った者への怨嗟が綴られてゆく。詩中に一回も繰り返される「遺」字には、表現者の押さえきれぬ憤懣が表出している。この「古遺歎」からは、天宝六載の制科において、李林甫の「野無遺賢（野に遺賢無し）」という上奏によって捨て去られた元結らの姿を容易に想起することができるであろう。この「山海客」は、商余山中にあった元結自身の姿だったのである。

第六節 君主との邂逅

元子の独白の形をとる作品の中、本章第四節でとりあげた「貧婦詞」、「農臣怨」には、「貧婦」「農臣」という悲嘆にくれる人物が登場していた。「貧婦詞」の妻は、府主に対して訴える術を持たない、貧窮のうちにあらる者であり、「農臣怨」に描かれた、草木の患いや昆虫の苦を人主に訴えようとする農民は、宮殿の傍らを彷徨し、結局訴える術を見いだすことができず、都の市で慟哭し郷里に帰っていった。また、次に挙げる「去郷悲」にも故郷を棄てて去る身寄りのない老人たちの姿が描かれている。

踟躕古塞関　　踟躕す　　古塞関

悲歌為誰長　　悲歌　　誰が為にか長き

日行見孤老　　日び行きて孤老を見る

羸弱相提將　　羸弱　　相提將す

05 聞其呼怨声　　其の呼怨の声を聞き

聞声問其方 声を聞き其の方に問ふ

乃言無患苦 乃ち言ふ 患苦無くんば

豈棄父母郷 豈に父母の郷を棄てんやと

非不見其心 其の心を見ざるに非ず

10 仁恵誠所望 仁恵 誠に望む所なり

念之何可説 之を念ふも何ぞ説くべけんや

独立為悽傷 独り立ちて為に悽傷す

この詩においては、悲歌しつつ故郷を捨てて去って行く身寄りのない老人たちが、「愁いと苦しみがなければ、どうして父母の郷村を捨てましょうか。」（第七、八句）と訴える姿が描かれている。彼らはその思いを人主に訴える術を持たぬまま、流民と化してゆく。語り手は為す術も無く「念之何可説、独立為悽傷（之を念ふも何ぞ説くべけんや、独立して為に悽傷す）」（第一一、一二句）と、ただ傷み悲しむしかなかったのである。ここにも「貧婦詞」「農臣怨」と同じ表現の構造が見られる。

これらの特徴的な形象はいかなる意味を持つのであろうか。この三首も王朝に対する諷諭の意図を込めたものであることは確かである。しかし、第一編で検討したように、この頃の元結が閉塞状況の中にあつて強い王朝への求心的志向を吐露しており、彼の精誠はつねに阻害され、より深い閉塞感に苛まれているという構造を考え、と、「系楽府十二首」中に表出された心情や、「農臣怨」「貧婦詞」「去郷悲」に描かれた農臣・貧婦・流民の形象は、実は商余山中にある元結自身の姿にそのまま重なりと解釈することができるのではないか。

語り手元子は、「貧婦」が「府主」の前で号泣して訴えようとしているとし、宮殿のまわりを巡って窮状を天子に訴えようとしている「農臣」の言葉こそ採るべきだと言い、故郷を捨ててゆく老人達を目の当たりにして、

「彼らは天子の仁愛と恵みを望んでいるのだ（仁恵誠所望）」と独白している。語り手の視線はこれらの悲嘆にくれる人々に向けられるとともに、閉塞状況の中であって天子との邂逅を願う自らの姿を彼らの中に見えていると言つてよいであろう。

「系楽府十二首」には、本章で取り上げたものの他、上古の純朴な世界への憧憬、道義の失われた現実の世界に対する嘆き、王朝に見捨てられた人士の憤懣、「方正」「清和」を守り続けようとする決意が表現された作品がある。商余山中にある元結の全てが「系楽府十二首」に込められているのである。

「系楽府十二首」其十二「下客謡」は次のような作品である。

下客無黄金　下客　黄金無きも

豈思主人憐　豈に主人の憐れみを思はんや

客言勝黄金　客の言　黄金に勝る

主人然不然　主人　然りとするか然りとせざるか

05 珠玉成彩翠　珠玉は彩翠を成し

綺羅如嬋娟　綺羅はかくのごとく嬋娟たり

終恐見斯好　終に恐る　斯の好きを見るも

有時去君前　時有りて君が前を去らんことを

豈知保忠信^(注20)　豈に知らんや　忠信を保たば

10 長使令徳全　長へに令徳をして全からしむるを

風声与时茂　風声　時と与に茂り

歌頌万千年　歌頌　万千年ならん

詩は、主人に語りかける下等の賓客の口吻を借り、珠玉や綺羅などを対置して主人の美德を永遠のものとする忠信の価値を語る。珠玉や華美な衣服はいかに美しくとも、やがては失われるものであり、失うことを心配しなければならぬが、忠信は、主人の美德を永遠に全くするものであると言っているのである。ここには天子にとつては臣下の忠と信こそが珠玉に勝る価値を持つという思いが流露している。楊承祖^(注21)氏は、この「下客謠」について「這一首最能弁『系樂府』作於天寶六載（七四七）之前、因其後元結中輟仕進之望、直至十三載（七五四）再應進士舉及第、其間不可能有如此頌主求售之作。（この一首は「系樂府十二首」が天寶六載（七四七）以前に制作されたことをはつきりと示すことができるものである。元結は天寶六載以後仕進の望みを一時断念しており、一三載（七五四）になって再び進士に應じて及第したのであり、その間にはこのような主人を称美して自らを売り込もうとする作品はあり得ないからである）」と、この作品を自らの仕官を求める心情を述懐したものとして解し、「系樂府十二首」の制作年が天寶六載以前であったとする証左としている。

しかしながら、この作品は決して主人を称美して自らを売り込もうとしている作品ではないであろう。「下客」は「主人」に向かって、臣下の「忠信」こそが、主人の「令徳」（美德）を完全なものとし、主人の「風声」（名声と教化）を永遠のものとする、と語りかけている。「大唐中興頌」（卷七）にも、「刊此頌焉、何千萬年（此の頌を刊めば、何ぞ千万年のみならんや）」の句がある。「令徳」「風声」、そして「歌頌萬千年」の語は、この「主人」が唐王朝の天子であることを明確に示すものである。語り手は、天子に対して忠信の大切さを論じているのであって、それがこの樂府における諷諭なのである。

「農臣怨」に「謠頌若採之（謠頌若し之を採らば）」とあるように、樂府は採詩の官によって採取され、天子に届けられるものであった。元結は、諷諭の器である樂府という様式に自らの感懷を託すことによって、それが天子に嘉納され、自らの志と情が天子に受け止められることを願うのである。樂府はいわば元結と君主との幸福

な邂逅の場なのであり、歎びや哀怨を尽くした表現によって自らの真情を明らかにし、君主を動かす契機となりうるものとして制作されたのである。商余山中にあった元結にとって、楽府こそは自己を実現する手段であったのであり、ここに唐代の諷諭詩の画期的作品である「系楽府十二首」が成立したのである。

おわりに

元結の歌謡に対する強い信頼は元徳秀の影響のもとに育まれたと考えることができる。元徳秀が魯山県令であった時、懷州の人々の苦しみをうたった「于蔦」が玄宗の目にとまり、懷州刺史が更迭されるということがあった。この事件は元結に大きな影響を与えたようであり、後の「閔荒詩」では、隋代の人々の歌の持つすさまじい怨嗟の感情に着目し、煬帝は人々の怨嗟に気づくことのない王であったと述べている。元結に歌謡の社会的機能についての確固たる確信があったことは確かであろう。

また、唐代における諷諭詩の展開において、「系楽府十二首」には高い評価が与えられている。この作品が諷諭のための手段として構想されていることは確かであるが、同時に、この連作から窺うことができる歌謡の社会的機能への確信、歎怨の情の重視、そして閉塞感と王朝への求心的志向に注目しなければならない。元結の代表的作品である「系楽府十二首」は、愚者として商余山中にあったこの時期でなければ、生み出されることはなかったと言いうことができよう。

注

(1) 拙論「陳子昂から李白・杜甫・元結へ——詩風の革新《風雅不作》」(伊藤虎丸・横山伊勢雄編『中国の文

学論』汲古書院、一一六―一三一頁）参照。

(2) 佐藤保氏（前野直彬編『中国文学史』東京大学出版会、一九七五年）、聶文郁氏（『元結詩解』陝西人民出版社、一九八四年）他が両者の関係を指摘している。例えば佐藤氏は、「彼には「春陵行」や「賊退きて官吏に示す」があり、いずれも杜甫に注目された作品である。また、「系樂府」十二首があり、後の「新樂府」のさきがけをなすものであった。」（一〇三頁）と述べている。

(3) 『資治通鑑』以外に、『明皇雜錄』、『新唐書』卷一九四「卓行伝」にも同様の記載がある。このうち『明皇雜錄』卷下は以下のように記している。

唐玄宗在東洛、大酺於五鳳楼下。命三百里内県令刺史、率其声樂来赴闕者、或謂令較其勝負而賞罰焉。時河内郡主令樂工数百人於車上、皆衣以錦繡、伏廂之牛、蒙以虎皮、及為犀象形状。觀者駭目。時元魯山遣樂工数十人、聯袂歌于薦。于薦、魯山文也。玄宗聞而異之、徵其詞、乃歎曰、賢人之言也。其後上謂宰臣曰、河内之人、其在塗炭乎。促命徵還、而授以散秩。

玄宗東洛に在り、大いに五鳳楼下に酺す。三百里内の県令刺史に命じ、其の声樂を率ゐ来りて闕に赴かしむれば、或ひと謂へらく、其の勝負を較はしめて賞罰せんとす、と。時に河内郡主樂工数百人をして車上に於て、皆衣るに錦繡を以てせしめ、伏廂の牛は、蒙るに虎皮を以てし、及び犀象の形状を為す。觀る者目を駭かす。時に元魯山は樂工数十人をして、袂を聯ねて于薦を歌はしむ。于薦は、魯山の文なり。玄宗聞きて之を異とし、其の詞を徵し、乃ち歎じて曰はく、賢人の言なり、と。其の後上宰臣に謂ひて曰はく、河内の人、其れ塗炭に在るか、と。促命して徵還せしめて授くるに散秩を以てす。

『資治通鑑』とほぼ同じ内容だが、元徳秀の樂工の数を、「数十人」としている。

(4) 薦は、春秋時代の鄭の邑で、河南省孟津県の東北にあった。『春秋左氏伝』隱公一一年に、「王取鄆・劉・薦・邠之田于鄭、而与鄭人蘇忿生之田、温・原・緄・樊・隰郕・欒茅・向・盟・州・陘・隤・懷。（王鄆

・劉・蔦・邗の田を鄭より取りて、鄭人蘇忿生の田、溫・原・絺・樊・隰郕・欒茅・向・盟・州・陘・隤・懷を与ふ」とある。

(5) 「閔荒詩」の制作年について、孫望氏(『元次山年譜』一七頁)は、序に「天宝丙戌」とあるのによって天宝五載(七四七)とする。一方、楊承祖氏(『元結研究』二一五、二一六頁)は、天宝六載から十一載の間の作とする。

(6) 聶文郁氏(『元結詩解』聶文郁注解、陝西人民出版社、一九八四年、一一九頁)は、第三二句までを隋人の歌謡とするが、ここでは、第三一、三二句を元結の判断を述べる句として解した。

(7) 喬象鍾・陳鉄民主編『唐代文学史』(人民文学出版社、一九九五年)五六九頁。陶文鵬氏は、「元結在他的創作早期、就写了許多揭露黑暗现实、同情人民疾苦的詩歌、比較尖銳地触及了天宝中期各種社会矛盾。大約在天宝十載他写了『系樂府十二首』、從各箇方面表現他对国事的憂慮和对人民疾苦的同情。……這些早期的作品、已顯示出作者对現實的深刻体察、及其以詩筆為民立言、為民請命的可貴精神。(元結は創作の早期において暗黒の現實を暴き出し、人民の苦しみに同情した多くの詩歌を制作し、比較的鋭く天宝中期の各種の社会的矛盾に言及している。おそらく天宝一〇載に『系樂府十二首』を制作し、様々な面から国家の大事に対する憂慮と人民の苦しみに対する同情を表現している。……これら早期の作品にはすでに作者の現實に対する深刻な体験と考察、及び詩によって人民のために立言し、人民のために助命を嘆願する貴ぶべき精神が表れている)」と述べている。

(8) 伊藤正文著『建安詩人とその伝統』(創文社、二〇〇二年)四〇三頁。伊藤氏は、「『三吏』『三別』が元結の『系樂府』十二首(天宝十載の作)の影響下にあると言い切るつもりはないが、制作時期の前後と、テーマの關聯性には十分注意する必要がある。」と述べている。

(9) 楊承祖著『元結研究』(国立編訳館、二〇〇二年)一八頁。楊承祖氏は、「系樂府十二首」の制作年につ

いて、「『系樂府十二首』、拋其『序』、作於『天宝辛未』。天宝無辛未、一般都假定是辛卯（十載、七五一）之譌、其實也可能是「癸未」（二載、七四三）之誤。因為在這十二首中、並未涉及宮廷與時政特殊敗壞的現象、雖然也反映民間疾苦、但控訴並不強烈、与天宝六載以後的作品頗有區別。（『系樂府十二首』は、その「序」によれば天宝辛未に制作された。天宝に辛未は無いので、普通には辛卯（十載、七五一）の誤りであるとされているが、実は癸未（二載、七四三）の誤りである可能性がある。なぜならこの一二首では、いずれもまだ宮廷と當時の政治の特殊な腐敗の現象に及んでおらず、民間の苦しみを反映してはいるが、告発は強烈ではなく、天宝六載以後の作品とはかなり相違があるからである）」と述べている。

（10）前野直彬編『中国文学史』（東京大学出版会、一九七五年）一一頁。

（11）王克讓著『河岳英靈集注』（巴蜀書社、二〇〇六年）一一八頁。王克讓氏は、「秘芸、未詳。芸、俱作雲。秘芸署、『唐詩紀事』『全唐詩』作秋雲曙。似当從。（秘芸は、未詳。芸は、諸本ともに雲に作る。秘芸署は、『唐詩紀事』『全唐詩』は秋雲曙に作る。従うべきであろう）」と述べている。

（12）傅璇琮編撰『唐人選唐詩新編』（陝西人民出版社、一九九六年）一四一頁。傅璇琮氏は、「按題為贈秘書山兄、唐人習稱秘書省為芸署、此處似以作芸為是。（詩題を「秘書山兄に贈る」としているが、唐人は秘書省を芸署と呼び習わしているから、ここでは芸に作るのがよいであろう。）」と述べている。

（13）王克讓氏、前掲書。一一八頁。

（14）伊藤正文氏、前掲書。三九八頁。

（15）聶文郁氏、前掲書。一三三頁。

（16）聶文郁氏、前掲書。一三四頁。

（17）楊承祖氏、前掲書。二二頁。

（18）聶文郁氏、前掲書。一四〇頁。

(19) 楊承祖氏、前掲書。二二頁。

(20) 底本は「終信」に作るが、ここでは『全唐詩』卷二四〇が「忠信」に作るのに従う。

(21) 楊承祖氏、前掲書。二四頁。

第二編

諷諭の展開

第一章 『篋中集』編纂

はじめに

第一編においては、元結における初期諷諭の文学の形成とその特色について考察を進めてきた。彼の諷諭の文学は、天寶六載（七四七）の制科下第から、天寶一三載（七五四）、進士に及第する頃にかけてその基本的な表現の形が確立されたと考えられる。愚愚者である元子の視座から諷諭の表現が展開され、同時に唐王朝への強い求心性が表出しているというのが、その文学の特色であり、殊に「引極三首」（卷一）、「演興四首」（卷一）、説楚賦三編（卷四）、「系樂府十二首」（卷二）等にはそれがよく表れていた。

本編では、主として元結が起家して以後、その諷諭の文学がどのように展開していったかを明らかにしてゆく。まず、本章では尚古派の文学的主張を表明するとされている『篋中集』の編纂を取り上げる。

安史の乱勃発後、慌ただしく即位した肅宗は、乾元二年（七五九）、天下に士を求めた。元結は国子司業蘇源明の推挙により肅宗に「時議三篇」（卷六）を奉るや、右金吾兵曹參軍撰觀察御史を拝し、その年の十一月には、義軍を招集し、泌陽において史思明の軍の南進を防いだ。そして翌、乾元三年（七六〇）、戦乱の続く中で『篋中集』が編纂された。それは、沈千運、王季友、于逖、孟雲卿、張彪、趙微明、元季川の七人の作品、計二十四首を集めた小集であった。

編纂の直接の動機について、その序（卷七）は、「兵興於今六歳、人皆務武、斯焉誰嗣。已長逝者遺文散失、方祖師者不見近作。（兵興りて今において六歳、人皆武に務むれば、斯に誰か嗣がん。已に長逝する者は遺文散失し、方に祖師せらるる者は近作を見ず）」と述べている。風雅の文学を体現した沈千運ら不遇な詩人達の作品

が戦乱によって散佚してしまおうとしているのを憂い、散佚を防ごうとしたというのである。それを『篋中集』と名付けたのは、「尽篋中所在、総編次之、命曰篋中集。」（篋中の在る所を尽くし、総て之を編次し、命づけて篋中集と曰ふ）」とあるように、文箱にあったものを編集したことによる。篋中という語は、例えば玄宗が蘇頲の上奏文を愛惜し、副本を作らせて文箱の中におさめたいと述べた、という『大唐新語』卷六の話が示すように、自らの傍らに置いてかけがえのないものとして愛惜する思いと分かちがたく結びつく。『篋中集』という命名には、集中におさめられた二四首が自身にとって大切なものであることを表すとともに、この集を示された人々にとってもかけがえのないものであつてほしいという願いもこめられていよう。

この小集は序に「風雅不興、幾及千歳。（風雅興らざること、幾ど千歳に及ぶ）」と言うように、風雅の文学観を表明したものであるとして有名であり、その編纂には尚古派の文学観を世に問うという意図があつたとする解釈がなされている。例えば、喬象鍾・陳鉄民主編の『唐代文学史』において、陶文鵬氏は、『篋中集』編纂の主要な目的を『詩経』の風雅の伝統を掲げることであるとしている^{（注2）}。

『篋中集』ははたしてこのような意識に基づいて編纂されたと解釈されるべきものであろうか。本章では、元結の『篋中集』編纂が、七人の文学を顕彰し、彼らが相応しい評価を受けるべきであるとして、あたかも采詩の官のごとき視座において行われたとする解釈の可能性を探る。

第一節 編纂の意図をめぐって

陶文鵬氏は、^{（注3）}『篋中集』編纂の意図について、まず、七人の友人の境遇に同情し、彼らの佳作を集めて、後代まで伝えようとした、と述べる。これは、「篋中集序」に元結自ら述べている所である。次に、「他編選『篋中集』更主要的目的、是要標舉『詩経』風雅伝統、用以促進一種反映民政疾苦的詩歌流派的發展、并抵制、排斥綺

靡詩風。(彼が『篋中集』を編纂したさらに主要な目的は、『詩経』の風雅の伝統をかがげ、人々の生活の苦しみを反映する詩歌の流派の発展を促し、華美な詩風を阻止し排斥することであった)と、その主要な目的が、『詩経』以来の風雅の文学の伝統を掲げ、華美に流れ、内容のない当代の詩風を阻止し、排斥するところにあつたとする。氏はまた特に、『篋中集』中の詩歌が「救時勸俗」の作用、すなわち社会を戒め教化する働きを持つものとして元結に意識されていたことを強調している。

また、川北泰彦氏は、^(注4)『篋中集』が尚古派の文学的主張であつたとする立場から、『篋中集』編纂は元結によって自覚的になされた運動の結果であつたとする。そして、元結は安史の乱以前においては、主体的に文学活動を展開してはいなかったが、安史の乱を契機として政治に参画し、そのことによって自覚的、主体的に文学的活動を展開していったとし、『篋中集』の編纂はその表れであると捉えるのである。さらに氏は、元結が集中の詩人たちを推挙しようとしていることが窺われるとしている。

楊承祖氏も「乃編『篋中集』、而作「序」、正所以表出自己的文学主張、并对鼓行於時的詩界主流風氣作了嚴肅的批評。^(注5)（『篋中集』を編纂して序を著したのは、自らの文学的主張を明確にし、当時盛行していた詩壇の支配的風潮に対して厳しい批判をするためであつた）」と、元結が自己の文学的主張を展開し、当時の詩壇に対して厳しい批判をおこなうために『篋中集』が編纂されたとしている。ただ、楊承祖氏は、元結が当時の詩人達から孤立していたとして、この主張を尚古派のものであると解釈してはいない。

一方、伊藤正文氏は、「『篋中集』編纂の趣旨として、そこに彼及び彼の文学グループの自己主張が存在するのはもとよりであるが、当時の彼の境遇、更には彼の詩友の二、三人(うち一人は沈千運?)が不遇のうちに、世を去つたのが直接の動機となつたようである。^(注6)」と述べ、尚古載道を掲げるグループの自己主張よりは、むしろ不遇な詩友たちへの同情が直接の契機になつたと解している。

このように、『篋中集』の編纂の意図、目的については、尚古派の文学的主張であつたか否かという問題、不

遇な詩友たちを称揚する意図の有無、諷諭の意図、当時の詩壇批判といったことについても様々な見解が提出されている。また、序に示されている文学観が、元結自身の文学観であるのか、元結を含む集団の文学観なのかということも解釈が分かれるところである。

この小集の編纂が詩友たちへの哀惜に基づいてなされたものであるということは序からも明らかにうかがわれる。しかしながら、序に示されている尚古的文学観の記述に関しては研究者によってそれぞれ見解が異なり、『篋中集』編纂の目的について相違した解釈が生じているのである。まず『篋中集』序について検討し、その編纂の意図を説明する。

第二節 「篋中集序」

「篋中集序」（卷七）は、次の通りである。

元結作篋中集。或問曰、公所集之詩、何以訂之。対曰、風雅不興、幾及千歳。溺於時者、世無人哉。嗚呼、有名位不顯、年寿不終、独無知音、不見称頌、死而已矣。誰云無之。近世作者、更相沿襲、拘限声病、喜尚形似、且以流易為辞、不知喪於雅正。然哉。彼則指詠時物、会諧糸竹、与歌兒舞女生汚惑之声於私室可矣。若令方直之士、大雅君子、聴而誦之、則未見其可矣。呉興沈千運独挺於流俗之中、強攘於已溺之後、窮老不惑、五十余年。凡所為文、皆与时異。故朋友後生、稍見師効、能似類者有五六人。於戲、自沈公及二三子、皆以正直而無禄位、皆以忠信而久貧賤、皆以仁讓而至喪亡。異於是者、顓榮当世。誰為弁士。吾欲問之。兵興於今六歳、人皆務武、斯焉誰嗣。已長逝者遺文散失、方祖師者不見近作。尽篋中所有、総編次之、命曰篋中集、且欲伝之親故、冀其不忘於今。凡七人、詩二十四首。時乾元三年也。

元結篋中集を作る。或ひと問ひて曰はく、公集むる所の詩は、何を以て之を訂するか、と。対へて曰はく、風雅興らざること、幾ど千歳に及ばんとす。時に溺む者、世に人無からんや。嗚呼、名位顕れず、年寿終はらず、独り知音無く、称頌せられずして、死する有るのみ。誰か之無しと云はんや。近世の作者、更ごも相沿襲し、声病に拘限し、形似を喜尚し、且つ流易を以て辞と為し、雅正に喪ふを知らず。然らんかな。彼は則ち時物を指詠し、糸竹に会諧し、歌兒舞女と汚惑の声を私室に生ずるは可なり。若し方直の士、大雅の君子をして、聴きて之を誦せしめば、則ち未だ其の可なるを見ず。呉興の沈千運独り流俗の中より挺んで、強て已溺の後を攘ひ、窮老にして惑はざること、五十余年なり。凡そ為る所の文は、皆時と異なる。故に朋友後生に、稍く師効せられ、能く似類する者五六人有り。於戲、沈公より二三子に及び、皆正直を以てして禄位無く、皆忠信を以てして久しく貧賤なり、皆仁讓を以てして喪亡に至る。是に異なる者は、当世に顕榮す。誰か為に士を弁ぜん。吾之を問はんと欲す。兵興りて今において六歳、人皆武に務むれば、斯に誰か嗣がん。已に長逝する者は遺文散失し、方に祖師せらるる者は近作を見ず。篋中の有る所を尽くし、総て之を編次し、命づけて篋中集と曰ひ、且つ之を親故に伝へんと欲し、其の今に忘れざらんことを冀ふ。凡そ七人、詩二十四首なり。時に乾元三年なり。

この序の叙述からすると、尚古派の自覺的な文学宣言が主たる編纂目的であるとする解釈については、いくつかの疑問点を指摘しなければならない。例えば、序には不遇な詩友への強い哀惜の情が表れており、それが序の中心となっているように見えることをどのように解釈すればよいのであろうか。第一編第六章においても取り上げたように、元結は例えば「系樂府十二首」の序においては、「天宝辛未中、元子将前世嘗可称歎者為詩十二篇、為引其義以名之、総命曰系樂府。古人歌詠不尽其情声者、化金石以尽之。其歆怨甚耶戲。尽歆怨之声者、可以上感於上、下化於下。故元子系之。」(天宝辛未中、元子前世の嘗に称歎すべき者を将て、詩十二篇を為り、為に其

の義を引きて以て之に名づけ、総て命づけて系楽府と曰ふ。古人は歌詠して其の情声を尽くさずんば、金石に化して以て之を尽くす。其の歎怨甚だしきかな。歎怨の声を尽くす者は、以て上は上を感じしめ、下は下を化すべし。故に元子之を系ぐ」と、命名の行為とそれを支える文学観を端的に述べている。こうした例からすると、尚古派の文学宣言が中心であるとすれば、不遇な詩友に対する記述は最小限に止められなくてはならないであろう。

また、採録されている七人の詩人の二四首という作品数は、元結を含む尚古派の文学を詩壇に示すものとしては、あまりに貧弱ではあるまいか。例えば『河岳英霊集』の「二十四人、……詩二百三十四首」、『国秀集』の「凡九十人、詩二百二十首」などに比較して、その採録詩人、作品の少なさが際だっている。

『篋中集』という命名も、社会の教化を願う文学を詩壇に問うものとしては、あまりふさわしいものではないようにも思われる。先に述べたように、この語にはむしろ沈千運以下の文学を愛惜する思いの方が強くうかがわれる。

さらに、この『篋中集』編纂が当時の詩壇に対して自覚的に為された文学的活動の一つであったとすると、元結は『篋中集』後において、積極的に風雅の文学を制作し続けたと考えるのが自然である。ところが後に取り上げるように、孫望氏、楊承祖氏の編年によって作品を確認してみても、官吏となつて以後の詩は世俗に対する戒めや忠告の意識を伴っているものは少なく、意図的に文学的活動を展開しているとは言いがたいのである。『篋中集』は、果たして尚古派の文学的主張を意図したものであるのか否か。

第三節 埋もれた詩人たちの顕彰

「篋中集序」は、「元結作篋中集。（元結篋中集を作る）」と、「元結」の語を以て始まる。第一編第三章第

五節で検討したように、元結は自らを称する場合に、多く元子の語を用いている。ことに天宝一四載（七五五）までの作品では、すべて元子と自称し、その使用は宝応元年（七六二）に及んでおり、元子という自称が用いられたときには、社会に対する厳しい戒めや忠告の意識が表出されていた。また安史の乱を避け、一族を率いて猗玗洞に棲んだ時には猗玗子と称し、乾元元年の「瀼溪銘」においては浪士、乾元二年の「時規」では漫叟と称している。これら元子、元結以外の自称の意味については、第四章で考察することとし、本節では、元結が自らを元結と称する場合の視座を検討する。

元結と自称する例は、官を拝した乾元二年（七五九）以後に限ると、上奏文等以外では、「寄源休」（卷二）詩の序及び「別王佐卿序」（卷八）に見える。「寄源休」詩の序並びに詩を挙げる。

辛丑中、元結与族弟源休皆为尚書郎、在荆南府幕。休以曾任湖南、久理長沙、結以曾遊江州、将兵鎮九江、自春及秋、不得相見。故抒所懷以寄之。

辛丑中、元結族弟源休と皆尚書郎と為り、荆南の府幕に在り。休は曾て湖南に任ぜられ、久しく長沙を理むるを以て、結は曾て江州に遊び、兵を将ゐて九江に鎮するを以て、春より秋に及ぶまで、相見ゆるを得ず。故に懷ふ所を抒べて以て之に寄す。

天下未偃兵	天下	未だ兵を偃めず
儒生預戎事	儒生	戎事に預かる
功劳安可問	功劳	安くんぞ問ふべけんや
且有忝官累	且く官累を忝くする有り	
05 昔常以荒浪	昔常に荒浪を以て	

不敢学為吏 敢て吏と為るを学ばず

況当在兵家 況んや兵家に在るに当たりて

言之豈容易 之を言ふこと豈に容易ならんや

忽然向三歳 忽然として三歳に向とし

10 境外為偏帥 境外に偏帥と為る

時多尚矯詐 時多く矯詐を尚び

進退多欺式 進退 欺式多し

縦有一直方 縦ひ一直方有りとも

則上似姦智 則ち上は姦智の似しとす

15 誰為明信者 誰か明信の者為りて

能弁此劳畏 能く此の劳と畏とを弁ぜん

この「寄源休」詩は、上元二年（七六一）、安史の乱が未だ終息せず、荊南の兵を領して九江にあった時に、族弟の源休に与えたものである。聶文郁氏が「我們以此対照本詩、確實詩中写了一些心中事、写了一些対一般人難以相告的事。」（この詩の序に示された状況をこの詩と対照させれば、確かに詩中には心中のことが書かれ、他人には話にくいことが表現されているのである）と指摘するように、族弟に対する真摯な心情がうかがわれる作品である。安史の乱が続き、儒生までが軍事に関わらねばならない中で、自分は功績もなく、官を忝なくしている思いだけがあると言い（第三、四句）、いつわりに満ちた時代の中で、端正に正直に生きたとしても、奸智としか見られないと、苦渋に満ちた心情が率直に流露している（第一一句、第一四句）。ここには、諷諭の意図をうかがうことはできない。

また、宝応二年（七六三）の「別王佐卿序」（巻八）にも元結の自称が用いられている。

癸卯歳、京兆王契佐卿年四十六、河南元結次山年四十五。時次山須浪遊吳中、佐卿須日去西蜀。対酒欲別、此情易邪。在少年時、握手笑別、雖遠不恨。以天下無事、志氣猶壯。今与佐卿年近五十、又逢戦争未息、相去万里。欲強笑別、其可得乎。与佐卿去者有清河崔異、与次山往者有彭城劉灣。相醉相留、幾日江畔。主人鄂州刺史韋延安令四座作詩、命余予為序、以送遠云。

癸卯の歳、京兆の王契佐卿年四十六、河南の元結次山年四十五なり。時に次山吳中に浪遊するを須ち、佐卿日を須ちて西蜀に去る。酒に対して別れんと欲すれば、此の情易からんや。少年の時に在りては、手を握りて笑ひて別れ、遠しと雖も恨みず。天下事無く、志氣猶ほ壯なるを以てなり。今佐卿と年は五十に近く、又戦争の未だ息まざるに逢ひ、相去ること万里なり。強ひて笑ひて別れんと欲するも、其れ得べけんや。佐卿と与に去る者に清河の崔異有り、次山と与に往く者に彭城の劉灣有り。相酔ひて相留まり、幾日か江畔にあり。主人の鄂州刺史韋延安四座をして詩を作らしめ、予に命じて序を為らしめて、以て遠きを送ると云ふ。

この序は鄂州刺史韋延安の催した送別の宴において、その命により制作されたものであるが、友人の王契に対する親愛の情と別離の悲哀が直截に表れており、二人の親しい関係が窺われる。一方、例えば漫叟の自称を用いた「送王及之容州序」（巻八）においては、「人生若不能師表朝廷、即当老死山谷。彼驅驅於財貨之末、局局於權勢之門、縦得鍾鼎、亦胡顔受納。：（人生若し朝廷に師表たる能はずんば、即ち当に山谷に老死すべし。彼の財貨の末に驅駆たり、權勢の門に局局たるは、縦ひ鍾鼎を得とも、亦た胡の顔ありて受納せんや。：）」と、容州に旅立つ若い王及を強く戒めている描写が見られる。その視座は、世俗に対する強い戒め、忠告の意識を表白する元子のそれとほぼ同一と言つてよい。元結という諱は、社会に対する諷諭や戒めの意識よりも、むしろ相手

に対する真摯さや親愛の情、さらには自らの人生観等を飾ることなく真摯に述懐する時に用いられるのである。

こうした自称による表現の差異に着目すると、尚古派の文学を称揚し、世俗に対する強い戒めや忠告、すなわち「救時勸俗」を目的として『篋中集』を編纂したのであれば、その序においては「元結」ではなく「元子」という自称が用いられた可能性が高いと考えられる。「元結」という諱の使用には、沈千運以下の不遇な詩友たちへの同情や哀惜、編纂という行為に対する真摯さ、といったものを読みとることができるであろう。

「篋中集序」のうち、「風雅不興、幾及千歳。溺於時者、世無人哉。嗚呼、有名位不顯、年寿不終、独無知音、不見称頌、死而已矣。誰云無之。近世作者、更相沿襲、拘限声病、喜尚形似、且以流易為辭、不知喪於雅正。然哉。彼則指詠時物、会諧糸竹、与歌兒舞女生汚惑之声於私室可矣。若令方直之士、大雅君子、聴而誦之、則未見其可矣。（風雅興らざること、幾ど千歳に及ばんとす。時に溺む者、世に人無からんや。嗚呼、名位顯れず、年寿終はらず、独り知音無く、称頌せられずして、死する有るのみ。誰か之無しと云はんや。近世の作者、更ごも相沿襲し、声病に拘限し、形似を喜尚し、且つ流易を以て辭と為し、雅正に喪ふを知らず。然らんかな。彼は則ち時物を指詠し、糸竹に会諧し、歌兒舞女と汚惑の声を私室に生ずるは可なり。若し方直の士、大雅の君子をして、聴きて之を誦せしめば、則ち未だ其の可なるを見ず）」とあるのが、尚古的文学観を述べる部分である。このうち「溺於時者、世無人哉。嗚呼、有名位不顯、年寿不終、独無知音、不見称頌、死而已矣。誰云無之。（時に溺む者、世に人無からんや。嗚呼、名位顯れず、年寿終はらず、独り知音無く、称頌せられずして、死する有るのみ。誰か之無しと云はんや）」の部分には、風雅の文学を繼承する多くの者たちが不遇のままに埋もれていたことを言い、そうした者たちへの哀惜の思いがよく表れている。とりわけ「誰云無之。（誰か之無しと云はんや）」という語句には、その思いが強く窺われる。

この箇所は、例えば陳子昂の「修竹篇」序、「東方公足下。文章道弊五百年矣。漢魏風骨、晋宋莫伝。然而文獻有可徵者。僕嘗暇時觀齊梁間詩、彩麗競繁而興寄都絶、每以永歎。（東方公足下。文章の道弊れて五百年なり。

漢魏の風骨は、晋宋伝はること莫し。然れども文献に徴すべき者有り。僕嘗て暇時に齊梁間の詩を觀るに、彩麗繁を競ひて興寄都て絶ゆれば、毎に以て永歎す」のように、晋宋、齊梁間の文学を否定する文言を以てすることも十分に可能であつたであろう。あるいは次に挙げる「劉侍御月夜讌会」詩の序（卷三）のように述べることもできたであろう。

於戲、文章道喪蓋久矣。時之作者、煩雜過多、歌兒舞女、且相喜愛。系之風雅、誰道是邪。諸公嘗欲變時俗之淫靡、為後生之規範。今夕豈不能道達情性、成一時之美乎。

於戲、文章の道喪はれて蓋し久し。時の作者は、煩雜過多にして、歌兒舞女すら、且つ相喜愛す。之を風雅に系すれば、誰か是なりと道はんや。諸公嘗て時俗の淫靡を變へんと欲して、後生の規範と為る。今夕豈に情性を道達し、一時の美を成す能はざらんや。

この序は、元結の文学觀を語るときに「篋中集序」とともに引用されることが多い。ここでは風雅の文学が久しく失われていることを指摘するのに続けて、直ちに「時之作者、煩雜過多、歌兒舞女、且相喜愛。（時の作者は、煩雜過多にして、歌兒舞女すら、且つ相喜愛す）」と、当代の文学を否定する言辞を連ねている。

ところが「篋中集序」では、「風雅不興、幾及千歳。（風雅興らざること、幾ど千歳に及ばんとす）」に続けて当代の文学を否定する言辞を連ねることをせず、「溺於時者、世無人哉。嗚呼、有名位不顯、年寿不終、独無知音、不見称頌、死而已矣。誰云無之。（時に溺む者、世に人無からんや。嗚呼、名位顯れず、年寿終はらず、独り知音無く、称頌せられずして、死する有るのみ。誰か之無しと云はんや）」と、風雅の文学に志し、不遇なままに生を終えた過去の詩人達のことを述べるのである。「風雅不興、幾及千歳。近世作者、……」と続けることが可能な部分において、却つて不遇な者たちへの視線が明確に示されていることには注意しなければならない。

「近世作者、更相沿襲、拘限声病、喜尚形似、且以流易為辭、不知喪於雅正。然哉。彼則指詠時物、會諧糸竹、与歌兒舞女生汚惑之声於私室可矣。若令方直之士、大雅君子、聴而誦之、則未見其可矣。（近世の作者、更ごも相沿襲し、声病に拘限し、形似を喜尚し、且つ流易を以て辞と為し、雅正に喪ふを知らず。然らんかな。彼は則ち時物を指詠し、糸竹に会諧し、歌兒舞女と汚惑の声を私室に生ずるは可なり。若し方直の士、大雅の君子をして、聴きて之を誦せしめば、則ち未だ其の可なるを見ず）」の部分は、「風雅不興、幾及千歳。（風雅興らざることを、幾ど千歳に及ばんとす）」を受け、当世の文学の状況を述べつつ、それを強く否定する部分である。ここに示された視点は、実は「篋中集序」において初めて呈示されたわけではない。すでに商余山中習静時の「自述三篇」（卷五）のうちの「述時」において、次のようにアイロニカルに述べられていた。第一編第二章でも取り上げたが、再び引用する。

礼樂化於戎夷、慈恵及於草木。雖奴隸齒類、亦能誦周公孔父之書、說陶唐虞夏之道。至於歌頌謳吟、婦人童子、皆抒性情、美辭韻、指詠時物、与糸竹諧會、綺羅當稱。況世貴之士、博學君子、其文學声望、安得不顯聞於當時也哉。

礼樂は戎夷を化し、慈恵は草木に及ぶ。奴隸の齒類と雖も、亦た能く周公孔父の書を誦し、陶唐虞夏の道を説く。歌頌謳吟に至りては、婦人童子も、皆性情を抒し、辭韻を美しくし、時物を指詠し、糸竹と諧會し、綺羅當に稱すべし。況んや世貴の士、博學の君子は、其の文學声望、安くんぞ當時に顯聞せざるを得んや。

玄宗皇帝の治世となり、教化は天下にあまねく、人々は繁栄を謳歌している。文学の状況については、婦人や子どもたちまで自らの心を美しい言葉で表現し、あるいは対象を描写し、音楽にもかなう華麗な表現をものしているほどである。このような状況においては、世にときめく人々は、その才学と声望をこの世界において顯示せ

ざるを得ない。この記述には現実に対するにがしく、また沈鬱な思いが凝縮されているよう。「篋中集序」の記述は、そのアイロニーの衣を取り去って、より直截に当代の文学的状况を指弾するものであり、序全体を覆う真摯な意識の表出に沿うものである。

次に、序は一転して、風雅の伝統を継ぐ沈千運の文学を称揚し、彼を仰ぐ者たちが不遇のままであったことを傷む。この部分は「溺於時者、世無人哉。嗚呼、有名位不顯、年寿不終、独無知音、不見称頌、死而已矣。誰云無之。（時に溺む者、世に人無からんや。嗚呼、名位顯れず、年寿終はらず、独り知音無く、称頌せられずして、死する有るのみ。誰か之無しと云はんや）」の意を繰り返して述べるものである。

このように見ると、この序は風雅の伝統が衰えた当代の文学状況を否定することを目的とするのではなく、沈千運らへの哀惜と彼らの文学の称揚こそが主眼であったと読まねばならない。不遇のままに時代に埋もれていた詩人達に対する真摯な思いを表現するには「元結」という自称こそ相応しいものであったのである。

また、「於戲、自沈公及二三子、皆以正直而無禄位、皆以忠信而久貧賤、皆以仁讓而至喪亡。異於是者、顯榮当世。誰為弁士。吾欲問之。（於戲、沈公より二三子に及び、皆正直を以てして禄位無く、皆忠信を以てして久しく貧賤なり、皆仁讓を以てして喪亡に至る。是に異なる者は、当世に顯榮す。誰か為に士を弁せん。吾之を問はんと欲す）」という部分の叙述も特徴的である。元結は、沈千運らの詩文ではなく、彼らの「正直」「忠信」「仁讓」が称揚されて彼らの価値を認めるものが当世にいないことを慨嘆している。高い価値を有しながら見捨てられている存在を見だし、顕彰するという表現の構造は、後に述べるように元結の表現の基底的構造であり、序は、『篋中集』を契機として彼らの価値が認められることを願っているとも読めるのである。

第四節 『篋中集』と「系楽府十二首」

『篋中集』の作品が、不遇な状況にある士人の人生への悲哀や社会への懷疑の呈示という特色を持っていることについては、これまで繰り返し指摘されているところである^(注8)。

そうした作品としては、沈千運（「感懷弟妹」「贈史修文」「濮中言懷」「山中作」）、王季友（「寄韋子春」）、于逖（「野外行」「憶兄弟」）、孟雲卿（「傷懷贈故人」）、張彪（「雜詩」「神仙」「北遊還酬孟雲卿」）、元季川（「山中曉興」）が挙げられ、二四首中の半分近くを占めている。その他の大部分は、別離の悲哀や、死別の悲しみをうたうものである。ただ、全てがこうした作品であるというわけではなく、隱者の自適の心境をうたう詩（元季川「泉上雨後作」「登雲中」）も含まれている。また、趙微明「回軍跛者」は、足が不自由となつてやつと辺境の守備の任を解かれ、故郷にたどり着くことだけを願う傷病者の姿を描いており、時代の犠牲となつてゐる人物をモチーフとした諷諭の作である。

『篋中集』は士人の悲哀感を詠じた作品が全てなのではないとすると、集中の作品はどのように解釈されるのであろうか。

『篋中集』が編纂された乾元三年以前の元結の詩作品は、孫望氏ならびに楊承祖氏の年譜によれば、「補樂歌十首」、「二風詩」一〇編、「閔荒詩」「系樂府十二首」、「石宮四詠」、が伝えられるのみである。このうち、『篋中集』の作品には、その表現の構造において「系樂府十二首」に近似するものがあることが注目される。

例えば趙微明「回軍跛者」と同様のモチーフを持つものとしては、第一編第六章で扱った「系樂府十二首」中に、「貧婦詞」「去鄉悲」「農臣怨」といった作品を見いだすことができる。ここでは「回軍跛者」を取り上げて「去鄉悲」（卷二）と、表現の位相を比較してみよう。

既老又不全	既に老い	又全からずして
始得離辺城	始めて辺城を離るるを得たり	

一枝 仮枯木 一枝 枯木に仮り

歩歩向南行 歩み歩みて南に向かひて行く

05 去時日一百 去る時は日に一百なるに

来時一月程 来る時は一月の程なり

常恐道路旁 常に恐る 道路の旁

掩棄狐兔塋 狐兔の塋に掩棄せられんことを

所願死郷里 願ふ所は郷里に死せんことなり

10 到日不願生 到る日 生を願はず

聞此哀怨詞 此の哀怨の詞を聞き

念念不忍聽 念ひ念ひて 聴くに忍びず

惜無異人術 惜しむらくは 異人の術の

倏忽具爾形 倏忽として爾の形を具ふること無きを

(回軍跛者)

この「回軍跛者」は、足が不自由となり、辺城の守備を解かれて故郷へ向かう旅を続けている傷病者の独白が中心となっている。それに対して「去郷悲」の孤老の言葉は「乃言無患苦、豈棄父母郷（乃ち言ふ患苦無くんば、豈に父母の郷を棄てんやと）」（第七、八句）の二句であり、その他の句は、孤老を見つめる者の目から眺められた情景である。「回軍跛者」は、傷病者の意識の表白が、「所願死郷里、到日不願生（願ふ所は郷里に死せんことなり、到る日生を願はず）」（第九、一〇句）という痛々しく切ない願いへと収束している。一方、「去郷悲」は「無患苦、豈棄父母郷（患苦無くんば、豈に父母の郷を棄てんや）」という言葉に収束する。「去郷悲」のこの言葉はむろん困苦のない生活を望む思いや、故郷を棄てざるをえないつらさを含むものであるが、むしろ

論理性が表出しており、またそれは「仁恵誠所望（仁恵誠に望む所なり）」（第一〇句）と解釈されることによつて客体化され、孤老の心情そのものの描写は却つて弱められている感がある。痛々しい孤老の姿と言葉に触れた語り手は、こうした情況を生み出す社会のあり方に対する懷疑を述べて詩を結ぶのである。この時その視点は、孤老を離れて、彼らをそのような状態にしている政治のあり方へと向かつていることに注意したい。「去郷悲」は、政治のあり方への懷疑や批判、そして傍観者でしかない語り手の意識の自己表出が中心となっているのである。それに対して趙微明の作の、傷病者に対する「惜無異人術、倏忽具爾形（惜しむらくは異人の術の、倏忽として爾の形を具ふること無きを）」（第一四、一五句）という素朴な言葉には、哀憐の情が痛切に流露しており、その視線は常に対象に向けられている。「回軍跛者」は、対象に寄り添い、哀憐の心情を飾らずに率直に記述するという点において「去郷悲」を凌いでいよう。

不遇な士人の心情を表白する作品としては、「系樂府十二首」に、「賤士吟」「古遺歎」「下客謠」等を見いだすことができる。ここでは沈千運「濮中言懷」を取り上げ、「古遺歎」（卷二）と比較し、叙情の差異を明らかにする。

聖朝優賢良 聖朝 賢良に優^{あつ}くし

草沢無遺匿 草沢に遺匿無し

人生各有志 人生 各志有り

在余胡不激 余に在りて胡ぞ激しからざらんや

05 一生但区区 一生 但だ区区たり

五十無寸祿 五十にして寸祿無し

衰退当棄捐 衰退は当に棄捐せらるべく

貧賤招毀讟	貧賤は毀讟を招く
栖栖去人世	栖栖として人世を去らば
10 迹蹟日窮迫	迹蹟 日び窮迫せん
不如守田園	如かず 田園を守り
歲晏望豐熟	歲晏 豐熟を望むに
壯年失宜尽	壯年にして宜しきを失ひ尽くし
老大無筋力	老大にして筋力無し
15 始覚前計非	始めて前計の非なるを覺り
將貽後生福	將に後生の福を貽さんとす
童兒新学稼	童兒 新たに稼を学び
少女未能織	少女 未だ能く織らず
顧此煩知己	此を顧みて知己を煩はし
20 終日求衣食	終日 衣食を求む

(濮中言懷)

第一編第六章で検討したように、「古遺歎」は、不遇な士人の心情を詠じた作品である。一一回も用いられる「遺」字、繰り返される「所遺……」という句の背後には、不遇なままにうち捨てられている者の怨嗟がひろがっている。国家は人望のある有用な人材を在野にうち捨てたままにしておくはずはないのであるから、うち捨てられている者たちは国家にとって無用な者たちなのである、という自虐的ですからあるこの叙述の構造は、自らをうち棄てている者への怨嗟を際立たせている。自らの正しさを貫く者は結局江海に在らざるを得ない、という第九、一〇句の叙述は、天宝六載（七四七）の制挙の体験を背景としつつ、商余山中で閉塞の中にあつた時の元結

の心境をよく伝えるものとして読むことができた。

一方、沈千運の作は、冒頭の八句において、やはり元結と同様に、玄宗の治世、在野にはもはや残された人材はいないのだから、結局は自分も棄て去られるべき存在なのだということを述べている。しかし、元結が「遭」字を繰り返し、その怒りを露わにするのに対し、沈千運は自らについて語ってゆく。自らも激しい経世の志を抱いていたが、あくせくと生き、五〇になっても無官のまま貧賤の中にあるのだから、人々のそしりをうけるのしかたのないことであると、次第に自嘲の語気を帯びつつ自らの姿と意思とを語るのである。

沈千運の独白はさらに続く。第九句から第一二句は、田園における生活を選択したことをいう。第一三句から第一六句は、その時の自己について語る部分である。不遇のまま過ぎていった壮年の日々という認識が、経世の志を抱き続けていた人生への悔悟を呼び起こす。せめて後生の者が生活できるようにしたい、というその願いの言葉は率直で切なく、まだ一人前になっていない子どもたち、そして彼らのために友人に衣食を乞う自らを見つめる視線には悲哀がある。「濮中言懷」には、不遇な自己の心情が飾らぬまま率直に吐露されているのである。こうした表出のありかたにおいては、「回軍跛者」と「濮中言懷」は等しいといつてよいだろう。

このように、悲哀や怨嗟、不遇感の表白が中心となっている『篋中集』の作品は、人間の偽らざる心情が、その極限のレベルにおいて表出しているところに特色がある。まさしく元結が言う「尽歎怨之声（歎怨の声を尽くす）」（「系樂府十二首」序）ものである。では傾向が異なるとして挙げた元季川「泉上雨後作」はどうなのだろうか。

風雨蕩繁暑	風雨	繁暑を蕩し
雷息佳霽初	雷息	みて霽初佳し
衆峰帶雲雨	衆峰	雲雨を帯び

清氣入吾廬 清氣 吾が廬に入る

05 颯颯涼颯来 颯颯として涼颯来り

臨窺愜所囟 臨窺 囟る所に愜ふ

緑蘿長新蔓 緑蘿 新蔓長じ

裏裏垂坐隅 裏裏として坐隅に垂る

流水復簷下 流水 簷下に復し

10 丹砂発清渠 丹砂 清渠に発す

養葛為我衣 葛を養ひ 我が衣を為り

種芋為我蔬 芋を種え 我が蔬と為す

誰是畹与畦 誰か是れ畹と畦とならん

瀾漫連野蕪 瀾漫 野蕪に連なる

この作品は『篋中集』の作の中で唯一清新な風景描写を伴っている。第一句から第一〇句に描かれた、風雨によつて暑さははらわれ、雨が上がって晴れ始めた空間、さわやかな風、緑蘿、簷下に流れる水、といった清浄な形象がこの隠遁者の世界を彩っている。ここには悲哀はない。詩を構成しているのは、隠遁者の清らかな世界であり、自適のうちにある語り手の歓びである。この作品もまた「尽歎怨之声（歎怨の声を尽くす）」ものとして読むことができるであろう。

元季川の描いたこの世界は、また元結が求めていたものであつた。商余山にあつた頃の作品とされる「石宮四詠」（巻二）には、次のように隠者の自得した世界が展開されている。

石宮春雲白 石宮 春雲白し
白雲宜蒼苔 白雲 蒼苔に宜し
払雲踐石徑 雲を払ひ石徑を踐む
俗士誰能来 俗士 誰か能く来らん

(其二)

石宮夏水寒 石宮 夏水寒し
寒水宜高林 寒水 高林に宜し
遠風吹蘿蔓 遠風 蘿蔓を吹く
野客熙清陰 野客 清陰を熙ぶ

(其二)

石宮秋氣清 石宮 秋氣清し
清氣宜山谷 清氣 山谷に宜し
落葉逐霜風 落葉 霜風を逐ふ
幽人愛松竹 幽人 松竹を愛す

(其三)

石宮冬日暖 石宮 冬日暖かなり
暖日宜温泉 暖日 温泉に宜し
晨光静水霧 晨光 水霧静かなり
逸者猶安眠 逸者 猶ほ安眠す

(其四)

石宮は、山中の洞穴をいう。^(注9)しかし、元結が後に安史の乱を猗玗洞に避けた際、その洞穴を砮（石でできた郷）と名づけたことから分かるように、石宮は単なる洞穴ではなく、世俗から隔絶した別乾坤と解釈した方がよい。俗士は訪れることができず、野客、幽人、逸者が自適する世界なのである。四首には四季それぞれの清澄なイメージを伴う情景が、語り手の歎びを伴って描かれている。殊に「遠風吹蘿蔓、野客熙清陰（遠風蘿蔓を吹く、野客清陰を熙ぶ）」（其二）という句は、「泉上雨後作」の意境と重なるであろう。

第五節 諷諭による表現

『篋中集』の編纂された乾元三年、安史の乱によって下層の人々が塗炭の苦しみをなめる状況は各地に存在していたにもかかわらず、元結は、そうした状況を取り上げ、社会に対する強い戒めや忠告を表明した諷諭の詩を制作していない。第一編第三章に挙げた「哀丘表」に明らかのように、時代を確かに見つけているにもかかわらず、不遇な士人や人々をモチーフとした諷諭の詩歌は制作されてはいないのである。

例えば乾元三年の作品「与党評事」（卷二）は、序に「大理評事党曄、好閑自退。元子愛之、作詩贈焉。（大理評事党曄、閑を好みて自ら退く。元子之を愛し、詩を作りて焉に贈る）」とあるのによれば、党曄が官を退いたことに対する元結の心情を伝えたものである。

自顧無功勞	自ら顧みれば功勞無きに
一歳官再遷	一歳 官再遷す
跼身班次中	身を班次の中に跼し
常窃愧恥焉	常に窃かに愧恥す

05 加以久荒浪 加へて以て久しく荒浪し

昏愚性頗全 昏愚 性頗る全し

未知在冠冕 未だ知らず 冠冕に在りては

不合無拘牽 合に拘牽無かるべからざるを

勤強所不及 勤強して及ばざる所

10 於人或未然 人に於ては或は未だ然らず

豈忘惠君子 豈に忘れんや 惠君子

恕之識見偏 之が識見の偏れるを恕するを

且欲因我心 且く我が心に因りて

順為理化先 順を理化の先と為さんと欲す

15 彼云万物情 彼は云ふ 万物の情

有願随所便 便とする所に随ふを願ふ有りと

愛君得自遂 愛す 君が自ら遂ぐるを得たるを

令我空淵禪 我をして空しく淵禪たらしむ

詩は、まず第一、二句で、自らが功績もないのに官が右金吾兵曹参軍撰監察御史、監察御史裏行、水部員外郎兼殿中侍御史と遷ったことを謙遜しつつ述べ、続いて、自らの暗愚の性は官僚世界にはふさわしいものではなく、勤しんでも及ばぬ事ばかりだが、そんな自分を許容してくれる君子もいた、と官僚世界における自身について語る（第四句～第一二句）。そして官を退く党評事の生き方に対して思いをいたさざるをえない、と退隱への思いを述べる（第一一句～第一八句）。元結の心情がいささかの謙遜を含みつつ展開されているが、この詩は党評事

の生き方に感じて彼に与えたものであつて、官人同士の贈答詩である。

この頃にかかれた作品には、この他「与党侍御」（卷二）「寄源休」（卷二）「与灊溪隣里」（卷二）「喻灊溪鄉旧遊」（卷二）がある。しかし、これらの作品にも明白な強い諷諭の意図を窺うことはできない。

なぜ、諷諭の作は制作されなかったのか。この問題については、『篋中集』編纂の二年後、宝応二年（七六三）制作の「酬孟武昌苦雪」（卷二）詩が示唆を与えてくれるようである。この時、元結は母の老いをもって官を辞し、武昌の樊水（現在の湖北省鄂城市の樊谿）のほとりに家し、漫叟と号していた。

積雪閑山路 積雪 山路を閑ぎ

有人到庭前 人有りて庭前に到る

云是孟武昌 云ふ 是れ孟武昌

令献苦雪篇 苦雪の篇を献ぜしむと

5 長吟未及終 長吟 未だ終はるに及ばざるに

不覺為悽然 覺えず 為に悽然たり

古之賢達者 古の賢達の者

与世竟何異 世と竟に何れか異なる

不能救時患 時患を救ふ能はずんば

10 諷諭以全意 諷諭して以て意を全くす

知公惜春物 知る 公の春物を惜しむは

豈非愛時和 豈に時の和するを愛するに非ざらんや

知公苦陰雪 知る 公の陰雪に苦しむは

傷彼災患多

彼の災患の多きを傷めばなるを

15 姦兇正驅馳

姦兇 正に驅馳すること

不合問君子

合に君子に問ふべからず

林鶯与野獸

林鶯と野獸と

無乃怨於此

乃ち此を怨むこと無からんや

兵興向九歲

兵興りて九歳に向んとすれば

20 稼穡誰能憂

稼穡 誰か能く憂へんや

何時不發卒

何れの時か卒を發せざる

何日不殺牛

何れの日か牛を殺さざる

耕者日已少

耕す者 日に已に少く

耕牛日已希

耕牛 日に已に希なり

25 皇天復何忍

皇天 復た何ぞ忍びんや

更又恐斃之

更に又之を斃さんことを恐る

自經危乱来

危乱を経てより来

触物堪傷歎

触物 傷歎するに堪へたり

見君問我意

君我に問ふ意を見れば

30 只益胸中乱

只だ胸中の乱れを益す

山禽飢不飛

山禽 飢ゑて飛ばず

山木凍皆折

山木 凍りて皆折る

懸泉化為冰

懸泉 化して冰と為り

寒水近不熱 寒水 近づくも熱あたたかならず

35 出門望天地 門を出でて天地を望めば

天地皆昏昏 天地 皆昏昏たり

時見双峰下 時に見る 双峰の下

雪中生白雲 雪中 白雲を生ずるを

この詩は、孟彦深から届けられた詩に酬いたものである。孟彦深、字士源は、天寶二年（七四三）、進士の第に登り、その後武昌令となり、元結と親交を結んでいた。孟彦深が元結に送った「元次山居武昌之樊山新春大雪以詩問之詩」（『全唐詩』卷一九五）は次のような作品である。

江山十日雪 江山 十日の雪

雪深江霧濃 雪深くして江霧濃し

起来望樊山 起来 樊山を望めば

但見群玉峰 但だ群玉の峰を見る

05 林鶯卻不語 林鶯 卻て語らず

野獸翻有蹤 野獸 翻て蹤有り

山中応大寒 山中 応に大いに寒かるべし

短褐何以完 短褐 何を以て完くせん

皓氣凝書帳 皓氣 書帳に凝り

10 清著釣魚竿 清らかにして釣魚の竿に著く

懷君欲進謁 君を懷ひ進謁せんと欲するも

谿滑渡舟難 谿滑にして舟を渡すこと難し

前半の六句は、降雪の情景を描き、後半は樊山の様子を想像して元結を思いやり、拝謁したいものの船で渡つてゆくこともできないと述べて結んでいる。元結の作の第一七、一八句は、孟彦深の第五、六句を踏まえたものである。鶯も啼かず、野の獣たちの足跡が残るばかりであるという孟彦深の作は、単に雪中の情景を描いただけのようであるが、元結はここに諷諭の意を読み、「知公惜春物、豈非愛時和（知る公の春物を惜しむは、豈に時の和するを愛するに非ざらんや）」と、孟彦深は季節のめぐりが順調で天下が平和であることを願っているとし、雪に苦しむのは、災いが多く凶悪な者どもが跋扈していることを愁えているのだと解釈するのである。第七句から第一〇句は、孟彦深の作品を諷諭であるとする根拠を述べるものである。この句が端的に示すように、元結にとって諷諭は、時代の弊害を除くことができない状況にある者が、社会に対する戒めや忠告の思いを全うするときに不可避免的に選択される表現の営みであった。孟彦深は、凶悪な者たちが世界に跋扈し黎民が塗炭の苦しみの中にある時代の状況を除くことができないために、その心意を諷諭の表現を用いて述懐していると言うのである。第一編第六章で検討した「系樂府十二首」もその典型である。また、広徳二年（七六四）には、遠く道州の地にあって有名な「春陵行」が制作されている。この諷諭の作は、後に明らかにするように、刺史として道州の人々の疲弊を救う術を模索する中で書かれたものである。

乾元三年（七六〇）、元結は右金吾兵曹参軍撰觀察御史として、史思明の南進を防ぎ、時代の弊害を除くべく身を粉にしていた。この時、諷諭の詩歌をあえて書かねばならない必然性はなかったのである。

この諷諭についての言及は、『篋中集』編纂の目的を考察するうえでも示唆を与えてくれる。爛熟から戦乱へという時代の大きなうねりの中で、不遇な詩友達とそのかけがえのない文学が埋もれてゆくことは大きな時弊で

あり、元結は改める術を持たぬ者たちに代わって、その文学を顕彰し、彼らがふさわしい評価を受けるようにすることによって、時代の弊害を改めようとしたのであると考えることができるであろう。元結という諱の使用が示すように、それは真摯なる営みであったのである。

おわりに

『篋中集』に採られているのは、時弊を救う立場にない下層の士人たちの哀怨と歎びを尽くした作品である。このことは「系楽府十二首」序に「尽歎怨之声者、可上感於上、下化於下。故元子系之。（歎怨の声を尽くす者は、以て上は上を感じしめ、下は下を化すべし）」とあるように、これらの作品が為政者を感動させ、あるいは教化のはたらきをするものとして位置づけられていたことを表しているであろう。元結は彼らの作品を風雅の伝統を継ぐものとして愛惜し、顕彰しつつ世に伝えようとしたのであり、官にあった元結にとって、それは時弊を救う一つの真摯な行為であったと言いうことができよう。そして『篋中集』という命名には、「系楽府十二首」がそうであったように、これらの作品が親故からやがては為政者に届けられて「上を感じしめ」、文箱の中に納められて愛惜されること、則ち不遇な詩友達が君主との幸福な邂逅を果たしてほしいという願いがこめられているであろう。「系楽府十二首」との相違は、自らの哀怨や歎びを尽くした詩歌が採詩の官に採取されるのを願うのではなく、今や官にある元結があたかも歌謡を採取し編集する採詩の官のごとき位置に立っていることである。『篋中集』の編纂に、不遇な詩友たちの文学が正統なものであることを示し、当代流行の文学を戒める意図があったことは無論である。しかし『篋中集』編纂の目的は、集団の文学的活動として尚古派の文学観を世に問うことではなく、沈千運を初めとする詩友たちの歎びや悲しみ、怨みを尽くした詩を採取して伝え、その営みを通して彼らがふさわしい評価を得ることにあった、と解釈することができる。

注

(1) 『大唐新語』卷六には次のようにある。

他日謂頌曰、前朝有李嶠、蘇味道、時謂之蘇李。朕今有卿及李乂、亦不謝之。卿所制文誥、朕自識之。自今以後、進書皆須別錄一本、云臣某撰。朕便留篋中也。至今為故事。

他日頌に謂ひて曰はく、前朝に李嶠、蘇味道有り、時に之を蘇李と謂ふ。朕今卿及び李乂有り、亦た之に謝せず。卿制する所の文誥は、朕自ら之を識る。今より以後、進書は皆須らく別に一本を録し、臣某撰すと云ふべし。朕便ち篋中に留めん、と。今に至るも故事と為す。

(2) 陶文鵬「元結和《篋中集》」(喬象鍾・陳鉄民主編『唐代文学史』人民文学出版社、一九九五年)五八一頁。

(3) 陶文鵬氏、前掲論文。五八一頁。

(4) 川北泰彦「元結に於ける文学的軌跡」(目加田誠博士古稀記念中国文学論集編集委員会編集『目加田誠博士古稀記念中国文学論集』竜溪書舎、一九七四年)二六六―二七〇頁。

(5) 楊承祖著『元結研究』(国立編訳館、二〇〇二年)九六頁。

(6) 伊藤正文著『建安詩人とその伝統』(創文社、一九六二年)三九六頁。

(7) 聶文郁注解『元結詩解』(陝西人民出版社、一九八四年)一五八頁。

(8) 例えば、王運熙「元結《篋中集》和唐代中期詩歌的復古潮流」(『復旦大学報(社会科学版)』一九七八年、第二期、六八頁)に、「他們的詩篇内容、多悲苦之詞、傷悼自身的困頓不遇、……(彼らの詩編の内容は、悲しく痛ましい言葉が多く、自らの困窮と不遇を悲しみ傷み、……)」とある。また、中国科学院文学

研究所中国文学史編写組編写『中国文学史』（人民文学出版社、一九六二年、四一三頁）は、「《篋中集》中有不少作品充滿着憂鬱憤慨、……（『篋中集』の多くの作品には憂鬱や憤慨が満ちており、……）」と指摘している。

（9）聶文郁氏、前掲書。一四七頁。聶氏は、「石室、石宮、一般指深山中的岩洞。（石室、石宮は、一般的に深山の洞窟を指す）」と解している。

第二章 「大唐中興頌」の成立

はじめに

元結の「大唐中興頌」（卷七）は、安史の乱によって失われた国都の回復と王朝の中興を称美した作であり、顔真卿の揮毫による浯溪「摩崖碑」として名高い。

しかしながら、この頌については、その序において、肅宗を称えて「大業盛徳」と言いながら、一方では「歌頌大業（大業を歌頌す）」とあり、「盛徳」の語を欠いていることに注目し、これを春秋の筆法であるとして、肅宗に対する批判の意図を読み取る解釈がなされている。また、この作品は頌、すなわち盛徳を称えるものであり、諷諭の意図がこめられているものではないともされている。

「大唐中興頌」が制作されたのは、上元二年（七六一）八月、両京が回復された至徳二載（七五七）から四年後であった。この頌が両京の回復をことほぎ、それを成し得た肅宗の盛徳と大業を称えることのみを意図して書かれたものであるとしても、両京回復直後ではなく、その四年後に制作された理由の検討が必要である。

元結は、対象を称美することによって世俗に対する戒めや忠告の意を述べることがある。「大唐中興頌」は、王朝の中興を称美したものであるが、これが制作されたのは、宦官李輔国が国権を恣にしていた時であった。そうであるとするれば、この「大唐中興頌」も、中興を成し遂げた王朝を称美するとともに、李林甫や楊国忠が専横を極め、国家が崩壊したこと、そして中興を願って君臣が心を一つにしていたことを思い出し、李輔国の如き奸臣を除き、賞罰が当を得ることを訴える諷諭の作として読めるのではあるまいか。

「大唐中興頌」は、元結の文学における諷諭のあり方を考える上で極めて示唆に富む作品である。本章では、

「大唐中興頌」をめぐって提示されている問題のうち、その制作の意図について改めて検討し、元結における諷諭の表現の特色を明らかにする。

第一節 「大唐中興頌」の解釈をめぐって

涪溪の摩崖に刻された「大唐中興頌」は、次のような作品である。

天宝十四年^(注1)、安祿山陷洛陽、明年、陷長安。天子幸蜀、太子即位於靈武。明年、皇帝移軍鳳翔。其年復兩京、上皇還京師。於戲、前代帝王有盛徳大業者、必見于歌頌。若今歌頌大業、刻之金石、非老於文学、其誰宜為。頌曰、

天宝十四年、安祿山洛陽を陥れ、明年長安を陥る。天子蜀に幸し、太子靈武に即位す。明年、皇帝軍を鳳翔に移す。其の年兩京を復し、上皇京師に還る。於戲、前代の帝王盛徳大業有る者は、必ず歌頌に見はさる。今大業を歌頌し、之を金石に刻するがときは、文学に老けたるに非ずんば、其れ誰か宜しく為すべけんや。頌に曰はく、

噫嘻前朝	孽臣姦驕	為僭為妖	噫嘻前朝	孽臣姦驕し	僭を為し妖を為す
辺将騁兵	毒乱国経	群生失寧	辺将兵を騁せ	国経を毒乱し	群生寧きを失ふ
大駕南巡	百僚竄身	奉賊称臣(第一節)	大駕南巡し	百僚身を竄し	賊を奉じて臣と称す
天将昌唐	繫睨我皇	匹馬北方	天将に唐を昌んにせんとし	繫に我が皇を睨 ^み	匹馬北方よりす
独立一呼	千麾万旗	戎卒前駟	独立して一たび呼べば	千麾万旗	戎卒前に駟く

我師其東 儲皇撫戎 蕩攘羣兇（第二節） 我が師其れ東し 儲皇戎を撫し 羣兇を蕩攘す

復復指期 曾不逾時 有国無之 復た復すること期を指し 曾て時を逾えず 国有りてより之無し

事有至難 宗廟再安 二聖重歛 事に至難有るに 宗廟再び安んじ 二聖重ねて歛ぶ

地關天開 蠲除祲災 瑞慶大来（第三節） 地關け天開けて 祲災を蠲除し 瑞慶大いに来る

凶徒逆儔 涵濡天休 死生堪羞 凶徒逆儔 天休に涵濡し 死生羞づるに堪へたり

功劳位尊 忠烈名存 沢流子孫 功劳は位尊く 忠烈は名存し 沢は子孫に流はる

盛徳之興 山高日昇 万福是膺（第四節） 盛徳の興ること 山高く日の昇るがごとく 万福是れ膺く

能令大君 声容_{（注）} 不在斯文 能く大君をして 声容_{（注）}たらしむるは 斯の文に在らざらんや

湘江東西 中直活溪 石崖天齊 湘江東西し 中活溪に直り 石崖は天と齊し

可磨可鑄 刊此頌焉 何千万年（第五節） 磨くべく鑄るべし 此の頌を刊めば 何ぞ千万年のみならんや

上元二年秋八月撰 大暦六年夏六月刻

四言四五句、毎句押韻、三句ごとに換韻する頌であり、内容からは九句を一節とした五節構成をとっている。

第一節は、安史の乱以前の状況と乱の発生、玄宗の蒙塵とその時の百官の状況を端的に述べる。元結は、安史の乱前の時期を太平の御代とするのではなく、李林甫等「孽臣」が国権を弄び、道理にはずれたことを行い、様々な災いをもたらしていた時代として捉えているのである。大乱の背後に国権を弄ぶ者たちの存在を見ていることに注目される。第二、三節は、肅宗が人々を糾合して瞬くうちに両京を回復したことを言い、続いて第四節では賞罰が厳正に行われたことを称える。そして第五節には、この頌を活溪に刻み、千万年の未来に伝えたいと、頌を活溪に刻むこととその意図が述べられる。

李建崑氏は、第五節を「湘江東西」以降の六句としている。しかし、この頌が九句を一節としていること、ま

た「能令大君、声容^注云、不在斯文」の三句は、明らかにそれ以前の頌文を「斯文」として対象化する視点に立っており、表現の相を異にしていることからしても、やはり末九句を第五節としたほうがよい。

前野直彬^{注3}氏は、この頌には肅宗を批判する言葉は見あたらないとし、肅宗に対する批判を読み取る宋代以来の解釈を「宋人らしい大義名分論の上に立った考え方」であるとして退ける。氏はこの頌を、特に肅宗批判を意図した諷諭の作ではなく、唐王朝の中興を称えた文であるとするのである。

また、星川清孝^{注4}氏も同じ立場に立つ。序に「盛徳大業」とあり、続いて「大業」と言い、「盛徳」の語を欠くことを以て春秋の筆法であるとするについては、「文字の末にとらわれた見方である。まして頌文中に『盛徳の興ること、山の高く日の昇るがごとし。』とあつて、盛徳あることを頌しているのであるから、この文が譏りを含んでいるとはいえないのである。」と述べる。

確かに両氏の指摘するごとく、この頌は中興を称美するものとして読むことができる。肅宗に盛徳があればこそ人々を糾合し、両京を回復することが可能となったのであり、この頌が肅宗の大業と盛徳を称えていることは明らかである。

この頌が両京回復後四年を経て制作されたことについて、顧福生^{注5}氏は「雖然安史之乱尚未完全平息、但賊勢已挫、戦局好転、对唐朝的振興仍寄比較樂觀的希望。……体现謳歌統一、期待中興的愛国精神、……（安史の乱はまだ完全には終息していなかったが、賊の勢力はすでに挫かれていたから、唐王朝の再興に対しては比較的樂觀的な希望を抱いているのである。……統一を謳歌し、中興を期待する愛国の精神を具体的に示しており、……）」と、安史の乱の戦局がやや好転した状況の中で、唐王朝の再興に比較的樂觀的な希望を抱き、中興を期待する愛国の精神を表明したものとして解釈している。しかしながら、上元二年、元結は荊南の兵を領して九江にあったのであり、例えば同年に書かれた「左黄州表」（卷七）には、次のようにある。

天下兵興、今七年矣。河淮之北、千里荒草、自関已東、海浜之南、屯兵百万、不勝征税。

天下兵興りて、今に七年なり。河淮の北は、千里荒草なり、関より已東、海浜の南に、屯兵百万あり、征税に勝へず。

この記述によれば、少なくとも当時の元結が、中興を称美するような時勢にあるとしていなかったことは確かである。「大唐中興頌」が上元二年に制作された理由はやはり他に求めねばならないだろう。

楊承祖^(注6)氏は、宋代以降の指摘をふまえて「盛徳大業」の句を春秋の筆法であるとし、この頌を肅宗批判の作であると読み、さらに両京回復四年後に書かれたことについて次のように解釈している。

氏は、上元元年（七六〇）秋七月、興慶宮にあった上皇を西内（太極宮）に移したことに着目し、「他雖然不反對太子即位靈武、却会与顔真卿一樣要譴責肅宗的不孝。魯公以上表請安的方式表達嚴正的抗議、元結則用『春秋』書法作了更深沈的譏貶^(注7)。（彼は太子が靈武で即位したことに反対はしなかったが、顔真卿と同様に、肅宗の不孝を譴責しようとしている。顔真卿は上表して上皇の安否を問うという方法で厳しい抗議を表明し、元結は『春秋』の筆法によって厳しく譏ったのである）」と、元結が譏ったのは肅宗の即位ではなく、上皇を西内に移したというその不孝であり、意図するところは顔真卿の抗議と同一であった、とするのである。氏はまたこのことを以て後に顔真卿が「大唐中興頌」を揮毫したことの根拠とする。この論は「大唐中興頌」が両京回復以後四年を経て制作されたことに一つの解釈を与えている。頌が書かれたのが上皇の西内移居から一年後であったことについては、当時、元結が呂諲の幕府にあったためとしている。しかしながら、上元元年には『篋中集』も編まれており、「大唐中興頌」が顔真卿の肅宗譴責と相前後して書かれなかった理由は他にあったとする可能性を否定することはできないであろう。

第二節 制作の背景

上皇の西内（太極宮）移居について、『旧唐書』卷九、本紀第九「玄宗下」には、次のようにある。

乾元三年七月丁未、移幸西内之甘露殿。時閹宦李輔国離間肅宗。故移居西内。高力士、陳玄礼等遷謫、上皇寢不自憚。

乾元三年七月丁未、移りて西内の甘露殿に幸す。時に閹宦李輔国肅宗を離間せんとす。故に居を西内に移す。高力士、陳玄礼等遷謫せられ、上皇寢く自ら憚らず。

乾元三年は、すなわち上元元年（四月己卯改元）である。この処置は、興慶宮にあった上皇を側近の高力士や陳元礼等から引き離すものであった。同じく卷一〇、本紀第一〇「肅宗」は、次のように記す。

丁未、上皇自興慶宮移居西内。丙辰、開府高力士配流巫州、内侍王承恩流播州、魏悦流溱州、左竜武大將軍陳玄礼致仕。

丁未、上皇興慶宮より西内に移居す。丙辰、開府高力士巫州に配流せられ、内侍王承恩播州に流され、魏悦溱州に流され、左竜武大將軍陳玄礼致仕す。

また、この事件の背後にいたとされる李輔国の伝（『旧唐書』卷一八四）には次のように言う。

上皇時召伶官奏樂、持盈公主往來宮中。輔国常陰候其隙而間之。上元元年、上皇嘗登長慶樓、与公主語、劍

南奏事官過朝謁、上皇令公主及如仙媛作主人。輔国起微賤、貴達日近、不為上皇左右所礼、慮恩顧或衰、乃潜画奇謀以自固。因持盈待客、乃奏云、南内有異謀。矯詔移上皇居西内、送持盈於玉真觀、高力士等皆坐流竄。

上皇時に伶官を召して樂を奏せしめ、持盈公主宮中に往来す。輔国常に陰かに其の隙を候ひて之を聞せしめんとす。上元元年、上皇嘗て長慶楼に登り、公主と語る。劍南の奏事官過りて朝謁し、上皇公主及び如仙媛をして主人と作さしむ。輔国微賤より起こり、貴達の日近く、上皇の左右の礼する所と為らず、恩顧或は衰ふるを慮り、乃ち潜かに奇謀を画して以て自ら固くす。持盈客を待するに因りて、乃ち奏して云へらく、南内に異謀有り、と。矯詔して上皇を移して西内に居らしめ、持盈を玉真觀に送り、高力士等皆坐して流竄せらる。

以上の記述によれば、上元元年七月丁未（一九日）、李輔国が自らの恩顧の衰えを懼れ、劍南の奏事官の接待を口実に、詔を矯り、上皇を西内に遠ざけ、さらに関係の人物を退けたということになる。

この事件が起こるやいなや、翌八月哉生魄（一六日）、顔真卿は百官を率いて上表し、上皇の様子を問うた。

これは上皇の西内移居に反対の意思表示であった。顔真卿は、李輔国に憎まれ、後に蓬州長史に左遷されている。『旧唐書』卷一二八、顔真卿伝は次のように記す。

李輔国矯詔、遷玄宗居西宮、真卿乃首率百僚上表請問起居。輔国惡之、奏貶蓬州長史。

李輔国矯詔し、玄宗を遷して西宮に居らしむるや、真卿乃ち首として百僚を率ゐて上表して起居を問はんことを請ふ。輔国之を惡み、奏して蓬州長史に貶せしむ。

一方、顔真卿自身は「鮮于氏離堆記」（『顔魯公文集』卷一二）において、「上元之歲、秋八月哉生魄、猥自

刑部侍郎、以言事忤旨、…（上元の歳、秋八月哉生魄、猥りに刑部侍郎より、事を言ふを以て旨に忤ひ、…）」と述べ、刑部侍郎の立場から発言したことが左遷の原因だったとしている。しかし、永泰二年（七六六）、直諫の道をひらくことを訴えて代宗に奉った疏「奏百官論事疏」（『顔魯公文集』卷一）では、次のように言う。

蓋其所從來者、漸矣。自艱難之初、百姓尚未彫弊、太平之理、立可便致。属李輔国用權、宰相專政、遞相姑息、莫肯直言。大開三司、不安反側。逆賊散落、將士北走、党項合集、土賊至今為患。偽將更相驚恐、因思明危懼、扇動却反。又今相州敗散、東都陷沒。先帝由此憂勤、至於損壽。臣每思之、痛切心骨。

蓋し其の従りて来る所の者は、漸なり。艱難の初めよりして、百姓は尚ほ未だ彫弊せず、太平の理、立ちどころに便ち致すべし。属李輔国權を用ゐ、宰相政を専らにし、遞ひに相姑息し、肯へて直言する莫し。大いに三司を開くも、反側に安んぜず。逆賊散落し、將士北走し、党項合集し、土賊今に至るも患を為す。偽將更相驚恐し、思明の危懼に因りて、扇動却反す。又今相州敗散し、東都陷沒す。先帝此に由りて憂勤し、壽を損ふに至る。臣毎に之を思ひ、痛み心骨に切す。

ここでは、李輔国や宰相が權柄を専らにしたため、政治がその場しのぎのものとなり、誰も直言する者がなくなり、内外の憂患がもたらされたことを言い、肅宗はこのために壽命を縮めることとなったと指摘し、自らは痛恨の極みであったと明言している。上皇の様子を問うという顔真卿の行為は、李輔国らが權力をほしいままにしている状況を認識しつつ行われた、やむにやまれぬものであったと判断される。顔真卿は肅宗を不孝たらしめた原因を見据えていたのである。

当時、李輔国の專横はすさまじく、上元二年八月には刑部尚書を拝し、さらに宰相の位を冀い、僕射の裴冕を動かそうとしたものの、裴冕は、「初無此事。吾臂可截、宰相不可得也。（初めより此の事無し。吾が臂は截つ

べくも、宰相は得べからざるなり」と述べたという話（『旧唐書』卷一八四）も伝えられている。のちには禁軍を掌握し、制勅はすべて彼から出るという状態であったと言われる。

両京回復後すでに四年を経過したこの時期、しかも李輔国の専横が著しい中で制作された「大唐中興頌」が、もしも時代に迎合した単なる王朝称美の言辞でしかなかったとしたら、それは顔真卿の立場とは相容れないこととなり、彼がこの頌を高く評価することは考えられない。また、「大唐中興頌」は、上皇の西内移居から一年あまりが経過して制作されている。もしこの頌が単に肅宗の不孝を批判するものであったとすれば、顔真卿にとつてそれは遅きに失したということになるであろう。

「奏百官論事疏」から窺われるように、時代の本質を見据えていた顔真卿が「大唐中興頌」を高く評価し揮毫したのは、彼が、元結もまた上皇の西内移居という表層的な事件の背後にある李輔国の専横を見据えていることを、この頌によって判断したからである、と考えることもできるであろう。

第三節 「時議三篇」の視座

両京回復後の政治状況に対する元結の認識を端的に示すのは、「大唐中興頌」の著される二年前の乾元二年（七五九）に肅宗に奉られた「時議三篇」（卷六）である。この「時議三篇」では、安史の乱が起こり、やがて両京が回復され、それ以降、乾元二年に至るまでの情勢について、正言をもって諫める論が展開されている。三編のうち、「時議上篇」は次のような作品である。

時之議者或相問曰、往年逆乱之兵、東窮江海、南極淮漢、西抵秦塞、北尽幽都。今趙衛之疆、悉為盜有、凶勇之徒在四方者、幾百余万。如屯守二京、從衛魁帥者不計。當時之兵、可謂強矣。當時人心、已不固矣。天子

独以数騎、僅至靈武、引聚余弱、憑陵強寇。頓軍岐陽、師及渭西。曾不踰時、竟摧堅銳、復兩京、逃降逆類、悉收河南州郡。（第一段）

今河北隴陰、姦逆尚余。今山谷江湖、稍多亡命。今所在盜賊、屢犯州郡。今天下百姓、咸輟流亡。今臨敵將士、多喜奔散。今賢士君子、不求任使。（第二段）

天子往在靈武、至于鳳翔。無今日兵革、而能勝敵。無今日禁制、而無亡命。無今日威令、而盜賊不起。無今日財用、而百姓不亡。無今日封賞、而將士不散。無今日朝廷、而人思任使。何哉。豈天子能以弱制強、不能以強制弱。豈天子能以危求安、而忍以未安忘危。（第三段）

時之議者或相對曰、此非難言。甚易言矣。天子往年悲恨陵廟為凶逆傷汚、怨憤上皇忽南幸巴蜀、哀傷宗戚多見誅害、驚惶聖躬動息無所。是以勤勞不辭、親撫士卒、与人權位、信而不疑、渴聞忠直、過則喜改。如此、所以能以弱制強、以危求安。（第四段）

今天子重城深宮、燕私而居、冕旒清晨、纓佩而朝。太官具味、當時而食、太常修樂、和声而聽。軍國機務、參詳而進、万姓疾苦、時或不聞。而廐有良馬、宮有美女。輿服礼物、日月以備、休符佳瑞、相繼而有。朝廷歌頌盛德大業、四方貢賦尤異品物。公族姻戚、喜荷帝恩、諧臣戲官、怡愉天顏。而文武大臣、至於公卿庶官、皆權位爵賞、名實之外、自己過望。此所以不能以強制弱、忍以未安忘危。（第五段）

若天子能視今日之安如靈武之危、事無大小、皆若靈武、何寇盜強弱可言。当天下日無事矣。（第六段）

時の議する者或は相問ひて曰はく、往年逆乱の兵、東のかた江海を窮め、南のかた淮漢を極め、西のかた秦塞に抵り、北は幽都を尽くす。今趙衛の疆は、悉く盜の有するところと為り、凶勇の徒四方に在る者は、幾ど百余万たり。二京に屯守し、魁帥に従衛する者のごときは計らず。當時の兵、強しと謂ふべし。當時の人心、已に固ならず。天子独り数騎を以て、僅かに靈武に至り、余弱を引聚し、強寇に憑陵す。軍を岐陽に頓するや、師渭西に及ぶ。曾て時を踰えず、竟に堅銳を摧き、兩京を復し、逆類を逃降せしめ、悉く河南の

州県を収む。(第一段)

今河北隴陰、姦逆尚ほ余る。今山谷江湖、稍く亡命多し。今所在の盜賊、屢州県を犯す。今天下の百姓、咸転た流亡す。今敵に臨むの將士、多く奔散するを喜ぶ。今賢士君子、任使するを求めず。(第二段)

天子往に靈武に在り、鳳翔に至る。今日の兵革無くして能く敵に勝ち、今日の禁制無くして亡命無く、今日の威令無くして、盜賊起こらず。今日の財用無くして、百姓亡せず。今日の封賞無くして、將士散ぜず。今日の朝廷無くして、人任使せんことを思ふ。何ぞや。豈に天子能く弱を以て強を制するも、強を以て弱を制する能はざるか。豈に天子能く危を以て安を求むれども、忍びて未だ安んぜざるを以て危を忘るるか、と。

(第三段)

時の議する者或は相對へて曰はく、此れ言ひ難きに非ず。甚だ言ひ易し。天子往年陵廟凶逆の為に傷汚せらるるを悲恨し、上皇の忽ち南のかた巴蜀に幸するを怨憤し、宗戚の多く誅害せらるるを哀傷し、聖躬の動息所無きに驚惶す。是を以て勤勞して辞せず、親しく士卒を撫し、人に權位を与へ、信じて疑はず、忠直を聞くを渴^{ねが}ひ、過てば則ち改むるを喜ぶ。此くのごときは、能く弱を以て強を制し、危を以て安きを求むる所以なり。(第四段)

今天子重城深宮に燕私して居り、冕旒清晨、纓佩して朝す。太官味を具へ、時に当たりて食らひ、太常樂を修め、声を和して聴く。軍国の機務は、參詳して進め、万姓の疾苦は、時に或は聞せず。而して厩に良馬有り、宮に美女有り。輿服礼物は、日月以て備はり、休符佳瑞は、相繼ぎて有り。朝廷は盛徳大業を歌頌し、四方は尤異の品物を貢賦す。公族姻戚は、帝恩を荷ふを喜び、諧臣戲官は、天顔を怡愉せしむ。而して文武の大臣より、公卿庶官に至るまで、皆權位爵賞、名実の外にして、自ら已に望に過ぐ。此れ強を以て弱を制する能はず、忍びて未だ安んぜざるを以て危を忘るる所以なり。(第五段)

若し天子能く今日の安きを視ること靈武の危きがごとくし、事大小と無く、皆靈武のごとくせば、何の寇

盗の強弱か言ふべけんや。当に天下日事無かるべし、と。（第六段）

「時之議者」とは、この「時議三篇」の上表文にある「興阜之説」の「興阜」、すなわち時勢について議論する下々の官吏を指す。第一段は、安祿山の乱が起こってから、肅宗が都を回復するまでのことを言う。安祿山の反乱軍の勢いはすさまじく、洛陽、長安の二都も占領され、人心は擾乱していたにもかかわらず、肅宗が残余の衆を率いるや、都を回復し、敵の勢力を挫き、逆賊を打ち破ったと言うのである。

続いて第二段では、「今」字を繰り返して、逆賊は未だ完全に掃蕩されていないにもかかわらず、人々は流民と化し、将兵は逃げてちりぢりとなり、賢人君子も仕えようとはしない、という現在の状況が語られる。

第三段は、肅宗が靈武から鳳翔に移った頃、人々が心を一つにし、反乱軍に立ち向かったことを言い、議する者たちは現在の状況に対して「天子は弱きを以て強きを制することができても、強きを以て弱きを制することができないとでもいうのだろうか。天子は危難の中にあつて安泰を求めることはできても、まだ安泰でないのに危難を忘れてしまうのだろうか」という疑問を提示する。以下、この疑問に答える形で論が展開する。

第四段は、「弱きを以て強きを制することができ、危難の中にあつて安泰を求めることができる」理由を述べる。肅宗が、唐王朝の陵と廟の汚されたことを恨み、上皇の蜀に蒙塵したことを憤り、王室の人々が殺害されたことを哀傷し、都を失ったことに驚き、勤労を厭わず、将兵を慰撫し、地位を賜って疑わず、忠誠、正直の言を聞き、喜んで過ちを改めたということこそ、その理由だと言うのである。

第五段は、「強きを以て弱きを制することができず、安泰でないのに危難を忘れてしまう」理由として、肅宗と朝廷の現在の状況を詳細に述べてゆく。肅宗は、宮殿深くにゆったりとして居り、正装して朝廷に御し、美食と音楽を享受している。軍国の大事も斟酌して上聞し、人々の苦しみも伝えられないことがある。名馬、美女、車輿、衣冠、儀仗、儀式のための品々も日を追って整えられ、瑞祥が次々に届けられ、朝廷では肅宗の偉大な徳

と中興の大業を頌える詩文が奉られる。四方から貢ぎ物が届き、王室の者たちは天子の恩にうるおい、天子は楽人や主君を楽しませる臣下に囲まれ、臣下は名実の伴わない地位や恩賞に浴している。こうしたことが、その理由だというのである。ここに「朝廷は盛徳大業を歌頌し」とあることからすると、当時、朝廷では肅宗の徳と中興をことほぐ詩歌が奉られていたが、元結にとつてそれらは否定すべきものであったことがわかる。このことから「大唐中興頌」は、ただ盛徳大業を頌えるのみの朝廷の歌頌とは異なる意図を持つものとして制作されたことが窺われる。

第六段は、肅宗に対して、かつて靈武において倦むことなく中興を期していた頃を思い起こすよう訴える部分である。

元結は、現在の王朝が上下ともに安逸に流れ、盛徳を称える言辞ばかりが献じられ、賞罰も当を失しているとし、いまだ世界は安泰ではないのに、危機を忘れているとする。そして、かつて靈武において倦むことなく中興を期していた頃を思い起こすよう訴えるのである。彼は、安史の乱の中で唐の興復に君臣が心を一つにし、その結果としての両京の回復に国家再興のイメージを見ているのである。

「時議中篇」は、士人たちが十分な爵位と奉禄を得て安定した状況にあり、天下のために身を危険にさらすことを避けるようになっていくことを言う。

士人共自謀曰、昔我奉天子、拒凶逆、勝敵則家国両全、不勝則家国両亡。所以生死決戦、是非極諫。今吾属名位已重、財貨已足。爵賞已厚、勤勞已極。天下若安、吾何苦哉。天下若不安、吾属外無仇讎相害、内無窮賤相追、何苦更当鋒刃以近死乎。何苦更忤人主以近禍乎。

士人共に自ら謀りて曰はく、昔我天子を奉じ、凶逆を拒むは、敵に勝てば則ち家国両ら全く、勝たざれば則ち家国両つながら亡べばなり。生死決戦し、是非極諫する所以なり。今吾が属は名位已に重く、財貨已に

足れり。爵賞已に厚く、勤勞已に極まれり。天下若し安んぜば、吾何ぞ苦しまんや。天下若し安んぜずんば、吾が属外に仇讎の相害する無く、内に窮賤の相迫ふ無ければ、何ぞ苦しみて更に鋒刃に当たりて以て死に近づかんや。何ぞ苦しみて更に人主に忤きて以て禍に近づかんや、と。

「時議上篇」で指摘されていた「文武大臣、至於公卿庶官、皆權位爵賞、名実之外、自己過望。此所以不能以強制弱、忍以未安忘危。（文武の大臣より、公卿庶官に至るまで、皆權位爵賞、名実の外にして、自ら已に望に過ぐ。此れ強を以て弱を制する能はず、忍びて未だ安んぜざるを以て危を忘るる所以なり）」ということについてのより詳細な分析が展開されているのである。

さらに、元結はこうした状況を招来してしまったのは、国家が「明」「信」を重んじすぎているからであるとし「蓋失於太明太信而然耳。（蓋し太明太信に失して然るのみ）」と言う。政治があまりに明瞭でありすぎると内情を隠そうとして偽りが生じるようになり、「信」を重んじすぎると相手を信頼しすぎることになり、そこに奸惡が存在するようになると指摘する。

夫太明則見其内情。將藏内情、則罔惑生焉、罔上惑下。能令必信、信可必矣。故太信焉、太信之中、至姦元惡、卓然而存。

夫れ太だ明なれば則ち其の内情を見^{あらは}す。將に内情を藏^{かく}さんとすれば、則ち罔惑生じ、上を罔ひ下を惑はす。能く必ず信ならしめんとせば、信必とすべし。故に太だ信あらば、太信の中、至姦元惡、卓然として存す。

上元二年の時代状況及びこの「時議上篇」「時議中篇」と「大唐中興頌」とを比較すると、その内容に明らか

な対応が見られることに気づく。

先に述べたように「大唐中興頌」が書かれた上元二年（七六一）八月は、上皇の西内移居からすでに一年あまりが経過していた。この間の宦官李輔国の専横は甚だしく、王朝の情況は安史の乱前の李林甫、楊国忠が国権を弄んだ頃を彷彿とさせるものとなっていた。それは、「大唐中興頌」に言う、「孽臣姦驕、為愾為妖。（孽臣姦驕し、愾を為し妖を為す）」という叙述に重なる。また「時議中篇」に言う巨悪が存在するようになるとの表現は、後日の李輔国のことを寓しているようでもある。

「大唐中興頌」の肅宗が両京を回復した記述は、「時議上篇」の「天子独以数騎、僅至靈武、……曾不踰時、竟摧堅銳、復兩京、逃降逆類、悉收河南州県。（天子独り数騎を以て、僅かに靈武に至り、……曾て時を踰えず、竟に堅銳を摧き、兩京を復し、逆類を逃降せしめ、悉く河南の州県を収む）」に相当する。「時議上篇」では続けて肅宗が今は宮城深くにあり、君臣が安逸に流れている現状が述べられる。さらに、兩京回復後の賞罰が宜しきを得ていたとする「大唐中興頌」の部分は、「時議上篇」の「文武の大臣より、公卿庶官に至るまで、皆権位爵賞、名実の外にして、自ら已に望に過ぐ。」という当を失した褒賞の現状、及び「時議中篇」の士人達の状況と対照することができる。

こうした対比をふまえると、「大唐中興頌」は、「時議上篇」にいう「盛徳大業を歌頌」する、時代に迎合した皮相な言辞と同一ではなく、かつての中興を称美することにより、それと対置される現実を浮かび上がらせ、李輔国のごとき姦臣を除き、兩京回復の時を想起し、賞罰が当を得るように訴える諷諭の作であると理解することができそうである。

しかし元結において、そもそも頌という様式、頌するという行為はこうした諷諭を可能とするものであったのか。

第四節 頌について

頌は神明に告するものであり、本来諷刺の意は含まれないものであったが、後には諷刺の意を寓する作品も著されており、頌という文体を根拠として一概に諷諭の意が込められていないとすることはできない。^(注8) 元結における頌という文体、そして頌するということは、如何なる意味を持つものであったのか。

元結には、「大唐中興頌」の外に、「虎蛇頌」（巻六）と題する頌がある。

猗玗子逃乱在^(注9)碣。南人云、猗玗洞中是王虎之宮、中碣之陰、是均蛇之林。居之三月、始知王虎如古君子、始知均蛇如古賢士。然哉、猗玗子奪其宮、王虎去而不回、猗玗子侵其林、均蛇去而不歸。借順惠讓、可作頌矣。

猗玗子乱を逃れて碣に在り。南人云へらく、猗玗洞中は是れ王虎の宮にして、中碣の陰は、是れ均蛇の林なり、と。之に居ること三月、始めて王虎は古の君子のごときを知り、始めて均蛇は古の賢士のごときを知る。然らんかな、猗玗子其の宮を奪ひ、王虎は去りて回らず、猗玗子其の林を侵し、均蛇去りて帰らず。順惠讓に借りて、頌を作すべし。

虎頌

猗 王虎

将何与方

方古太王

非不方于今

今也惠讓

虎頌

猗 王虎

将た何れか与に方べん

古の太王に方べん

今に方べざるには非ず

今や惠讓

不如王虎之心

王虎の心に如かざればなり

蛇頌

蛇頌

猗 均蛇

猗 均蛇

将何与儔

将た何れか与に儔せん

儔古延州

古の延州に儔す

非不儔于時

時に儔せざるに非ず

時也順讓

時や順讓

不如均蛇之為

均蛇の為に如かざればなり

元結は、天寶一五載（七五六）、安史の乱のために、一族を率いて猗玗洞（湖北省黄石市の東）に難を避けていた。この頌はその時期に制作されたものである。序によれば、この洞は王虎と均蛇の住むところであった。ところが元結が洞に入り込んで三箇月、王虎も均蛇も姿を現さなかった。そこで元結は、自らがその世界に入り込んだため彼らは姿を隠したと考え、王虎と均蛇のなかに当代の人々が失ってしまった「順讓」、「恵讓」といった価値を賦与し、この頌を制作したのである。頌では、王虎は、古の太王（古公亶父）のようであるとされ、そして均蛇は古の延州（季札）のともがらであると讃えられている。古公亶父について、『史記』巻四、周本紀には次のようにある。

古公亶父復脩后稷公劉之業、積德行義、国人皆戴之。薰育戎狄攻之、欲得財物、予之。已復攻、欲得地与民。民皆怒、欲戰。古公曰、有民立君、将以利之。今戎狄所為攻戰、以吾地与民。民之在我、与其在彼、何異。民

欲以我故戰、殺人父子而君之、予不忍為。乃与私属遂去豳、度漆沮、踰梁山、止於岐下。豳人举国扶老携弱、尽復歸古公於岐下。

古公亶父復た后稷・公劉の業を脩め、徳を積み義を行ひ、国人皆之を戴く。薰育・戎狄之を攻め、財物を得んと欲すれば、之を予ふ。已にして復た攻め、地と民とを得んと欲す。民皆怒り、戦はんと欲す。古公曰はく、民君を立つる有るは、將に以て之を利せんとするなり。今戎狄攻戦を為す所は、吾が地と民とを以てなり。民の我に在るは、其の彼に在ると、何ぞ異ならんや。民我を以ての故に戦はんと欲するも、人の父子を殺して之に君たるは、予為すに忍びず、と。乃ち私属と遂に豳を去り、漆・沮を度り、梁山を踰え、岐の下に止まる。豳人国を挙げ老を扶け弱を携へ、尽く復た古公に岐の下に歸す。

古公亶父は、戦争によつて黎民の命が失われることを憂え、戎狄が財物を望めばそれを与え、地と民とを望めば一族の者を引き連れ豳の地を去り、岐山のふもとに移つた王であつた。また、延州、すなわち春秋時代、呉王寿夢の第四子、延陵の季札は、国を逃れ去つて王位を最後まで固辞した人物であつた。（『史記』卷三一、呉太伯世家）

元結は、王虎と均蛇に心動かされ、古の古公亶父や季札に比肩する「惠讓」や「順讓」といった価値を賦与して称美するのである。しかしこの頌においては、同時に「今也惠讓、不如王虎之心。（今や惠讓、王虎の心に如かざればなり）」「時也順讓、不如均蛇之為。（時や順讓、均蛇の為に如かざればなり）」という句が示すように、「順讓」「惠讓」を失い、安史の乱によつて混乱を極める現実が対置されており、読者はこの頌を通してその現実を認識せざるを得ない。対象を称美することによつて却つて現実を浮かび上がらせた「虎蛇頌」は、ここに諷諭の作として成立しているのである。

楊承祖氏は、「『虎蛇頌』仍是抱持諷世的精神、但並未直接反映戦乱和時局^(注10)。（「虎蛇頌」は世俗を諷刺する

精神を持つが、しかしながらまだ直接に戦乱と時局を反映してはいない」と述べ、諷諭の精神が見られるものの、直接には時勢を反映してはいないと解釈している。しかし、この頌が制作された天宝一五載、玄宗の第一皇子であった永王璘は異志を抱き、江陵の地に拠って兵を集めていたのである。延陵の季子の、最後まで王位に就くことを肯んぜず「讓」を貫いた姿は、異志を抱いた永王璘をその負の像として見事に浮き上がらせているようである。

また、古公亶父について、頌は、戎狄に惜しみなく財物を与えたことを「恵」と言い、属人を率いて豳を去つたことを指して「讓」と讃えている。この古公亶父の「恵讓」は、異民族の安祿山に対して惜しめない恩寵を与え、彼が叛くや、慌ただしく蜀に蒙塵した玄宗の姿を負の像として想起させるであろう。表層的な構造の皮肉な一致と内実の千里の径庭、現実の姿が諷諭の筆によって浮かび上がる。それがこの「虎蛇頌」なのである。

こうした表現の形は、例えば第一編第一章において検討した「元魯鼎墓表」（巻六）にも見ることができる。この中に次のような叙述があった。

嗚呼、元大夫生六十余年而卒。未嘗識婦人而視錦繡。不頌之、何以戒荒淫侈靡之徒也哉。未嘗求足而言利、苟辞而使色。不頌之、何以戒貪猥佞媚之徒也哉。未嘗主十畝之地、十尺之舍、十歳之童。不頌之、何以戒占田千夫、室宇千柱、家童百指之徒也哉。未嘗皂布帛而衣、具五味而食。不頌之、何以戒綺紈梁肉之徒也哉。

嗚呼、元大夫は生まれて六十余年にして卒す。未だ嘗て婦人を識りて錦繡を視ず。之を頌せずんば、何を以て荒淫侈靡の徒を戒めんや。未だ嘗て足るを求めて利を言ひ、辞を苟にして色を便にせず。之を頌せずんば、何を以て貪猥佞媚の徒を戒めんや。未だ嘗て十畝の地、十尺の舍、十歳の童に主たらず。之を頌せずんば、何を以て占田千夫、室宇千柱、家童百指の徒を戒めんや。未だ嘗て布帛を皂して衣、五味を具へて食はず。之を頌せずんば、何を以て綺紈梁肉の徒を戒めんや。

一生を独身で過ごし、華美を求めず、己が利をはかることなく、阿諛追従せず、富貴を願わず、極貧のうちに自適の日々を送った元徳秀を称美することによって、彼に対比される人々、世俗を戒めようというのである。頌するということが同時に世俗に対する戒めや忠告を表明する。これが元結における頌するという行為の意味なのであった。

おわりに

「大唐中興頌」の根底に、称美する対象への感動があることは確かである。両京の回復という大業を成し得た肅宗の盛徳は称美されるべきものであった。しかし、元結にとって、頌は、対象を頌しつつ、一方では対極にある現実の姿を浮かび上がらせ、諷諭の意を寓することを可能にする様式として位置づけられていた。「虎蛇頌」においては「恵讓」や「順讓」を失った現実が、「大唐中興頌」においては中興の時とは全く逆の現実が、それぞれ浮かびあがるようになっているのである。

「大唐中興頌」は、単に肅宗の不孝を指弾するためや、中興の精神を鼓舞するといった目的のために制作されたものではなく、両京の回復という大業を成し得た肅宗の盛徳に感動し、それを称えるときともに、李輔国のごとき姦臣を除き、賞罰を正し、肅宗に中興の時の心を思い起こさせる意図を含んで書かれたものとして解釈することができる。そしてこのように読むことによって、はじめてこの頌を揮毫した顔真卿の思いも理解できるであろう。

この「大唐中興頌」は、後に涪溪の摩崖に刻まれることとなる。このことについては、第三編第三章で改めて論ずることとする。

注

(1) 底本は「載」に作るが、「大唐中興頌」の摩崖碑は「季」に作る。本論ではこの碑文により、表記は「年」とする。

(2) 李建崑著『元次山之生平及其文学』（台湾商務印書館、一九八六年）一四三頁。

(3) 前野直彬著『文章軌範（正編）下』（新釈漢文大系一八、明治書院、一九六二年）四一一頁。

(4) 星川清孝著『古文真宝（後集）』（新釈漢文大系一六、明治書院、一九六三年）三〇〇頁。

(5) 孫望・郁賢皓主編『唐代文選』（江蘇古籍出版社、一九九四年）一〇五四頁。

(6) 楊承祖著『元結研究』（国立編訳館、二〇〇二年）一〇五―一一〇頁。

(7) 楊承祖氏、前掲書。一〇八頁。

(8) 『文心雕竜』第九章「頌讚」に、「四始之至、頌居其極。頌者、容也。所以美盛徳而述形容也。（四始の至、頌は其の極に居り。頌とは、容なり。盛徳を美めて形容を述ぶる所以なり）」、「頌主告神、義必純美。（頌は神に告ぐるを主り、義は必ず純美なり）」とあり、頌とは、本来徳をほめ、その姿を述べ、神に報告するものであるとされている。また、後の褒貶を含んだ頌については、「其褒貶雜居、固末代之訛体也。（其の褒貶雜居するは、固より末代の訛体なり）」と断じている。

(9) 「碁」について、劉法綏氏は、元結の制作した文字であり、四方を石で囲まれた封邑であると解釈している。（「読元結作品小識」〔『文学遺産』一九八一年、第三期、一四三頁〕）。

(10) 楊承祖氏、前掲書。七五頁。

第三章 「春陵行」と「賊退示官吏」

はじめに

元結が道州（湖南省道州市）刺史の任にあった広徳二年（七六四）に制作された「春陵行」（巻三）と「賊退示官吏」（巻三）の二編は、彼の文学の代表作ともされ、同時代の杜甫にも高く評価された作品である。^{（注1）}この二編のうち「春陵行」が著された理由や目的については、「（厳しい税のとりたてという）政治の在り方に対する憤りから作られたもの」であって、「中央に伝えられることによって民情が朝廷に理解されることを期待してつくられたものであり、直接的には道州の州民が税金の負担に耐えかねる実情を朝廷に伝達せんと意図する」ものとして解釈されるのが一般的である。^{（注2）}また、その諷諭詩としての独自性も、「主題とする社会問題が第三者的立場から批判されているのではなく、その問題の当事者としての視点から捕らえられている」こと、及び「社会問題に対する作者の政治理念及び政治的な態度が極めて明確に呈示されている点」にあることも指摘されている。^{（注3）}

「春陵行」とほぼ同じ時期に「謝上表」（巻八）と「奏免科率状」（巻八）が書かれている。もし道州の民情、実情を中央に伝えようとするのであれば、楽府ではなくこの両文書がその役割を担うべきであろう。それが楽府として、しかも漫叟という語り手によって制作されたのはなぜか。あるいは両文書を補完するとともに、体制外の者の視座で語る必要があったのではあるまいか。

また、ほぼ同じ時期に書かれた「賊退示官吏」には、後に述べるように、「春陵行」とは異なる元結の意識が鮮明に表出されている。この作品はどのような意図によって制作されたのであろうか。

本章では、道州刺史にあった当時の元結の中央に対する態度、及び彼の楽府に対する認識に基づきつつ、二作

品の制作の意図について再検討を行う。

第一節 「謝上表」と「奏免科率状」

広徳元年（七六一）九月、道州刺史の勅命をうけた元結は、翌広徳二年（七六二）五月二二日に道州に着任した。彼は、先ず「謝上表」（巻八）を奉り、間もなく「春陵行」「賊退示官吏」を制作し、一方で「奏免科率状」（巻八）を奉っている。この「謝上表」ならびに「奏免科率状」には、元結の刺史としての見解が明確に示されている。先ず、この二編を取り上げ、「春陵行」、「賊退示官吏」詩との関連を見てゆくこととする。

「謝上表」は、道州刺史を拝したことを謝し、自らはその任にはふさわしくない者であることを述べたものである。ここには着任した時の道州の状況が描写され、さらに刺史のあり方に対する認識が展開されている。全文を次に挙げる。

臣某言。去年九月、勅授道州刺史。属西戎侵軼、至十二月、臣始於鄂州授勅牒、即日赴任。臣州先被西原賊屠陷、節度使已差官摄刺史、兼又聞奏。臣在道路、待恩命者三月。臣以五月二十二日到州上訖。（第一段）

耆老見臣、俯伏而泣、官吏見臣、以無菜色。城池井邑、但生荒草、登高極望、不見人煙。嶺南数州、与臣接近、余寇蟻聚、尚未帰降。臣見招輯流亡、率勸貧弱、保守城邑、畚種山林、冀望秋後、少可全活。（第二段）

臣愚以為今日刺史、若無武略以制暴乱、若無文才以救疲弊、若不清廉以身率下、若不変通以救時須、一州之人不叛、則乱将作矣、豈止一州者乎。（第三段）

臣料今日州県堪征税者無幾、已破敗者実多。百姓恋墳墓者蓋少、思流亡者乃衆。則刺史宜精選謹択、以委任之。固不可拘限官次、得之貨賄、出之權門者也。（第四段）

凡授刺史、特待陛下一年間其流亡帰復幾何、田疇墾闢幾何、二年間畜養比初年幾倍、可税比初年幾倍。三年計其功過、必行賞罰、則人皆不敢冀望僥倖、苟有所求。(第五段)

臣実孱弱、辱陛下符節。陛下必当謹扱。臣固宜廢帰山野、供給井税。臣不任懇款之至。謹遣某官奉表陳謝以聞。(第六段)

臣某言す。去年九月道州刺史を勅授せらる。属たま西戎侵軼し、十二月に至り、臣始めて鄂州に於て勅牒を授けられ、即日赴任す。臣が州先に西原の賊の屠陷を被り、節度使已に官を差して刺史を撰せしめ、兼て又聞奏す。臣道路に在りて、恩命を待つこと三月なり。臣五月二十二日を以て州に到り上り訖る。(第一段)

耆老臣を見て、俯伏して泣き、官吏臣を見て、以に菜色無し。城池井邑、但だ荒草を生じ、登高して極望すれば、人煙を見ず。嶺南の数州は、臣と接近し、余寇蟻聚し、尚ほ未だ帰降せず。臣見て流亡を招輯し、貧弱を率勸して、城邑を保守し、山林に畚種し、秋後、少しく全活すべきを冀望す。(第二段)

臣愚以為らく今日の刺史、若しくは武略の以て暴乱を制する無く、若しくは文才の以て疲弊を救ふ無く、若しくは清廉にして以て身ら下を率ゐず、若しくは変通にして以て時須を救はずんば、一州の人叛かざれば、則ち乱將に作らんとすること、豈に一州に止まる者ならんや。(第三段)

臣料るに今日の州県征税に堪ふる者は幾くも無く、已に破敗する者実に多し。百姓墳墓を恋ふ者蓋し少く、流亡を思ふ者は乃ち衆し。則ち刺史は宜しく精選謹扱して以て之に委任すべし。固より官次に拘限し、之を貨賄に得、之を権門より出だすべからざる者なり。(第四段)

凡そ刺史を授くるには、特だ望むらくは陛下一年其の流亡帰復するもの幾何なるか、田疇の墾闢するもの幾何なるかを問ひ、二年畜養初年に比して幾倍なるか、税すべきもの初年に比して幾倍なるかを問はんことを。三年にして其の功過を計り、必ず賞罰を行へば、則ち人皆敢て僥倖を冀望し、苟くも求むる所有らんや。

(第五段)

臣実に孱弱にして、陛下の符節を辱くす。陛下必ず当に謹拭すべし。臣固より宜しく山野に廃帰し、井税を供給すべし。臣懇款の至りに任へず。謹みて某官をして表を奉り陳謝して以聞せしむ。(第六段)

この表は先ず、広徳元年(七六四)九月に道州刺史を授けられたものの、西原の賊の進入によって広徳二年五月二日に着任したことを言い(第一段)、続いて第二段で着任時の道州の状況を述べる。到着してみると、州の老人達は伏して泣き、窮状を訴える一方で、州県の官吏は、飢えた様子もない。州は窮乏が甚だしく、炊事の煙も立たないほどであり、周辺の賊がまだ投降していないという状況であった。老人と官吏の姿を対比させ、後に州全体の状況を述べることによって、殊に州民を憂えぬ官吏の姿が際立っている。次に第三段で、刺史たる者の資質、則ち暴乱を制する武略と、疲弊を救う経世済民の才と、清廉さ、変通の能力が提示される。第四段は、州県の現状に対応するためには優れた刺史を選任すべきであり、その任用は官次、賄賂、家門などによってはならないことを言う。第五段は、刺史の考課に関する言及である。刺史というものは、三年間の治績によって評価し、厳格に賞罰を行えば、僥倖を願う者もいなくなることを指摘する。そして、最後に今回の登用を謝して結んでいる。

この「謝上表」は、例えば乾元元年(七五八)の顔真卿「蒲州刺史謝上表」(『全唐文』卷三三六)と比較すると、その特徴が明らかとなる。

臣真卿言。臣今月十一日、伏奉五日恩制、除臣使持節蒲州諸軍事蒲州刺史充本州防禦使。臣縁同州先無佐官、蒲州書魚未到、遲迴累日、不敢赴上。中使張抱誠至、奉宣恩命、令臣与將軍趙瑣計会遊奕兵馬。昨以十八日至州上訖。祇承寵命、伏増感惕。中謝。(I)

臣窃以、此州之地、堯舜所都、表裏山河、古称天險、余凶未殄、防禦是先。況扼秦晋之喉、撫幽并之背、既号股肱之郡、実資心膂之賢。(Ⅱ)

伏惟光天文武大聖孝感皇帝陛下、道冠生人、恩涵墜履。方建非常之業、不遺易忘之臣、特委大邦、俾之集事。戴荷殊獎、無忘寢食。(Ⅲ)

但臣愚鷥有素、智勇欠然、將以鎮遏艱虞、導揚德沢、拜命之日、以榮為憂。唯君知臣、教其不及。勤恤人隱、動必以聞。陛下不以為煩、則臣死而獲考矣。無任感戴屏營之至。(Ⅳ)

臣真卿言す。臣今月十一日、伏して五日の恩制を奉ずるに、臣を使持節蒲州諸軍事蒲州刺史充本州防禦使に除せらる。臣は同州先に佐官無く、蒲州の書魚未だ到らざるに縁りて、遲迴すること累日、敢て赴き上らず。中使張抱誠至り、恩命を奉宣するに、臣をして將軍趙瑣と遊奕の兵馬を計会せしめらる。昨十八日を以て州に至り上り訖る。祇だ寵命を承り、伏して感惕を増す。中謝。(Ⅰ)

臣窃かに以へらく、此の州の地は、堯舜の都する所にして、表裏の山河は、古より天險と称せらるるも、余凶未だ殄くさざれば、防禦を是れ先とす。況んや秦晋の喉を扼し、幽并の背を撫し、既に股肱の郡と号せられ、実に心膂の賢を資るをや。(Ⅱ)

伏して惟みるに光天文武大聖孝感皇帝陛下、道は生人に冠たり、恩は墜履を涵す。方に非常の業を建てんとし、易忘の臣を遺れず、特に大邦を委ね、之をして事を集^なさしむ。殊獎を戴荷し、寢食にも忘るる無し。

(Ⅲ)

但だ臣は愚鷥有り、智勇欠然たれば、將に以て艱虞を鎮遏し、徳沢を導揚せんとするも、拜命の日、榮を以て憂ひと為す。唯だ君のみ臣を知り、其の及ばざるを教へん。人隱を勤恤し、動ずれば必ず以聞せん。

陛下以て煩と為さずんば、則ち臣死して考を獲ん。感戴屏營の至りに任ふる無し。(Ⅳ)

この顔真卿の「謝上表」は、

I 勅命を奉じてから着任までの事情と着任の報告

II 任地の現状とその報告

III・IV 拝命の感謝、皇恩に謝し、勤めに勤しむ決意の表明

という、構造になっている。先ず、(I) 顔真卿が今月の一日に蒲州刺史を拝命したことを述べ、勅書が届かないため着任が遅れ、一八日に着任したことを報告している。次に(II) 蒲州が重要な地であり、いまだ安史の乱が終息していない故に、防御を第一とすることを述べる。続いて(III) (IV) 皇帝を称え、自らを任用してくれたことを謝し、勤めを果たす決意を述べている。この構造は、また元結の「謝上表」ともほぼ重なる。ところが、元結の「謝上表」には、「臣愚以為今日刺史、……三年計其功過、必行賞罰、則人皆不敢冀望僥倖、苟有所求。」の部分に加えられているのである。この部分は、刺史に必用な能力と資質・刺史選任の方法・刺史の考課に関する見解の表明である。こうした叙述の背後には、刺史任用の現状を踏まえてあるべき任用・考課のあり方を述べ、天子を諫めようとする意識を窺うことができるであろう。

一方、科率の減免を願う「奏免科率状」(巻八)は、着任後「春陵行」と相前後して書かれたものである。科率とは、民間から定額で物資を徴収することを言う。全文は以下の通りである。

当州准勅及租庸等使徵率錢物、都計一十三万六千三百八十八貫八百文。一十三万二千四百八十貫九百文、嶺南西原賊未破州已前。三千九百貫九百七足、賊退後徵率。(第一段)

以前件如前。臣自到州、見庸租等諸使文牒、令徵前件錢物送納。(第二段)

臣当州被西原賊屠陷。賊停留一月余、日焚燒糧儲屋宅、俘掠百姓男女、驅殺牛馬老少、一州幾尽。賊散後、百姓帰復、十不存一、資産皆無。人心嗷嗷、未有安者。若依諸使期限、臣恐坐見乱亡。今来未敢徵率、伏待進

止。(第三段)

又嶺南諸州、寇盜未盡。臣州是嶺北界、守捉処多。若臣州不安、則湖南皆乱。(第四段)

伏望天恩、自州未破已前、百姓久負租税、及租庸等使所有徵率和市雜物、一切放免。自州破已後、除正租正庸、及准格式合進奉徵納者、請拋見在戸徵送。其余科率、並請放免。容其見在百姓産業稍成、逃亡帰復、似可存活、即請依常例处分。(第五段)

伏願陛下以臣所奏、下議有司。苟若臣所見愚僻、不合時政、干乱紀度、事涉虚妄、忝官尸祿、欺上罔下、是臣之罪、合正典刑。謹録奏聞。(第六段)

当州の准勅及び租庸等の使の徵率する錢物は、都て計一十三万六千三百八十八貫八百文なり。一十三万二千四百八十貫九百文は、嶺南西原の賊未だ州を破らざる已前なり。三千九百七貫九百足は、賊退きて後の徵率なり。(第一段)

以前の件前のごとし。臣州に到りしより、庸租等の諸使の文牒を見るに、前件の錢物を徵して送納せしむ。(第二段)

臣が当州は西原の賊の屠陷を被る。賊停留すること一月余、日糧儲屋宅を焚焼し、百姓男女を俘掠し、牛馬老少を驅殺し、一州幾ど尽く。賊散ずる後、百姓帰復するもの、十に一も存せず、資産皆無し。人心嗷嗷として、未だ安んずる者有らず。若し諸使の期限に依らば、臣坐して乱亡を見んことを恐る。今来未だ敢て徵率せず、伏して進止を待つ。(第三段)

又嶺南の諸州は、寇盜未だ尽きず。臣が州は是れ嶺北の界にして、守捉する処多し。若し臣が州安んぜずんば、則ち湖南皆乱れん。(第四段)

伏して望むらくは天恩もて、州未だ破れざる已前の、百姓久負の租税、及び租庸等使の有る所の徵率、和市の雜物は、一切放免せられんことを。州破れてより已後は、正租正庸、及び格式に准じて合に進奉徵納す

べき者を除き、請ふらくは見在の戸に拠りて徴送し、其の余の科率は、並びに放免せられんことを。容に其の見在の百姓の産業稍く成り、逃亡するもの帰復し、存活すべきに似れば、即ち常例に依りて処分せらるべきことを請ふ。（第五段）

伏して願はくは陛下臣の奏する所を以て、議を有司に下されんことを。苟くも若し臣の見る所愚僻にして、時政に合せず、紀度を干乱し、事虚妄に涉り、官を忝くし禄を尸し、上を欺き下を罔すとせば、是れ臣の罪にして、合に典刑に正すべし。謹み録して奏聞す。（第六段）

この上奏文は、先ず科率の内容とその徴収の請求について指摘し（第一、二段）、それに相對するように、道州の悲惨な現状を伝える。西原の賊の侵入によって道州は疲弊の極にあり、州民の数も極度に少なくなっている様子が語られ、科率を期限通りに徴収すれば、州が維持できないと判断し、まだ徴収を行っていないことが述べられる（第三段）。さらに道州は嶺北の境に位置しており、州が維持できなければ湖南の地も安寧ではいられないと主張し（第四段）、州を維持するために租庸等の徴収の免除を請う旨を述べている（第五段）。ここでは科率の減免を願う理由として、道州の窮乏以外にその地理上の重要性を指摘し、説得力を増す工夫をしているのである。

第二節 「謝上表」「奏免科率状」と「春陵行」の位相

前節で検討した「謝上表」「奏免科率状」の内容は、「春陵行」の序および本文のそれと重複する部分が多い。「春陵行」序を以下に挙げる。

癸卯歳、漫叟授道州刺史。道州旧四万余戸、経賊已来、不滿四千、大半不勝賦税。到官未五十日、承諾使徵求、符牒二百余封。皆曰、失其限者罪至貶削。於戲、若悉宥其命、則州県破乱、刺史欲焉逃罪。若不宥命、又即獲罪戾、必不免也。吾将守官、静以安人、待罪而已。此州是春陵故地。故作春陵行、以達下情。

癸卯の歳、漫叟道州刺史を授けらる。道州は旧四万余戸、賊を経て已来、四千に満たず、大半は賦税に勝へず。官に到りて未だ五十日ならざるに、諸使の徵求、符牒二百余封を承く。皆曰はく、其の限を失ふ者は罪貶削に至る、と。於戲、若し悉く其の命に宥ぜば、則ち州県破乱し、刺史焉くにか罪を逃れんと欲する。若し命に宥ぜずんば、又即ち罪戾を獲んこと、必ず免れざるなり。吾将に官を守り、静以て人を安んじ、罪を待たんとするのみ。此の州は是れ春陵の故地なり。故に春陵行を作りて、以て下情を達す。

この「春陵行」の序文では、先ず道州刺史を授けられたことを言い、続いて賊の侵入前後における道州の戸数の減少、及び民衆が疲弊し、徴税に耐えられる状況ではないことが述べられている。一方、「謝上表」と「奏免科率状」にもこれとほぼ等しい内容が記されている。それぞれの該当箇所を以下に改めて引用してみよう。

臣某言。去年九月、勅授道州刺史。属西戎侵軼、至十二月、臣始於鄂州授勅牒、即日赴任。臣州先被西原賊屠陷、節度使已差官撰刺史、兼又聞奏。臣在道路、待恩命者三月。臣以五月二十二日到州上訖。……城池井邑、但生荒草、登高極望、不見人煙。……今日州県堪征税者無幾、已破敗者実多。百姓恋墳墓者蓋少、思流亡者乃衆。

（「謝上表」）

臣某言す。去年九月道州刺史を勅授せらる。属たま西戎侵軼し、十二月に至り、臣始めて鄂州に於て勅牒を授けられ、即日赴任す。臣が州先に西原の賊の屠陷を被り、節度使已に官を差して刺史を撰せしめ、兼て又聞奏す。臣道路に在りて、恩命を待つこと三月なり。臣五月二十二日を以て州に到り上り訖る。……城池

井邑、但だ荒草を生じ、登高して極望すれば、人煙を見ず。……今日の州県征税に堪ふる者は幾くも無く、已に破敗する者実に多し。百姓墳墓を恋ふる者蓋し少く、流亡を思ふ者は乃ち衆し。

臣当州被西原賊屠陷。賊停留一月余、日焚燒糧儲屋宅、俘掠百姓男女、驅殺牛馬老少、一州幾尽。賊散後、百姓帰復、十不存一、資産皆無。人心嗷嗷、未有安者。（「奏免科率状」）

臣が当州は西原の賊の屠陷を被る。賊停留すること一月余、日糧儲屋宅を焚焼し、百姓男女を俘掠し、牛馬老少を驅殺し、一州幾ど尽く。賊散ずる後、百姓帰復するもの、十に一も存せず、資産皆無し。人心嗷嗷として、未だ安んずる者有らず。

次に序は、道州に到着してから五〇日余りで、徴税の公文書が二〇〇余通届けられたことを言う。この箇所は、「奏免科率状」に、賊が退いた後の徴求として「三千九百貫九百足、賊退後徴率。（三千九百貫九百足は、賊退きて後の徴率なり）」「臣自到州、見庸租等諸使文牒、令徴前件錢物送納。（臣州に到りしより、庸租等の諸使の文牒を見るに、前件の錢物を徴して送納せしむ）」と詳細に記されている。

続いて序では、元結の道州刺史としての決断が示される。すなわち、この状況においては、もし徴求の命令に従えば州県が波乱して刺史はその責任を問われ、また、もし命に背けば当然その罪を問われることになるというのである。そしていずれにしろ責任が問われるというのであれば、自らは民生を安んずるというその一点において徴求の命令に従わず、罪を得る道を選ぶと言明する。後に挙げる「春陵行」本文においても「安人天子命、符節我所持。州県忽乱亡、得罪復是誰。逋緩違詔令、蒙責固所宜（人を安んずるは天子の命なり、符節は我の持つ所なり。州県忽ち乱亡せば、罪を得るは復た是れ誰ぞ。逋緩せしめて詔令に違ふ、責を蒙るは固より宜しき所なり）」と詠われている。これは実に堂々たる決意の表明であって、後に杜甫が「同元使君春陵行」（『杜詩詳

註』卷一九)で称揚する所以でもある。この「春陵行」は本文に「何人采国風、吾欲献此辞(何人か国風を采らん、吾此の辞を献ぜんと欲す)」とあるように、理念的には朝廷に届けられることを想定して制作されたものである。しかしながら、こうした決断が評価される可能性は極めて低いであろう。この「春陵行」が嘉納されるためには、刺史たる者のあり方、民生を安んずることの重要性が明確に語られなくてはならない。その役割を負うのが「謝上表」と「奏免科率状」だったのではないか。

「謝上表」では、第三段、第四段、第五段と、全体の半分以上を費やして刺史の資質、任用のあり方、考課のあり方についての所見が展開されていた。また、科率の減免を願う「奏免科率状」では、「若依諸使期限、臣恐坐見乱亡。(若し諸使の期限に依らば、臣坐して乱亡を見んことを恐る)」と判断し、「今来未敢徵率、伏待進止。(今来未だ敢て徵率せず、伏して進止を待つ)」と、まだ徵収を行っていないことが報告され、道州に騒乱が起これば、湖南全体が乱れると述べて、道州を安定させることの重要性を訴えている。その上で科率の減免を願っているのである。また、譴責に対する覚悟も、「奏免科率状」第六段に「苟若臣所見愚僻、不合時政、干乱紀度、事涉虚妄、忝官尸禄、欺上罔下、是臣之罪、合正典刑。(苟くも若し臣の見る所愚僻にして、時政に合せず、紀度を干乱し、事虚妄に涉り、官を忝くし禄を尸し、上を欺き下を罔すとせば、是れ臣の罪にして、合に典刑に正すべし)」と示されている。

このように見てくると、「春陵行」序とこの二編の文は相補完する関係にあり、また序は「奏免科率状」とほぼ同じ内容を持っていることがわかる。「春陵行」序はこの二編を合わせ読むことによって、始めて説得力を持つことになるのである。

次に「春陵行」(卷三)の本文を見る。

軍国多所需 軍国 需むる所多し

切責在有司	切責は有司に在り
有司臨郡県	有司 郡県に臨み
刑法竟欲施	刑法 竟に施さんと欲す
05 供給豈不憂	供給 豈に憂へざらんや
徴斂又可悲	徴斂 又悲しむべし
州小経乱亡	州小にして乱亡を経
遣人実困疲	遣人 実に困疲す
大郷無十家	大郷に十家無く
10 大族命单羸	大族も命单羸なり
朝飡是草根	朝飡は是れ草根にして
暮食是木皮	暮食は是れ木皮なり
出言気欲絶	言を出だせば気絶えんと欲し
言速行步遅	言速かなるも行步遅し
15 追呼尚不忍	追呼するも尚ほ忍びず
況乃鞭撲之	況んや乃ち之を鞭撲するをや
郵亭伝急符	郵亭 急符を伝へ
来往迹相追	来往 迹相追ふ
更無寛大恩	更に寛大の恩無く
20 但有迫切期	但だ迫切の期有り
欲令鬻兒女	兒女を鬻がしめんと欲するも

言発恐乱随

言発すれば恐らくは乱随はん

悉使索其家

悉く其の家を索めしむるも

而又無生資

而も又生資無し

25 聴彼道路言

彼の道路の言を聴くに

怨傷誰復知

怨傷 誰か復た知らん

去冬山賊来

去冬 山賊来り

殺奪幾無遺

殺奪して幾ど遺す無し

所願見王官

願ふ所は王官の

30 撫養以恵慈

撫養するに恵慈を以てするを見んことなり

奈何重驅逐

奈何ぞ重ねて驅逐して

不使存活為

存活を為さしめざると

安人天子命

人を安んずるは天子の命なり

符節我所持

符節は我の持つ所なり

35 州県忽乱亡

州県 忽ち乱亡せば

得罪復是誰

罪を得るは復た是れ誰ぞ

逋緩違詔令

逋緩せしめて詔令に違ふ

蒙責固所宜

責を蒙るは固より宜しき所なり

前賢重守分

前賢 分を守るを重んず

40 惡以禍福移

悪くんど禍福を以て移らん

亦云貴守官

亦た云に官を守るを貴び

不愛能適時 能く時に適ふを愛せず
顧惟孱弱者 顧みるに惟れ孱弱の者
正直当不虧 正直当に虧かざるべし
45 何人采国風 何人か国風を采らん
吾欲献此辞 吾此の辞を献ぜんと欲す

「春陵行」の本文では、先ず軍事と国政には様々な需要があり、その供給の責任は官吏が負っているので、官吏が郡県に臨む時にはどうしても厳しく取り立てることが多いものであると、当時の官吏の状況を指摘する（第一句～第六句）。この部分に関しては、先の「謝上表」「奏免科率状」ともに相当する箇所が無い。

続いて第七句から第一六句まで、道州の悲惨な状況を具体的に述べてゆく。この部分は「奏免科率状」の「賊散後、百姓帰復、十不存一、資産皆無。人心嗷嗷、未有安者。（賊散する後、百姓帰復するもの、十に一も存せず、資産皆無し。人心嗷嗷として、未だ安んずる者有らず）」の部分より明確にしている箇所である。

次に「郵亭伝急符、来往迹相追。更無寛大恩、但有迫切期（郵亭 急符を伝へ、来往 迹相追ふ。更に寛大の恩無く、但だ迫切の期有り。」（第一七句～第二〇句）と、徴税の文書が次々にもたらされることを言う。「奏免科率状」では、徴税の事実と内容は述べられているが、その激しさについては直接に言及されておらず、「春陵行」ではより具体的に述べられているのである。

続いて、もしも命令通りに徴税を迫れば、更に混乱が生じるであろうことが指摘され（第二一句～第二四句）、道州の州民の言葉を借りて、お上の仁愛と憐れみとを請わんとする人々の心情が語られる（第二五句～第三二句）。このうち州県の混乱を予想する部分は、「奏免科率状」の「若依諸使期限、臣恐坐見乱亡。（若し諸使の期限に依らば、臣坐して乱亡を見んことを恐る）」という句と一致する。「聴彼道路言、怨傷誰復知。去冬山賊

来、殺奪幾無遺。所願見王官、撫養以惠慈。奈何重驅逐、不使存活為（彼の道路の言を聴くに、怨傷 誰か復た知らん。去冬 山賊来り、殺奪して幾ど遺す無し。願ふ所は王官の、撫養するに惠慈を以てするを見んことなり。奈何ぞ重ねて驅逐して、存活を為さしめざる）」（第二五句く第三二句）の部分は、「謝上表」「奏免科率状」のいずれにも直接言及されてはいないが、「謝上表」の「耆老見臣、俯伏而哭（耆老臣を見て、俯伏して泣く）」の部分をも具体的に展開しているものと考えることができる。

詩ではさらに、民生の安定を第一として徴税を行わないという刺史としての自らの判断が繰り返し呈示される。序の該当部分が繰り返され、刺史としての責任を負う覚悟が一層明確にされているのである。

「春陵行」の最後の第四五、四六句は、この作品を樂府として位置付けること、ならびに采詩の官によって朝廷に伝えられるようにしたいという願いが述べられる。

以上のように見てくると、「春陵行」の本文も、「謝上表」「奏免科率状」の二編とほぼ補完しあうような内容が述べられていることがわかる。殊に「春陵行」は、「奏免科率状」の内容の背景となっている道州の状況や刺史としての判断を、歌謡の形式を用いてより印象的に述べているのである。

「春陵行」は、安史の乱を経て戸数が一〇分の一に減少し、州民が疲弊しきった道州の現状と中央の政策への対応、及びそのもととなった、民生の安定こそ刺史の本務であるという判断を、樂府の形をとりつつ、朝廷に、理念的には天子である代宗に伝えようとしたものと位置付けられるであろう。このような意図を想定すれば、傍観者ではなく、当事者としての視座を用いたのは当然の選択であったということが出来る。それとともに、「系樂府十二首」に見られるごとく、自らの見解が皇帝に嘉納されるという思いも確認することができるであろう。そうした確信がなければ、この「春陵行」は成立しなかったはずである。なお、この当事者の視座は、正確には「臣結」の視座ではなく、漫叟の視座である。このことについては、第五章で検討する。

第三節 「賊退示官吏」における「官吏」

一方、「賊退示官吏并序」（卷三）は、どのような意図を持って、誰を対象にして書かれたものであったのだろうか。

癸卯歳、西原賊入道州、焚燒殺掠、幾尽而去。明年、賊又攻永州、破邵、不犯此州辺鄙而退。豈力能制敵歟。蓋蒙其傷憐而已。諸使何為忍苦徵斂。故作詩一篇、以示官吏。

癸卯の歳、西原の賊道州に入り、焚燒殺掠、幾ど尽くして去る。明年、賊又永州を攻め、邵を破るも、此の州の辺鄙なるを犯さずして退く。豈に力能く敵を制せんや。蓋し其の傷憐を蒙むるのみ。諸使何為れぞ忍苦して徵斂せんや。故に詩一篇を作りて、以て官吏に示す。

昔歳逢太平	昔歳	太平に逢ひ
山林二十年	山林	にあること二十年
泉源在庭戸	泉源	庭戸に在り
洞壑当門前	洞壑	門前に当たる
05 井税有常期	井税	に常期有り
日晏猶得眠	日晏	くして猶ほ眠るを得たり
忽然遭世変	忽然	として世変に遭ひ
数歳親戎旃	数歳	親ら戎旃す
今来典斯郡	今来	斯の郡を典るに

10 山夷又紛然 山夷 又紛然たり

城小賊不屠 城小にして賊屠らず

人貧傷可憐 人貧にして傷みて憐れむべしとす

是以陷隣境 是を以て隣境を陷るるも

此州独見全 此の州独り全くせらる

15 使臣将王命 使臣 王命を将ふ

豈不如賊焉 豈に賊だにも如かざらんや

今彼徵斂者 今彼の徵斂の者

迫之如火煎 之に迫ること火の煎するがごとし

誰能絶人命 誰か能く人命を絶ちて

20 以作時世賢 以て時世の賢と作さん

思欲委符節 符節を委ね

引竿自刺船 竿を引きて自ら船を刺し

将家就魚麦 家を将て魚麦に就き

帰老江海辺 老を江海の辺に帰せんと思欲す

詩の序は先ず、癸卯の歳、すなわち広徳元年（七六三）、西原の賊が道州に侵入し、翌広徳二年（七六四）にも周辺の郡に侵入したが、道州はあまりにも悲惨な状況であつたので、その賊ですら手を付けなかったと述べる。広徳元年九月以降の西原の賊の侵入は、「奏免科率状」に「臣当州被西原賊屠陷。賊停留一月余日、焚燒糧儲屋宅、浮掠百姓男女、驅殺牛馬、老少一州幾尽、賊散後、百姓帰復、十不存一、資産皆無。（臣が当州は西原の賊

の屠陷を被る。賊停留すること一月余、日糧儲屋宅を焚焼し、百姓男女を俘掠し、牛馬老少を駆殺し、一州幾ど尽く。賊散ずる後、百姓帰復するもの、十に一も存せず、資産皆無し」と記されているものである。元結は広徳元年九月に道州刺史を拝したが、この賊の侵入のために赴任できず、翌広徳二年五月二二日に道州に着任している。その後「謝上表」が書かれ、着任後五〇日程経過して「春陵行」と「奏免科率状」が制作された。

「賊退示官吏」序に「明年、賊又攻永州、破邵、不犯此州辺鄙而退。（明年、賊又永州を攻め、邵を破るも、此の州の辺鄙なるを犯さずして退く）」とあるから、広徳二年（七六四）に再び賊が侵入したことになるが、「奏免科率状」「春陵行並びに序」にも言及がないことからすると、この侵入は「春陵行」「奏免科率状」が制作された後であつたと考えられる。この二編が制作され、おそらくともに中央に送られた後、再び賊の侵入があつたと推察される。そしてこの賊が退いた後、「賊退示官吏」詩が制作されたのである。「春陵行」と「賊退示官吏」詩は、同時期に著され、一緒に中央にもたらされたのではなかつたと考えられる。この二編の詩は、後年杜甫の元にも届けられているが、両詩の制作時期にはずれがあつたのである。^{（注4）}

広徳二年の西原の賊の侵入はどの程度の期間であつたのか。原注に「永泰二年奏。勅依。」とある「奏免科率等状」（巻九）には「去年又賊逼州界、防捍一百余日。賊攻永州、陷邵州。臣州独全者、為百姓捍賊。（去年又賊州界に逼り、防捍すること一百余日なり。賊永州を攻め、邵州を陷る。臣が州独り全きは、百姓賊を捍ぐが為なり）」とある。この記述は「賊退示官吏」序の記述と内容が重複している。孫望氏は「奏免科率等状」を永泰二年（七六七）に編年しているが、楊承祖氏は、永泰元年（七六五）に制作されたとしており、今、楊承祖氏の説に従う。この広徳二年の賊の侵入も一〇〇日余りに亘っていたと考えられる。このように想定すると「賊退示官吏」は、少なくとも「春陵行」が書かれてから三カ月以上後に制作されたことになる。^{（注7）}

また、道州が無事であつた理由として、「賊退示官吏」序は、賊が憐れんだためとし、「奏免科率等状」は、百姓を糾合して賊を防いだためであるとしている。『新唐書』巻二二下、西原蛮列伝には、「余衆復困道州、

刺史元結固守、不能下。進攻永州、陷邵州、留數日而去。（余衆復た道州を囲むも、刺史元結固く守れば、下す能はず。進みて永州を攻め、邵州を陥れ、留まること数日にして去る）」と、元結が賊の侵入を防いだことを記す。おそらく西原の賊の侵入を防いだのが事実であったのだろう。「賊退示官吏」序では、賊ですら憐れんだと記すことによつて、民を憐れむこともなく、厳しく徴税を行う諸使の苛酷さが一層際立つように描かれているのである。「奏免科率等状」において、「賊退示官吏」序の叙述を襲いながら、百姓が防いだ為と明記したのは、科率の減免を願うためには百姓の働きを明記しなくてはならなかったためと考えられる。

この詩は、序に「諸使何為忍苦徵斂。（諸使何為れぞ忍苦して徴斂せんや）」とあるとおり、諸使の徴税に対する憤りが鮮明に表出している。詩の本文は「舂陵行」とは異なり、先ず道州刺史となるまでの自らの状況を述べることから始まる（第一句く第八句）。続いて賊すら憐れんだ道州に対して徴税が厳しくなされていることに對する批判が展開される（第九句く第二〇句）。「使臣」「彼徴斂者」すなわち徴税のために命を受けて州県に赴く官僚がその批判の直接の対象とされているのである。最後の第二一句から第二四句で、こうした状況に對峙した自らの決意、官を辞するという決断が呈示される。

この作品の詩題にある「官吏」とは具体的に誰を指すのであろうか。序文では「諸使」と「官吏」が対照的に用いられており、また「諸使」は、詩の本文では「使臣」「彼徴斂者」に相当している。

この「官吏」という語は「謝上表」にも見られる。「耆老見臣、俯伏而泣、官吏見臣、已無菜色。」とあるのがそれである。これは元結を迎えた道州の官吏が飢えた様子のないことを述べたものである。また、永泰二年の「再謝上表」（卷九）には「今四方兵革未寧、賦斂未息。百姓流亡転甚、官吏侵剋日多。（今四方の兵革未だ寧からず、賦斂未だ息めず。百姓の流亡すること転た甚だしく、官吏の侵剋すること日に多し。）とあり、ここでの「官吏」も直接に統治にあたる州県の官吏を指している。

以上のことからすると、この詩の「官吏」も州県の官吏であると考えるのが適切であろう。「賊退示官吏」は、

中央の官僚に向けて制作されたのではなく、直接には元結の身近にいたであろう州県の官吏を対象にしたものであったと推測される。

西原の賊と対峙する一方で、州民を収奪するかのごとき厳しい徴税が引き続き行われているという状況の中から生じた、中央の政策に対する憤りをもって、周囲にいる、やはり無自覚で民を憂えることを知らず、民に酷く迫ってやまぬ官吏たちに対峙したとき、この詩編は成立したのである。身の官吏を対象としたこの「賊退示官吏」詩は、そもそも「春陵行」のように嘉納され、君主と幸福な邂逅をすることを想定したものではなかったのである。

一方で「春陵行」を書き、周到に自らの態度を中央に表明し、その一方で自らの憤りを周囲の官吏に明らかにすることによって、元結は、士人としての使命を果たし、その鬱屈した心を幾分なりとも安らかなものにしていたことであろう。このことについては第三編で論ずる。

ところで、彼の意図が以上述べてきたものであったとしても、それがどのように受け入れられるかはまた別の問題である。ことに「賊退示官吏」の表現が相当な影響を与えたであろうことは、永泰元年（七六五）に制作された「別何員外」詩（卷三）から容易にうかがうことができる。この年の夏、元結は、道州刺史の任期が満ち、道州から衡陽に至り、命を待っていた。^(注8)

誰能守清躅 誰か能く清躅を守らん

誰能嗣世儒 誰か能く世儒を嗣がん

吾見何君饒 吾見る 何君饒

為人有是夫 人と為り是れ有るかな

05 黜官二十年 官を黜けらるること二十年

未曾暫崎嶇

未だ曾て暫くも崎嶇たらず

終不病貧賤

終に貧賤を病へず

寥寥無所拘

寥寥として拘む所無し

忽然逢知己

忽然として知己に逢ひ

10 数月領官符

数月にして官符を領す

猶是尚書郎

猶ほ是れ尚書郎

収賦来江湖

賦を収めんとして江湖に来る

人皆悉蒼生

人皆蒼生を悉くし

随意極所須

意に随ひて須むる所を極む

15 比盜無兵甲

盜に比すれば兵甲無く

似偷又不如

偷に似て又如かず

公能独寛大

公は能く独り寛大にして

使之力自輸

之をして力めて自ら輸せしむ

吾欲探時諂

吾 時諂を探り

20 為公伏奏書

公の為に伏して書を奏せんと欲す

但恐抵忌諱

但だ恐る 忌諱に抵り

未知肯聴無

未だ聴くを肯んずるか無かを知らず

不然且相送

然せずして且く相送り

醉飲於坐隅

坐隅に酔飲せん

詩の前半（第一句～第二句）は、何員外（何昌裕）の人柄を称え、戸部員外郎^{（注9）}として徴税の為に江湖の地に至ったことを言う。後半（第三句～第四句）は、他の徴税の吏が厳しい取り立てをしていることを言い、「比盗無兵甲、似偷又不如（盗に比すれば兵甲無く、偷に似て又如かず）」と、彼らが盗人以下であることを明言している。この叙述は、「賊退示官吏」詩と見事に重なっている。この時謡を奏上することが「忌諱に抵る」とは、採取された歌謡のなかに必ずや含まれているであろう、官吏を賊に比するという表現が忌避に触れると言っているのである。この詩から、「賊退示官吏」詩が朝廷にもたらされた結果、その詩中の、官吏を賊にすら及ばぬとする表現に対して、それが忌諱に触れるとしてなんらかの判断が下されたであろうことが想定できるであろう。

また、この「別何員外」においてこのような叙述が可能となったのは、彼の道州刺史の任期が終わってからであると考えられる。この後、元結は再び道州刺史に任じられたが、二度と「賊退示官吏」に見られるような直接的な官僚批判を行うことはなかった。

おわりに

「春陵行」は、中央の政治批判を直接に意図したものではなく、むしろ刺史としての自らの立場と徴税の停止を選択するに至った理由を述べ、「奏免科率状」と互いに補完しつつ、徴税の免除と自らの判断に対する許可を求めるという、極めて現実的な意図を持った作品であった。このように位置付けることによって、「春陵行」が傍観者的な視点を持たない理由が明らかとなる。また、「賊退示官吏」は、中央の官僚に向けられたものではなく、直接には身近にいる官吏に向けられたものであったからこそ、「誰能絶人命、以作時世賢（誰か能く人命を絶ちて、以て時世の賢と作さん）」というような激越な叙述が可能となったのである。

「賊退示官吏」詩が朝廷にもたらされると、官吏を厳しく批判する表現が朝廷の忌避に触れたことが想像される。この後、元結は再び直接的な官僚批判を行うことはなかった。

注

(1) 例えば、小川環樹氏は「最も有名な『春陵行』は広徳元年(763)道州へ赴任したときの作。この地が反乱以来、戸口は以前の十分の一にも満たないほどに衰微し、租税の徴収を上司から督促されるが、州民の窮乏は到底その賦課にたえないありさまを述べる。……その沈痛の語は杜甫がこれを読んで深く感動したものであった。」(『唐詩概説』、中国詩人選集、岩波書店、一九五八年、六二頁)と述べ、また佐藤保氏も「社会派詩人として、この時期に杜甫とともに挙げられるのは、元結である。彼には『春陵行』や『賊退きて官吏に示す』があり、いずれも杜甫に注目された作品である。」(前野直彬編『中国文学史』、東京大学出版会、一九七五年、一〇三頁)と指摘する。

(2) 市川桃子「元結『春陵行』考―詩人の文学精神と政治理念との関わりを中心に―」(『東方学』六〇集、一九八〇年)四九頁。

(3) 市川桃子氏、前掲論文。四九頁。

(4) 市川桃子氏は、「元結社会詩考」(『東大文哲文学会報』二、一九七六年、一〇四頁)において、「春陵行」「賊退示官吏」の二首がどのように流布したかについて、①杜甫が大暦二年に読んでいることから、何らかのルートで伝わった可能性があること、②蘇源明をとおして中央に伝わった可能性、また知り合いの官僚に送られた可能性、③徴税の役人に示した可能性、を挙げている。確かに氏の指摘のとおり、この二首はやがてまとまって流布したと考えられるが、制作の時期には少なくとも三箇月以上の間隔があったことに注

意しなくてはならない。

(5) 孫望著『元次山年譜』（古典文学出版社、一九五七年）七五頁。

(6) 楊承祖著『元結研究』（国立編訳館、二〇〇二年）二五五頁。

(7) 孫望著『元次山年譜』は、広徳二年の条（六六頁）に「到官未五十日、諸使徵求符牒二百余封、云失其限者、罪至貶削。公以応命則州県乱、違命又必獲罪戾、乃作春陵行以抒其寧待罪以安民、毋邀功而賊民之意。又進免科率状、請免百姓所負租税等十三万貫、代宗許之。七月、河南副元帥大尉兼侍中臨淮王李光弼卒於徐州。是歳、西原民攻永州、破邵、不犯道州。作賊退示官吏。（官に到りて未だ五十日ならざるに、諸使の徵求の符牒二百余封あり、其の限を失はば、罪は貶削に至ると云ふ。公命に応ずれば則ち州県乱れ、命に違へば又必ず罪戾を獲るを以て、乃ち春陵行を作りて以て其の寧ろ罪を待ちて以て民を安んじ、功を邀め民を賊すること母からんとするの意を抒す。又科率を免ずる状を進め、百姓負ふ所の租税等十三万貫を免ぜんことを請ふ、代宗之を許す。七月、河南副元帥大尉兼侍中臨淮王李光弼徐州に卒す。是の歳、西原の民永州を攻め、邵を破るも、道州を犯さず。賊退示官吏を作る）」と言ひ、「賊退而官吏」の制作時期について「是歳」というに止める。一方、楊承祖『元結研究』は、「元結年譜」広徳二年の条（二五二頁）において「七月、作『春陵行』。……未幾、西原蛮復来犯州、次山固守百余日。賊退、作『示官吏』詩。（七月、「春陵行」を作る。……未だ幾くならずして、西原蛮復た来りて州を犯し、次山固守すること百余日なり。賊退きて、「示官吏」詩を作る）」と記し、両詩制作の時期に言及している。今、楊承祖氏の説に従う。

(8) 楊承祖氏、前掲書。二五六頁。

(9) 「与何員外書」（卷八）の原注に「永泰中、何昌裕為戸部員外。」とある。

第四章 「春陵行」・「賊退示官吏」と杜甫「同元使君春陵行」

はじめに

「春陵行」及び「賊退示官吏」の二編は、大暦元年（七六六）もしくは二年（七六七）、夔州に旅寓していた杜甫のもとにも届けられ、感動した杜甫は「同元使君春陵行」（『杜詩詳注』卷一九）詩を作り唱和している。唐代において「春陵行」「賊退示官吏」の二詩について言及するのは杜甫のこの作のみである。顔真卿の「唐故容州都督兼御史中丞本管経略使元君表墓碑銘并序」も道州刺史としての政績を記述するのみで、特に両詩については言及していない。

杜甫は、この両詩を「比興体制」「微婉頓挫」の作であるとして称賛し、元結は王朝を支える官吏であると高く評価している。そして自らの中の王朝への求心性を確認し、詩家としての意識を高揚させて詩作の営みを盛んにしてゆくこととなったようである。この二詩は杜甫に大きな影響を与えたと思われるが、彼は「春陵行」のような樂府による諷諭を積極的に採用しようとはせず、また「漫叟」についても特に言及はしていない。

杜甫の「同元使君春陵行」詩は、杜甫における元結理解のみならず、同時代における二編の詩の受容を考える上で重要な作品である。「春陵行」と「賊退示官吏」が杜甫に与えた影響についてはすでに論じられているが、^(注2)本章では、第三章の考察を踏まえつつ杜甫がこの二編をどのように読み、元結をどのように評価したか、そして彼の詩的表現が如何に展開したかを改めて検討し、杜甫が言及しなかった元結の表現についても確認する。

第一節 「同元使君春陵行并序」

「春陵行」と「賊退示官吏」の二首に唱和した「同元使君春陵行并序」は、以下のような作品である。

同元使君春陵行并序

覽道州元使君結春陵行兼賊退後示官吏作二首、志之曰、当天子分憂之地、効漢官良吏之目。今盜賊未息、知民疾苦。得結輩十數公、落落然參錯天下為邦伯、万物吐氣、天下小安可待矣。不意復見比興体制、微婉頓挫之詞。感而有詩、增諸卷軸、簡知我者、不必寄元。

（道州元使君結の春陵行と賊退きて後官吏に示す作との二首を覽、之を志して曰はく、天子分憂の地に当たり、漢官良吏の目に効ふ。今盜賊未だ息まざるに、民の疾苦を知る。結の輩十數公を得て、落落然として天下に參錯して邦伯と為さば、万物氣を吐き、天下小しく安んぜんこと待つべし。意はざりき、復た比興の体制、微婉頓挫の詞を見んとは。感じて詩有り、諸を卷軸に増し、我を知る者に簡するにして、必ずしも元に寄せず。）

遭乱髮尽白 乱に遭ひて髮尽く白く

軫衰病相嬰 軫た衰へて病相ひ嬰る

沈綿盜賊際 沈綿たり 盜賊の際

狼狽江漢行 狼狽して江漢に行く

05 嘆時藥力薄 時を嘆きて藥力薄く

為客羸瘵成 客と為りて羸瘵成る

吾人詩家秀 吾人 詩家の秀

博采世上名 博く世上の名を采る

粲粲元道州

粲粲たり 元道州

10 前聖畏後生

前聖 後生を畏る

觀乎春陵作

春陵の作を觀れば

欸見俊哲情

欸ち俊哲の情を見る

復覽賊退篇

復た賊退の篇を覽るに

結也実国楨

結や実くに国楨なり

15 賈誼昔流慟

賈誼は昔流慟し

匡衡嘗引經

匡衡は嘗て經を引く

道州憂黎庶

道州 黎庶を憂ふ

詞氣浩縱橫

詞氣 浩として縱横たり

兩章対秋月

兩章 秋月に對し

20 一字偕華星

一字 華星に偕ひとし

致君唐虞際

君を唐虞の際に致さんとし

淳朴憶大庭

淳朴 大庭を憶ふ

何時降璽書

何れの時か璽書を降し

用爾為丹青

爾を用ひて丹青と為さん

25 獄訟永衰息

獄訟 永く衰息せん

豈惟偃甲兵

豈に惟に甲兵を偃するのみならんや

悽惻念誅求

悽惻 誅求を念ふ

薄斂近休明

薄斂 休明に近し

乃知正人意 乃ち知る 正人の意

30 不苟飛長纓 苟くも長纓を飛ばさざるを

涼颺振南岳 涼颺 南岳に振ふ

之子寵若驚 之の子 寵驚くがごとし

色沮金印大 色は沮す 金印の大なるに

興含滄浪清 興は含む 滄浪の清きを

35 我多長卿病 我長卿の病多きも

日夕思朝廷 日夕 朝廷を思ふ

肺枯渴太甚 肺枯れて渴すること太甚なり

漂泊公孫城 漂泊す 公孫城

呼兒具紙筆 兒を呼びて紙筆を具へしめ

40 隠几臨軒楹 几に隠りて軒楹に臨む

作詩呻吟内 詩を呻吟の内に作れば

墨淡字敲傾 墨淡く字敲傾す

感彼危苦詞 彼の危苦の詞に感ず

庶幾知者聽 庶幾はくは知者の聴かんことを

序は専ら官吏としての元結を称揚する。先ず、「当天子分憂之地、効漢官良吏之目。（天子分憂の地に当たり、漢官良吏の目に効ふ）」と、元結が漢代の善良にして忠実な官吏の細目にならった刺史であったことを言う。

「良吏」とは『漢書』循吏伝に宣帝の言葉として「庶民所以安其田里而亡嘆息愁恨之心者、政平訟理也。与我共

此者、其唯良二千石乎。（庶民の其の田里に安んじて嘆息愁恨の心亡き所以は、政平らかにして訟理まればなり。我と此を共にする者は、其れ唯だ良二千石か）とあるように、政治が公平であり、訴訟を正しく裁き、黎民を安んじる地方長官をいう。杜甫は、先ず元結こそが王朝にとって循環な官吏であつたと称賛するのである。これは「春陵行」序の「吾将守官、静以安人、待罪而已。（吾将に官を守り、静以て人を安んじ、罪を待たんとするのみ）」、および「春陵行」の「安人天子命、符節我所持（人を安んずるは天子の命なり、符節は我の持つ所なり）」（第三三、三四句）に表出している、元結の刺史としての意識を踏まえたものであろう。

「今盜賊未息、知民疾苦。（今盜賊未だ息まざるに、民の疾苦を知る）」とは、具体的には西原の賊の侵入によつて道州が疲弊している状況にあつても、元結は州民の困苦を知る刺史であつたことを言うのであるが、それは「春陵行」の第五、六句、第二一―第三二句に描かれた州民のありさまに、黎民を憂える元結のまなざしを読み取ったことに基づくと考えられる。

「得結輩十数公、落落然參錯天下為邦伯、万物吐氣、天下小安可待矣。（結の輩十数公を得て、落落然として天下に參錯して邦伯と為さば、万物氣を吐き、天下小しく安んぜんこと待つべし）」は、元結に対する賛辞である。杜甫は元結の中に王朝の正しき官吏たらんとする強い意志と自負を読み取っている。その意志と自負は、「春陵行」の「安人天子命、符節我所持（人を安んずるは天子の命なり、符節は我の持つ所なり）」（第三三、三四句）、「顧惟孱弱者、正直当不虧（顧みるに惟れ孱弱の者、正直当に虧かざるべし）」（第四三、四四句）に鮮明に表出しており、また、「賊退示官吏」における痛烈な官僚批判の言を支えているものでもある。

序は続いて二編の詩に及ぶ。「不意復見比興体制、微婉頓挫之詞。（意はざりき、復た比興の体制、微婉頓挫の詞を見んとは）」の「比興体制」、「微婉頓挫之詞」は「春陵行」と「賊退示官吏」の二編に対する評であるが、従来「春陵行」のみについでのものであるとしても論じられて^{（注3）}いる。この二首は、樂府と詩というスタイル、表現の位相も異なる作品である。したがって、杜甫のこの評語が「春陵行」「賊退示官吏」に共通するものであ

るのか否かについては、改めて確認する必要がある。

第三章において述べたが、「春陵行」は、「何人采国風」（第四五句）という句から明らかなように、『毛詩』大序に「是以一国之事、繫一人之本、謂之風。（是を以て一国の事を、一人の本に繫す、之を風と謂ふ）」とあるのに基づき、道州の黎民の状況と刺史としての立場、判断について詩人の漫叟が自らの心につけて、中央に伝えるべく、国風としての様式をもって制作した作品である。杜甫は、これを『詩経』の美刺の伝統を継ぐ「比興体制^{注4}」であるとして評価したとしてよい。

一方、「賊退示官吏」詩は「春陵行」のような国風としての体裁を備えてはいない。王雲熙^{注5}氏は、二編ともに「比興体制」の作とするが、少なくとも「賊退示官吏」を「春陵行」と同レベルにおいて「比興体制」の作とすることは無理があるとせざるを得ない。

「微婉頓挫之詞」の「微婉」とは、春秋の筆法をいう語である。例えば、杜預「春秋左氏伝序」（『文選』巻四五）には、『春秋左氏伝』における義例を説明する方法について述べるなかで「一日、微而顕。文見於此而義起在彼。……三曰、婉而成章。曲從義訓、以示大順。（一に曰はく、微にして顕る。文此に見るも義を起すこと彼に在り。……三に曰はく、婉にして章を成す。曲さに義訓に従ひ、以て大順を示す）」と言ひ、劉峻「弁命論」（『文選』巻五四）には「夫聖人之言、顕而晦、微而婉（夫れ聖人の言は、顕にして晦、微にして婉）」とある。明示的ではなく婉曲だが、真意が推察され、筋が通っているような表現のあり方をいうのである。

「頓挫」は、音調や情調、詩文の展開が抑揚に富むこと、急に停頓したり変化したりすることをいう。例えば陳子昂は「修竹篇」序で、東方虬の「詠孤桐篇」を「骨氣端翔、音情頓挫」と評している。また、陸機「遂志賦」序では馮衍について「衍抑揚頓挫、怨之徒也（衍の抑揚頓挫は、怨の徒なり）」と述べている。言志の文学においては表出の「頓挫」が起るのである。^{注6}杜甫も「進雕賦表」において「沈鬱頓挫」の語を用いて自らの文学を語っている。自らを彫に託した「雕賦」は激昂慷慨の気が充溢した作であり、正しく「頓挫」の文学と言う

ことができる。

「比興体制」の作である「春陵行」が「微婉頓挫」の表現を持つことは無論であるが、「賊退示官吏」詩はどのようなであろうか。「賊退示官吏」詩においても、道州の官吏に対して直截に自らの心情を表出し、厳しい税の徴収を迫る「使臣」に対する痛烈な批判が展開され、一転して辞官の意が述べられている。こうした感情の高ぶりと表現の屈折、展開が鮮明なこの詩は、やはり「頓挫」の作であると考えることができよう。

また、「賊退示官吏」詩の第一句と第六句、

昔歳逢太平 昔歳 太平に逢ひ

山林二十年 山林にあること二十年

泉源在庭戸 泉源 庭戸に在り

洞壑当門前 洞壑 門前に当たる

05 井税有常期 井税に常期有り

日晏猶得眠 日晏くして猶ほ眠るを得たり

は、太平の時代、二〇年の間、山林にあった日々のことを詠じている。「井税有常期、日晏猶得眠（井税に常期有り、日晏くして猶ほ眠るを得たり）」の句は、直接には元結自身の体験を述べているのであるが、人々が平和に過ごしていた日々のことを言うと同時に、律令制度の崩壊した勿々たる当代の状況を想起させるという表現の構造を持っている。また、「使臣将王命、豈不如賊焉（使臣王命を将ふ、豈に賊だにも如かざらんや）」（第一五、一六句）、「今彼徴斂者、迫之如火煎。誰能絶人命、以作時世賢（今彼の徴斂の者、之に迫ること火の煎するがごとし。誰か能く人命を絶ちて、以て時世の賢と作さん）」（第一七と第二〇句）に示された批判は、勿論

直接には「使臣」「微斂者」に対するものであるが、ここには朝廷の政治を行う者たちに向けられた規諷の意図が込められている。こうした表出のあり方は微婉の構造として理解することができるであろう。杜甫は「春陵行」を「比興体制」と評し、「微婉頓挫」を二編に共通する表現の特色として捉えたと推測できる。

詩中では、「両章対秋月、一字偕華星（両章秋月に対し、一字華星に偕し）」（第一九、二〇句）と、二編を称賛し、「春陵行」に対しては「観乎春陵作、欵見俊哲情（春陵の作を観れば、欵ち俊哲の情を見る）」（第一一、一二句）と言い、「賊退示官吏」については「復覧賊退篇、結也実国楨（復た賊退の篇を覽るに、結や実に国楨なり）」（第一三、一四句）と詠じている。「俊哲」は、才能見識の非凡な人物、「国楨」は、国家の柱、国家の支えとなる人物をいう。『詩経』大雅「文王」に「維周之楨（維れ周の楨）」とあるのに基づく。杜甫は「賊退示官吏」に示された元結の王朝に対する態度をもって国楨と称賛した。民生を第一とし、中央の政治を批判することも辞せず、官位も望まぬ元結の姿に感動し、彼を国楨と呼び、賈誼や匡衡の姿に重ねているのである。涙を流し慟哭して天下を論じた前漢の賈誼や、経書を引用して政治を論じた匡衡の姿は、また王朝への強い求心的志向を喚起するものでもある。「致君唐虞際、淳朴憶大庭（君を唐虞の際に致さんとし、淳朴大庭を憶ふ）」（第二一、二二句）も元結を称美する語であるが、この句は、かつて天寶六載（七四七）、杜甫が韋左丞に贈った詩で「致君堯舜上、再使風俗淳。（君を堯舜の上に致し、再び風俗をして淳ならしむ）」と自らの願いを詠じた句と同様である。元結のなかに唐王朝への強い求心性が見いだされているのである。

こうした元結の姿に、杜甫は「我多長卿病、日夕思朝廷（我長卿の病多きも、日夕朝廷を思ふ）」（第三五、三六句）と自らを振り返る。伊藤氏はこの二句を杜甫の自己批判と精一杯の自己主張を象徴的に表現したものであるとしているが、むしろ杜甫は元結の中に朝廷への強い思いを読み取った時に、自らの内なる王朝への強い求心性を改めて確認したと解釈できるのであろう。

第二節 「春陵行」「賊退示官吏」の影響

「春陵行」「賊退示官吏」を読み、朝廷を思うとつぶやいた杜甫の表現の営みに生じた変化について、伊藤氏^(注8)は「杜甫はこの二首により、かつての強固な儒家意識を回復し、ひいては彼の詩的燃焼を熾烈にしたのではなかったか。」と述べている。氏はまた「詩家」の語に注目し、「吾人詩家秀、博采世上名」(第七、八句)について、「詩家」とは詩の「六義の継承者として」の「儒教的モラルに基礎づけ」られた意識であるとし、夔州に漂泊する杜甫にとっては、「為し得る最大限のことは、世上の詩の名作を採集して、社会に還元し、世の風教に益することくらいである」と解釈している。

また、伊藤氏^(注9)は、夔州の時期以後の杜甫の樂府について、「『縛鷄行』『折檻行』『負薪行』『最能行』『可歎』『歲晏行』などの、社会の断面をえぐった現実主義的な作品が見える。」と言い、「大曆以後のものには、やや積極的に現実立ちむかおうとする姿勢がうかがわれる。多くは日常身边に材をとるが、社会的連帯感がそこにはある。」と指摘している。

「春陵行」を「比興体制」と称えた杜甫は、果たして樂府という表現様式をどの程度積極的に用いようとしたのであろうか。晩年の作とされる「歲晏行」を取り上げる。

歲云暮矣多北風 歲云に暮れ北風多し

瀟湘洞庭白雪中 瀟湘 洞庭 白雪の中

漁父天寒網罟凍 漁父 天寒く網罟凍り

莫徭射雁鳴桑弓 莫徭 雁を射て桑弓を鳴らす

05 去年米貴闕軍食 去年 米貴く軍食を闕き

今年米賤太傷農

今年 米賤くただ農を傷ましむ

高馬達官厭酒肉

高馬の達官は酒肉に厭き

此輩杼軸茅茨空

此の輩 杼軸茅茨空し

楚人重魚不重鳥

楚人は魚を重んじて鳥を重んぜず

10 汝休枉殺南飛鴻

汝枉げて南飛の鴻を殺すを休めよ

況聞処處鬻男女

況や聞く 処処男女を鬻ぎ

割慈忍愛還租庸

慈を割き愛を忍びて租庸を還すを

往日用錢捉私鑄

往日 錢を用ふるに私鑄を捉ふ

今許鉛鉄和青銅

今鉛鉄青銅に和するを許す

15 刻泥為之最易得

泥を刻して之を為るは最も得易きも

好惡不合長相蒙

好惡 合に長く相蒙くべからず

万国城頭吹画角

万国 城頭 画角を吹く

此曲哀怨何時終

此の曲 哀怨 何れの時にか終らん

大曆三年（七六八）、岳陽に向かう時の作である。冒頭の二句には、年の暮れ、白雪に包まれた情景が描かれる。第三、四句「瀟湘の水も洞庭湖も白雪の中にあり、漁師は寒さのために網が凍り漁もできず、蛮族の莫徭は弓を鳴らして雁を射ている」は、第九、一〇句に対応し、漁師が税を納めるための漁ができないことをいう。第五、六句は米の価格が適切でなく、今年は農民が苦しんでいることをいう。大曆二年（七六七）には水害のため、京官の職田の三分の一を減じて軍の食糧に当てたことを踏まえる。また、第七句は、大曆二年三月、郭子儀が来朝した際、元載、第五琦他がそれぞれ三〇万銭を出して、郭子儀の邸宅で大宴会を催したことなどの事実を踏ま

えている。都では高官が贅沢な暮らしをしているのに、湖南の地では必死に機織りをしているものの、粗末な家には何もない、というこの二句は、「朱門酒肉臭、路有凍死骨（朱門には酒肉臭きに、路に凍死の骨有り）」（「自京赴奉先縣詠懷五百字」）を想起させる。第一一、一二句は、子供を売って租庸に当てていることを言い、第一句から第一六句は、民間で鑄造された質の悪い貨幣が用いられ、経済が混乱している事実を伝える。第一七句は戦乱が続いていることをいう。

この作品は時事を踏まえて制作されており、杜甫の現実に対する関心の高さを表すものであるが、劉辰翁が「子美晚年詩多雜亂、無復語次。（子美晩年の詩は多く雜亂にして、復た語次無し。）」と評するように、租税、貨幣の問題、そして戦乱と、やや煩瑣な内容が盛り込まれ、例えばかつての三吏三別に見られるような物語性や問答のスタイル、対象に密着して現実をえぐり出すような迫力は見られない。

一方、樂府以外の作品の中には、三吏三別を彷彿とさせるようなものがある。「甘林」を取り上げる。

捨舟越西岡	舟を捨てて西岡を越え
入林解我衣	林に入りて我が衣を解く
青芻適馬性	青芻 馬性に適ひ
好鳥知人歸	好鳥 人の歸るを知る
05 晨光映遠岫	晨光 遠岫映じ
夕露見日稀	夕露 日を見て稀なり
遲暮少寢食	遲暮 寢食少く
清曠喜荆扉	清曠 荆扉を喜ぶ
經過倦俗態	經過 俗態に倦む

10 在野無所違

野に在りては違ふ所無し

試問甘藷

試みに問ふ藷を甘しとするかと

未肯羨輕肥

未だ肯て輕肥を羨まず

喧靜不同科

喧靜 科を同じくせず

出処各天機

出処 各天機なり

15 勿矜朱門是

朱門の是なるを矜り

陋此白屋非

此の白屋非なりと陋とする勿かれ

明朝歩隣里

明朝 隣里に歩む

長老可以依

長老 以て依るべし

時危賦斂數

時危くして賦斂數なり

20 脱粟為爾揮

脱粟 爾が為に揮ふ

相携行豆田

相ひ携へて豆田を行れば

秋花靄菲菲

秋花 靄として菲菲たり

子実不得喫

子実 喫するを得ず

貨市送王畿

市に貨して王畿に送る

25 尽添軍旅用

尽く軍旅の用に添ふ

迫此公家威

此の公家の威に迫らる

主人長跪問

主人 長跪して問ふ

戎馬何時稀

戎馬何れの時にか稀ならんと

我衰易悲傷

我衰へて悲傷し易く

30 屈指數賊圍

指を屈して賊に囲まるるを数ふ

勸其死王命

其に勸む 王命に死し

慎莫遠奮飛

慎みて遠く奮飛すること莫かれと

『杜詩詳注』は、大暦二年、城中より瀼西の甘林（蜜柑の園林）に戻ってきた時の作とする。城中から船で甘林に戻ってきた杜甫は、ゆったりとくつろいで自問自答しつつ自らのあり方を振り返る。第一七句以降はその翌日のことを記す。翌朝、杜甫は、隣の長老とともに逍遙し、「時代が危うく、徴税がしばしばで、玄米も役人にとって行かれて、なにも残っていない」と訴える長老の言葉を聞きながら、共に豆の畑を巡る。（以上『杜詩詳注』の解釈による）第二三句から第二六句は、長老の言葉として読める。長老は「豆の実は食べられず、市場で売ってその金を都に送る。すべて軍用に供されるが、お上の権威に迫られてしかたなくそうしているのだ」と語る。そして跪いて「戦争は何時になったら無くなるのか」と尋ねる。杜甫は長老の言葉を痛み悲しみ、自らが賊に囲まれた回数を指折り数え、王命であれば死力を尽くさなくてはならないのだと勧めるのであった。

詩の後半の表現は、詳注に引く『杜臆』が「後段列問答之詞、居然古調、与三吏三別諸章參觀、何謂唐無古詩乎。（後段問答の詞を列し、居然として古調なり。三吏三別の諸章と參觀すれば、何ぞ唐に古詩無しと謂はんや。）」と指摘するように、三吏三別の表現を彷彿とさせるものである。例えばこの物語性と問答のスタイルを持つ場面を楽府として描くことは十分に可能であったろうに、杜甫はそうしなかった。杜甫は夔州の時期以降も、楽府の制作に対しては実はそれほど積極的ではなかったということが窺える。

一方、伊藤氏^(注10)が指摘するように、夔州にあった時期、杜甫は長編の排律を制作している。三〇韻以上の作品は、「夔府書懷四十韻」「贈李八秘書別三十韻」「秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻」「寄劉峽州伯華使君四十韻」「大暦三年春、白帝城、放船出瞿塘峽、久居夔府、將適江陵、漂泊有詩、凡四十韻」である。これら排律の

制作は、杜甫の詩歌創作への意欲が高まっていることを示すものであろう。

そのうち、「夔府書懷四十韻」（大暦元年秋）は、自らの境遇を述べて天下の現状に及び、中央の政治に対する尚書省の官吏としての見解を示した作品である。詩中には、中央の租税の徴収と盗賊への対応に対する見解が批判を含みつつ次のように展開されている。

………	使者分王命	使者	王命を分かち
………	群公各典司	群公	各典司す
………	恐乖均賦斂	恐らくは賦斂を均しくするに乖き	
………	不似問瘡痍	瘡痍を問ふに似ざらん	
………	万里煩供給	万里	供給煩はしく
………	孤城最怨思	孤城	最も怨思す
………	緑林寧小患	緑林	寧ぞ小患ならんや
………	雲夢欲難追	雲夢	追ひ難からんと欲す
………	即事須嘗胆	即事	須らく胆を嘗むべく
………	蒼生可察眉	蒼生	眉に察すべし
………	………	………	………

「天子の命を使臣が各地方に伝え、中央ではお歴々が官署を司っているが、徴税の仕方は均等ではなく、黎民の疾苦を問う態度ではない。万里の彼方の地でも租税の供給が煩わしく、この夔州では人々が最も恨みに思っ

いる。盗賊は決して小さい愁いではなく、楚の昭王が雲夢に出かけて盗賊に攻められるようなことが起こってからは遅いのだ。眼前のことに即して言えば、復讐することを忘れてはならないし、黎民の心はその眉を見ただけで察するようにしなくてはいけない。」

「使者分王命」は、天子の命を使臣が各地方に伝えることで、元結「賊退示官吏」詩の「使臣将王命（使臣王命を将ふ）」（第一五句）の句を想起させる。また、「賦斂」の語も同じ意味の「徴斂」が「春陵行」「賊退示官吏」にそれぞれ「供給豈不憂、徴斂又可悲（供給豈に憂へざらんや、徴斂又悲しむべし）」（第五、六句）「今彼徴斂者（今彼の徴斂の者）」（第一七句）のように用いられている。「供給」の語も「春陵行」に見える。租税の徴斂と盗賊の侵入は「春陵行」「賊退示官吏」において、道州刺史元結が直面した問題でもあった。さらに黎民への視座も共通している。

おそらく元結の詩に触発され、尚書省の郎官としての「朝廷を思う」意識と詩家としての自負とが、この最も技量を求められる排律の長編を制作せしめたのであろう。この詩の第七八句に「哀歌欲和誰（哀歌和せんと欲するは誰ぞ）」とあるように、夔州にある杜甫にとって、その営みは「哀歌」でしかなかったが、ここには確かに朝廷への著しい求心性が表出している。

おわりに

「同元使君春陵行」詩は、元結の文学の称揚というより、王朝の官吏としての元結を称える詩である。そしてそのことが杜甫の心中に、王朝への強い求心性を持つ官吏としての意識を自覚させることとなった。しかし杜甫は元結の比興の体制にならって、楽府の形式によって下情を達する諷諭の方法を積極的にとることをしなかった。彼はおそらく比興の文学の限界を見定めていたのであろう。元結の「春陵行」は杜甫に驚きと感動を与えはした

ものの、表現の方法として積極的に取り入れられることはなかったのである。

また、前章で指摘した「漫叟」についても、杜甫が特に言及していなかったことにも注目される。「漢官良吏之目」ならうと評価した者が、なぜ「臣結（臣某）」ではなく、漫叟という号を用いて「漫叟授道州刺史。（漫叟道州刺史を授けらる）」と述べたのであろうか。杜甫はおそらく漫叟の号についても理解した上でことさらに言及することなく「結也実国楨（結や実に国楨なり）」と称賛しているのであって、ここに杜甫の朝廷に対する視座を見て取ることもできそうである。漫叟の号の使用は、元結の朝廷に対する態度を表しており、次章で検討を進めることとする。

注

（１）「春陵行」、「賊退示官吏」の二編が杜甫の手元に届いた経緯について、伊藤正文氏は「どのような経路でこの一首が杜甫の手元に届いたのかは不明であるが、その頃荊州まで来ていた元結の親友孟雲卿が、届けたのではなかったろうか。」（『建安詩人とその伝統』創文社、二〇〇二年、四〇六頁）と推測している。

（２）代表的な論考に、伊藤正文氏、前掲書、第三編第三章「詩家としての杜甫」、第三編第四章「杜甫と元結・『篋中集』の詩人たち」、鄧芳「元結楽府における『比興体制』とその新楽府に対する影響―『春陵行』を中心に―」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第一三号、二〇一〇年）がある。

（３）伊藤正文氏、前掲書。四〇六頁～四一一頁。鄧芳氏、同論文。王雲熙・楊明著『隋唐五代文学批評史』「第二編第二章「唐代的詩歌批評」（上海古籍出版社 一九九四年）他。

（４）唐代における「比興」の概念については鄧芳氏、前掲論文が詳細に分析して「孔穎達の後の唐代文人は、『比興』の政治風諭の面を更に重視しているように思われる」（八頁）とし、「杜甫が『比興』を『美刺風

論』の意味で用いたとしてもおかしくはない」と述べている。また「体制」を「文章形式と風格」（九頁）と解釈している。

（5）王雲熙・楊明氏、前掲著。二六三頁。

（6）鄧芳氏は前掲論文において、「頓挫」を「諷諭、説得などの婉曲な文辞の風格を言うと考えられる」（六頁）としている。

（7）伊藤正文氏、前掲書。四〇九頁。

（8）伊藤正文氏、前掲書。三八九頁。

（9）伊藤正文氏、前掲書。四一〇頁。

（10）伊藤正文氏、前掲書。三八九頁。

第五章 漫叟の視座

はじめに

元結は、第一編第三章で検討した元子をはじめとして、いくつかの号を用いている。「漫叟」は、宝応元年（七六二）以後に、王朝の官僚世界の価値観にとらわれない老人の意で用いられるようになった号であり、この号には世俗に対峙して道義を守り続けようとする強い意志と自負が込められているように見える。

第三章及び第四章において取り上げた「春陵行」序の「癸卯歳、漫叟授道州刺史。（癸卯の歳、漫叟道州刺史を授けらる）」は、その用例の一つであるが、この序において、例えば『篋中集』序にあった「元結」の自称や「臣結」といった表現を用いず、漫叟という号を用いたのはなぜなのであるか。

漫叟という号は如何なる表現者の視座を表しているのだろうか。また、彼の号である猗玗子、浪士と漫叟との関係はどのようなものだったのか。本章では、猗玗子、浪士及び漫叟という号の使用の検討を通して、「春陵行」制作前後の時期における元結の文学の表現の視座を明らかにする。

第一節 「自釈」に見られる称呼

元結が自ら用いた猗玗子・浪士・漫叟といった号については、宝応元年（七六二）に編年されている「自釈」（卷八）のなかで、次のように述べている。

河南、元氏望也。結、元子名也。次山、結字也。世業載国史、世系在家牒。少居商余山、著元子十篇。故以元子為称。天下兵興、逃乱入猗玗洞、始称猗玗子。後家灋浜、乃自称浪士。及有官、人以為浪者亦漫為官乎。呼為漫郎。既客樊上、漫遂頭。樊左右皆漁者、少長相戲、更曰聲叟。彼謂以聲者、為其不相從聽、不相鈎加、帶箬簪而尽船、独聲齟而揮車。酒徒得此、又曰、公之漫、其猶聲乎。公守著作、不帶箬簪乎。又漫浪於人間、得非聲齟乎。公漫久矣。可以漫為叟。於戲、吾不從聽於時俗、不鈎加於当世。誰是聲者。吾欲從之。彼聲叟不慚帶乎箬簪。吾又安能薄乎著作。彼聲叟不羞聲齟於隣里。吾又安能慚漫浪於人間。取而醉人議、当以漫叟為称。直荒浪其情性、誕漫其所為、使人知無所存有、無所將待。乃為語曰、能帶箬簪者、全独而保生。能學聲齟者、保宗而全家。聲也如此。漫乎非邪。

河南は、元氏の望なり。結は、元子の名なり。次山は、結の字なり。世業は国史に載り、世系は家牒に在り。少くして商余山に居り、元子十篇を著す。故に元子を以て称と為す。天下兵興るや、乱を逃れて猗玗洞に入り、始めて猗玗子と称す。後灋浜に家し、乃ち自ら浪士と称す。官有るに及び、人以為へらく浪者亦た漫に官と為るか、と。呼びて漫郎と為す。既に樊上に客たるや、漫遂に頭る。樊の左右は皆漁る者にして、少長相戯れ、更めて聲叟と曰ふ。彼謂るに聲を以てするは、其の相從聽せず、相鈎加せず、箬簪を帶びて船を尽くし、独り聲齟にして車を揮ふが為なり。酒徒此を得、又曰はく、公の漫は、其れ猶ほ聲のごときか。公著作を守るに、箬簪を帶びざるか。又人間に漫浪たるは、聲齟に非ざるを得んや。公漫なること久し。漫を以て叟と為るべし、と。於戲、吾時俗に従聽せず、当世に鈎加せず。誰か是れ聲なる者ぞ。吾之に従はんと欲す。彼の聲叟は箬簪を帶ぶるに慚ぢず。吾又安くんぞ能く著作を薄んぜんや。彼の聲叟は隣里に聲齟たるに羞ぢず。吾又安くんぞ能く人間に漫浪たるに慚ぢんや。而ら醉人の議を取りて、当に漫叟を以て称と為すべし。直だ其の情性を荒浪ならしめ、其の為す所を誕漫ならしめ、人をして存有する所無く、將待する所無きを知らしめん。乃ち為に語げて曰はく、能く箬簪を帶ぶる者は、独を全くして生を保ち、能く聲齟を学

ぶ者は、宗を保ちて家を全くせん。贅や此のごとし。漫なるか非ざるか、と。

元結は初め元子と自称していた。そして安史の乱以後、いくつかの号を用いている。「自釈」によれば、安史の乱後、彼の号は、猗玗子↓浪士↓漫叟と変わっていったことになる。そのうち猗玗子の号は、乱を逃れて猗玗洞にあったという自らの身を置く場所に基づく。浪士も、海浜に隠遁する者の意で、やはり自ら身を寄せた場所による。この両者はいわば空間に依存する号であって、元結はこれらの地を去った後、猗玗子や浪士と称するとはなかった。それに対して漫叟は、漫郎、贅叟、「漫を以て叟と為る」といった、他者の元結に対する称呼や評語のうちから得たものである。「自釈」の、漫浪・贅叟という他者の称呼から漫叟を得るに至る過程に記述は、同時に世俗に対する自らの態度を明確にするものでもある。猗玗子や浪士という号とは意味づけが少しく異なっているのである。

元結が漫叟を自らの号としたことについて、楊承祖氏は次のように述べる。^(注1)

「荒浪誕漫、無有無待」、是在老莊哲理的人生實踐、而「全独保生、保宗全家」、却反映出辞官背景中深沈的蒼涼。「贅也」・「漫乎」、非僅遊戲之詞而已、更有不諧流俗、抗顏当世的精神寓乎其中。既以「漫」為称、於是特作「漫論」、又恢復了『元子』時期嘲諷議論的風格。……以浪漫對抗規檢、甚至自許「漫家」、辞官解職、讓元結在行事和精神上、都得到很大的自由解放、過了一兩年自在逍遙的生活。

「いいかげんでたらめ、有するものもたのむところもない」というのは、老莊の哲学の實踐で、「独を全くし生を保ち、宗を保ち家を全くす」には、官を辞したことの背後にある深い寂寞感が表されている。

「贅也」、「漫乎」とは、単に戯れの言葉であるだけではなく、流俗に合わせず、当世に対峙する精神をその中に寓している。「漫」をもって称し「漫論」を作り、元子と名乗っていた時期の、世俗を嘲笑諷刺し議

論するといった精神を回復している。……浪漫を以て法律や制度を守る者に対峙し、自ら漫家とまで称している。官を辞することによって元結は行動の面においても精神的にも大きな自由と解放を得、一二年の自由な逍遙の生活を送ったのである。

氏は、元結が漫叟と号したのは老荘的な理念の実践であり、背後には官を辞した沈鬱な思いがあるものの、世俗に合致せず、当世に対峙する精神がこの号には込められており、それは元結が辞官によって行動や精神の自由を得、世俗を嘲笑、諷刺し、議論するという精神を回復したことを表すものであるとしている。さらに、「聲」「漫」には、世俗とともにせず、当世に対する傲った精神が託されていると述べている。

しかし、氏の解釈に従うと、例えば「春陵行」が、当世におごった嘲笑諷刺の視座において制作されたということになり、こうした解釈にはやや無理があるように思われる。さらに表現の視座において元子と漫叟とが等しいものであったか否かについても検討の必要があるだろう。

第二節 浪士

元結は、乾元元年（七五八）、安史の乱を逃れ、猗玗洞から瀼溪（江西省瑞昌市）に居を移し、翌二年（七五九）蘇源明の推挙によって京師に上るまでをこの地で過ごした。瀼溪における作品としては、乾元元年の「瀼溪銘」（巻六）が残されている。顔真卿の「元君表墓碑銘」には「将家瀼浜、乃自称浪士、著浪説七篇。（家を瀼浜に将て、乃ち自ら浪士と称し、浪説七篇を著す）」とあるが、この「浪説七篇」は散佚している。なお、上元二年（七六一）の「与瀼溪隣里」（巻二）、「喻瀼溪鄉旧遊」（巻二）の二編の詩には「浪士」の号は用いられていない。

「瀼溪銘」（卷六）を次に引く。

乾元戊戌、浪生元結始浪家瀼溪之浜。瀼溪、蓋湓水分称。瀼水夏瀼江海、則百里為瀼湖、二十里為瀼溪。瀼溪、浪士愛之、銘之其浜。於戲、古人喜尚君子。不見君子、見如似者、亦称頌之。瀼溪、可謂讓矣。讓、君子之道也。称頌如此、可遺瀼溪。若天下有如似讓者、吾豈先瀼溪而称頌者乎。銘曰、

乾元戊戌、浪生元結始めて浪りに瀼溪の浜に家す。瀼溪は、蓋し湓水の分称なり。瀼水は夏に江海に瀼るれば、則ち百里を瀼湖と為し、二十里を瀼溪と為す。瀼溪は、浪士之を愛し、之に其の浜に銘す。於戲、古人は君子を喜尚す。君子を見ざれば、似るがごとき者を見れば、亦た之を称頌す。瀼溪は、讓と謂ふべし。讓は、君子の道なり。称頌すること此のごとく、瀼溪に遺るべし。若し天下に讓に似るがごとき者有らば、吾豈に瀼溪に先んじて称頌する者なるか。銘に曰はく、

瀼溪之瀾 瀼溪の瀾なみ

誰取盟焉 誰か取りて焉に盟せん

瀼溪之漪 瀼溪の漪なみ

誰取飲之 誰か取りて之を飲まん

05 盟実可矣 盟すること実に可なり

飲豈難矣 飲むこと豈に難からんや

得不慚其心 慚ぢざるを得んや 其の心の

不如此水 此の水に如かざるを

浪士作銘 浪士 銘を作り

10 将戒何人 将に何人かを戒めんとする

欲不讓者 讓ならざる者の

慚遊瀼浜 瀼浜に遊ぶを慚ぢしめんと欲す

ここでは、自らを「浪生元結」と言い、また「浪士」と号している。「浪士」の語は水辺に気ままに隠棲する者をいう語で、郭璞の「客傲」（『全晋文』卷一二一）に「嚶声冠于伐木、援類繁乎拔茅。是以水無浪士、巖無幽人。（嚶声は伐木に冠たり、類を援くこと茅を抜くよりも繁し。是を以て水に浪士無く、巖に幽人無し）」と見える。しかしながら元結に至るまで郭璞以外の用例は見あたらない。また、浪生の号も例を見ない。しかし、商余山に静養していた天宝九載（七五〇）から一二載（七五三）頃に制作されたとされる「浪翁観化」（卷五）では、自らが「浪然として山谷に在」ったとして、次のように言う。

浪翁、山野浪老也。聞元子亦浪然在山谷、病中能記水石草木虫豸之化、亦來說常所化。

浪翁は、山野の浪老なり。元子も亦た浪然として山谷に在り、病中能く水石草木虫豸の化を記すと聞き、亦た来りて常に化する所を説く。

「浪然」について、『漢語大詞典』は「放蕩無拘束貌。」と解し、この「浪翁観化」を引用する。この解釈に随えば世俗の価値観に拘束されることなく、気儘に振る舞うさまとする解釈である。浪士は浪翁と同じく、王朝の官僚世界の価値観に拘束されず、水辺に隠棲して気儘に振る舞う者という意味を持つ号であると言うことができる。

詩人の視座はさまざまな対社会的関係の結節点において成立するものであり、元結の場合には世俗、ことに中

央の政治世界の価値観に拘束されず、尚古的な儒家の公理に依拠しつつ、社会を、とりわけその政治的情况を客体化して対峙する視点を伴っている。

「瀼溪銘」は、「瀼溪」の「瀼」に「讓」の意味を読み、溪谷に讓という価値観を賦与して称美した作品である。その序では、「若天下有如似讓者、吾豈先瀼溪而称頌者乎。（若し天下に讓に似るがごとき者有らば、吾豈に瀼溪に先んじて称頌する者なるか）」と言い、また銘においては「浪士作銘、将戒何人。欲不讓者、慚遊瀼溪。（浪士銘を作り、将に何人をか戒めんとする。讓ならざる者、瀼溪に遊ぶを慚ぢしめんと欲す）」と、「讓」を忘れた現実に対する憤りが吐露されている。元結は瀼溪を称美しつつ、「讓」を忘れた現実を見据えているのである。「瀼溪中曲浜、其陽有閒園。隣里昔贈我、許之及子孫。我嘗有匱乏、隣里能相分。我嘗有不安、隣里能相存。（瀼溪中曲の浜、其の陽に閒園有り。隣里昔我に贈り、之を子孫に及ぼすを許す。我嘗て匱乏有り、隣里能く相分かつ。我嘗て安んぜざる有り、隣里能く相存す）」（「与瀼溪隣里」）とあるように、瀼溪の人々は、元結が困窮しているのを見れば自らのものを分かち与え、安らかでなければやってきて慰めてくれたのである。こうした人々の姿がどれほど元結を感動させたかは想像に難くない。端正で力強い「瀼溪銘」の叙述は、この感動がなければ成立しなかったであろう。

浪士が見据えていた現実はどうのようなものであったのか。それは猖狂を極め、欲望の限りを尽くす安祿山、史思明の姿であり、また次第に王朝の支配が及ばなくなってきた藩鎮の姿であったと考えられる。

乾元元年（七五八）一二月には、平盧節度使が軍士によって廃立されるという事件が起こっている。^{（注2）}この事件に象徴されるように、当時、王朝の求心力の衰退と、それに伴う藩鎮の横暴とが顕著となっていた。元結もすでに至徳二載（七五七）に制作した「管仲論」（巻六）において、次のように指摘している。

況今日之兵、不可以礼儀節制、不可以盟誓禁止。如仲之輩、欲何為矣。

況んや今日の兵は、礼儀を以て節制すべからず、盟誓を以て禁止すべからず。仲のごときの輩、何をか為さんと欲する。

藩鎮は礼儀や盟約によって押さえることはできないのだから、管仲のごとき者がいたとしても何もできはしないというのである。こうした威力、権力を求めて傲る者たちを念頭にして「瀼溪銘」は書かれたのであろう。

「若天下有如似讓者、吾豈先瀼溪而称頌者乎。（若し天下に譲に似るがとき者有らば、吾豈に瀼溪に先んじて称頌する者なるか）」とあるように、浪士は騒然たる時局をしっかりと見据えていたということができよう。

「瀼溪銘」を制作した元結は、翌乾元二年（七五九）、蘇源明の推挙により、肅宗に「時議三篇」を奉り、右金吾兵曹参軍撰監察御史を拝し、兵を率いて史思明の南進を防いだ。そして上元二年（七六一）には、荊南節度判官水部員外郎兼殿中侍御史として、荊南の兵を率いて九江に鎮していた。第一編第三章で検討したように、そのおりに瀼溪の人々を思つて制作された「与瀼溪隣里」詩の序（巻二）では、彼は自らを元子と称している。元子と名乗ったのは、浪士が猗玗子と同じく、猗玗洞、瀼溪といった場所に限定されたものだったためである。同年、元結が再び瀼溪を訪れた時には、彼が浪士と号した時からすでに二年近くが経過していた。その折りに制作された「喻瀼溪郷旧遊」（巻二）には、瀼溪の人々が元結の姿を見て驚いた様子が次のように描かれている。

往年在瀼溪 往年瀼溪に在りしとき

瀼人皆忘情 瀼人 皆情を忘る

今来遊瀼郷 今来 瀼郷に遊ぶに

瀼人见我驚 瀼人 我を見て驚く

05 我心与瀼人 我心は瀼人と

豈有辱与荣	豈に辱と榮と有らんや
讓入異其心	讓入 其の心を異にするは
応為我冠纓	応に我が冠纓の為なるべし
昔賢惡如此	昔賢 此くのごときを惡むは
10 所以辞公卿	公卿を辞する所以なり
貧窮老鄉里	貧窮 郷里に老い
自休還力耕	自ら休めて還た力耕せん
況曾經逆乱	況んや曾て逆乱を経
日厭聞戰爭	日び戰爭を聞くに厭くをや
15 尤愛一溪水	尤も一溪の水を愛して
而能存讓名	能く讓の名を存せん
終当来其浜	終に当に其の浜に來り
飲啄全此生	飲啄して此の生を全くすべし

讓溪の人々の心が変わってしまったのは自らが官にあるからであると気づき、同時に自らがもはや讓溪の人ではないことを知ったのである。元結は、官を辞してこの讓溪に老いたいと、讓溪への限りない愛着を語るのだが、彼の視座はもはや讓溪に身を寄せる浪士のそれではなかった。

第三節 漫叟

元結は、宝応元年（七六二）以降漫叟の号を用いている。^{（注3）}この号は猗玗子、浪士と異なり、より直接に官僚世界との関係において成立していると考えられる。「自釈」（巻八）に「及有官、人以為浪者亦漫為官乎。呼為漫郎。既客樊上、漫遂顛。（官有るに及び、人以為へらく浪者亦た漫に官と為るか、と。呼びて漫郎と為す）」とあるように、「漫」は、官としての元結に与えられた呼称である。この「漫」はいかなる視座を可能にするものであったのか。元結は「漫論并序」（巻八）において自ら次のように述べている。

乾元己亥至宝応壬寅、蒙時人相誚議曰、元次山嘗漫有所為、且漫聚兵、又漫辞官、漫聞議云云。因作漫論。論曰、

世有規檢大夫持規之徒、來問叟曰、公漫然何為。對曰、漫為公也。漫何以然。對曰、漫然。規者怒曰、人以漫指公者、是他家惡公之辭。何得翻不惡漫而稱漫為。漫何檢括、漫何操持、漫何是非。漫不足準、漫不足規。漫無所用、漫無所施。漫也何効、漫焉何師。公髮已白。無終惑之。叟俛首而謝曰、吾不意公之說漫而至於此。意如所說、漫焉足恥。吾當於漫終身不差。著書作論、當為漫流。於戲、九流百氏、有定限耶。吾自分張、獨為漫家。規檢之徒、則奈我何。

乾元己亥より宝応壬寅に至るまで、時人の相誚りて議するを蒙むるに曰はく、元次山嘗て漫に為す所有り、且つ漫に兵を聚め、又漫に官を辞し、漫に議を聞く云云、と。因りて漫論を作る。論に曰はく、

世に規檢大夫・持規の徒有り、來りて叟に問ひて曰はく、公漫然として何をか為す、と。對へて曰はく、漫を公と為すなり、と。漫何を以て然るか、と。對へて曰はく、漫もて然り、と。規者怒りて曰はく、人漫を以て公を指すは、是れ他家公を惡むの辞なり。何ぞ翻りて漫を惡まずして漫を稱するを得んや。漫は何ぞ檢括せん、漫は何ぞ操持せん、漫は何ぞ是非せん。漫は準とするに足らず、漫は規とするに足らず。漫は用ゐる所無く、漫は施す所無し。漫や何ぞ効はん、漫や何ぞ師とせん。公は髮已に白し。終に之に惑ふこと無

れ、と。叟俛首して謝して曰はく、吾意はざりき公の漫を説きて此に至れるを。意は説く所のごときも、漫は焉くんぞ恥づるに足らんや。吾当に漫に於て終身羞ぢざるべし。書を著し論を作るは、当に漫流を為すべし。於戯、九流百氏、定限有らんや。吾自ら分張し、独り漫家を為さん。規検の徒、則ち我を奈何せん、と。

元結は、乾元二年（七五九）、すなわち官に就いた年から官を辞した宝応元年（七六二）まで、常軌を逸脱した「漫」なる者として指弾され、漫郎と呼ばれていた。これは王朝の官僚世界の価値観に拘束されず思うがままに振る舞う者に対する士人の側からの処遇であつた。彼らからすれば元結の態度は、なんら規範とならないものであり、守るべき価値のあるものでもなく、是非の判断に値するものでもないものであつた。では士人たちが

「漫」とするのは、具体的にどのようなことに基づいているのか。序には「嘗漫有所為、且漫聚兵、又漫辞官、漫聞議。（嘗て漫に為す所有り、且つ漫に兵を聚め、又漫に官を辞し、漫に議を聞く）」とある。このうち「漫聚兵（漫に兵を聚め）」とあるのは、乾元二年十一月、元結が唐州、鄧州、汝州、蔡州等で大いに義軍を招集したことを指す。顔真卿の「元君表墓碑銘」（『顔魯公文集』卷五）は、このことについて次のように言っている。

乃拝君左金吾兵曹撰監察御史充山南東道節度參謀、仍於唐鄧汝蔡等州招緝義軍。山棚高晃等率五千余人、一時帰附、大圧賊境。於是史思明挫銳不敢南侵。

乃ち君を左金吾兵曹撰監察御史に拝し山南東道節度參謀に充て、仍りて唐鄧汝蔡等の州に於いて義軍を招緝す。山棚の高晃等五千余人を率ゐて、一時に帰附し、大いに賊境を圧す。是に於て史思明鋭を挫かれて敢て南侵せず。

この記述によれば、河南の高地部族高晃等が五千余人を率いて帰順し、元結は彼らの力を得て史思明の南進を

防いだのであった。ところがこのことが、苟且の安泰を求め、規律、法度の遵守を第一とする王朝の官僚たちから、朝廷の意向を全く無視した「漫」なる行為として批判の対象とされたのである。また、「漫辞官（漫に官を辞す）」というのは、宝応元年（七六二）に官を辞したことを指している。その経緯についても、先の「元君表墓碑銘」は次のように記す。

今上登極、節度使留後者、例加封邑、君遜讓不受、遂歸養親。特蒙褒獎、乃拜著作郎。

今上登極し、節度使留後の者は、例として封邑を加へらるるに、君遜讓して受けず、遂に帰りて親を養ふ。特に褒獎を蒙り、乃ち著作郎を拜す。

元結は、当然の恩賞を受けずに官を辞してしまった。このことが、常軌を逸した振る舞いであるとして誹りを蒙ったというのである。^{（注4）}

元結は彼らを「規檢大夫・持規之徒」と呼ぶ。「規檢大夫・持規之徒」とは、法律や制度、慣習に従い、体制と自らの地位を維持しようとする者たちを言う。元結は、規則や制度を維持し、それに基づいて行動する者達に対し、放縦で拘束を受けない「漫」なる者として自らを位置づけていたのである。

官界において漫郎と呼ばれていた元結は、官を辞して攀水に隱遁すると漫がますます顕著となり、漁師から聲叟と呼ばれるようになる。聲とは、人の言うことを聞き入れないという意味であり、聲叟とは、わがまま勝手に人の言うことに耳を傾けない老人を言う。第一節で引用した「自釈」においては、そのさまを「不相從聽、不相鈎加、帶箬簪而尽船、独聲齧而揮車。（相從聽せず、相鈎加せず、箬簪を帯びて船を尽くし、独り聲齧にして車を揮ふ）」と描いている。言うことを聞こうともせず、関与しようともせず、船を魚籠でいっぱいにし、ひとり勝手に釣魚車（漁具の一種、リール）を操っているというのである。攀水の漁者に元結はこのように映っていた。

これに對して、酒徒は、元結が漫郎と呼ばれていたことを知る者たちである。彼らは、「公の漫は、其れ猶ほ聲のごときか。公著作を守るに、笞箠を帯びざるか。」と、殊に元結が著作郎の官を帯びたまま傲然と笞箠（魚籠）を身につけていることを取り上げて、彼の漫が贅であることを指摘する。元結は「而ら酔人の議を取りて、当に漫叟を以て称と為すべし。」と言ひ、贅叟の呼称と漫郎の呼称を結びつけ、漫は贅のごとしという酔人の議論を採り、自らを漫叟と号することになったのであった。

元結の「漫」は、人の言うことを聞き入れない「贅」という強靱な意志によつて支えられ、そしてこの強靱な意志が元結を「漫家」という思想家の視点にたたせ、著作へと向かわせた。漫叟は決して世俗を否定し、身を引いて自らの徳を涵養する独善をよしとする者ではない。永泰元年（七六五）、道州刺史の任にあつたおり、瀼溪の人で、元結に従つていた王及が容州に行くのを送つた「送王及之容州序」（卷八）において、元結は次のように王及を戒めている。

叟愛及者也。無惑叟言。及方壯、可強芸業。勿以遊方為意。人生若不能師表朝廷、即当老死山谷。

叟は及を愛する者なり。叟の言に惑ふこと無かれ。及は方に壯んなれば、芸業に強むべし。方に遊ぶを以て意と為すこと勿かれ。人生若し朝廷に師表たる能はずんば、即ち当に山谷に老死すべし。

「遊方」は、『莊子』大宗師に「孔子曰、彼遊方之外者也、而丘遊方之内者也。（孔子曰はく、彼は方の外に遊ぶ者なり、而して丘は方の内に遊ぶ者なり）」とあるのに基づく言葉で、四方を遊歴する意で用いられる。漫叟は、王及に對して朝廷の師表たれと激励するのであつて、その意識はあくまで朝廷を志向していたことが窺われる。

第四節 元子と漫叟

唐王朝そのものに対する強い求心性と、規律、法度の遵守を重んじる現実の朝廷、中央の官僚世界に対峙する強い意識を持つ漫叟は、拘束をうけない放縦さの程度においても元子との相違が見られる。

宝応元年（七六二）に制作された「退谷銘」（卷八）は、元子の自称が用いられている作品としては、最も遅い時期のものである。ここには漫叟も登場している。

杯湖西南是退谷。谷中有泉、或激或懸、為竇為淵。滿谷生寿木、又多寿藤縈之。始入谷口、令人忘返。時士源以漫叟退修耕釣、愛遊此谷、遂命曰退谷。元子作銘、以顯士源之意。銘曰、

杯湖の西南は是れ退谷なり。谷中に泉有り、或は激しく或は懸かり、竇を為し淵を為す。滿谷寿木を生じ、又多く寿藤之を縈る。始めて谷口に入れば、人をして返るを忘れしむ。時に士源漫叟退修耕釣し、此の谷に遊ぶを愛するを以て、遂に命づけて退谷と曰ふ。元子銘を作り、以て士源の意を顯す。銘に曰はく、

誰命退谷 誰か退谷に命づくる

孟公士源 孟公士源なり

孟公之意 孟公の意は

漫叟知焉 漫叟焉を知る

05 公畏漫叟 公は畏る 漫叟

心進跡退 心進まんとして跡退くを

公懼漫叟 公は懼る 漫叟

名顕身晦 名顕れんとして身晦すを

公恐漫叟 公は恐る 漫叟

10 辞小受大 辞すること小にして受くること大ならんとするを

於戯退谷 於戯 退谷

独為吾規 独り吾が規為り

干進之客 干進の客

不差遊之 之に遊ぶを差ぢざらんや

15 何人作銘 何人か銘を作り

銘之谷口 之を谷口に銘せる

荒浪者歟 荒浪なる者か

退谷漫叟 退谷の漫叟なり

第一章第五節で触れたように、元結は宝応元年（七六二）、母の老いをもって官を辞し、武昌の樊水の郎亭山下に仮寓し、武昌令であった孟彦深（字、士源）と諷諭の詩を応酬するなど、方外の交わりを結んでいた。この「退谷銘」は、孟彦深が退谷と命名した溪谷についての銘である。元結は、この溪谷に孟彦深を招く詩「招孟武昌」（巻二）を残している。その詩中に「武昌不干進、武昌人不厭。退谷正可遊、杯湖任來浮（武昌は干進せず、武昌は人厭はず。退谷正に遊ぶべく、杯湖来りて浮かぶに任す）」とあり、二人の親交が窺われる。孟彦深を相手にして、元結は存分に自らの性情を解放しているようである。右に挙げた「退谷銘」の序に「時士源以漫叟退修耕釣、愛遊此谷、遂命曰退谷。（時に士源漫叟退修耕釣し、此の谷に遊ぶを愛するを以て、遂に命づけて退谷と曰ふ）」とあるところからすれば、「退谷」は、退隠し自適の日々を過ごす者の溪谷という意味である。銘は

「公畏」（第五句）、「公懼」（第七句）、「公恐」（第九句）と、孟彦深が元結の中に官界への思いがあるのではないかと心配していることを繰り返し述べ、退谷と命名した意図を明らかにする。そして「於戯退谷、独為吾規（於戯退谷、独り吾が規為り）」（第一一、一二句）と、退谷こそ自らの規範であり、「干進之客」（栄達を求める者）は遊ぶことのできない空間として、この溪谷を位置づけている。

序に「元子作銘、以顯士源之意。（元子銘を作り、以て士源の意を顯す）」とあるように、この銘は元子の視点で著されている。ところが銘文では「何人作銘、銘之谷口。荒浪者歟、退谷漫叟（何人か銘を作り、之を谷口に銘せる。荒浪なる者か、退谷の漫叟なり）」と、銘を制作したのは漫叟であると言っている。このことはどのように解釈されるのか。元子と漫叟とが同一であることを表しているのだろうか。また銘文中に「於戯退谷、独為吾規（於戯退谷、独り吾が規為り）」とある「吾」とは元子であるのか漫叟であるのか。

このことを考える上で手掛かりとなるのが、同じ頃に制作された「杯樽銘并序」（巻八）である。この作も孟彦深が「杯樽」と名づけた窪んだ形状の石の銘である。

郎亭西乳有藜石、石臨樊水。漫叟構石顛以為亭。石有窟顛者。因修之以藏酒。士源愛之、命為杯樽。乃為士源作杯樽銘。銘曰、

郎亭の西乳に藜石有り、石樊水に臨む。漫叟石顛に構へて以て亭を為る。石に窟顛なる者有り。因りて之を修めて以て酒を蔵す。士源之を愛し、命づけて杯樽と為す。乃ち士源の為に杯樽の銘を作る。銘に曰はく、

窟顛之石 窟顛の石

在吾亭上 吾が亭の上に在り

天全其器 天 其の器を全くし

実有殊状

実に殊状有り

05 如寶而底

寶のごとくにして底あり

似傾幾欹

傾くに似て幾ど欹つ

非曲非方

曲に非ず 方に非ず

不準不規

準ならず 規ならず

孟公高賢

孟公 高賢にして

10 命曰杯樽

命づけて杯樽と曰ふ

漫叟作銘

漫叟 銘を作り

当欲何言

当に何をか言はんと欲すべき

時俗澆狡

時俗は澆狡にして

日益偽薄

日び益偽薄たり

15 誰能杯飲

誰か能く杯飲し

共守淳樸

共に淳樸を守らん

かつて元子の視点から著された作品には、強い規諷の意識が表明されていた。元子は元結の自称であり、「三人称的な一人称^(注5)」である。元結の場合には、確かに元子を三人称的に客体化した語り手がいるのだが、元子と語り手との距離は極めて近く、いわば元子である私という視点から語られていたのである。漫叟という号においても同様である。この「杯樽銘」は、序に「漫叟構石顛以為亭。（漫叟石顛に構へて以て亭を為る）」と言い、銘には「窠顛之石、在吾亭上（窠顛の石、吾が亭上に在り）」とあることからすると、この「吾」は漫叟が自ら称していることになる。一方、第一一、一二句では「漫叟作銘、当欲何言。（漫叟銘を作り、当に何をか言はんと欲

すべき」と、語り手の漫叟が自らを漫叟と称している。ここは「吾」と称することも十分に可能であったが、語り手は、孟士彦に対して、銘を制作した行為者としての漫叟を提示し、曲でも方でもなく、準でも規でもなく、世俗の価値判断の外にあって、淳朴を守っている、漫叟としての私のあり方を語るのである。

「退谷銘」においては、序に「元子作銘（元子銘を作る）」とあるように、銘文は元子（語り手）としての視点で語られている。銘文中の「於戯退谷、独為吾規。（於戯退谷、独り吾が規為り）」の「吾」は、元子（語り手）自らを言う。しかし、「荒浪なる者」のみが銘を作れるというのであれば、銘の作者にふさわしいのは元子（語り手）ではなく、語り手の内なる漫叟であった。「招孟武昌」詩（卷二）の序にも、「漫叟作退谷銘、指曰、干進之客、不得遊之。（漫叟退谷の銘を作り、指して曰はく、干進の客は、之に遊ぶを得ず、と）」と、自らの内なる漫叟が「退谷銘」を書いたとしている。漫叟は、規諷する者という意識を含みつつも、なによりも官界における栄達を求める者たちの世界、官僚世界に対峙し、その価値観に拘束されず、純朴さを守り続けることにおいて自らを規定する、放縦で「荒浪なる者」という意味をこめた号であったのである。

これに対して元子は、第一編第三章第五節で検討したように、社会に対する戒めや忠告の意を表出する、規諷する者として自己を規定する自称であった。元子と漫叟の自称の差異については、このように理解することができるであろう。

おわりに

「自釈」の記述によれば、元結は乾元二年（七五九）から漫を以て称せられ、官を辞した宝応元年（七六二）から、道州刺史の任にあった大暦二年（七六七）に至る期間、自ら漫叟と号している。

両京の回復によって王朝の秩序は次第に回復されたものの、李輔国が権勢を握り、あるいは第五琦・元載に代

表される経済官僚が重用され、煩瑣な法律と厳格な徴税、賦役が人々を苛んでいた。こうした状況の下で、「時議三篇」下篇（巻六）の、「若天子能追行已言之令、必行将来之法、且免天下無端雜徭、且除天下隨時弊法、且去天下拘忌煩令、…（若し天子能く追して已言の令を行ひ、必ず将来の法を行ひ、且つ天下の無端の雜徭を免じ、且つ天下の随時の弊法を除き、且つ天下の拘忌の煩令を去り、…）」といった主張や「請給将士父母糧状」（巻七）「請収養孤弱状」（巻七）に見られる将兵や民生を重視する態度は、旧来の秩序の回復と維持に汲々とする中央の官僚にとって、決して好ましいものとは受け取られなかったであろう。

李商隱は「容州経略使元結文集序」（『李義山文集』巻四）において「見憎于第五琦元載、故其将兵不得授、作官不至達、母老不得尽其養、母喪不得終其哀。…其文危苦激切、悲憂酸傷于性命之際。（第五琦元載に憎まる、故に其の兵を將ゐては授を得ず、官と作りては達に至らず、母老ゆるも其の養を尽くすを得ず、母の喪には其の哀を終ふるを得ず…其の文は危苦激切にして、性命の際に悲憂酸傷す）」と述べている。安祿山の乱に際しては、十分な兵を授けられず、官は刺史に止まり、母が老いても容州刺史を辞退することができなかったとするその背後には、第五琦や元載の影を認めることができる。

「春陵行」が漫叟の視座において書かれたということは、宦官と経済官僚が実権を握り、煩瑣な法律を制定して厳しい徴税を行っている中央の官僚世界に対して、その外にある者として対峙する態度を明確に示すものである。そこには朝廷の師表たらしめとする思いとともに、規諷の表現によって正しき刺史のあり方を示し、忠告し戒めようとする強い意識が表出している。

しかしながら、漫叟の心底には、李商隱が「悲憂酸傷」と言うように、己が政治理念を実現する術がなく、疎外されている者の不遇感や憂憤の情があったであろうことも確かである。道州刺史の任以後いよいよ鮮明となつてゆく怪異な水石への志向は、そのことと深く関わると考えられる。このことについては第三編で考究する。

注

(1) 楊承祖著『元結研究』（国立編訳館、二〇〇二年）一二二頁。

(2) 『旧唐書』卷一二四、李正己伝には「李正己、高麗人也。本名懷玉。生於平盧。乾元元年、平盧節度使王玄志卒、会有勅遣使來存問。懷玉恐玄志子為節度、遂殺之、与軍人共推立侯希逸為軍帥。（李正己は、高麗の人なり。本の名は懷玉。平盧に生まる。乾元元年、平盧節度使王玄志卒し、会たま勅有り遣使して来りて存問せしむ。懷玉玄志の子節度と為るを恐れ、遂に之を殺し、軍人と共に侯希逸を推立して軍帥と為す）」とある。節度使の廃立が軍士によって行われたのは、この事件からであるとされている。唐王朝の勢力の減退を象徴的に物語る出来事であった。

(3) 「自釈」によれば、元結は宝応元年（七六二）以降漫叟の号を用いたことになる。しかし「時規」には、「乾元己亥、漫叟待詔在長安。（乾元己亥、漫叟待詔して長安に在り）」とある。「乾元己亥」と明記されていることから、孫望氏（『元次山年譜』）、楊承祖氏（『元結研究』「元結年譜」）ともに、この作品を乾元二年（七五九）に編年している。しかしながら「自釈」の記述に因るのであれば、乾元二年には元結はまだ漫叟とは名乗っていないことになる。この作品は宝応元年以後に、乾元二年の出来事を回顧して著されたとしなければならない。

(4) この時の元結辞官の事情については、楊承祖氏（『元結研究』「第五章 辞官・樊上」「耄、辞官之故」、一一二頁）が詳細に論じている。氏は、元結が荆南の維持のためには自分ではない者がよいと考えていたこと、及び当時の朝廷においては元結が権力を恣にし、また代宗の即位によって前朝の旧臣たちが権力の中心から退けられていたことを、辞官の理由としている。李商隱の「容州経略使元結文集後序」に「見憎于第五琦元載（第五琦元載に憎まる）」とあることからしても、氏の解釈は首肯できるものである。

(5) 川合康三著『中国の自伝文学』(創文社、一九九六年)一六二頁。

第三編

自適の位相

第一章 初唐における水石の描写

はじめに

本論では、これまで元結の社会派の詩人としての側面に焦点を当てて考察を進めてきた。第一編においては元結における諷諭の文学の成立とその特色を明らかにし、また第二編では『篋中集』編纂の目的について検討するとともに、「大唐中興頌」、「春陵行」、「賊退示官吏」を取り上げて新たな解釈を提示した。しかし元結には尚古的文学観を持った社会派の詩人として理解したのでは捉えつくせない一面があることもすでに指摘されている。例えば欧陽脩『集古録』巻七は元結を次のように評している。

元結、好奇之士也。其所居山水、必自名之。

元結は、好奇の士なり。其の居る所の山水は、必ず自ら之に名づく。

また楊慎の『升庵詩話』巻一〇は次のように言う。

元次山好奇条。文章好奇、自是一病。好奇之過、反不奇矣。

元次山奇条を好む。文章奇を好むは、自らはれ一病なり。奇を好むことの過ぐるは、反りて奇ならず。

欧陽脩や楊慎が指摘するように、元結の文学には確かに好奇と評されるような面がある。殊に著しい山水への

耽溺、就中怪異な水石への志向を示す言葉が多く見られるのである。いくつか例を挙げる。

尤宜春水満　尤も春水の満つるに宜しく

水石更殊怪　水石　更に殊怪なり

（「遊右溪勸学者」巻三）

軒窓幽水石　軒窓　水石幽にして

怪異尤難状　怪異　尤も状し難し

（「宴湖上亭作」巻三）

至零陵、愛其郭中有水石之異、泊舟尋之、得岩与洞。

零陵に至り、其の郭中に水石の異有るを愛し、舟を泊して之を尋ね、岩と洞とを得たり。

（「朝陽岩銘序」巻九）

於戯朝陽　於戯　朝陽

怪異難状　怪異　状し難し

（「朝陽岩銘」巻九）

これらの詩や銘からは怪異な水と石のたたずまいに対する限らない愛着が窺えるようである。この怪異な水石への志向は、「春陵行」「賊退示官吏」の二編が書かれた広徳二年（七六四）以後顕著となつてゆく。

本編では、元結の文学に見られる怪異な水石に対する志向の意味を探り、好奇のありかたを検討するとともに、諷諭の意識との関係を考察してその文学の基底的特色を明らかにする。

先ず本章において、初唐から盛唐にかけての水と石のたたずまいにかかわる表現について石の描写を中心として検討し、元結との差異を確認することとする。

第一節 宮廷詩人の描く水石のたたずまい

初唐は、宮廷を中心に侍宴応制詩が盛行した時期であり、その詩風は齊梁時代のものを継承し、内容よりは形式美、韻律美が追求されたとされている。^(注1)一方で、王勃・楊炯・盧照隣・駱賓王の所謂初唐の四傑がみずみずしい抒情あふれる作品を残している。また、盛唐詩の先駆者であった陳子昂は「感遇三十八首」に代表されるような漢魏の詩にあやかった風骨のある文学を主張し、実践していた。

先ず、主として宮廷を中心に活躍した詩人たちが水と石のたたずまいをどのように詩に詠じていたかを、石の描写において見る。これらの詩人たちの作品に用いられている石に関する語彙のうち、主なものとしては、次の例を挙げることができる。

石影・石匱・石逕・石困・石鏡・石岸・石澗・石巖・石上・石泉・石髓・石扉・石炭・石馬・石墉・石路・石林・石瀨・雲石・巨石・危石・嘉石・鏡石・錦石・巖石・古石・臥石・水石・碎石・松石・淺石・樹石・攢石・泉石・寢石・綵石・仙石・苔石・珍石・伏石・磐石・方石・文石・幽石・乱石・金石

これらの語彙は典故を持つものが多い。また元結が例えば「宿洄溪翁宅」詩（卷三）で「長松万株遶茅舎、怪石寒泉近簷下（長松万株茅舎を遶り、怪石寒泉簷下に近し）」と詠ずる中で用いている「怪石」という語彙は見出すことができない。次に景物としての水石を対象とした詩句の例をいくつか挙げる。

①掩映葉光含翡翠 掩映する葉光 翡翠を含み

参差石影帶芙蓉 参差たる石影 芙蓉を帶ぶ

（武三思「奉和聖製夏日遊石淙山」、『全唐詩』卷八〇）

② 前池錦石蓮花艷 前池 錦石 蓮花艷にして

後嶺香鑪桂蕊秋 後嶺 香鑪 桂蕊秋なり

（李適「侍宴安樂公主莊応制」、『全唐詩』卷七〇）

③ 垂藤掃幽石 垂藤 幽石を掃ひ

臥柳礙浮槎 臥柳 浮槎を礙ぐ

（楊師道「還山宅」、『全唐詩』卷三四）

④ 往往花間逢綵石 往往 花間 綵石に逢ひ

時時竹裏見紅泉 時時 竹裏 紅泉を見る

（蘇頌「奉和初春幸太平公主南莊^{（注2）}応制」、『全唐詩』卷七三）

⑤ 山泉鳴石澗 山泉 石澗に鳴り

地籟響巖風 地籟 巖風に響く

（虞世南「奉和幽山雨後応令」、『全唐詩』卷三六）

⑥ 江如曉天淨 江は曉天の浄らかなるがごとく

石似暮雲張 石は暮雲の張るに似る

（張説「和朱使欣道峽似巫山之作」、『張説之文集』卷七）

いずれも華麗なあるいは清浄な情景を形作るものとして水石が機能している。石は、蓮、藤、花とともに麗しい景の一部となり（①②③④）、また清浄な流れとともに描かれ（⑤）、時には夕暮れの雲に喩えられる（⑥）

のである。さらに少数ではあるが、石は、

我心松石清霞裏　我が心　松石　清霞の裏

弄此幽弦不能已　此の幽弦を弄びて已む能はず

（宋之問「放白鵬篇」、『全唐詩』卷五一）

のように超俗の心境を表白するものとしても用いられ、更には水石のたたずまい、山水のたたずまいという意味で「泉石」「水石」が用いられることもある。

蓬瀛不可望　蓬瀛　望むべからず

泉石且娛心　泉石　且く心を娛しましむ

（太宗「秋日二首」其二、『全唐詩』卷一）

蓬莱山や瀛州などの仙界は望み見るべくもないから泉石のたたずまいを眺めてしばらく心を楽ませる、というこの作品の「泉石」は、泉流と石そのものよりも仙界に比すべき山水のたたずまいを言っている。

更に石の描写に着目してみよう。初唐期の侍宴応制詩の中で石を素材の一つとして用いている好例は、則天武后が石淙の三陽宮に行幸した折のものである。『資治通鑑』唐紀二二に、

春、一月、……戊寅、還神都。作三陽宮於告成之石淙。

春、一月、……戊寅、神都に還る。三陽宮を告成の石淙に作る。

夏、四月、戊申、太后幸三陽宮避暑。

夏、四月、戊申、太后三陽宮に幸して避暑す。

とあるのによれば、武后は晩年の久視元年（七〇〇）、石淙の地に三陽宮を造営し、夏四月には避暑のために行幸している。

また、翌年の大足元年（七〇一）五月にもやはり三陽宮に行幸している。

夏、五月、乙亥、太后幸三陽宮。

夏、五月、乙亥、太后三陽宮に幸す。

（『資治通鑑』唐紀二三）

この石淙の三陽宮においては重ねて酒宴が下賜され、詩作が競われたことであろう。現存している石淙における侍宴応制の諸編はこの二回の行幸のうちのいずれかで作られたものと考えられる。行幸には当時太子であった中宗や相王であった睿宗をはじめとして、多くの侍臣たちが随行した。作品が現存しているのは、則天武后・中宗・睿宗・蘇味道・姚崇・閻朝隱・武三思・于季子・張易之・張昌宗・薛曜・沈佺期・楊敬述・徐彦伯・宋之問・李嶠の一六名である。彼らの作品のうち六首に「石」字が使用され、あるいは水石のたたずまいが描かれている。

水炫珠光遇泉客

水は珠光を炫かせ泉客を遇し

巖懸石鏡厭山精

巖には石鏡懸かり山精を厭はしむ

（中宗「石淙」、『全唐詩』卷二）

巖辺樹色含風冷
風を含みて冷ややかに
石上泉声帶雨秋
雨を帯びて秋なり

（宋之問「三陽宮侍宴扆制得幽字」、『全唐詩』卷五二）

遠近風泉俱合雜
俱に合雜し
高低雲石共參差
共に參差たり

（楊敬述「奉和聖製夏日遊石淙山」、『全唐詩』卷八〇）

掩映葉光含翡翠
翡翠を含み
參差石影帶芙蓉
芙蓉を帶ぶ

（武三思「奉和聖製夏日遊石淙山」、『全唐詩』卷八〇）

石泉石鏡恒留月
石泉 石鏡 恒に月を留め
山鳥山花競逐風
山鳥 山花 競ひて風を逐ふ

（姚崇「奉和聖製夏日遊石淙山」、『全唐詩』卷六四）

金竈浮煙朝漠漠
金竈の浮煙 朝に漠漠たり
石牀寒水夜泠泠
石牀の寒水 夜泠泠たり

（李嶠「石淙」、『全唐詩』卷六一）

楊敬述の作は、風の音と泉流の音が遠く近く混じり合うなか、雲と石とが入り組むように続いている様子を詠う。また李嶠の作は清らかに澄んだ水が石上を流れる様子をとらえている。いずれも水石が華麗な、あるいは清浄な風景を構成する一点景として用いられている。中宗と姚崇の作に見える「石鏡」は鏡のごとき石を言い、王嘉『拾遺記』、酈道元『水經注』に記述がある。『水經注』卷三九には「山東有石鏡、照水之所出。有一円石、

懸崖明淨、照見人形。晨光初散、則延曜入石、豪細必察。故名石鏡焉。（山東に石鏡有り、照水の出づる所なり。一円石有り、崖に懸かり明淨にして、人形を照見す。晨光初めて散ずれば、則ち延曜石に入り、豪細必ず察す。故に石鏡と名づく）と、朝陽を受けるとどのように微細なものも見分けることができる程に明澄な鏡のごとき石のことが記されている。太宗の作では山精がその明澄な石鏡を避けることを言い、姚崇の作は、石鏡が月光に輝くことをいう。こうした典故を持つ語の使用も初唐詩の特色である。宋之問の作の全体を見てみよう。

離宮秘苑勝瀛州

離宮 秘苑 瀛州に勝り

別有仙人洞壑幽

別に仙人 洞壑の幽なる有り

巖辺樹色含風冷

巖辺の樹色 風を含みて冷ややかに

石上泉声帶雨秋

石上の泉声 雨を帯びて秋なり

鳥向歌筵來度曲

鳥は歌筵に向かひ 来りて曲を度し

雲依帳殿結為樓

雲は帳殿に依り 結びて樓を為す

微臣昔忝方明御

微臣 昔 方明の御を忝くし

今日還陪八駿遊

今日 還た八駿の遊に陪す

第一、二句で三陽宮が仙界の瀛州にも勝る世界として呈示される。そこに展開するのが風に揺れて冷ややかな樹木の姿であり、秋を思わせる石上の泉流である（第三、四句）。続いてさえずる鳥と樓の形をなす雲が呈示され（第五、六句）、最後に第七、八句でこの場に侍ることのできる身の幸せが述べられる。初唐の侍宴応制詩の特色をよく表している作品である。石は神仙世界と見紛うような清浄な世界の景物の一つとして詠じられている。またこの宋之問の作品でもそうであるように、初唐期の石は泉流と対になって用いられ、水石のたたずまいを形

作ることが多い。さらにいくつか例を挙げる。

山泉鳴石澗 山泉 石澗に鳴り
地籟響巖風 地籟 巖風に響く

（虞世南「奉和幽山雨後応令」、『全唐詩』卷三六）

攢石当軒倚 攢石 軒に当たりて倚り
懸泉度牖飛 懸泉 牖を度りて飛ぶ

（杜審言「和韋承慶過義陽公主山池五首」其四、『全唐詩』卷六二）

洞口仙巖類削成 洞口仙巖 削成に類し
泉香石冷昼含清 泉は香り石は冷ややかにして昼清を含む

（崔融「嵩山石淙侍宴应制」、『全唐詩』卷六八）

これらの宮廷詩に見られる表現は六朝以来の美意識を襲うものである。先に挙げた元結の「遊右溪勸学者」「宴湖上亭作」においても水石のたたずまいが描かれるのだが、それが形作るのは奇怪な情景であって、初唐の詩人達とは明らかに表現の位相を異にしている。初唐の詩人達が称美するのは、後に趙冬曦が「南湖美泉石、君子玩幽奇（南湖泉石美しく、君子幽奇を遊ぶ）」（「和燕公別澹湖」、『全唐詩』卷九八）と詠ずるように、あくまでも美的な石であり泉流なのである。

次に石そのものを主題とする詠物詩を見る。石を主題とする初唐期の作品には、蘇味道の「詠石」（『全唐詩』卷六五）と、李嶠の「石」（『全唐詩』卷五九）がある。今、李嶠の作品を取り上げる。

宗子維城固	宗子	維れ城の固
將軍飲羽威	將軍	飲羽の威あり
巖花鑑裏発	巖花	鑑裏に発き
雲葉錦中飛	雲葉	錦中に飛ぶ
入宋星初隕	宋に入りて	星初めて隕ち
過湘燕早帰	湘を過ぎて	燕早に帰す
倘因持補極	倘し因りて	持ちて極を補はば
寧復想支機	寧ぞ復た	支機を想はんや

第一句は『詩経』小雅・坂の「宗子維城（嫡子が国を堅固にする）」という句をふまえている。嫡子は国の城壁であり、そのように堅固な石の意。第二句からは石にまつわる様々な典故が用いられている。第二句は李広が狩猟に出て野中の岩を虎と思い込み、矢を射て岩に突き刺したという『史記』卷一〇九「李將軍列伝」に見える話を踏まえる。第三句は石鏡のことを、第四句は衡山に産する錦の文様のある石を言う。第五句は宋の国に隕石が落ちたという『春秋左氏伝』僖公一六年の話を、第六句は風雨に遭うとまるで生きた燕のように飛び、収まるとまた石に還るといふ石燕のことをそれぞれふまえている。更に第七句は女媧氏が五色の石を鍊成して天の破れを塞いだという『列子』湯問の話を用い、第八句は天の織女が機を支えるのに用いたという支機石のことを典故としている。

李嶠の「石」も蘇味道の「詠石」も、石にまつわる様々な典故を羅列している。これらの作品に用いられている石鏡、隕石、石燕などはいずれも非日常的な或いは不思議なものであるが、それらは奇または怪という視点で捉えられてはいない。

第二節 初唐の四傑、陳子昂の水石

次に初唐の四傑の作品に詠じられた水石のたたずまいを、石を中心にして見ることにする。四傑の作品には、次に示すような石に関する語彙がある。

石磴・石路・石文・石髓・松石・抗石・石柱

(王勃)

金石・玉石・鳴石・石楼

(楊炯)

積石・石瀨・石路・旧石・石燕・石径・磐石・石岸

(盧照隣)

石鏡・石蓮・危石・石路・枕石・積石・玄石・祥石

(駱賓王)

これらの語彙は「石柱」「鳴石」「石楼」「枕石」「祥石」を除き、いずれも他の初唐の詩人たちに用例がある。しかし彼らの水石のたたずまいの描写には、やはり新しさが見られる。以下例を挙げる。

松石偏宜古 松石 偏へに宜しく古なるべく

藤蘿不記年 藤蘿 年を記さず

(王勃「三月曲水宴得煙字」^(注3)、『王子安集』卷三)

石楼紛似画 石楼 紛として画に似

地鏡森如空 地鏡 森として空のごとし

(楊炯「和輔先入昊天觀星瞻」、『楊盈川集』卷二)

旧石開紅蘚 旧石 紅蘚開き
新荷覆緑池 新荷 緑池を覆ふ

（盧照隣「宿晋安寺」、『幽憂子集』卷一）

石瀬潺湲横石径 石瀬 潺湲として石径横たはり
松蘿冪歷掩松門 松蘿 冪歷として松門を掩ふ

（盧照隣「懷仙引」、『幽憂子集』卷二）

濺石回湍咽 濺石 回湍咽び
縈叢曲澗幽 縈叢 曲澗幽なり

（駱賓王「至分水戍」、『駱賓王文集』卷三）

重巖抱危石 重巖 危石を抱き
幽澗曳輕雲 幽澗 輕雲曳る

（駱賓王「賦得白雲抱幽石」、『駱賓王文集』卷三）

ここに挙げた初唐の四傑の石に関する語彙は、楊炯「和輔先入昊天觀星瞻」、駱賓王「賦得白雲抱幽石」のよ
うに宮廷詩人たちと似るものがある。一方で王勃「三月曲水宴得煙字」と盧照隣「宿晋安寺」の用例は石のた
ずまいに年を経た古さを見ている。さらに、盧照隣「懷仙引」の「石瀬潺湲横石径（石瀬潺湲として石径横たは
り）」は、『楚辞』九歌「湘君」に「石瀬兮浅浅（石瀬浅浅たり）」とあるように、『楚辞』の世界を彷彿とさ
せる水石の描写である。駱賓王「至分水戍」は、石に注ぎかかる水、渦まき早瀬の音という動のイメージと叢に
被われた深い谷間の静の情景とが緊張感のある水石の世界を形作っている。こうした清新な描写が初唐の四傑に
はあるものの、やはり四傑においても石そのものに執着した表現は見られない。

では盛唐詩の先蹤とされる陳子昂の作品ではどうであろうか。陳子昂には景物としての石を扱った次のような例がある。

巖泉万丈流 巖泉 万丈に流れ
樹石千年古^(注4) 樹石 千年古し

(「酬暉上人夏日林泉」、『陳伯玉文集』卷二)

巖庭交雜樹 巖庭に雜樹交はり
石瀨瀉鳴泉 石瀨に鳴泉瀉ぐ

(「同王員外雨後登開元寺南樓因酬暉上人独坐山亭有贈」、『陳伯玉文集』卷二)

叢石何紛糾 叢石 何ぞ紛糾たる
小山復翕^(注5)絕 小山 復た翕絶たり

(「度峡口山贈喬補闕知之王二無競」、『陳伯玉文集』卷二)

このうち「巖泉万丈流、樹石千年古(巖泉万丈に流れ、樹石千年古し)」、「叢石何紛糾、小山復翕絶(叢石何ぞ紛糾たる、小山復た翕絶たり)」は力強くダイナミックな措辞であり、陳子昂詩の特色をよく表している。一方「石瀨瀉鳴泉」という水石のたたずまいは虞世南の「山泉鳴石澗」(「奉和幽山雨後応令」とほぼ等しい)ものである。そしてそれは謝靈運の「石磴瀉紅泉(石磴に紅泉瀉ぐ)」(「入華子崗是麻源第三谷詩」、『文選』卷二六)に基づくものである。陳子昂にはこの他に石林・石髓・金石・石尤風・礪石館などの語彙が見られるが、その用い方はやはり他の初唐の詩人たちとほぼ共通している。

総じて初唐期の詩人たちの描く水石の情景は風景の一点景であることが多い。その世界は華麗或いは清浄であ

り、時には神仙世界として形象される。石そのものを主題とする作品は典故をふまえつつ石にまつわる様々なイメージを展開するのみであり、元結の詩に見られるような石の奇怪な形状に対する著しい執着は見られない。

第三節 怪石

第一節に引いた「怪石寒泉近簷下」（「宿洄溪翁宅」）の句で元結が用いた「怪石」の語は、『書経』禹貢に「岱畎糸臬鉛松怪石」（岱の畎は糸・臬・鉛・松・怪石なり）と見える。「糸臬鉛松怪石」は、それぞれ岱山の谷の貢ぎ物である。この「怪石」は奇怪な形状の石を指すのではなく、伝に「怪、異。好石似玉者。（怪は、異なり。好石の玉に似る者なり）」とあるように、玉に似た価値を持つ石を指す。

唐以前の詩における「怪石」の用例は、鮑照「從庾中郎遊園山石室」、庾信「羽調曲五首」其二に見えるのみである。

怪石似竜章 怪石 竜章に似

瑕壁麗錦質 瑕壁 錦質麗し

（鮑照「從庾中郎遊園山石室」、『鮑氏集』卷六）

瑤琨篠簞 既從 瑤琨篠簞 既に従ひ

怪石鉛松即序 怪石鉛松 即ち序す

（庾信「羽調曲五首」其二、『庾子山集』卷六）

鮑照の「怪石」は竜に似た文様を持つ石であり、やはり価値のあるものとして用いられている。また庾信の例

は『書経』禹貢をそのままふまえるものである。

一方、文の用例としては、揚雄、馬融、曹丕、棧潜、郭璞、梁簡文帝、蕭子范、後梁宣帝に用例がある。例えば揚雄の「青州箴」（『全漢文』巻五四）は、「茫茫青州、海岱是極。塩鉄之地、鉛松怪石。……（茫茫たる青州、海岱是れ極まる。塩鉄の地、鉛松怪石あり。……）」と、庾信の作と同様、『書経』に基づく。また馬融「広成頌」（『全後漢文』巻一八）の「怪石浮磬、燿焜于其陂。（怪石浮磬、其の陂に燿焜す）」、曹丕「典論」諸物相似乱者（『全三国文』巻八）の「武夫怪石似美玉、蛇牀乱靡無。（武夫怪石美玉に似、蛇牀に靡無乱る）」、棧潜「諫明帝興衆役疏戚属疏」（『全三国文』巻二九）の「怪石玼玠、浮于河淮。（怪石玼玠、河淮に浮かぶ）」、郭璞「江賦」（『文選』巻一二）の「金精玉英瑱其裏、瑤珠怪石碎其表。（金精玉英其の裏に瑱り、瑤珠怪石其の表に砕る）」も同様である。しかし梁の簡文帝「与広信侯書」（『全梁文』巻一一）の用例はこれらと異なっている。

縦賞山中、游心人外。青松白露、处处可悦、奇峰怪石、極目忘帰。

縦に山中を賞し、心を人外に游ばしむ。青松白露、处处悦ぶべく、奇峰怪石、目を極めて帰るを忘る。

「奇峰怪石」は、山中の景として賞玩の対象となっている。この「怪石」は『書経』の「怪石」とは異なり、「奇峰」と対になり、通常とは異なる形状の岩塊を言うのであろう。ここには、石の形状を怪と捉え、それを賞翫の対象としている意識が認められる。梁代において石は怪なるものとして賞翫の対象として意識されるようになったと言いうことができるであろう。

ただ、詩において怪石の語が用いられることはなく、唐代に入っても初唐の詩には「怪石」の用例は見られない。盛唐期に至ると、王維、孟浩然、高適等の作品に用いられるようになる。そのうち王維の「燕子龕禪師」

（『王右丞集』卷六）を取り上げる。

山中燕子龕

山中の燕子龕

路劇羊腸惡

路は羊腸の惡しきよりも劇し

裂地競盤屈

地を裂きて盤屈を競ひ

挿天多峭嶮

天を挿みて峭嶮多し

瀑泉吼而噴

瀑泉 吼えて噴き

怪石看欲落

怪石 看れば落ちんと欲す

伯禹訪未知

伯禹 訪へども未だ知らず

五丁愁不鑿

五丁 愁ひて鑿たず

………

………

ここでは人跡の絶えた燕子龕の空間を描写する中に怪石の語が用いられている。燕子龕の地は禹も訪れたことがなく、山をも移すという五人の力士ですら穿とうともしない空間であり、裂けて曲がりくねり、空をさしはさむかのように鋭い峰々が聳え立つ世界であった。このようなところに禪師は住むというのである。ここは初唐の詩人達が好んだ華麗なあるいは清澄な世界ではなく、彼らの美意識の範疇には属さない異様な空間なのであり、怪石も美的賞翫の埒外にある異様な岩石である。ただ、王維はこの世界に対する志向を述べてはいない。

高適「赴彭州山行之作」（『高常侍集』卷七）にも「怪石」が用いられている。

峭壁連崆峒

峭壁 崆峒に連なり

攢峰疊翠微

攢峰 翠微を疊ぬ

鳥声堪駐馬 鳥声 馬を駐むるに堪へ

林色可忘機 林色 機を忘るべし

05 怪石時侵徑 怪石 時に徑を侵し

輕蘿乍扞衣 輕蘿 乍ち衣を扞ふ

路長愁作客 路長く客と作るを愁ひ

年老更思歸 年老い更に歸るを思ふ

且悦巖巒勝 且く巖巒の勝を悦び

10 寧嗟意緒違 寧ぞ意緒の違ふことを嗟かん

山行応未盡 山行 応に未だ尽きざるべし

誰与玩芳菲 誰と与にか芳菲を玩ばん

乾元二年（七五九）、彭州刺史として赴任する道中の作である。岷州の崆峒山にまで連なる切り立った壁のごとき山々、幾重にも重なった峰々、そこを経過してゆく高適は鳥の声に馬を留めて勝景を賞翫する（第一句、第四句）。時に小道を侵すように突き出ている奇怪な石は衣を扞う蘿とともにその一部となっている（第五、六句）。王維の作とは異なり、ここには怪石を賞翫の対象とする視線が確かに存在する。ただそれは元結のような奇怪な水石への強い志向を示すものではなく、あくまでも山水賞玩の視座なのであって、怪石も風景の一部として描かれるのみなのである。

一方、初唐期の文に用いられた「怪石」の用例としては次のようなものが挙げられる。

徂徠新甫、伐喬木而韻流嘯、岱畎泗浜、採怪石而喧浮磬。

徂徠の新甫に、喬木を伐りて流嚶韻き、岱畎の泗浜に、怪石を採りて浮磬喧たり。

（崔行功「贈太師魯国孔宣公碑」、『全唐文』卷一七五）

龕前怪石、塔下秋泉。

龕前に怪石あり、塔下に秋泉あり。

（王勃「益州縣竹県武都山淨慧寺碑」、『王子安集』卷一五）

居人致祭、桐郷有朱邑之祠。（注6）怪石成墳、葉県有王喬之墓。

居人祭を致せば、桐郷に朱邑の祠有り。怪石墳を成せば、葉県に王喬の墓有り。

（楊炯「益州温江県令任君神道碑」、『楊盈川集』卷七）

豈若聴清音於爨余、則枯桐發響、收夜光於元璧、則怪石騰輝。

豈に清音を爨余に聴けば、則ち枯桐響きを發し、夜光を元璧に収むれば、則ち怪石輝きを騰ぐるに若かんや。

（駱賓王「上兗州刺史啓」、『駱賓王文集』卷六）

層崖邃谷、疊屏帳以重囿。怪石奇峯、聳楼台之高挿。

層崖邃谷、屏帳を疊ねて以て重囿す。怪石奇峯、楼台の高挿に聳ゆ。

（沈佺期「峽山賦」、『全唐文』卷二三五）

構仙山兮既畢、侔造化之神術。其為狀也、攢怪石而岑崒。其為異也、含清氣而蕭瑟。

仙山を構へて既に畢り、造化の神術に侔し。其の狀為るや、怪石を攢めて岑崒たり。其の異為るや、清氣を含みて蕭瑟たり。

（宋之問「太平公主山池賦」、『全唐文』卷二四〇）

怪石奇木、鳴虫嘯羽。

怪石奇木、鳴虫嘯羽あり。

（路敬淳「大唐懷州河内県木澗魏夫人祠碑銘并序」、『全唐文』卷二五九）

ここに挙げたものは、いずれも石を怪として捉えた例である。その多くは、墓園や寺院の空間を形象化するものであつて、賞翫の対象として存在しているものではない。しかし、唯一宋之間「太平公主山池賦」の例では、太平公主の庭園を彩る景物の一つとして怪石が用いられており、この賦においては、賞翫するに足る美的価値を持つ対象として怪石が位置づけられているとすることができよう。梁簡文帝以来の美意識が窺われるのである。

第四節 初唐詩における奇と怪

初唐の詩人たちは怪・奇・殊・異のうち奇という語を好んで用いている。この奇という語は晋代には多用されていた（五三例）が、宋代以降用例が少なくなっている。宋代では一二例（そのうち鮑照が一一例）で、謝靈運には一例もない。齊代で四例（そのうち謝朓が三例）のみである。しかし梁代に至ると増加し、主なものだけでも四〇余りの用例がある。そして初唐期においては自然の景物を対象とする場合に限っても、以下のような用例を見出すことができる。

芳辰追逸趣 芳辰 逸趣を追ふ
禁苑信多奇 禁苑 信に奇多し

（太宗「帝京篇十首」其五、『全唐詩』卷一）

奇峯巖 嶙峋山北 奇峯 巖 嶙峋たり 箕山の北
秀嶠岵 嶢嶠鎮南 秀嶠 岵 嶢嶠たり 嵩鎮の南

（睿宗「石淙」、『全唐詩』卷二）

泉石多仙趣
巖壑写奇形

泉石 仙趣多く
巖壑 奇形を写す

（上官昭容「遊長寧公主流杯池二十五首」其一六、『全唐詩』卷五）

聞有弦歌地
穿鑿本多奇

聞くならく弦歌の地有り
穿鑿 本より奇多しと

（盧照隣「宿晋安亭」、『幽憂子集』卷一）

鶴岑有奇徑
麟州富仙家

鶴岑に奇徑有り
麟州 仙家に富む

（王勃「懷仙」、『王子安集』卷二）

貪玩水石奇
不知川路渺

水石の奇を貪玩し
川路の渺かなるを知らず

（李嶠「早發苦竹館」、『全唐詩』卷五七）

不是迷鄉客
尋奇処処留

是れ郷に迷ふの客ならず
奇を尋ねて処処に留まる

（張説「和尹懋秋夜遊澠湖」、『張説之文集』卷八）

湖上奇峯積
山中芳樹春

湖上 奇峯積もり
山中 芳樹春なり

（張説「遊澠湖上寺」、『張説之文集』卷八）

涉趣皆留賞

涉趣 皆留まりて賞し

無奇不偏尋

奇として偏く尋ねざるは無し

(張説「別澨湖」、『張説之文集』卷八)

奇峯岌前転

奇峯 岌として前に転じ

茂樹隈中積

茂樹 隈中に積もる

(張九齡「巡按自灘水南行」、『唐丞相曲江張先生文集』卷四)

觀奇逐幽映

奇を觀 幽映を逐ひ

歷險忘嶇嶽

險を歷 嶇嶽を忘る

(張九齡「祠紫蓋山經玉泉山寺」、『唐丞相曲江張先生文集』卷四)

土風從楚別

土風 楚より別なり

山水入湘奇

山水 湘に入りて奇なり

(張九齡「南還以詩代書贈京都旧僚」、『唐丞相曲江張先生文集』卷四)

奇という言葉は日常性からかけ離れていても評価するに足る対象に使用されており、山水のたたずまいを対象として用いられる場合は単に非日常的であるのみならず、賞玩に足る自然の情景を意味している。ここに挙げた例の他にも例えば張易之は「秋日宴石淙序」(『全唐文』卷二二九)において三陽宮の景物を「耳目所接、天下之為奇也。遊踐所經、天下之為絶也。(耳目の接する所は天下の奇と為すなり。遊踐の經る所は天下の絶と為すなり)」と称えている。張易之は文章が下手だったので宋之問や閻朝隱が代作したと言われるから、この序文も或いは宋之問らの手によるものかも知れないが、三陽宮の景物を奇絶と称え、それを賞玩しようとする意識がよく表れている。

次に盧照隣の「宿晋安寺」(『幽憂子集』卷一)を挙げる。

聞有弦歌地	聞くならく弦歌の地有り
穿鑿本多奇	穿鑿 本より奇多しと
遊人試一覽	遊人 試みに一覽すれば
臨翫果忘疲	臨翫 果たして疲れを忘る
05 窓横暮捲葉	窓には横たふ 暮れに捲く葉
簷臥古生枝	簷には臥す 古生の枝
旧石開紅蘚	旧石 紅蘚開き
新荷覆緑池	新荷 緑池を覆ふ
孤猿稍断絶	孤猿 稍く断絶し
10 宿鳥復参差	宿鳥 復た参差たり
汎灩月華曉	汎灩たり 月華の曉
徘徊星鬢垂	徘徊すれば星鬢垂る
今日刪書客	今日 刪書の客
悽遑君詎知	悽遑するも君詎ぞ知らんや

禹の穿鑿の跡といわれる河川の勝景（第五句く第一〇句）が「奇」と捉えられている。盧照隣はその勝景を恣に賞玩して疲れを忘れる程であると言う。「臨翫果忘疲（臨翫果たして疲れを忘る）」という句には山水賞玩の喜びがよく表れている。

また注目されるのは李嶠の「早發苦竹館」（『全唐詩』卷五七）である。

合沓巖嶂深

合沓として巖嶂深く

朦朧煙霧暁

朦朧たり 煙霧の暁

荒阡下樵客

荒阡 樵客下り

野猿驚山鳥

野猿 山鳥驚く

05 開門聴潺湲

門を開き潺湲たるを聴き

入径尋窈窕

径に入りて窈窕たるを尋ぬ

棲颺抱寒木

棲颺 寒木を抱き

流螢飛暗篠

流螢 暗篠に飛ぶ

早霞稍霏霏

早霞 稍く霏霏たり

10 残月猶皎皎

残月 猶ほ皎皎たり

行看遠星稀

行くゆく遠星の稀なるを看

漸覺遊氛少

漸く遊氛の少きを覺ゆ

我行撫輶伝

我が行 輶伝を撫するも

兼得傍林沼

兼ねて林沼に傍ふを得たり

15 貪玩水石奇

水石の奇を貪玩し

不知川路渺

川路の渺かなるを知らず

徒憐野心曠

徒らに野心の曠なるを憐れむ

詎惻浮年小

詎ぞ惻らんや 浮年の小^{すく}なきを

方解寵辱情

方に寵辱の情を解し

「苦竹館」は今の浙江省紹興市の西南にあつた建物。たたなずく山々、立ちこめた朝霧のなか、苦竹館を發つた李嶠は、木こりの姿を目にし、野猿に驚く鳥の鳴き声を耳にしつつ歩を進めてゆく（第一句～第六句）。彼の目に映じたのは寒木を抱く鼯（ムササビ）、篋に飛ぶ螢であつた。やがて朝焼けが濃くなり、星がしだいに消え、もやが薄れ、山林や沼沢がその姿を現してくる（第七句～第一二句）。李嶠は、目前に展開する水石の奇勝を賞翫して遙かな道のりを忘れてしまう（第一五、一六句）と、山水賞翫の喜びを表白している。李嶠にとつても、水石のたたずまいは「怪」ではなく、あくまで「奇」なる対象だったのである。

一方、初唐期の詩人達の「怪」の用例は「怪鳥」「靈怪」「山怪」「潜怪」といった語がほとんどである。しかし、唯一、沈佺期には風景を怪としてとらえ、それを賞翫している例が見られる。

從崇山向越常并序 崇山より越常に向かふ 并びに序

按九真図、崇山至越常四十里。杉谷起古崇山、竹溪從道明国来。於崇山北二十五里合、水欹欠、藤竹明昧。有三十峯、夾水直上千余仞、諸仙窟宅在焉。

九真図を按ずるに、崇山より越常に至るまで四十里なり。杉谷は古崇山より起こり、竹溪は道明国より来り、崇山の北二十五里に於て合し、水は欹欠たり、藤竹は明昧たり。三十峯有り、水を夾みて直上すること千余仞、諸仙の窟宅焉に在り。

朝發崇山下 朝に崇山の下を發し

暮坐越常陰 暮れに越常の陰に坐す

西從杉谷度 西のかた杉谷より度り

北上竹溪深 北のかた竹溪を上ること深し

05 竹溪道明水 竹溪 道明の水

杉谷古崇岑 杉谷 古崇の岑

差池將不合 差池として將に合はざらんとし

繚繞復相尋 繚繞として復た相尋ぬ

桂葉藏金嶼 桂葉 金嶼を藏し

10 藤花閉石林 藤花 石林を閉ざす

天窓虚的的 天窓 虚し虚的的たり

雲竇下沈沈 雲竇 下に沈沈たり

造化功偏厚 造化 功偏へに厚く

真仙跡每臨 真仙 跡毎に臨む

15 豈徒探怪異 豈に徒に怪異を探るのみならんや

聊欲緩帰心 聊か帰心を緩やかにせんと欲す

（『全唐詩』卷九七）

朝、崇山のふもとを発った沈佺期は、杉谷を渡り、竹溪を上ってゆく。彼の視線は桂樹の葉に隠された島や、藤の花に閉ざされたようにある石林をとらえ、上に峰々の間にわずかに覗く輝く空を見、また雲気の出入する岩穴に向けられている（第五句、第一二句）。沈佺期は眼前に展開する風景を「怪異」と捉えた。「豈徒探怪異、聊欲緩帰心（豈に徒に怪異を探るのみならんや、聊か帰心を緩やかにせんと欲す）」とは怪異なる自然を賞翫し、都へのつのる思いをいささかなりとも軽減しようとすることを言う。ただここでも世界全体が怪異として捉えら

れているのであり、例えば「石林」が命名され、怪異な対象物として明確に分節されているわけではない。元結のように怪なる石に命名してそれを賞翫する行為とはやはり異なっているよう。

第五節 張説の山水賞翫

前節までの検討を踏まえると、初唐期において怪という語で捉えられる対象は、多くの場合美的な賞玩の対象として位置づけられていなかったであろうと推測される。初唐期の詩人たちは賞玩の対象となる勝景を奇という語で捉えるのである。

こうした初唐詩人の美意識は、滄湖における張説（六六七～七三〇）らによる山水の賞翫に受け継がれている。張説は景雲二年（七一二）に宰相となったが、開元元年（七一二）には相州刺史に、ついで三年（七一五）には岳州刺史に左遷された。この岳州においては趙冬曦、尹懋らと詩を応酬している。滄湖は岳州（現在の湖南省岳陽市）の南にあつた。趙冬曦の「滄湖作」（『全唐詩』卷九八）の序によれば、湖水は洞庭湖に連なり、夏には湖となるが、冬には陸地が現れるという。

巴丘南滄湖者、蓋沅湘澧汨之余波焉。茲水也、淪匯洞庭、澹澹千里、夏潦奔注、則決為此湖。冬霜既零、則涸為平野。……

巴丘の南の滄湖は、蓋し沅湘澧汨の余波なり。茲の水や、洞庭に淪匯し、澹澹千里なり。夏潦奔注すれば、則ち決れて此の湖と為る。冬霜既に零れば、則ち涸れて平野と為る。……

張説にはこの滄湖に趙冬曦らと遊んだ「和尹懋秋夜遊滄湖」「遊滄湖上寺」などの作品がある。そのうち「和

尹懋秋夜遊澠湖」は尹懋の「秋夜陪張丞相趙侍御游澠湖二首」（『全唐詩』卷九八）に唱和したものであり、他に趙冬曦、張均の作が残っている。尹懋の序には、「燕公以司馬初到、趙侍御客焉。聿理方舟、嬉游澠壑。覽山川之異、探泉石之奇。騁望崇朝、留尊待月。一時之樂、豈不盛歟。……（燕公司馬を以て初めて到り、趙侍御客たり。聿に方舟を理め、澠壑に嬉游す。山川の異を覽、泉水の奇を探り、望を騁せて朝を崇へ、尊を留めて月を待つ。一時の楽しみ、豈に盛んならざらんや。……）」というように、澠湖の山水を賞玩する喜びが述べられている。以下張説と趙冬曦の作品を見る。

澠湖佳可遊 澠湖 佳にして遊ぶべし

既近復能幽 既に近づけば復た能く幽なり

林裏棲精舍 林裏 精舍に棲ひ

山間転去舟 山間 去舟を転ず

雁飛江月冷 雁飛びて江月は冷ややかに

猿嘯野風秋 猿嘯きて野風は秋なり

不是迷郷客 是れ郷に迷ふの客ならず

尋奇処処留 奇を尋ねて处处に留まる

（張説「和尹懋秋夜遊澠湖」、『張説之文集』卷八）

煙靄夕微蒙 煙靄 夕べに微蒙たり

幽湾賞未窮 幽湾 賞すること未だ窮まらず

艤舟待初月 舟を艤して初月を待ち

褰幌招遠風 幌を褰げて遠風を招く

鶴声聒前浦	鶴声	前浦に聒しく
漁火明暗叢	漁火	暗叢に明らかなり
東山雲壑意	東山	雲壑の意
不謂爾來同	謂はず	爾來同じきを

（趙冬曦「和尹懋秋夜遊澠湖二首」其二、『全唐詩』卷九八）

張説の作は澠湖のすばらしさを述べ、夜に船を浮かべて賞翫していることを言い、月光が冷ややかに照らす中を雁が飛び、夜猿が嘯き、野面を秋風がわたつてゆく流動的な情景が描かれる。「尋奇処処留（奇を尋ねて処処に留まる）」という句には山水賞翫への強い意識が窺われる。趙冬曦の作においても、夕暮れになっても山水の賞翫がまだ終わらず、夜、船を出してまで勝景をたずねようとしたのだと詠われ、澠湖の景物を賞玩しようという思いが述べられている。「東山雲壑意」は晋の謝安が隠棲して山水の楽しみに耽っていたことを指す。自分たちの山水賞翫を謝安のそれに重ね合わせているのである。

次に示すのは張説が澠湖を去る時の作品、「別澠湖」（『張説之文集』卷八）である。

念別澠湖去	澠湖に別れて去らんと念ひ
浮舟更一臨	舟を浮かべて更めて一たび臨む
千峯出浪陰	千峯は浪より出でて険しく
万木抱烟深	万木は烟を抱きて深し
05 南郡延恩渥	南郡 恩渥に延かれ
東山恋宿心	東山 宿心を恋ふ

露花香欲醉 露花 香りて酔はんと欲し

時鳥轉余音 時鳥 轉りて余音あり

涉趣皆留賞 涉趣して皆留まり賞し

10 無奇不徧尋 奇として徧く尋ねざるは無し

莫言山水間 言ふ莫れ 山水の間

幽意在鳴琴 幽意 鳴琴に在りと

まず第一、二句で澗湖を立ち去りがたい思いを吐露する。続いて険しい嶺ともやに包まれた木々という澗湖の情景（第三、四句）が第五句の朝廷への思いと帰隱との対立した感情を導く。第七、八句の露に濡れ、香りをただよわせる花と、時に応じて麗しくさえずる鳥という澗湖の景物はそうした張説の心を慰めるものであった。彼は、「涉趣皆留賞、無奇不徧尋（涉趣して皆留まり賞し、奇として徧く尋ねざるは無し）」と、自らが澗湖の勝景をあまねく賞翫したことを述べ、澗湖に対する愛着を表出する。第一一、一二句「莫言山水間、幽意在鳴琴（言ふ莫れ山水の間、幽意鳴琴に在りと）」は、山水の楽しみは、優れた景物を尋ねて賞玩することにあるのであつて、山水の中にあつて琴を爪弾く高雅な営みにあるのではないことを明言している句である。

一方、元結の場合も、顔真卿の手による元結の墓碑銘「唐故容州都督兼御史中丞本管経略使元君表墓碑銘」（『顔魯公文集』巻五）に「君雅好山水、聞有勝絶、未嘗不枉路登覽而銘賛之。（君雅より山水を好み、勝絶ありと聞けば、未だ嘗て路を枉げ登覽して之を銘賛せずんばあらず。）」とある。この顔真卿の言う元結の山水賞玩の態度は、張説の「涉趣皆留賞、無奇不徧尋（涉趣して皆留まり賞し、奇として徧く尋ねざるは無し）」とほぼ軌を一にするものである。確かに元結も山水に対する賞玩の志向を強く持っていた。その作品においても例えば次のように水石を賞玩する者として自らを位置づけている。

人誰無耽愛　人誰か耽愛無からん
各亦有所偏　各亦た偏する所有り
於吾喜尚中　吾喜尚する中に於ては
不厭千万泉　千万の泉を厭はず
………

(「海陽泉」^(注7))

為愛水石奇　水石の奇を愛するが為に
不厭湖畔行　湖畔を行くに厭かず
每登曲石鳧　曲石鳧に登る毎に
則有遠興生　則ち遠興の生ずる有り
………

(「曲石鳧」)

しかしながら、元結の場合、怪異な水石を賞玩する際にその水石に命名し、自らのものであることを明らかにすることがあり、またその水石を世に忘れ去られたものとして捉えることがある。

至零陵、愛其郭中有水石之異。泊舟尋之、得岩与洞。此邦之形勝也、自古荒之而無名称。以其東向、遂以朝陽命焉。

零陵に至り、其の郭中に水石の異有るを愛す。舟を泊して之を尋ね、岩と洞とを得たり。此れ邦の形勝なるに、古より之を荒らして名称無し。其の東に向くを以て、遂に朝陽を以て焉に命づく。

又有藂石欹欠、為之島嶼。殊怪相異、不可名狀、此邦豈世無好事者耶。而令古荒之。

又藂石の欹欠する有り、之が島嶼を為す。殊怪にして相異なり、名狀すべからず。此の邦に豈に世々好事の者無からんや。而るに古より之を荒れしむ。

元結の水石への志向は、張説等の山水賞翫の態度と表層的には重なる部分があるが、ここに挙げたように世に忘れられた怪異な水石に命名し、自らの所有として賞玩していたことに着目すると、彼の水石への志向はやはり張説とは明確に異なっていたと言わねばならないであろう。

おわりに

本章では初唐における石の描写について概観した。初唐期においては石という対象は景物の一つとして描かれるのが主であり、石に関する語彙も典故を持つものが多い。時には石を主題とする作品も見られるが、それらは石にまつわる様々なイメージを典故を連ねながら展開してゆくのであり、石の形状に着目し、それを賞玩の対象とするものではなかった。

また初唐期には怪という語はほとんど用いられず、六朝の梁以来多用されるようになった奇という語が頻用されている。この奇という語は非日常的でしかも評価するに足るという意味で用いられており、自然の景物を対象とした場合には、その景物が非日常的で格別にすばらしく、しかも賞玩するに足るものであることを言う。これに対して怪は物の怪や奇怪な対象に用いられる語であり、賞翫の対象となる怪異な山水を指す例は沈佺期を除く

て見られない。

盛唐初期の張説らが抱いていた山水に対する賞玩の態度は元結の水石に対する態度と表層的には一致するものである。しかし世に忘れられた怪異な水石に命名して自らの所有物として賞翫する志向は元結独自のものであり、初唐期の詩人達には見られないものである。元結は明らかに初唐から盛唐初期の詩人たちとは異なる視座において、山水、殊に怪異な水石を捉えていたと言うことができよう。この元結の志向、視座はどのように解釈されるのか、次章において明らかにしてゆく。

注

(1) こうした初唐詩についての一般的な見方に対して、趙昌平氏は、「開元十五年前後——論盛唐詩的形成与分期」(『中国文化』第二期、一九九〇年、一〇五—一一五頁)において、初唐詩に関する二つの誤解として、残存する資料による誤解、ならびに初唐の宮廷詩についての誤解をあげている。そして、残存する資料による誤解については、初唐の詩人の詩集は王績・駱賓王を除いて、いずれも後人による編纂であって、本来の形を伝えておらず、宮廷詩の総集も一定の選詩の基準によっているのであるから、『全唐詩』に採録されている初唐詩が当時の状況を反映しているとは断定できない、としている。また、太宗が伝統的な詩の觀念と齊梁以来の文学の矛盾を調和し、唐代の詩の体系を作り上げようとした営みから初唐の宮廷詩は始まったと、初唐詩に対する見解を提示している。

(2) 『全唐詩』は、同じ作品を沈佺期「陪幸太平公主南莊詩」(卷九六)として採り、「一作蘇頌詩」と注する。

(3) 『王子安集』は、詩題の「煙」を「樽」に作る。ここでは『王子安集注』(清、蔣清翊注、卷三)によつ

て改めた。

(4) 『陳伯玉文集』は、「巖泉流雜樹、石室千年古（巖泉雜樹に流れ、石室千年古し）」に作り、「品彙作巖泉万丈流、樹石千年古。（品彙は巖泉万丈に流れ、樹石千年古し、に作る）」と注する。ここでは、注によった。

(5) 『陳伯玉文集』は「絶」を「絶」に作る。『文苑英華』卷一九二によって改めた。

(6) 『楊盈川集』は「怪石」を「怪力」に作る。『全唐文』卷一九四によって改めた。

(7) 太田晶二郎氏は、「海陽泉帖考」（『太田晶二郎著作集 第一冊』、吉川弘文館、一九九一年。初出は、『歴史地理』八六―二、一九五五年）において、「海陽泉」「曲石鼻」他が元結の作品であることを明らかにしている。後の劉禹錫（七七二―八四二）の「海陽十詠并引」（『全唐詩』卷三五五）には「元次山始作海陽湖（元次山始めて海陽湖を作る）」とあり、「吏隱亭述」（『全唐文』卷六〇七）に「海陽之名、自元先生。先生元結、有銘其碣。（海陽の名は、元先生よりす。先生元結、其の碣に銘する有り）」とある。孫望、楊承祖両氏の年譜は海陽泉のことに言及していないが、太田氏の見解は首肯できるものである。

(附) 本章の詩語の用例については、以下の索引を使用した。

松浦崇編『全漢詩索引』（權歌書房、一九八四年）

松浦崇編『全三国詩索引』（權歌書房、一九八五年）

松浦崇編『全晋詩索引』（權歌書房、一九八七年）

松浦崇編『全宋詩索引』（福岡大学中国文学会、一九九一年）

松浦崇編『齊詩索引』（權歌書房、一九八八年）

森野繁夫校閲、佐藤利行・小川恒男・佐伯雅宣・木村守編『全梁詩索引』（白帝社、二〇〇〇年）

- 松浦崇編『陳詩索引』（福岡大学中国文学会、一九九二年）
- 松浦崇編『北魏詩索引』（權歌書房、一九八六年）
- 松浦崇編『北齊詩索引』（權歌書房、一九八七年）
- 松浦崇編『北周詩索引』（福岡大学中国文学会、一九八九年）
- 安東俊六編『陳子昂詩索引』（采華書林、一九七六年）
- 塩見邦彦編著『駱賓王詩一字索引』（采華書林、一九八二年）
- 松岡栄志編『宋之問詩索引』（東洋学文献センター叢刊、四六、一九八五年）
- 藤沢隆浩著『杜審言詩一字索引』（崑崙書房、一九八六年）
- 塩見邦彦編著『王勃詩一字索引』（崑崙書房、一九八六年）
- 松岡栄志編『沈佺期詩索引』（東洋学文献センター叢刊 五〇、一九八七年）

第二章 怪異な水石への志向

はじめに

前章では元結が初唐期の詩人達とは異なり、怪異な水石への志向を持つことを指摘した。その志向は、欧陽脩や楊慎が指摘するように、皮相的には「好奇」という言葉で表現することができものである。

これに対して、例えば市川桃子氏は、元結が怪異な水石のたたずまいの中に理想的な為政者像を見出し、そこに自然の価値を認めたと解釈する。そして氏は「春陵行」以後に自然を主題とする詩が多くなった理由として、尚古派の人々の勢力が交替したという時代状況と道州刺史としての行政体験、政治理念の挫折の二つを挙げている。また、こうした元結の文学の変化を中唐の白居易や元稹が政治体験を経て自然詩や閑適詩を多作するようになったのと同様であるとし、元結は中唐の詩人達の先蹤であつたとしている。

市川氏のこの指摘は極めて示唆に富む。しかし、例えば第二編第二章で諷諭の作であることを明らかにした「大唐中興頌」を自らの住む浯溪の摩崖に刻んだことなどを考えると、元結の文学に対しては、自らの文学を諷諭と閑適のように截然と区別できた白居易ら中唐の詩人とは異なる理解が必要であるように思われる。

元結は怪異な水石に命名してこよなく愛で、水石に自らの同質性を見出して様々な価値を賦与し、それを称揚することを通して世俗を戒めるべく諷諭の営みを展開している。また一方では、殊に怪石の穴や窪みに別乾坤を見、そこに身を置くこと、あるいは怪異な水石とともにあることに無上の喜びを懐き、自らの社会に対する悲憤や憂いを癒やしていた。本章では、こうした怪異な水石に対する志向について考察を進め、諷諭の営みとの関係を明らかにする。

第一節 奇怪な水石

元結の作品の制作年を孫望氏『元次山年譜』および楊承祖氏「元結年譜」に従って見てみると、彼は「春陵行」「賊退示官吏」の二編を制作した広徳二年（七六四）以後、自然の景物を題材とした詩や記・銘の類を多く作るようになっていく。この広徳二年を境にして彼の文学にどのような変化が起こったのかはひとまず措き、自然の景物を対象とした作品を見てみると、前章で指摘したように「異」「殊」「怪」といった語が頻繁に使用されていることに気づく。詩に限っても、一一四首中、「異」が七例、「殊」が九例、「怪」が六例用いられている。例えば次に引く「引東泉作」（巻三）は永泰元年（七六五）から大暦二年（七六七）にかけて道州刺史の任にあった頃の作品である。

東泉人未知 東泉 人未だ知らず

在我左山東 我が左山の東に在り

引之傍山来 之を引きて山に傍ひて来らし

垂流落庭中 流れを垂らし庭中に落とす

05 宿霧含朝光 宿霧 朝光を含み

掩映如残虹 掩映して残虹のごとし

有時散成雨 時有りて散じて雨と成り

飄灑随清風 飄灑として清風に随ふ

衆源発淵竇 衆源 淵竇に発し

10 殊怪皆不同 殊怪 皆同じからず

此流又高懸 此の流れ 又高く懸かり

瀟瀟在長空 瀟瀟として長空に在り

山林何処無 山林 何れの処にか無からん

茲地不可逢 茲の地 逢ふべからず

15 吾欲解纓佩 吾 纓佩を解きて

便為泉上翁 便ち泉上の翁と為らんと欲す

東泉は道州府の東側にあった泉で、山の東側に湧出していたことから名付けられたものである。第一句から第四句では、先ず東泉と命名された泉流を庭中に引いたことが述べられ、次の第五句から第八句で庭中に落下する飛泉の様子が描かれる。立ちのぼる水煙は朝日の光を受け、まるで虹のごとき彩りが現れ且つ消え、飛散する水しぶきは時に雨のごとく、清らかな風に運ばれていく。さらに次の第九句から第一二句では「この泉流が発する岩の穴は怪異な形をしており、それぞれがすべて異なる形状である。」と、視点を転じて水源の様子が述べられる。この作品では泉流の湧き出る岩の穴の様子が「殊怪」という語によつて捉えられている。元結はこうした東泉のたたずまいに限りない愛着を抱き、「山林はどこにでもあるが、かくも素晴らしいものにめぐりあうことはできない。」（第一三、一四句）と賛美を惜しまない。前章で指摘したように、彼が山水を好んだことは、顔真卿の撰した「唐故容州都督兼御史中丞本管経略使元君表墓碑銘并序」（『顔魯公文集』卷五）が「君雅好山水、聞有勝絶、未嘗不枉路登覽而銘贊之。（君雅より山水を好み、勝絶有りと聞けば、未だ嘗て路を枉げ登覽して之を銘賛せずんばあらず）」と指摘しているところである。また、彼がとりわけ泉流や岩石を偏愛し、その奇怪な様を詠じたことは、太田晶二郎氏の「海陽泉帖考」に詳細に指摘されている。^{（注2）}

元結が水石のたたずまいを「異」「殊」「怪」「奇」といった語でとらえる例を改めて挙げると以下のようになる。

軒窓幽水石 軒窓 水石幽にして
怪異尤難状 怪異 尤も状し難し
（「宴湖上亭作」卷三）

尤宜春水満 尤も春水の満つるに宜しく
水石更殊怪 水石 更に殊怪なり。
（「遊右溪勸學者」卷三）

浯溪之口有異石焉、……
浯溪の口に異石有り、……
（「唐廬銘」序 卷一〇）

浯溪東北廿余丈、得怪石焉。
浯溪の東北廿余丈、怪石を得たり
（「嵒台銘」序 卷一〇）

水実殊怪 水は実に殊怪にして
石又尤異 石も又尤異なり
（「浯溪銘」卷一〇）

水抵兩岸、悉皆怪石。
水は兩岸に抵り、悉く皆怪石なり。
（「右溪記」卷一〇）

朝陽水石 朝陽の水石
可謂幽奇 幽奇と謂ふべし

（「朝陽岩銘」卷九）

為愛水石奇 水石の奇を愛するが為に
不厭湖畔行 湖畔に行くに厭かず

（「曲石^{注3}鳧」）

このように「異」「殊」「怪」「奇」という語で水石のたたずまいを捉えた語句が記銘の類を中心にして多く見られる。また更に特徴的なのは、「洞」字が多用されていることである。例えば次のような例が挙げられる。

泉源在庭戸 泉源 庭戸に在り
洞壑当門前 洞壑 門前に当たる

（「賊退示官吏」卷三）

無為洞口春水満 無為洞口 春水満ち
無為洞傍春雲白 無為洞傍 春雲白し

（「無為洞口作」卷三）

海内厭兵革 海内 兵革に厭き
騷騷十二年 騷騷たること十二年
陽華洞中人 陽華洞中の人
似不知乱焉 乱を知らざるに似たり

……………

草堂背巖洞 草堂 巖洞を背とし
幾峯軒戸前 幾峯か軒戸の前

（「招陶別駕家陽華作」卷三）

岩下洞口 岩下に洞口あり
洞中泉垂 洞中に泉垂る

（「朝陽岩銘」卷九）

青莎白沙、洞穴丹崖。
青莎白沙、洞穴丹崖。

（「九疑図記」卷九）

岩高氣清 岩高く氣清く
洞深泉寒 洞深く泉寒し

（「陽華岩銘」卷九）

さらに彼は岩穴にも注目しており、先に挙げた「引東泉作」の「衆源發淵竇（衆源淵竇に発す）」以外にも次のような例が見られる。

泮泉之陽、得怪石焉。左右前後及登石顛、均有如似。故命之曰五如石。石皆有竇、竇中湧泉。泉詭異於七泉。故命為七勝泉。石有双目、一目命為洞井。井与泉通。一目命為洞樽。樽可貯酒。石尾有穴。有如礪者、又如滝者。泉可渟澄、匝石而流。入于礪中、出而為滝。於戲、彼能異於此。安可不称頭之。

（「五如石銘」序 卷一〇）

淳泉の陽に、怪石を得たり。左右前後し及び石顛に登るに、均しく似るがごとき有り。故に之に命づけて五如石と曰ふ。石に皆寶有り、寶中に泉湧く。泉は七泉よりも詭異なり。故に命づけて七勝泉と為す。石に双目有り、一目は命づけて洞井と為す。井は泉と通ず。一目は命づけて洞樽と為す。樽は酒を踞くべし。石尾に穴有り。礪のごとき者、又滝のごとき者有り。泉渟澄たるべく、石を匝りて流れ、礪中に入り、出でて滝と為る。於戲、彼能く此に異なり。安くんぞ之を称顕せざるべけんや。

道州東郭有泉七穴、或吐於淵寶、或繫於嵌臼。……

道州の東郭に泉七穴有り、或は淵寶より吐し、或は嵌臼に繫す。……

（「七泉銘」序 卷一〇）

杯湖西南是退谷。谷中有泉、或激或懸、為寶為淵。滿谷生寿木、又多寿藤繫之、始入谷口、令人忘返。……

杯湖の西南は是れ退谷なり。谷中に泉有り、或は激しく或は懸かり、寶を為し淵を為す。滿谷寿木を生じ、又多く寿藤之を繫り、始めて谷口に入れば、人をして返るを忘れしむ。……（「退谷銘」序 卷八）

以上の例から、元結は水石の奇怪な形状のなかでも特に穴や洞に対して視線を注いでいたことが窺われる。また例えば「窻樽銘」（卷九）に、

片石何状 片石何の状なる

如獸之踰 獸の踰まるがごとし

其背齟窠 其の背齟窠なり

可以為樽 以て樽と為すべし

……………

とあり、「杯樽銘」（卷八）に

窳顛之石 窳顛の石

在吾亭上 吾が亭の上に在り

天全其器 天 其の器を全くし

実有殊状 実に殊状有り

如寶而底 寶のごとくにして底あり

似傾幾欹 傾くに似て幾ど欹つ

非曲非方 曲に非ず 方に非ず

不準不規 準ならず 規ならず

……………

とあることからすると、彼は凹形の岩石にも注目していたようである。元結は水石の奇怪な形状に対して強い愛着を抱いており、就中洞や穴或いは窪んだ形の岩石に着目して詩文を制作しているのである。

さらに彼の水石に対する態度にはまた別の特色が見られる。

 浯溪在湘水之南、北匯于湘。愛其勝異、遂家溪畔。溪、世無名称者也。為自愛之、故命曰浯溪、銘于溪口。
銘曰、

浯溪は湘水の南に在り、北のかた湘に匯る。其の勝異を愛して、遂に溪畔に家す。溪は、世に名称無き者なり。自ら之を愛するが為の故に命づけて浯溪と曰ひ、溪口に銘す。銘に曰はく、

………

溪古地荒^(注4) 溪は古く地荒れ

蕪没蓋久 蕪没すること蓋し久し

命曰浯溪 命づけて浯溪と曰ひ

旌吾独有 吾独り有するを旌す

人誰遊之 人 誰か之に遊ばん

銘在溪口 銘して溪口に在り

(「浯溪銘并序」卷一〇)

この銘において、元結は「命曰浯溪、旌吾独有」と、溪が自分だけのものであることを明言している。また浯溪に建てた亭の銘である「唐廬銘」(卷一〇)の序においても「命曰唐廬、旌独有也。(命づけて唐廬と曰ひ、独り有するを旌すなり)」と、この建物が自分だけのものであることを述べている。この他に彼には「嵒台銘」がある。宋、葛立方の『韻語陽秋』卷一三に、

元次山結屋浯溪之上、有三吾焉。因水而吾之、則曰浯溪、因屋而吾之、則曰唐亭、因石而吾之、則曰嵒台。

元次山屋を浯溪の上に結ぶに、三吾有り。水に因りて之を吾とすれば、則ち浯溪と曰ひ、屋に因りて之を吾とすれば、則ち唐亭と曰ひ、石に因りて之を吾とすれば、則ち嵒台と曰ふ。

と指摘されているように、これら三つの銘においては対象を自らの所有物とする意識が鮮明に表出している。また宝応元年（七六二）、孟彦深を退谷に招いた時の作品である「招孟武昌」（巻二）には次のようにある。

風霜枯万物	風霜	万物を枯らすも
退谷如春時	退谷	春時のごとし
窮冬涸江海	窮冬	江海を涸らすも
杯湖澄清漪 ^{（注5）}	杯湖	澄みて清漪あり
05 湖尽到谷口	湖は谷口に到りて尽き	
単船近堦墀	単船	堦墀に近づく
湖中更何好	湖中	更に何か好き
坐見大江水	坐ろに見る	大江の水
欽石為水涯	欽石	水涯を為し
10 半山在湖裏	半山	湖の裏に在り
谷口更何好	谷口	更に何か好き
絶壑流寒泉	絶壑	寒泉流る
松桂蔭茅舍	松桂	茅舍を蔭ひ
白雲生坐辺	白雲	坐辺に生ず
15 武昌不干進	武昌は干進せず	
武昌人不厭	武昌は人厭はず	
退谷正可遊	退谷	正に遊ぶべく

杯湖任来泛 杯湖 来りて泛ぶに任す

湖上有水鳥 湖上に水鳥有り

20 見人不飛鳴 人を見るも飛鳴せず

谷中有山獸 谷中に山獸有り

往往随人行 往往にして人の行くに随ふ

莫将車馬來 車馬を将て来り

令我鳥獸驚 我が鳥獸をして驚かしむる莫れ

ここでは退谷の情景を詠じ、退谷の鳥獸が元結自らの所有物であることを「令我鳥獸驚（我が鳥獸をして驚かしむる莫れ）」（第二四句）のように述べている。恐らく元結によって命名された退谷もやはり自らのものとして意識されていたことであろう。こうした意識はすでに早い時期に元結のうちにあった。第一編第二章で取り上げた「心規」（巻五）では、「元子病遊世、帰于商余山中。以酒自肆、有醉歌。里夫公聞之、酹元子之酒、請歌之。歌曰、元子樂矣。俾和者曰、何樂亦然。何樂亦然。我曰、我雲我山、我林我泉。……（元子世に遊ぶに病れ、商余山中に帰る。酒を以て自ら肆にし、酔ひて歌ふ有り。里の夫公之を聞き、元子の酒を酹^{おほ}くして、之を歌はんことを請ふ。歌ひて曰はく、元子樂し、と。和せしむる者曰はく、何の樂しみか亦た然る。何の樂しみか亦た然る、と。我曰はく、我が雲我が山、我が林我が泉なり、と。……）」のように、元結自らの醉歌という設定において、商余山中の山水のたたずまいが自身のものであることを喜びをもって述べていた。元結はこのように怪奇な水石、洞・穴・凹状の岩石と泉流とのたたずまいに愛着を抱き、命名という行為によってそれらを自らのものとして愛惜していたのである。こうした意識は早い時期から元結の志向の中に存在しており、彼の文学の一特色を形成していると言ってよいであろう。

第二節 価値を賦与される水石

これまで述べたように、元結は怪異な形状の水石、なかでも洞・穴などの形状に対して愛着を抱き、それらを自らの所有物として愛惜している。彼は一体なぜそうした水石を好んだのであろうか。

市川桃子氏は元結が水石に価値を見出したことについて、「石と水の中に理想的為政者の持つ特性を発見し、そこに自然の持つ価値を認めて詩文を作っている。言いかえれば、自然を借りて、理想的為政者像を詩的に表現しているのである。」^(注6)と述べている。

市川氏の指摘するように、確かに元結は例えば第二編第六章で取り上げた「瀼溪銘」序（巻六）において、「於戯、古人喜尚君子。不見君子、見如似者、亦称頌之。瀼溪、可謂讓矣。讓、君子之道也。（於戯、古人は君子を喜尚す。君子を見ざれば、似るがごとき者を見れば、亦た之を称頌す。瀼溪は、讓と謂ふべし。讓は、君子の道なり）」と、溪谷が「讓」という価値を有し、それは君子の持つ価値と等しいと述べている。しかし、この銘において元結が君子としての価値を瀼溪に見出したのは、溪の名称である「瀼溪」を「讓なる溪」と読んだからであり、溪谷自体が「讓」と呼ぶにふさわしい機能や形状を有していて、それを見出したというわけではない。序に言う「瀼水」は湓水に注ぐ川の名であり、「瀼溪」はその二〇里程の溪谷の名称である。

木華の「海賦」（『文選』巻一二）に「涓流決瀼、莫不来注。（涓流決瀼して、来り注がざるは莫し）」とあり、李善は「決瀼、渟淤也。（決瀼は、渟淤なり）」と注し、「決瀼」を水がよどみ、砂や泥が沈殿している様子と解している。また李周翰は「涓流亦小水。決瀼、流貌。言此諸水莫不皆来注入于海。（涓流も亦た小水なり。決瀼は、流るる貌。此の諸水皆来り注ぎて海に入らざる莫きを言ふ）」と注し、流れる様子であるとしている。

「瀼溪銘」序に「瀼水夏瀼江海。（瀼水は夏に江海に瀼す）」と言っていることからすると、元結は「瀼」を小

さな川が流れるという意味で用いているようである。「瀼溪」は夏になると、小さな川の流れができる溪谷の名称であったのである。ところがこの「瀼」字に「讓」を見た途端、小さな川が流れるだけの溪谷が分節され、「讓」の価値を持つ世界として生成されたのである。元結が水石に価値を見出したということは、自然の中にあらかじめ存在している理想的為政者の持つ特性を発見したのではなく、むしろ命名という行為を通して新たな価値を持つ世界が生じたというように理解することができる。

道州刺史の任にあった頃に制作された「七泉銘」（巻一〇）を見てみよう。序においては先ず元結を惹きつけてやまない怪異な水石のたたずまいが呈示される。

道州東郭、有泉七穴。或吐於淵竇、或鑿於嵌臼、皆澄流清漪、旋沿相奏。又有藂石欹欠、為之島嶼。殊怪相異、不可名狀。此邦豈世無好事者耶。而令自古荒之。乃修其水木、為休暇之处。每至泉上、便思老焉。

道州の東郭に泉七穴有り。或は淵竇より吐し、或は嵌臼に鑿し、皆澄流清漪にして、旋沿相奏す。又藂石の欹欠する有り、之が島嶼を為す。殊怪にして相異なり、名状すべからず。此の邦に豈に世々好事の者無からんや。而るに古より之を荒れしむ。乃ち其の水木を修めて、休暇の処と為す。泉上に至る毎に、便ち焉に老いんことを思ふ。

道州の東にあった七つの泉流とあたりの岩石の怪異さは、言葉で形容できない程のものであった。しかしその怪異さ故に、世の中においては評価されることなく見捨てられ、荒れるにまかされていた。元結は川の流れや木々を整え、この水石のたたずまいを安らぎの空間としている。「每至泉上、便思老焉。（泉上に至る毎に、便ち焉に老いんことを思ふ）」という句にはこの怪異な水石の世界に対する強い志向を窺うことができるであろう。序は続けて七つの泉流に命名した所以を述べる。

於戲、凡人心若清惠、而必忠孝、守方直、終不惑也。故命五泉、其一曰漙泉、次曰漚泉、次曰湑泉、次曰洙泉、次曰洧泉、次曰洸泉、次曰洊泉、次曰洫泉、次曰洌泉、次曰洎泉、次曰洏泉、次曰洑泉、次曰洧泉、次曰洊泉、次曰洫泉、次曰洌泉、次曰洎泉、次曰洏泉、次曰洑泉。故命之曰東泉。引來垂流、更復殊異。各刻銘以記之。

於戲、凡そ人の心若し清惠にして、必ず忠孝、方直を守らば、終に惑はざるなり。故に五泉に命づけ、其の一を漙泉と曰ひ、次を漚泉と曰ひ、次を湑泉、洊泉、洊泉と曰ふ。之を泉上に銘し、來者をして其の流れに飲漱して、感發する所の者有らしめんと欲す。一泉を留めて命づけて漫泉と曰ふ。蓋し自ら漫浪にして、飲醉に厭かざる者なるを旌さんと欲するなり。一泉は山東に出づ。故に之に命づけて東泉と曰ふ。引き來り流れを垂らせば、更に復た殊異なり。各々銘を刻して以て之を記す。

これらの泉流はそれ自体がその形状や機能において惠、忠、孝、方、直という価値を有しており、それを元結が見出したというのではなく、元結の命名という行為によつて、新たに価値が生じているのである。また、水石に生じた価値がすべて理想的為政者のそれに連なるものでもないことは、「七泉銘」に「漫泉」「東泉」が含まれていることから明らかである。「東泉」は本章の第一節に引用した「引東泉作」に称えられている泉流で、その命名の由来は山の東側から流れ出ているということである。また「漫泉」の「漫」は、第二編第五章で検討したように、元結が社会に対する自らの態度を述べている言葉であつて、理想的為政者の持つ特性ではない。元結はこの世俗的な価値観からは許容されない「漫」を自らの価値観として泉流に「漫泉」と命名し、次のように述べる。

自成小湖 自ら小湖を成すを

能浮酒舫 能く酒舫を浮かべ

不没石魚 石魚を没せず

漫也叟称 漫や叟の称なり

名泉何為 泉に名づけ何をか為せる

旌叟於此 叟 此に於て

漫歛漫醉 漫歛漫醉するを旌す

（「漫泉銘」卷一〇）

この作において元結は自らが世俗的な価値観を離れ、歛びを尽くして酔っていることを世俗の人士に明らかにしようとする。恵、方、直、忠、孝も君子の資質であるとともに、「漫」と同じく元結自身を支えている価値観である。先に述べたように水石は命名されることによってそこに新たな価値が生じているのである。

これらの水石は怪異な形状をしており、その怪異さゆえに天下の景勝としての価値を知られることなく、世に忘れ去られていた。怪異な水石のたたずまいが誰にも賞玩されないということについては、「七泉銘序」の他、例えば次のような言及が見られる。

無人修賞 人の修賞する無く

競使蕪穢 競ひて蕪穢せしむ

（「朝陽岩銘」卷九）

置州以来、無人賞愛。

州を置きて以来、人の賞愛すること無し。

（「右溪記」卷一〇）

怪異さは世人の賞玩の価値基準には合致しない。怪異な水石は世人においては賞玩の対象とはなりえないものなのである。一方、これまで見てきたように、元結自身も世俗と合致しない価値観を持つ、時流とは異なる存在として自らを位置付けていた。この、世俗と異なる価値観を有し、自ら漫叟と号して世俗に対峙する元結自身の姿は、あまりに怪異であるが故に世人が賞翫することなく道州の地にある水石の姿と全く重なる。元結はおそらく怪異な水石の中に自らとの同質性を見ていたと思われる。

第三節 怪石に生じる別乾坤

第一節で述べたように、元結は水石の様々な形状のうち、洞や穴、凹状のものに対して殊に強い愛着を抱いている。その志向はどのように解釈されるのであろうか。

巉巉小山石	巉巉たる小山の石
数峯対窠亭	数峯 窠亭に対す
窠石堪為樽	窠石 樽と為すに堪へたり
状類不可名	状類は名づくべからず
05 巡回数尺間	数尺の間を巡回すれば
如見小蓬瀛	小蓬瀛を見るがごとし
樽中酒初漲	樽中に酒初めて漲るや
始有島嶼生	始めて島嶼の生ずる有り

豈無日觀峯
豈に日觀の峯無からんや

10 直下臨滄溟
直下 滄溟に臨む

愛之不覺醉
之を愛して覺えず酔ひ

醉臥還自醒
酔ひて臥し還た自ら醒む

醒醉在樽畔
醒酔して樽畔に在りて

始為吾性情
始めて吾が性情を為す

15 若以形勝論
若し形勝を以て論ずれば

坐隅臨郡城
坐隅 郡城に臨む

平湖近階砌
平湖 階砌に近く

遠山復青青
遠山 復た青青たり

異木幾十株
異木 幾十株

20 枝条冒簷楹
枝条 簷楹を冒ふ

盤根滿石上
盤根 石上に満ち

皆作竜蛇形
皆竜蛇の形を作す

酒堂貯釀器
酒堂 貯釀の器あり

戸牖皆罍餅
戸牖は皆罍餅

25 此樽可常滿
此の樽 常に満たすべし

誰是陶淵明
誰か是れ陶淵明ならん

（「宸樽詩」卷三）

この「宸樽詩」も、永泰二年（七六六）十一月、道州刺史の任にあった時の作品である。宸石と呼ばれる、周

りが陰しく切り立っていて中が凹状になっている名状しがたい石があり、その窪みはまるで蓬萊や瀛洲を見るかのように、そこに酒を満たすと島が生じ、大海に臨むようであると詠じ（第一句く第八句）、元結は窠石に生じる別乾坤に注目するのである。また同時期の「窠樽銘」（巻九）では、その世界の様子を次のように描いている。

………

………

空而臨之 空にして之に臨めば

長岑深壑 長岑深壑

広亭之内 広亭の内

如見山岳 山岳を見るがごとし

満而臨之 満たして之に臨めば

曲浦回淵 曲浦回淵

長瓢之下 長瓢の下

江湖在焉 江湖在り。

………

………

窠樽は空の時には高い峰や深い溪谷が現れ、まるで山岳を見るかのようにであり、酒を満たすと曲がりくねった水辺や淵のある湖が出現すると言うのである。元結はこの窠樽を「太樸」「直純」であるとし、古代の聖王の徳性に等しい価値を賦与している。それとともに彼はこの奇怪な形状の岩石に生じる世界に注目し、「之を愛して覺えず酔ふ」と、限らない愛着の思いを流露するのである。また第二編第二章で引用した至徳元載（七五六）の「虎蛇頌」（巻六）の序においても「猗玗子逃乱在硯。南人云、猗玗洞中、是王虎之宮。中硯之陰、是均蛇之林。

（猗玗子乱を逃れて碣に在り。南人云へらく、猗玗洞中は、是れ王虎の宮なり。中碣の陰は、是れ均蛇の林なり、と）」と、洞窟のうちに王虎の宮、均蛇の林があり、猗玗洞全体が一つの世界となつてゐることを述べてゐる。劉法緩氏^{（注7）}が指摘するように、「碣」字が四方を取り囲んだ岩石を屋壁とした封邑の意であるとすれば、猗玗洞は、四方を岩石に取り囲まれ、安史の乱によつて騒然とした外界とは隔絶された別乾坤であつたと解釈することができらるであらう。

さらに「招陶別駕家陽華作」（卷三）においても、次のように陽華洞の中が外界とは隔絶されてゐたことを詠じてゐる。

海内厭兵革 海内 兵革を厭ひ

騷騷十二年 騷騷たること十二年

陽華洞中人 陽華洞中の人

似不知乱焉 乱を知らざるに似たり

………

………

以上のように、元結は洞穴や凹状の岩石に対して、そこに現出する別乾坤に確かに注目しているのである。その世界は時には蓬萊や瀛洲、洞天であり、騒々たる日常を超越した世界であつた。その中に身を置く、すなわち自らを世俗と隔絶した者として位置づけ、さらにその世界を自ら所有するものと意識することによつて、彼の心は歓びと安らぎに満たされてゐたであらう。

次の「石宮四詠」（卷二）は第二編第一章で引用した作品であるが、再び掲出する。

石宮春雲白
 石宮 春雲白し
 白雲宜蒼苔
 白雲 蒼苔に宜し
 払雲踐石徑
 雲を払ひ石徑を踐む
 俗士誰能来
 俗士 誰か能く来らん

（其一）

石宮夏水寒
 石宮 夏水寒し
 寒水宜高林
 寒水 高林に宜し
 遠風吹蘿蔓
 遠風 蘿蔓を吹く
 野客熙清陰
 野客 清陰を熙ぶ

（其二）

石宮秋氣清
 石宮 秋氣清し
 清氣宜山谷
 清氣 山谷に宜し
 落葉逐霜風
 落葉 霜風を逐ふ
 幽人愛松竹
 幽人 松竹を愛す

（其三）

石宮冬日暖
 石宮 冬日暖かなり
 暖日宜温泉
 暖日 温泉に宜し
 晨光静水霧
 晨光 水霧静かなり
 逸者猶安眠
 逸者 猶ほ安眠す

（其四）

聶文郁^(注8)氏が述べるように、この連作は、天宝九載（七五〇）から一二載（七五三）にかけて、元結が商余山に静養していた頃の作品と思われる。「石宮」は商余山中の洞窟であり、彼は洞窟を「宮」と表現している。この詩はその洞窟をとりまく自然の四季を詠じたもので、そこは世俗の人の訪れることのない「野客」「幽人」「逸者」のみの世界であった。元結は、野客、幽人あるいは逸者として清陰を喜び、松竹のたたずまいを愛で、安眠しているのである。四首全体に歎びと安らぎが横溢している「石宮四詠」がおそらく元結三三、四歳頃の作品であり、先の「虎蛇頌」が三八歳の時のものであることからすると、これまで述べてきたような洞や凹状の岩石への志向は元結の文学の早期から見られるものであると言つてよい。

元結の怪奇な水石への愛好の基底には、そこに時俗に対峙する自らの姿との同一性を認めて共感するとともに、水石が現出する別乾坤への志向が見られる。本章第一節に挙げた「引東泉作」の「吾欲解纓佩、便為泉上翁（吾纓佩を解き、便ち泉上の翁と為らんと欲す）」という末二句の表現は、こうした怪異な形状の水石とともにある喜びを前提として始めて可能となるものであるろう。

第四節 水石と諷諭

元結の文学における諷諭の問題を水石の愛好との関係において見てみよう。「春陵行」以後も彼が諷諭を好んだことは「茅閣記」などの作品によく窺われる。「茅閣記」（巻八）は、永泰元年（七六五）、友人であった湖南の孟彦深が茅閣を作った折にその記として制作されたものである。

乙巳中、平昌孟公鎮湖南、將二歳矣。以威惠理戎旅、以簡易肅州県。刑政之下、則無撓人。故居方多閑。

（第一段）

時与賓客嘗欲因高引望、以紓遠懷。偶愛古木数株、垂覆城上、遂作茅閣、蔭其清陰。長風寥寥、入我軒檻、扇和爽氣、滿於閣中。世伝衡陽暑湿鬱蒸、休息於此、何為不然。

(第二段)

今天下之人正苦大熱。誰似茅閣、蔭而庥之。於戲、賢人君子為蒼生之庥蔭、不如是耶。

(第三段)

諸公歌詠、以美之。俾茅閣之什、得系嗣於風雅者矣。

(第四段)

乙巳中、平昌の孟公湖南に鎮すること、將に二歳ならんとす。威恵を以て戎旅を理め、簡易を以て州県を肅す。刑政の下、則ち撓人無し。故に居は方に閑多し。

(第一段)

時に賓客と嘗みに高きに因りて引望し、以て遠懷を紓せんと欲す。偶々古木数株、城上に垂覆するを愛し、遂に茅閣を作れば、其の清陰に蔭はる。長風寥寥として、我が軒檻に入り、爽氣を扇和し、閣中に滿つ。世に衡陽は暑湿にして鬱蒸たりと伝ふるも、此に休息すれば、何為れぞ然らざる。

(第二段)

今天下の人正に大熱に苦しむ。誰か茅閣の蔭はれて之に庥むに似ん。於戲、賢人君子蒼生の庥蔭を為すこと、是くのごとくならざらんや。

(第三段)

諸公は歌詠して、以て之を美む。茅閣の什をして、風雅を系嗣する者たるを得しめん。

(第四段)

記はまず孟士源の治績を称賛し(第一段)、続いて第二段で茅閣を作ったことを記す。この茅閣に休息すると爽やかな風が吹き、とてもじめじめと蒸し暑い地にいるとは思われないと述べ、茅閣を称える。さらに第三段において、今天下の人は炎熱に苦しんでいるのだが、誰がこの茅閣のように黎民を庇護するであろうか、と茅閣の世界がメタファーとして解釈され、茅閣のたたずまいに君子の徳が付与されて新たな価値が生じている。ここに言う君子は暗に孟彦深を指しているよう。そして茅閣を称賛する歌を作ることが風雅を継ぐものであると言う(第四段)。つまり茅閣が炎熱から人を守るということが、君子である孟士源が黎民を庇護することの比興の表現となっており、彼はそこに詩経以来の風雅の伝統の継承を見出しているのである。

元結は「春陵行」「賊退示官吏」詩以後、新楽府や厳しい規諷の意を寓した詩を制作していない。第二編第三章で検討したように「賊退示官吏」詩がこのことになんらかの影響を及ぼしたことが想定されるが、彼は自らの文学の理念、載道としての文学を放棄したわけではなかった。ここに挙げた「茅閣記」の他、特に「朝陽岩銘」「窰樽銘」「七泉銘」「寒泉銘」など銘のジャンルにおいて、水石を主な対象として諷諭の意識に基づいた作品が著されていくのである。

『文心雕竜』銘箴編に「銘者、名也。觀器必名焉。正名審用、貴乎慎徳。（銘とは名づけるという意味である。器物を見ると必ずそれに名づけるが、それは実体にふさわしい名称をつけることによって器物の作用を明らかにし、使用者自身が徳を慎む助けとするということを貴んだのである）」とあるのによれば、銘とは対象の価値を顕彰し、それを己が鑑戒とするものである。元結の水石や亭台に関する銘のあるものには、その対象の価値を世に対して顕彰し、それによって世俗を戒めようとする意識が顕著に現れている。先の「七泉銘」（卷一〇）のうち「漣泉銘」「忠泉銘」「淳泉銘」「汙泉銘」「湫泉銘」等はその典型である。今「漣泉銘」と「忠泉銘」を挙げる。

於戲漣泉 於戲 漣泉

清不可濁 清にして濁すべからず

恵及於物 恵 物に及び

何時竭涸 何れの時か竭涸せん

将引官吏 将に官吏を引きて

盥而飲之 盥して之を飲ましめんとす

清恵不已 清恵 已まず

泉乎吾規 泉よ 吾が規なり

（「漣泉銘」）

不為人臣 人臣と為らずんば

老死山谷 山谷に老死せん

臣於人者 人に臣たる者は

不就汚辱 汚辱に就かざれ

我命漣泉 我漣泉と命づくるは

勸人事君 人に勸めて君に事へしむるなり

来漱泉流 来りて泉流に漱ぎ

願為忠臣 願はくは忠臣と為らんことを

（「漣泉銘」）

顔真卿をして「君雅好山水、聞有勝絶、未嘗不枉路登覽而銘贊之。（君雅より山水を好み、勝絶有りと聞けば、未だ嘗て路を枉げ登覽して之を銘贊せずんばあらず）」と言わしめた程、元結は怪異な水石をこよなく愛で、そのたたずまいに社会に対峙する自身との同質性を見出して自らの価値観を賦与し、あるいは水石の穴や窪みに別乾坤を見ている。そしてそれとともに彼は自ら見出した水石に命名して讃美することによって、規諷の表現を展開するのである。

「漣泉銘」「漣泉銘」について言えば、元結が目にしたのは、世に忘れられた無名の泉流であり、泉の源は世人の価値観に合致しない怪異な形状をしていた。その人為を施さない怪異な形状に魅了され、限りない愛着を抱きつつ、漣泉、漣泉という名称を与えて讃美し、官吏に対してこの泉の水を飲み、人々に恵みをほどこし、汚辱に手を染めぬようにと戒めているのである。記や銘はそのために相応しい表現形式であった。

第五節 憂憤を癒やす水石

ところで、怪奇な水石の中にある喜びを表出することは、一体どのようなことをもたらすのであろうか。あるいは喜びの表出と同時に何が起こっているのでしょうか。

吾愛石魚湖

吾は愛す 石魚湖

石魚在湖裏

石魚 湖の裏に在り

魚背有酒樽

魚の背に酒樽有り

繞魚是湖水

魚を繞るは是れ湖水

05 兒童作小舫

兒童 小舫を作り

載酒勝一杯

酒を載すること一杯に勝ふ

座中令酒舫

座中 酒舫をして

空去復滿来

空にして去り復た滿たして来らしむ

湖岸多欹石

湖岸に欹石多く

10 石下流寒泉

石下に寒泉流る

醉中一盃漱

醉中 一たび盃漱すれば

快意無比焉

快意 焉に比する無し

金玉吾不須

金玉 吾は須らず

軒冕吾不愛

軒冕 吾は愛せず

15 且欲坐湖畔 且く湖畔に坐し

石魚長相對 石魚と長へに相對せんと欲す

(「石魚湖上作」卷三)

湖中に魚の形をした怪異な岩石があり、その背には酒樽にふさわしい窪みがあつて、そこに酒を満たしておく。元結らはこの石魚の背に座し、小舟で酒を運ばせては飲んで酔う。石の下を流れる冷たい泉流で手を洗い口を漱げば、これに勝る快さはない。富も身分も願わない、唯だ湖畔に座して石魚と向かいあつていただけであるというこの詩は、石魚に対する讃歌である。石魚は元結に命名されることで彼自身のものとなり、ひたすら賞玩の対象にまで高められている。

この「金玉吾不須、軒冕吾不愛。且欲坐湖畔、石魚長相對（金玉吾は須ゐず、軒冕吾は愛せず。且く湖畔に坐して、石魚と長へに相對せんと欲す）」には、世俗を超越した者の歎びが詠じられている。しかしその表現の背後に世俗に對峙する者の憂いや憤りがあつたことは、同じ時期に書かれた「石魚湖上醉歌」（卷三）に次のようにあることから明らかであろう。

……………

……………

我持長瓢坐巴丘 我 長瓢を持ちて巴丘に坐し

酌飲四坐以散愁 四坐と酌飲して以て愁ひを散ぜん

石魚湖上に飲醉する行為は、胸中の愁いを解消しようとするためのものであつたのである。劉大杰氏が「他の『右溪記』一類の山水小品、也寄寓着作者的悲憤^(注)。」と述べる所以である。しかしながら、「石魚湖上作」においては、むしろ社会への憂憤が怪異な石魚とともにあることの中で癒やされているというところに叙述の中心が

ある。自らが見出し、命名して自らのものとし、その怪異さ故に限りない賞玩の対象にまで高められた水石のたずまいとともにあることの喜びと憂憤の解消とが、元結の晩年の文学を特徴づけているのである。

元結のこのような意識は、水石に対してばかりではなく、例えば第二編第一章で検討した『篋中集』編纂といった行為の中にも見出すことができる。沈千運ら七人の詩人達の姿は怪異なるが故に世に認められぬまま忘れられている水石のイメージに等しい。彼らの詩文を世に顕彰することは、水石に命名して世俗を戒めようとする意識と同一のものである。そして、同時代の『国秀集』『珠英学士集』などに匹敵しうるような、その文学を顕彰するのにふさわしい名称があつたであろうに、そうした名称を採らず『篋中集』と命名したことに、この小集を文箱に納めて自らのものとして愛惜しようとする意識が強く窺われる。この『篋中集』の編纂という行為を通して、元結の心はやはり癒やされていたことであろう。

おわりに

本章では怪異な水石に対する志向に着目して元結の文学の特色を明らかにした。彼は怪異な水石に強い愛着を抱き、ことに洞や穴、凹状の岩石についてはそこに生ずる別乾坤に注目していた。世間から見捨てられた怪異な水石は世俗に対峙する自らの姿と等しいものであり、命名し、価値を賦与することを通して元結自らのものと意識され、ひたすらな愛玩の対象にまで高められていた。

広徳二年（七六四）に書かれた「春陵行」「賊退示官吏」の二編の詩は、道州の民の困苦と官吏としての自らの意識を明確に述べた作品であつた。この年以後の作品には社会に対する諷諭の意識が水石のたたずまいに託されて表出されるようになる。李商隠の言う「危苦激切」（「唐容州経略使元結文集後序」）とは、このことを指しているであろう。

元結は広徳二年以後も、諷諭としての文学の在り方を放棄したわけではなく、諷諭の意識に基づいた作品を多く残している。晩年の元結の文学を特徴づけているのは、怪異な水石を見出し、それに命名して自らのものとして賞翫し、あるいは諷諭の意を託すという行為を通して、彼の憂憤が癒やされていたということである。例えば「石魚湖上作」は、怪異な水石とともにあることで、自らの憂憤が癒やされ、心が喜びに満たされていくことを詠じたものと解釈される。

また、『篋中集』編纂は、世に認められぬまま忘れられた価値あるものを顕彰しようとする点において、水石の愛好と同じ意識によるものであったと考えることができるであろう。

注

- (1) 市川桃子「元結『春陵行』考」(『東方学』六〇集、一九八〇年)一一〇―一三頁。
- (2) 太田晶二郎「海陽泉帖考」(『太田晶二郎著作集 第一冊』吉川弘文館、一九九一年。初出は、『歴史地理』八六―二、一九五五年)。
- (3) 太田晶二郎氏は前掲論文において、この作品が元結のものであることを明らかにしている。
- (4) 「地荒」、底本は「荒溪」に作る。ここでは『全唐文』卷三八三による。
- (5) 「杯」、底本は「杯」に作る。ここでは明本によって改めた。
- (6) 市川桃子氏、前掲論文。一一頁。
- (7) 第二編第二章、注(9) 参照。
- (8) 聶文郁注解『元結詩解』(陝西人民出版社、一九八四年)一四九頁。聶文郁氏は「『石宮四詠』当是元結習静商余山時作品、也就是唐玄宗天宝九載至十二載(公元七五〇年―七五三年)之間的作品。」(「石宮四

詠」は元結が商余山に習静していた時の作品、すなわち唐玄宗の天宝九載から十二載（七五〇年～七五三年）にかけての作品としなければならない」と述べている。また楊承祖著『元結研究』（国立編訳館、二〇〇二）二二二頁も、「「石宮四詠」疑亦作於此期。（「石宮四詠」もまたこの時期に制作されたものであろう）」と、商余山に静養していた時期に制作されたと推測し、「詠石宮四季之景、及「野客」、「幽人」、「逸者」之趣、頗似初入商余心境。又其詩遣詞精巧、蓋為早期所作、因繫於此、以俟更詳。（石宮の四季の景觀、及び「野客」、「幽人」、「逸者」の趣を述べており、初めて商余山に入った頃の心境にかなり似ている。またその措辞も精巧であり、早期に制作されたものと思われるから、ここに繫年し、さらに詳究を待つ）」と述べている。

（9）劉大杰著『中国文学發展史』第二冊（上海人民出版社、一九七六年）二二八頁。

第三章 浯溪と「大唐中興頌」

はじめに

元結が上元二年（七六一）に制作した「大唐中興頌」（巻七）は、第二編第二章において明らかにしたように、両京の回復を成し遂げ、唐王朝の中興をもたらした肅宗の徳を称美するとともに、安史の乱が未だ平定されていない現状において、両京回復時、君臣が心を一にし、賞罰が時を得ていたことを想起し、李輔国のごとき姦臣を除く意を寓した諷諭の作として著されたと解釈できるものであった。

この頌は、顔真卿の揮毫によって、元結の死の前年、大暦六年（七七二）に浯溪（湖南省祁陽県南）の摩崖に刻された。頌の末九句、

能令大君	声容 _云 沄	不在斯文	能く大君をして	声容 _云 沄	たらしむるは	斯の文に在らざらんや
湘江東西	中直浯溪	石崖天齊	湘江東西し	中浯溪に直り	石崖は天と齊し	
可磨可鑿	刊此頌焉	何千万年	磨くべく鑿るべし	此の頌を刊めば	何ぞ千万年のみならんや	

は、その折に加えられたものと推測される。

「大唐中興頌」を浯溪に刻した意図が、肅宗の盛徳と唐の中興を永遠に伝えようとしたところにあったことは、この付加された頌文によって明らかである。しかし、この諷諭の意を含む頌を摩崖に刻んだということには、肅宗の盛徳と王朝の中興のみならず、姦臣を除き、賞罰が時を得るようにとの忠告、戒めの意図をも久遠に伝えん

とする願いが込められていたと考えることができる。

浯溪は私の溪谷の意を込めて命名され、世俗（政治的社会）との対峙により成立した自適の空間である。浯溪においては、三吾の銘と称される「浯溪銘」（巻一〇）、「嵒台銘」（巻一〇）、「唐廐銘」（巻一〇）、及び「東崖銘」（巻一〇）が制作されている。前章において検討したように、元結の銘には諷諭の意を含んだものの他に、対象を称美し、自適の意を表出する銘がある。しかしながらこの銘にあっても、その対象の価値を世人に示し、世人への戒めとしようとする構造を読み取ることができる。いわば諷諭が内在化しているのであり、自適の意を吐露することが同時に世俗に対する諷諭の営みとなるのである。こうした表現行為によって自らの憂憤が癒やされているのが、晩年の元結の文学の特色と言えよう。「大唐中興頌」がこの浯溪の地に刻されたことは、このことを象徴的に物語っている。

本章においては、浯溪という空間がどのように形象化されているかを明らかにし、晩年の元結における諷諭の表現の意味について更に考察を進めることとする。

第一節 浯溪の空間

浯溪は、湖南省祁陽県の南、東西に流れる湘水の南岸にあった無名の溪谷であり、元結が購入して浯溪と名付けたものである。彼がこの溪谷を購入した時期について、孫望氏『元次山年譜^(注1)』は、大暦二年（七六七）の条に、「公有嵒台銘、是歲六月十五日刻石。在祁陽。（公に嵒台の銘有り、是の歳六月十五日石に刻す。祁陽に在り）」と記し、「按六月十五日係刻石年月、則此銘或為本年春間、道經祁陽時所作、亦未可知。次山又有浯溪銘、不紀年月。然讀嵒台銘、知嵒台実因浯溪得名、則溪銘之作、宜在台銘以前也。（按ずるに六月十五日は石に刻せし年月に係れば、則ち此の銘は或は本年春の間、道祁陽を經し時作る所と為すも、亦た未だ知るべからず。次山に又浯溪の

銘有り、年月を紀せず。然れども嵒台の銘を読み、嵒台は実は浯溪に因りて名を得るを知れば、則ち溪の銘の作は、宜しく台の銘以前に在るべきなり」と言い、「浯溪銘」の制作年を「疑大曆元年二年間作」としている。これに対して楊承祖氏「元結年譜^(注2)」は大曆元年（七六六）にこの地を得、浯溪と名付けて居を営んだとする。氏は、永泰元年（七六五）、道州刺史の任期が終わり、道州より衡陽に至り命を待っていた時の作である「劉侍御月夜讌会」詩（卷三）に、

我従蒼梧来　我　蒼梧より来り

将耕旧山田　将に旧山の田を耕さんとす

踟蹰為故人　踟蹰して故人の為に

且復停帰船　且く復た帰船を停む

とあるのによつて、この時元結は北へ帰ることを考えていたとする。そして翌大曆元年、再び道州刺史を授けられて祁陽を経過するけれども、大曆二年（七六七）六月には「嵒台銘」が刻されており、また大曆二年作の「欸乃曲」（卷三）に「浯溪形勝滿湘中（浯溪の形勝湘中に満つ）」の句があり、すでに「浯溪」の語が用いられているのであるから、浯溪の地を入手したのは大曆元年中とするのである。また桂多蓀氏も『浯溪志^(注3)』において、楊承祖氏と同様、浯溪を入手したのは大曆元年とする。ことに桂氏はその時期を元結が再び道州刺史を授けられ、祁陽を経過した時であると推測している。

楊承祖氏が引く「欸乃曲」の他に、大曆元年の作「説洄溪招退者」（卷三）にも「浯溪石下多泉源（浯溪石下泉源多し）」の句がある。浯溪購入の時期は二氏の指摘するごとく大曆元年中であるとしてよいであろう。

再び道州刺史を拝した元結は、母親を浯溪に呼び寄せた。後年、容府都督兼侍御史本管計略使を拝するや、母

の老いを以て辞そうとしたものの許されず、母親を浯溪に残して赴任することになった。「我従蒼梧来、将耕旧山田（我蒼梧より来り、将に旧山の田を耕さんとす）」と、一度は帰郷を志していた彼が浯溪の地に居を構えたことの背後には、李商隠が「容州計略使元結文集後序」（『李義山文集』巻四）において、「見憎于第五琦元載、故其将兵不得授、作官不至達、母老不得尽其養、母喪不得終其哀。（第五琦・元載に憎まる、故に其の兵を将ゐては授を得ず、官と作りては達に至らず、母老ゆるも其の養を尽くすを得ず、母の喪には其の哀を終ふるを得ず）」と述べた状況があつたであろうことは想像に難くない。浯溪の入手もただこの地の怪奇な水石を嘉したのみではなかつたと考えねばならないであろう。

浯溪の地にどのような居が営まれていたかについては、「唐頤」「中堂」「右堂」という名称の建物があつたことが彼の残した銘からうかがわれる。また元結の末子とされる元友讓が後に浯溪を訪ねた時の作「復游浯溪」詩（『全唐詩』巻二五八）が残されている。この詩が制作されたのは元和一三年（八一八）であり、元結が亡くなつてから、すでに四六年の時が流れていた。

昔到纔三歳 昔到りしとき纔かに三歳なるに

今来鬢已蒼 今来れば鬢已に蒼なり

剥苔看篆字 苔を剥して篆字を看

薙草覓書堂 草を薙ぎて書堂を覓む

05 引客登台上 客を引きて台上に登り

呼童掃樹旁 童を呼びて樹の旁らを掃ふ

石渠疏擁水 石渠 擁水を疏し

門徑斲藂篁 門徑 藂篁を斲る

田地潜更主	田地	潜かに主を更め
10 林園尽廃荒	林園	尽く廃荒す
悲涼問耆耄	悲涼	耆耄に問へば
疆界指垂楊	疆界	垂楊を指す

この詩からは、荒れ果てていつの間にか他人の所有となつた浯溪の地で、父の記憶をたどるかのように遺跡をたずねている友讓の姿を思い浮かべることができる。第三句の「篆字」は元結がこの地で制作し刻した「浯溪銘」をはじめとする銘をいう。四六年の時を経て銘はすでに苔むし、「書堂」も草に埋もれ、石の疏水は水が流れず、門への小道は竹に覆われているのであつた。友讓は苔を除き、草を薙ぎ、水を流し、竹を切りはらい、浯溪の空間を確認している。彼にとっては摩崖に刻されていた「大唐中興頌」ではなく、篆書で刻された銘によってこの浯溪の空間が把握されてゆくのである。ここには「書堂」(第四句)「石渠」(第七句)「門徑」(第八句)などの語が見える。このうち「石渠」は、桂多蓀氏によれば、浯溪の水を引いて畑に灌漑するためのものであつたとされる。^(注4)この疏水の存在は、元結が道州において東泉と名付けた泉の水を引き、流れを庭に落とし、そこに生じた水のたたずまいに感動し、怪異な水石のうちにあることの喜びを次のように詠じていたことを想起させる。

山林何処無	山林	何れの処にか無からん
茲地不可逢	茲の地	逢ふべからず
吾欲解纓佩	吾	纓佩を解きて

便為泉上翁 便ち泉上の翁と為らんと欲す

(「引東泉作」卷三)

この疏水が灌漑のためのものであったことはもとよりであるが、その水石のたたずまいこそ元結にとって価値のあるものだったに相違ない。怪異な水石を何より好んだ彼は、道州においてもそうであったように、ここ浯溪の地もまた自適の空間として位置づけていたことが窺われる。

彼が、浯溪において制作したことが明らかな作品としては、わずかに三吾と称される「浯溪銘」(卷一〇)「崑台銘」(卷一〇)「唐廡銘」(卷一〇)および「東崖銘」(卷一〇)が伝わるばかりである。この他に「中堂銘」「右堂銘」があつたとされるが、「中堂銘」は湮滅し、「右堂銘」(大暦六年刻)は、現在わずか数文字が識別できるのみであるという。^(注5)

この他、孫望氏は、疑問を残しつつも「寒泉銘」を浯溪における作とするが、桂多蓀氏は「湘江西峰、直平陽江口。(湘江の西峰、平陽の江口に直る)」という「寒泉銘序」(卷一〇)の描写が浯溪の地と一致しないと指摘し、「寒泉銘」は浯溪における作ではないとしている。^(注7) また楊承祖氏も「寒泉銘」と「寒亭記」の叙述が類似することを挙げ、孫望氏の説に疑問を呈示している。^(注8) 今、桂、楊両氏の説に従う。

元結がこの浯溪という空間をどのように表象しようとしていたのかを「浯溪銘」「崑台銘」「唐廡銘」「東崖銘」の表現から見てゆく。^(注9) 「浯溪銘」は第二章の一部を引用したが、ここに全文を掲出する。

浯溪在湘水之南、北匯于湘。愛其勝異、遂家溪畔。溪、世無名称者也。為自愛之、故命曰浯溪、銘于溪口。銘曰、

浯溪は湘水の南に在り、北のかた湘に匯る。其の勝異を愛して、遂に溪畔に家す。溪は、世に名称無き者なり。自ら之を愛するが為の故に命づけて浯溪と曰ひ、溪口に銘す。銘に曰はく、

湘水一曲
湘水の一曲

淵洄傍山
淵洄りて山に傍ふ

山開石門
山は石門に開け

溪流潺潺
溪流 潺潺たり

05 山開如何
山開けること如何

巉巉双石
巉巉たる双石あり

臨淵断崖
淵に臨む断崖

夾溪絶壁
溪を夾む絶壁

水実殊怪
水は実に殊怪にして

10 石又尤異
石も又尤異なり

吾欲求退
吾 求退して

将老茲地
将に茲の地に老いんとせんと欲す

溪古地荒
溪は古く地荒れ

蕪没蓋久
蕪没すること蓋し久し

15 命曰浯溪
命づけて浯溪と曰ひ

旌吾独有
吾が独り有するを旌す

人誰遊之
人 誰か之に遊ばん

銘在溪口
銘して溪口に在り

（「浯溪銘并序」卷一〇）

浯溪は、荒廃して顧みる者もない無名の溪谷であつた。銘には先ずこの溪谷の情景が描かれる（第一句、第一

○句)。湘水の曲がり流れる所に門のごとき石があり、山が開け溪谷が現れ、両側は絶壁となり、溪流がさらさらと流れている。元結はこうした山や石のたたずまいを人為の施されていない「殊怪」「尤異」の空間として賞美し、自らが老いるのにふさわしい地であるとして、私の溪谷の意味をこめて浯溪と名付けるのである（第一一句（第一六句）。この銘を特徴づけているのは怪異な溪谷を自らのものとして命名する意識の表出であり、溪を自らのものとした喜びである。そして溪谷が「殊怪」「尤異」の地でありながら世人から顧みられることなく荒れはてており、自らがその価値を見いだし、賞翫しようとする志向も、第二章で明らかにしたように、元結の銘に見られる大きな特色である。また、第一一、一二句に、官を辞してこの地で老いていこうと言っていることにも注目される。あたかも浯溪の空間は世俗の対極にあるかのようなのである。

元結はこの浯溪の地に亭や堂をしつらえて、自適の空間としようとしている。三吾の銘の一つ「嵒台銘并序」（卷一〇）は、浯溪の東北にある周圍三、四〇〇歩、高さ八、九〇尺の怪異な岩についての銘である。「嵒台」とは、自らが所有する巨大な岩塊の台という意味である。

浯溪東北廿余丈、得怪石焉。周行三四百歩、従未申至丑寅。涯壁斗絶、左属回鮮。前有磴道、高八九十尺。下当洄潭、其勢礧礧。半出水底、蒼然泛泛、若在波上。石顛勝異之处、悉為亭堂。小峯歆竇、宜間松竹、掩映軒戸、畢皆幽奇。於戲、古人有畜憤悶与病於時俗者、力不能築高台以瞻眺、則必山顛海畔、伸頸歌吟以自暢達。今取茲石、將為嵒台。蓋非愁怨、乃所好也。銘曰、

浯溪の東北廿余丈に、怪石を得たり。周行すること三四百歩、未申より丑寅に至る。涯壁斗絶し、左のかた回鮮に属る。前に磴道有り、高さ八九十尺なり。下洄潭に当たり、其の勢ひ礧礧たり。半ばは水底より出で、蒼然泛泛として、波上に在るがごとし。石顛勝異の处、悉く亭堂を為る。小峯の歆竇、宜しく松竹を間ふべく、軒戸に掩映して、畢く皆幽奇なり。於戲、古人に憤悶を畜ふると時俗に病るると有る者は、力高台を築きて以て瞻眺する能はずんば、則ち必ず山顛海畔に、頸を伸ばし歌吟して以て自ら暢達す。今茲の石

を取り、將に嵒台と為さんとす。蓋し愁怨するに非ず、乃ち好む所なり。銘に曰はく、

湘淵清深 湘淵 清深たり

嵒台隋陵 嵒台 隋陵たり

登臨長望 登臨し長望すれば

無遠不尽 遠きとして尽くさざるは無し

05 誰厭朝市 誰か厭く 朝市に

羈牽局促 羈牽せられて局促せらるるに

借君此台 君に此の台を借し

壺縦心目 壺に心目を縦にせしめん

陽厓礪琢 陽厓 礪琢し

10 如瑾如珉 瑾のごとく珉のごとし

作銘刻之 銘を作りて之を刻し

彰示後人 後人に彰示せん

この銘が刻されたのは「有唐大曆二年歲次丁未六月十五日」、すなわち七六七年六月一五日のことである。序に「石巔勝異処、悉為亭堂。（石巔勝異の処、悉く亭堂を為る）」とあるところからすると、大曆元年に浯溪を手に入れてから、程なくここに亭や堂を構え、登臨しては眺望をほしいままにし、楽しみを尽くしていたことが窺える。

銘の第五、六句には「誰厭朝市、羈牽局促。（誰か厭く朝市に、羈牽せられて局促せらるるに）」と、世俗を

厭う者を提示する。「羈牽」は、束縛されて自由にできないこと、「局促」は、ゆったりできないことをいう。元結は中央の官吏を「規檢大夫持規之徒（規檢大夫・持規の徒）」（「漫論」卷八）と呼び、彼ら規律や法度を遵守する者たちの中にある限り、束縛されて自由に振る舞うことはできないとされていた。序に言う「畜憤悶与病於時俗者（憤悶を畜ふると時俗に病るると有る者）」とは、官僚世界にあつて束縛されゆったりとできず、憤りもだえ、疲れきった者の意味であり、銘文の「朝市」はここでは朝廷を意味しているよう。

序に「力不能築高台以瞻眺、則必山巔海畔、伸頸歌吟以自暢達。今取茲石、將為嵒台、蓋非愁怨、乃所好也。（力高台を築きて以て瞻眺する能はずんば、則ち必ず山巔海畔に、頸を伸ばし歌吟して以て自ら暢達す。今茲の石を取り、將に嵒台と為さんとす。蓋し愁怨するに非ず、乃ち好む所なり）」とあるように、嵒台は世俗における不遇感や疲弊した心を癒やす空間として位置づけられている。嵒台は世俗に対峙するものとして構築されているのである。「蓋非愁怨、乃所好也。（蓋し愁怨するに非ず、乃ち好む所なり）」とは、官僚社会との軋轢から生じた愁いがこの嵒台において眺望を恣にするという行為を通して消失してゆくことを言い、嵒台が愁いを癒やす場であることを改めて自ら確認している言葉である。

次の「唐廩銘」（卷一〇）は、浯溪の入り口にある高さ六〇余丈の岩の上に建てられた小堂についての銘である。刻されたのは「有唐大曆三年歲次戊申八月九日」、すなわち七六八年八月九日であった。

浯溪之口有異石焉。高六十余丈、周回四十余步。西面在江中、東望嵒台、北面臨大淵、南枕浯溪。唐廩当乎石上、異木夾戸、疎竹傍簷。瀛洲言无、由此可信。若在廩上、目所厭者遠山清川、耳所厭者水声松吹、霜朝厭者寒日、方暑厭者清風。於戲、厭、不厭也。厭猶愛也。命曰唐廩、旌独有也。銘曰、

浯溪の口に異石有り。高さ六十余丈、周回四十余歩なり。西面は江中に在り、東のかた嵒台を望み、北面は大淵に臨み、南のかた浯溪を枕とす。唐廩は石上に当たり、異木戸を夾み、疎竹簷に傍ふ。瀛洲無しと言

ふも、此に由りて信ずべし。若し廐上に在らば、目の厭く所の者は遠山清川、耳の厭く所の者は水声松吹、霜朝に厭く者は寒日、暑に方りて厭く者は清風なり。於戯、厭は、厭かざるなり。厭は猶ほ愛するがごときなり。命づけて唐廐と曰ひ、独り有するを旌すなり。銘に曰はく、

功名之伍 功名の伍は

貴得茅土 茅土を得るを貴び

林野之客 林野の客は

所耽水石 耽しむ所は水石なり

05 年将五十 年将に五十ならんとし

始有唐廐 始めて唐廐有り

愜心自適 心に愜ひて自適し

与世忘情 世と情を忘る

廐傍石上 廐傍の石上

10 篆刻此銘 此の銘を篆刻す

序に「目所厭者遠山清川、耳所厭者水声松吹、霜朝厭者寒日、方暑厭者清風。（目の厭く所の者は遠山清川、耳の厭く所の者は水声松吹、霜朝に厭く者は寒日、暑きに方りて厭く者は清風なり）」と言う。「唐」は元結の造字で、私の建物という意味である。唐廐の地は、心ゆくまで遠山清川の眺望を恣にし、流れる水と松風の音を聞き、霜の朝には冬の日が差し、暑い日には爽やかな風が吹くところであり、心を楽しませ自適するのにふさわしい空間として表象されているのである。

しかしながら第一句から第四句に見られるように、この銘においても世俗、すなわち中央の官僚世界との対峙の構造が鮮明に表れている。第一、二句で「功名を得ようとする者たちは、王侯の地位を得ることを尊ぶが、山野に隠棲する者は水石のたたずまいを楽しむものである」と、「功名之伍」と「林野之客」とが対置されており、この自適の空間が功名を求め高位にのぼることを第一とする官僚世界との対峙を通して成立していることを示している。銘の第七、八句にも「愜心自適、与世忘情（心に愜ひて自適し、世と情を忘る）」とある。さらに、唐廩に身を置くことによって、はじめて心になつて自適し、世俗への思いを忘れる、という言葉からもこのことを窺うことができる。

以上がいわゆる三吾の銘である。続いて「東崖銘」（卷一〇）を取り上げる。この作は、岵台の西側の崖についたの銘である。

岵台西面、敺敺高廻、在唐亭為東崖、下可行坐八九人。其為形勝、与石門石屏、亦猶宮羽之相資也。銘曰、

岵台の西面、敺敺として高く廻り、唐亭に在りては東崖を為す、下八九人を行坐すべし。其の形勝為るや、石門石屏と与に、亦た猶ほ宮羽の相資するがごときなり。銘に曰はく、

岵台蒼蒼 岵台 蒼蒼たり

西崖雲端 西崖 雲端にあり

亭午崖下 亭午 崖下

清陰更寒 清陰 更に寒し

可容枕席 枕席を容るべく

何事不安 何事か安んぜざらんや

この銘では、夏にも清らかな木陰があつて涼しく、枕席をととのえて横になることのできる晏如の場として東崖が称えられている。この東崖もやはり自適の空間として表象されている。「何事か安んぜざらんや」という句が示すように、この空間も、何事においても安んずることのできぬ世俗の世界を背景として成立しているのである。

第二節 銘の諸相

前節で確認したように、涪溪における三吾の銘及び「東崖銘」には、命名によつて自らのものとなり、賞翫の対象にまで高められた自適の空間に在ることの喜びが詠われると同時に、世俗、殊に朝廷の官僚世界との対峙という意識が確かに窺われる。第二章においては、怪異な水石や亭台を対象とした作品の中には、対象に価値を賦与し、その対象を顕彰することを通して、世俗を戒めようとする諷諭の意識が横溢しているものがあることを明らかにした。こうした表現の特色は、元結の銘全体に共通するものであるのか、また彼の銘に他の特色を認めることができるのであろうか。以下、元結の文学における銘の展開について改めて検討する。

元結には水石を対象とした一八編の銘があり、その制作は、天寶九載（七五〇）から一二載（七五三）にかけて商余山中にあった頃に制作された「水楽説」（卷五）^{（注10）}の銘に始まり、最晩年の大暦五、六年（七七〇、七七

（一）諷諭としての銘

まず、元結の銘のうち最も早期のものである「水楽説」の銘を取り上げる。

元子於山中尤所耽愛者有水樂。水樂是南磴之懸水。淙淙然、聞之多久、於耳尤便。不至南磴、即懸庭前之水、取欹曲竇欠之石、高下承之、水声少似、聽之亦便。銘曰、

元子山中に於て尤も耽愛する所の者に水樂有り。水樂は是れ南磴の懸水なり。淙淙然として、之を聞くこと多く久しく、耳に於て尤も便なり。南磴に至らざれば、即ち庭前の水を懸け、欹曲竇欠の石を取りて、高下に之を承くれば、水声少しく似、之を聴くも亦た便なり。銘に曰はく、

煙纔通 煙のごとく纔かに通じ

寒淙淙 寒くして淙淙たり

隔山風 山風を隔つ

老鼓鐘 老鼓鐘

水樂は、商余山中の南の山麓にある滝のことで、その流れ落ちる様は耳に心地よいものであるという。元結は、庭に小さな滝をしつらえ、この水樂を再現し、その銘を記すのである。「欹曲竇欠（傾き曲がり、穴があつて欠けている）」という石の描写が、第二章で検討した元結における怪異な水石への志向の特色をよく表している。水樂の銘は、水樂を称えた祝頌の銘であことは明らかである。しかしながら、次に掲げる「訂司樂氏」（巻五）を見ると、この銘がただ祝頌のみを意図したものではなく、朝廷の樂官に対する批判と諷諭の意とを込めたものであることがわかる。

或有將元子水樂説於司樂氏。樂官聞之、謂元子曰、能和分五音、韻諧水声、可伝之来。請觀学。元子辞之、

使門人以南磴及庭前懸水指之。樂氏醜惡慢罵曰、韻贖^(注1)多矣。焉有聽而云樂乎。此言聞元子。元子謝曰、次山病余昏固、自順於空山窮谷。偶有懸水淙石、冷然便耳。醉甚、或与酒徒戲言、呼為水樂。不防君子過聞而來、実汚辱君子之車僕。樂官去。季川問曰、向先生謝樂官、不亦過甚。曰、然。吾為汝訂之。汝豈不知彼為司樂之官老矣。八音教其心、五声伝其耳、不得異聞、則以為錯乱紛惑、甚不可聽。況懸水淙石、宮商不能合、律呂不能主、變之不可、会之無由。此全声也。司樂氏非全士、安得不甚謝之。嗟乎、司樂氏、欲以金石之順和、糸竹之流妙、宮商角羽、豊然迭生、以化全士之耳、猶以懸水淙石、激淺注深、清瀛浥溶、不変司樂氏之心。嗚呼、天下誰為全士、能愛夫全声也。

或ひと元子の水樂を將て司樂氏に説く有り。樂官之を聞き、元子に謂ひて曰はく、能く五音を和分し、水声に韻諧せば、之を伝ふべし。請ふ觀て学ばんことを、と。元子之を辞し、門人をして南磴及び庭前の懸水を以て之を指さしむ。樂氏醜惡し慢罵して曰はく、韻贖すること多し。焉くんぞ聴きて樂と云ふこと有らんや、と。此の言元子に聞こゆ。元子謝して曰はく、次山病余昏固にして、自ら空山窮谷に順ふ。偶たま懸水淙石有り、冷然として耳に便なり。酔ふこと甚だしければ、或は酒徒と戲言し、呼びて水樂と為す。防らずも君子過聞して來り、実に君子の車僕を汚辱す、と。樂官去る。季川問ひて曰はく、向に先生の樂官に謝すること、亦た過^{はなは}甚だしからずや、と。曰はく、然り。吾汝が為に之を訂せん。汝豈に彼司樂の官と為りて老ゆるを知らざらんや。八音其の心を教へ、五声其の耳に伝はり、異聞するを得ざれば、則ち以て錯乱紛惑にして、甚だ聴くべからずと為す。況んや懸水の石に淙ぐは、宮商も合する能はず、律呂も主る能はず、之を變ずるは不可なり、之に会するに由無し。此れ全声なればなり。司樂氏は全士に非ざれば、安くんぞ甚だ之に謝せざるを得んや。嗟乎、司樂氏、金石の順和、糸竹の流妙を以て、宮商角羽、豊然として迭ひに生じ、以て全士の耳を化せんと欲するは、猶ほ懸水石に淙ぎ、淺きに激し深きに注ぎ、清瀛浥溶たるを以て司樂氏の心を変へざるがごとし。嗚呼、天下誰か全士と為り、能く夫の全声を愛せん、と。

朝廷の樂官が元子の水樂の話を聞いて訪れ、滝の流れ下る音が韻律に合していないことを罵ると、元子は、水樂は酒徒と戯れて名付けたものであると詫びる。その後、弟子の問いかけに答え、滝の音は全声（完全な音楽）であり、韻律の整った音楽に慣れてしまった樂官には聴くに堪えられないものであると言う。さらに、樂官が完全な音楽を聴くことのできる全士の耳を変えていこうとしても、それは全声が樂官の心を変えることがないようなもので、不可能なことであると、全士たる者の強い自負を述べる。

この水樂の銘の根底には、人為によつて調えられた一二律の麗しい音楽のみに価値を見いだす中央の樂官に対する厳しい批判の意識がある。それはさらに言えば、皇謨三編（卷四）にいう「類弊以亡」の方向に向かう王朝に対する諷諭の意識である。『文体明弁』卷四七は、銘について「要其体、不過有二。一曰警戒、二曰祝頌。（要するに其の体は、二有るに過ぎず。一に曰はく警戒、二に曰はく祝頌）」と述べて、銘が戒めと祝頌の機能を持つ文体であることを指摘している。文学の合理性を諷諭ということにおいて追求した元結が銘の文体を選択したことは、こうした銘の機能からしても頷けることである。元結の銘は、対象を称美すると同時に現実を諷諭するという構造のうちに展開してゆくことになる。

安史の乱勃発後、天宝一五載（七五六）から至徳二載（七五七）頃にかけて「異泉銘」（卷六）が制作された。

天宝十三年、春至夏甚旱、秋至冬積雨。西塞西南有迴山、山顛是秋崩坼、有穴出泉。泉垂流三四百仞、浮江中可望。於戲、陰陽旱雨、時異。以至柔破至堅、事異。以至下処至高、理異。故命斯泉曰異泉、銘於泉上。其意豈独旌異而已乎。銘曰、

天宝十三年、春より夏に至り、甚だ旱し、秋より冬に至り積雨あり。西塞の西南に迴山有り、山顛は是の秋に崩坼し、穴有りて泉出づ。泉は垂流すること三四百仞、江中に浮かびて望むべし。於戲、陰陽旱雨、時

異なる。至柔を以て至堅を破るは、事異なる。至下を以て至高に処るは、理異なる。故に斯の泉に命づけて
異泉と曰ひ、泉上に銘す。其の意は豈に独り異を旌すのみならんや。銘に曰く、

01 何故作銘

何の故に銘を作り

銘于異泉

異泉に銘する

為其当不可闕

其の当に闕ぐべからざるべく

垢石出焉

石を垢さきて出づるが為なり

05 何用作銘

何を用て銘を作り

銘于異泉

異泉に銘する

為其当不可下

其の当に下すべからざるべく

窮高流焉

高きを極めて流るるがためなり

君子之徳

君子の徳は

10 顕与晦殊

顕と晦と殊なる

為此銘者

此の銘を為る者は

忘道也歟

道を忘るるならんや

この銘は、序によれば、陰陽の回りが乱れ旱魃や長雨が あつたことを「時異」とし、「至柔」の水が「至堅」の岩を破つて噴出したことを「事異」、「至下」の水が「至高」に存在することを「理異」として、噴出した水流に異泉と名付けたという。この異常な泉の情景は、安史の乱の勃発を想起させる。しかしながら、銘は祝頌と警戒を特色とする文体であり、後に述べるように元結の場合も、水楽の銘をはじめとして祝頌の要素を備えるこ

とを踏まえると、この銘も「君子之化」を表象するものとして異泉を祝頌していると考えなければならないであろう。

天寶一五載（七五六）六月、潼関の守りが破れ、安祿山は都長安を占領し、玄宗は蜀に蒙塵した。七月に太子亨が靈武で即位し、藩鎮の軍を結集して反乱軍に対抗し、翌至徳二載（七五七）九月には長安が回復されている。元結は、この時期のことを、乾元二年（七五九）に肅宗に奉った「時議三篇」（卷六）の「時議上篇」において、次のように論じている。「時議三篇」は、第二編第四章第三節で扱ったが、論述に係る箇所のみ再度掲出する。

往年逆乱之兵、東窮江海、南極淮漢、西抵秦塞、北尽幽都。今趙衛之疆、悉為盜有、凶勇之徒在四方者、幾百余万。如屯守二京、從衛魁帥者不計。當時之兵、可謂強矣。當時人心、已不固矣。天子独以數騎、僅至靈武、引聚余弱、憑陵強寇。頓軍岐陽、師及渭西。曾不踰時、竟摧堅銳、復兩京、逃降逆類、悉收河南州縣。

往年逆乱の兵、東のかた江海を窮め、南のかた淮漢を極め、西のかた秦塞に抵り、北は幽都を尽くす。今趙衛の疆は、悉く盜の有するところと為り、凶勇の徒四方に在る者は、幾ど百余万たり。二京に屯守し、魁帥に従衛する者のごときは計らず。當時の兵、強しと謂ふべし。當時の人心、已に固ならず。天子独り數騎を以て、僅かに靈武に至り、余弱を引聚し、強寇を憑陵す。軍を岐陽に頓するや、師渭西に及ぶ。曾て時を踰えず、竟に堅銳を摧き、兩京を復し、逆類を逃降せしめ、悉く河南の州縣を収む。

ここでは肅宗が數騎を率いて靈武に至ると、「余弱を引聚し」て百余万の強大的賊軍を突き挫き、兩京を回復したという。柔弱な水が防ぐことも下すこともできない勢いで山の頂から固い岩を突き破って流れ落ちる姿は、その表象であると考えられる。「異泉銘」は、強固な安祿山の軍を突き挫く肅宗の徳を称美し、猖狂を極めてい

る賊を戒める作として解釈することができるであろう。

また、第二編第六章第二節で取り上げた、乾元元年（七五八）制作の「瀼溪銘」（卷六）も、瀼溪の「瀼」から「讓」を想起し、溪谷に謙讓の徳を賦与して称美し、「讓、君子之道也。（讓は、君子の道なり）」として、謙讓の徳を失った現実を想起させ、世俗を戒めんとする諷諭の作であった。

宝応元年（七六二）、元結は母の老いをもって著作郎のまま樊水のほとりに退隠し、漫叟と号した。この時期には「杯樽銘」「杯湖銘」「退谷銘」の三編が著されている。「杯湖銘」（卷八）を取り上げる。

杯湖、東抵杯樽、西侵退谷、北匯樊水、南涯郎亭。有菱有荷、有菰有蒲、方一二里、能浮水。与漫叟自杯亭遊退谷、必泛此湖。以湖在杯樽之下、遂命曰杯湖。銘曰、

杯湖は、東のかた杯樽に抵り、西のかた退谷を侵し、北のかた樊水に匯り、南のかた郎亭に涯る。菱有り荷有り、菰有り蒲有り、方一二里にして、能く水に浮かぶ。漫叟と杯亭より退谷に遊べば、必ず此の湖に浮かぶ。湖は杯樽の下に在るを以て、遂に命づけて杯湖と曰ふ。銘に曰はく、

誰遊江海 誰か江海に遊び

能厭其大 能く其の大なるを厭はんや

誰泛杯湖 誰か杯湖に泛かび

能厭其小 能く其の小なるを厭はんや

05 故曰人不厭者 故に曰はく 人厭はざるは

君子之道 君子の道なりと

於戲君子 於戲 君子

人不厭之 人之を厭はず

死雖千歳 死して千歳と雖も

10 其行可師 其の行は師とすべし

可厭之類 厭ふべきの類は

不独為害 独り害を為すのみならず

死雖万代 死して万代と雖も

独堪汚穢 独り汚穢に堪へんや

15 或問作銘 或ひと問ふ 銘を作り

意尽此歟 意は此に尽くるかと

吾欲為人厭者 吾 人と為り厭ふ者は

勿泛杯湖 杯湖に泛ぶこと勿からしめんと欲す

この銘は杯湖を称美しつつ、君子のあり方を称えるところに、君子に対置される「為人厭者（人と為り厭ふ者）」を戒めるものである。杯湖は方一二里に過ぎないが、菱、荷、真菰、蒲もあり、そこに遊べば、倦むことを忘れる湖であるという。元結はこの湖に遊んで厭うことがないということを君子の道として称える。『論語』「述而」に、「子曰、默而識之、学而不厭、誨人不倦。何有於我哉。（子曰はく、黙して之を識り、学びて厭はず、人を誨へて倦まず。何か我に有らんや、と）」とあり、また「顔淵」に「子張問政。子曰、居之無倦。行之以忠。（子張政を問ふ。子曰はく、之に居りて倦むこと無かれ。之を行ふに忠を以てせよ、と）」とあるように、厭うことなく学び、倦むことなく人を教えるのが君子であり、政に当たっては、倦むことなく政務に勤しむのが君子のあり方であった。この銘は、中央の官僚に対するアイロニーに満ちた戒めとなっているのであり、「為人

厭者（人と為り厭ふ者）」とは、政に倦む者を指しているよう。

道州刺史の任にあった時期の作品においても、こうした銘が制作されている。例えば第二章第二節で取り上げた「七泉銘」の「漣泉銘」「湫泉銘」「洧泉銘」などがある。「洧泉銘」を取り上げる。

曲而為王 曲にして王と為り

直蒙戮辱 直にして戮辱を蒙る

寧戮不王 寧ろ戮せられて王たらずとも

直而不曲 直にして曲ならざれ

我頌斯曲 我斯の曲くまを頌し

以命洧泉 以て洧泉と命づく

将戒来世 将に来世を戒めんとす

無忘直焉 直を忘るる無れと

序では「欲来者飲漱其流、而有所感発者矣。（来者をして其の流れに飲漱して、感発する所の者有らしめんと欲す）」と言い、戒めの意図が明確にされている。「洧泉銘」では、たとえ殺戮され汚辱を被るうとも「直」を忘れてはならないと、人臣たる者を戒め、さらに「将戒来世（将に来世を戒めんとす）」と、戒めの意図が明確にされている。顔真卿の元結墓碑銘が「皇家忠烈、義激、文武之直清臣也（皇家の忠烈、義激、文武の直清の臣なり）」と称えるように、「直」は、元結が生涯にわたって保ち続けた価値観であった。

銘においては、元結は初期から水石に様々な価値を賦与しているのであって、対象を称美し、そこに諷諭の意

を寓するということは彼の本質的な表現の構造であったと言えることができるであろう。

(二) 感懷の表出としての銘

諷諭の意を含んだ銘を制作する一方で、元結の銘には諷諭の意が明確ではなく、対象を称美する銘、『文体明弁』にいう「祝頌」の銘が見られるようになる。例えば、第二章第二節で取り上げた「七泉銘」の「漫泉銘」がそうである。漫泉は、石魚湖に注ぐ泉である。この泉によって石魚湖は酒を積んだ小舟を浮かべることができ、石魚も水面に姿を現しているのである。漫叟は、無名の泉に自らの号の一部である漫を賦与し、「漫歌漫酔」する自適の場として称美しているのであつて、この銘では、諷諭としての表現構造が顕著ではない。

こうした銘はさらに展開し、対象を称美して自らの感懷を吐露することに叙述の中心がある作品が見られるようになる。例えば、水石の世界を称美し、そこに老いんとする思いを述べる「陽華岩銘」はそうした銘の典型である。

道州江華県東南六七里有回山。南面峻秀、下有大岩、岩当陽端。故以陽華命之。吾遊処山林幾三十年。所見泉石、如陽華殊異而可家者、未也。故作銘称之。県大夫瞿令問、芸兼篆籀、俾依石經、刻之岩下。銘曰、

道州江華県の東南六七里に回山有り。南面峻秀にして、下に大岩有り、岩は陽の端に当たる。故に陽華を以て之に命づく。吾山林に遊処すること幾ど三十年なり。見る所の泉石、陽華のごとく殊異にして家すべき者は、未し。故に銘を作りて之を称す。県大夫瞿令問、芸は篆籀を兼ねれば、石經に依りて、之を岩下に刻せしむ。銘に曰はく、

九疑万峯 九疑の万峯も

不如陽華 陽華に如かず

陽華嶺巉 陽華 嶺巉たり

其下可家 其の下家すべし

05 洞開為岩 洞開けて岩を為し

岩当陽端 岩は陽の端に当たる

岩高氣清 岩高く氣清く

洞深泉寒 洞深く泉寒し

陽華旋回 陽華 旋回すれば

10 岑巔如關 岑巔 關くがごとし

溝塍松竹 溝塍の松竹は

輝映水石 水石に輝映す

尤宜逸民 尤も逸民に宜しく

亦宜退士 亦た退士に宜し

15 吾欲投節 吾 節を投じて

窮老於此 此に窮老せんと欲す

懼人譏我 人 我を譏るを懼る

以官矯時 官を以て時に矯ふと

名節彰顯 名節の彰顯

20 醜如此為 此くのごとく為すを醜づ

於戲陽華 於戲陽華

將去思來 將に去らんとして来らんことを思ふ

前歩卻望 前み歩み卻き望み

踟躕徘徊 踟躕 徘徊す

永泰二年（七六六）、道州刺史の任にあつた時に制作された銘である。元結は、九疑山の峰々も陽華には及ばず、切り立った岩の下は住居を構えるによいと言い（第一句く第四句）、続けて、冷たい泉の流れる深い洞の出口の南に高く清浄な岩があり、周囲をめぐれば峰々が開けてくるようで、松や竹が映えている、と陽華岩のすばらしさを称える（第五句く第一二句）。そして「尤宜逸民、亦宜退士（尤も逸民に宜しく、亦た退士に宜し）」（第一三、一四句）と、この世界を「逸民」や「退士」に相応しい地であるとして、官を辞してここに老いたいと願うのだが（第一五、一六句）、しかしそれは叶わぬ望みであり、立ち去りかねて徘徊するのである。（第二一一句く第二四句）。

この銘には、世俗に対する諷諭の表現は見られない。ただ陽華岩への称美と、ここに留まることのできぬ思いが述べられるのみである。ただ、「浯溪銘」にあつたように、「吾欲投節、窮老於此（吾節を投じて、此に窮老せんと欲す）」という表現があることに注意しなくてはならない。この陽華の空間も世俗（政治的世界）の対極にあるものとして描かれているのである。

また、次に挙げる「丹崖翁宅銘」（巻九）にも同様の感懷が表出されている。

零陵淹下三十里、得丹崖翁宅。有唐節督者、曾為淹水令、去官家於崖下、自称丹崖翁。丹崖、湘中水石之異者、翁、湘中得道之逸者。愛其水石、為之作銘。銘曰、

零陵滝下三十里、丹崖翁の宅を得たり。唐節督なる者有り、曾て滝水の令と為り、官を去りて崖下に家し、自ら丹崖翁と称す。丹崖は、湘中の水石の異なる者にして、翁は、湘中の得道の逸なる者なり。其の水石を愛し、之が為に銘を作る。銘に曰はく、

滝水未尽 滝水 未だ尽きず

滝山猶峻 滝山 猶ほ峻なり

忽見淵洄 忽ち見る淵洄り

丹崖千仞 丹崖 千仞なるを

05 磴磴丹崖 磴磴^{そうそう}たる丹崖

其下誰家 其の下誰か家す

門前断舟 門前に断舟あり

籬上釣車 籬上に釣車あり

不知幾峰 知らず 幾峰か

10 為其四墉 其の四墉を為すを

竹幽石磴 竹は石磴に幽にして

泉飛戸中 泉は戸中に飛ぶ

怪石臨淵 怪石 淵に臨み

洗洗石顛 洗洗たる石顛あり

15 何得石顛 何をか石顛に得たる

翁独醉眠 翁独り醉眠す

吾欲与翁

吾翁と与に

東西茅宇

茅宇を東西にせんと欲す

飲啄終老

飲啄して老いを終へんとせば

20 翁亦悦許

翁も亦た悦びて許さん

世俗常事

世俗の常事

阻人心情

人の心情を阻む

徘徊崖下

崖下に徘徊し

遂刻此銘

遂に此の銘を刻す

丹崖は、零陵の南にある崖であり、ここには丹崖翁を名乗る、嘗ての滝水の令であつた唐節督の家があつた。

元結は、大暦二年（七六七）春、衡陽から道州へ帰る途中、丹崖翁の宅に宿つた。その時に制作されたのがこの銘である。

翁の住まいは、山に囲まれ、戸の中まで泉流の飛沫がかかり、怪異な石が淵に臨む世界であつた（第一句～第一〇句）。その中につややかな石があり、その頂きに翁が酔つて眠っている（第一四句～第一六句）。元結はこの怪奇な水石に囲まれた世界の中で自適の生活をしている老翁とともに老いんとする思いを述べる。しかし「世俗常事、阻人心情（世俗の常事、人の心情を阻む）」（第二一、二二句）とあるように、自らは道州刺史の任にあるのであり、もとよりそれはかなわぬことであると、この世界に身を置くことのできない自身の姿を顧みつつ、崖のもとを徘徊するのである（第二一句～第二三句）。ここでもやはり「世俗常事」とこの地に老いんとする心情とが対置されていることに注目される。

これらの銘に見られる自己表出のあり方は、むしろ詩によって表現されるにふさわしいものである。同時に制

作された「宿丹崖翁宅」詩（卷二）を次に挙げる。

01 扁舟欲到滝口湍

扁舟到らんと欲すれば滝口湍^{たぎ}り

春水湍滝上水難

春水の湍滝 水を上ること難し

投竿来泊丹崖下

竿を投じ来りて丹崖の下に泊し

得与崖翁尽一飲

崖翁と一飲を尽くすを得たり

05 丹崖之亭当石顛

丹崖の亭は石顛に当たり

破竹半山引寒泉

竹を破^わり山に半ばして寒泉を引けば

泉流掩映在木杪

泉流 掩映して木杪に在り

有若白鳥飛林間

白鳥の林間に飛ぶがごとき有り

往往随風作霧雨

往往にして風に随ひて霧雨と作り

10 湿人巾履滿庭前

人の巾履を湿して庭前に滿つ

丹崖翁 愛丹崖

丹崖の翁 丹崖を愛し

棄官幾年崖下家

官を棄て幾年か崖下に家する

兒孫棹船抱酒甕

兒孫 船に棹さして酒甕を抱き

醉裏長歌揮釣車

醉裏 長歌して釣車を揮ふ

15 吾将求退与翁遊

吾将に退くを求めて翁と遊び

学翁歌醉在魚舟

翁に学びて歌酔して魚舟に在らんとす

官吏随人往未得

官吏人に随へば往くこと未だ得ず

卻望丹崖慙復羞

卻りて丹崖を望み慙ぢ復た羞づ

詩は、まず舟で川を溯ることができず、丹崖の下に停泊し、翁と歎びを尽くすことができたことを語る（第一句～第四句）。続いて翁の宅の様子のうち、特に空中高く懸けられた竹から水が流れ落ちる様子を描写していく（第五句～第一〇句）。この水のたたずまいは元結の好んだ形象であった。第一一句から第一四句は、丹崖の翁の日々の生活を描く。翁は子供や孫に舟を進ませ、自分は酒を飲んで、歌をうたって、フライリールを操るのであった。元結は、この丹崖の翁の住まいとその暮らしに限りない憧憬を抱き、ともに過ごそうとするのであるが、自らは世俗に身を置く者であることを思い、丹崖の翁に対して恥じ入るばかりなのである、と感慨を表白する（第一五句～第一八句）。

「丹崖翁宅銘」と「宿丹崖翁宅」詩は、前者が翁の様子の描写が少ないこと、銘を刻するという行為が示されていることを除けば、表現の構造がほぼ一致している。むしろ詩で表すべき内容が銘として語られているのである。つまり、「祝頌」の銘が、自らの感懷を表現する自己表出の様式へと変容しているのである。先に検討した三吾の銘もこうした自己表出の銘として位置づけることができるであろう。

第三節 諷諭の内在化

前節で元結の銘における二つの方向性について検討してきたが、そのうち感懷の吐露が中心となる銘は、はたして「警戒」（世俗に対する戒め）を失ってしまっているのであろうか。

第一章で明らかにしたように、涪溪という空間は、功名を求める者たちの世界との対峙において成立しており、涪溪の背後には、常に世俗の世界が意識されていた。この世俗との対峙の構造は、前節で取り上げた銘以外にも見ることができる。

・於戲退谷 於戲 退谷

独為吾規 独り吾が規為り

干進之客 干進の客

不羞遊之 之に遊ぶを羞ぢざらんや

（「退谷銘」卷八）

・時俗澆狡 時俗は澆狡にして

日益偽薄 日び益偽薄たり

誰能杯飲 誰か能く杯飲し

共守淳樸 共に淳樸を守らん

（「杯樽銘」卷八）

・或問作銘 或ひと問ふ 銘を作り

意尽此歟 意は此に尽くるかと

吾欲為人厭者 吾 人と為り厭ふ者は

勿泛杯湖 杯湖に泛ぶこと勿からしめんと欲す

（「杯湖銘」卷八）

怪異な水石の世界の外側には、輕佻浮薄な世の中、出世を求める者、そして政に倦む者たちの世界があり、退谷や杯樽、杯湖は、そうした世俗と対峙しつつ構築された世界であった。

また、「浯溪銘」には、「命曰浯溪、旌吾独有。人誰遊之、銘在溪口（命づけて浯溪と曰ひ、吾独有するを旌す。人誰か之に遊ばん、銘して溪口に在り）」と、浯溪が自ら所有するものであることをこの地に遊ぶ者たち

に表明する、という表現の構造が見られた。「七泉銘」の「漫泉銘」にも「旌叟於此、漫飲漫醉（叟此に於て、漫飲漫醉するを旌す）」という表明があり、さらに次に挙げるように「世人をして知ること有らしめん」「来世を戒めん」「来世に告げん」「後人に彰示せん」と明言する例がある。

・刻石岩下 石に岩下に刻すれば

問吾何為 吾に問ふ何をか為すと

欲零陵水石 零陵の水石

世人有知 世人をして知ること有らしめんと欲す

（「朝陽岩銘」卷九）

・将戒来世 将に来世を戒めんとす
無忘直焉 直を忘るる無れと

（「湑泉銘」卷一〇）

・作銘者何 銘を作るは何ぞや
吾意未尽 吾が意未だ尽きず
将告来世 将に来世に告げんとす
無忘畎引 畎引するを忘るること無かれと

（「東泉銘」卷一〇）

・作銘刻之 銘を作りて之を刻し
彰示後人 後人に彰示せん

（「崑台銘」卷一〇）

元結の銘においては、それが水石の空間を称美し、そこに自適する喜びを表出するものであっても、その世界の価値、そこに自適する自らのありかたを世人に示し、世人への戒めとするという構造を読み取ることができる。こうした表現の構造を根柢で支えているのは諷諭の意識である。元結は、怪異な水石の世界にあって自適の思いを述べることを通してのみではなく、諷諭の表現によって世俗に対する戒めの意を尽くすという表現行為において、憂憤を癒やし、自らを充足させ、安らぎを得ていたのである。

大暦六年（七七一）夏、六月、諷諭の作である「大唐中興頌」が浯溪の摩崖に刻されたことも、このように解釈することによってはじめて理解することができるであろう。この頌は、先に述べたように、中興を果たした肅宗の盛徳の称美とともに、朝廷に姦臣がはびこり国政を乱し、賞罰が適正を欠き、君臣が乖離することを戒めんとする思いをも久遠に伝えようとするものであった。この頌を刻すること、元結は、諷諭の表現によって世に対する戒めの意を全うし、そこに深い充足感を得ていたことであろう。この頌が自適の空間であった浯溪の摩崖に刻まれたことは、諷諭によって世を戒めるという営みが手法のレベルを超えて彼の中に内在化されていたことを端的に表している。頌の刻されたのが死の前年であったことは、あたかもその文学の到達点をも象徴しているかのようである。

おわりに

元結は、大暦元年（七六六）、湖南省祁陽県の南、東西に流れる湘水の南岸の浯谷を購入し、自らの所有する浯谷の意をこめて浯溪と名付け、亭や堂を営んだ。浯溪の地における作品としては、現在、三吾と称される「浯溪銘」（巻一〇）「岵台銘」（巻一〇）「唐廩銘」（巻一〇）および「東崖銘」（巻一〇）が伝わるのみである。これらの銘において、浯溪の地は「殊怪」にして「尤異」なる空間として形象化され、世俗における不遇

感や疲弊した心を癒やす自適の場として位置づけられている。

そしてこの自適の空間に諷諭の作である「大唐中興頌」が刻されたのである。このことは、諷諭が単に方法として選択されたものではなく、いわば内在化し、元結の存在そのものに深く関わっていたこと、そして諷諭によって世俗に対する戒めの意を尽くすという表現行為それ自体が、憂憤を癒やし、あるいは安らぎをもたらしていたことを表している。

注

- (1) 孫望著『元次山年譜』（古典文学出版社、一九五七年）八四頁。
- (2) 楊承祖「元結年譜」（『元結研究』、国立編訳館、二〇〇二年）二六三頁。
- (3) 桂多蓀著『浯溪志』（湖南人民出版社、二〇〇四年）一一頁。
- (4) 桂多蓀氏、前掲書。六三頁。
- (5) 桂多蓀氏、前掲書。四八頁。桂氏は、現在は「右堂銘」の三字が判読できるのみであるとし、諸家の記述によるとして、「右堂銘有序 河南元結字次山撰 高重明書 右堂在中堂之西……銘曰……有唐大曆六年歲次辛亥閏三月 日刻」と復元している。
- (6) 孫望氏、前掲書。九九頁。
- (7) 桂多蓀氏、前掲書。九〇頁。
- (8) 楊承祖氏、前掲書。二六七頁。
- (9) 浯溪における銘については、桂多蓀氏、前掲書が文字の異同を丁寧に指摘しているが、ここでは底本によった。

(10) 孫望氏は「按黃本卷十二有樂銘一篇。其銘前小序即以水樂說充之。銘与此同。疑此篇原題應作水樂銘。旧本佚其銘文、故易題曰水樂說耳。」(按ずるに黃本卷十二に樂銘一篇有り。其の銘の前の小序は即ち水樂說を以て之に充つ。銘は此と同じ。疑ふらくは此の篇の原題は應に水樂銘に作るべきかと。旧本其の銘文を佚す、故に題を易へて水樂說と曰ふのみ) (『元次山集』卷五「水樂說」題下注。) ここでは孫望氏の說に従い、「水樂銘」とする。

(11) 「聵」字、孫望氏は「聵」(目がみえない)に作るが、『全唐文』卷三八三に「聵」(耳が聞こえない)に作るのによった。

結章

本論は、元結における諷諭の文学の成立とその展開の過程を明らかにし、王朝への強い求心性と諷諭の内在化こそが彼の文学を基底的に特色づけていることを闡明したものである。考究の過程において、これまで一定の評価がなされていた「系楽府十二首」（巻二）、「春陵行」（巻三）、「賊退示官吏」（巻三）や『篋中集』編纂等については、新たな解釈を提示し、殊に評価が二分している「大唐中興頌」（巻七）については、諷諭の意を含んだ作品として理解すべきであることを明らかにした。

道州刺史の任にあつた元結が、諷諭の意を込めて怪異な水石を詠じ、水石とともにあることに心の安らぎを見出していたということ、また、終の住処を営んだ浯溪の摩崖に諷諭の作である「大唐中興頌」を刻んだということとは、彼においては諷諭の営みが、自らの心の安らぎをもたらしていたことを象徴的に物語る。元結のうちには怪奇な水石のうちにある喜びと、表現行為としての諷諭の営みもたらす安らぎとが同時に存在していたのであり、それは諷諭ということが単なる手段や方法のレベルを超えて、自らのうちに内在化していたことを示すものである。

こうした文学の特徴は、元結が盛唐の詩人であつて、例えば諷諭と閑適とを別のベクトルを持つものとしてとらえていた中唐の白居易（七六八～八二四）とは異なる表現者であつたことを暗示しているであろう。

本論を終えるに当たり、改めてこれまでの論考を振り返り、さらに本論の研究結果を踏まえて元結と中唐の詩人白居易における諷諭の表現の位相を確認しておくこととする。

第一編においては、元結における諷諭の文学の成立とその特色を明らかにした。

元結の文学の基底的特色である諷諭の表現がどのように形成され、そしていかに展開したかということを考える上で、族兄元徳秀の影響を無視することはできない。

元徳秀は、独り元結のみならず、当時の科挙官僚、そして後世の士人たちにも影響を及ぼしている。その一人、「元魯山墓碣銘并序」を制作した李華は、元徳秀を、貧窮のうちに成長し、富貴を願うことなく、ひたすら孝養を尽くした人物としてとらえ、その出仕についても一族の者の婚姻と仕官のためであったと言う。そして元徳秀の不遇感については詳細に言及することなく、彼が貧窮に安んじて琴書を楽しみ、賓客との交流のうちに日々を過ごし、生死を同一視して身世を忘れて生きたとする。さらに官吏として信をもつて臨み、仁政を行ったことを称揚している。この元徳秀象は、彼ら科挙官僚にとつては、自らの理想的な生き方の表象であったのである。

一方、元結は、「元魯山墓表」（巻六）において、弟子叔盈との問答によつて元徳秀を失った悲しみを述べ、彼が世俗の価値観に固執せず、清廉潔白で強い意志を貫いたことを言い、その生き方を称揚することによつて、世俗を戒め、感化したいという強い意志を表出している。この墓表は、そのまま諷諭、規諷の作品となっているのである。こうした墓表は、墓表の様式においては特異なものであった。元結の文学的表現を考える上で元徳秀の影響として最も重視すべきは、この正しい規範を示して社会を戒め、あるいは社会に忠告するという規諷の意識であると考えられる。

元徳秀の影響のもとで元結は自らの表現者としての視座を確立してゆくことになる。その契機となったのが、天寶六載（七四七）、玄宗の詔による制科に下第したことである。魯山県に戻り、県南の商余山に静養していた頃の元結の作品には、社会の現実、価値観に対する厳しい批判と拒絶の姿勢が明確に窺える。ところが一方で彼は諷諭の意を含んだ作品を盛んに制作していた。

「自述三篇」（巻五）は、こうした自らのあり方を省察している作品である。その「述時」によれば、元結が

目の当たりにした世界は、礼樂が整い、慈恵に満ち、太平と繁栄のうちにあった。彼は自らもその世界に官吏たらんとして詔に応じたものの、退けられて屈辱感と閉塞感を味わい、自らを「愚愚者（愚の愚なる者）」とする沈鬱な自己認識を抱くこととなった。この「愚愚者」は、悔恨をともなう言葉であつて、二重の意味を持つ。それは、唐王朝の繁栄がすでに爛熟し、退廃、衰亡へと向かいつつあることに気づかなかつた愚かさであり、純朴さや方正忠信といった価値が失われつつあるのに、それらが当世においてもなお通ずるものとして、理想を掲げて官吏たらんとした愚かさをも含む語である。元結は、上古の純朴さ、忠孝や仁信を持ちながら生きるとすれば、愚である以外にはなしとし、愚者として生きる道を選択した。ここに表現者としての元結の視座が成立したのである。「愚者似直、弱者似仁。（愚者は直に似、弱者は仁に似る）」という言葉は、仁と直とをもって愚者として生きるという自らのあり方をよく表している。

元結にとって、商余山中の田園が自らを解放し、閉塞感と憂愁とを癒やすことができる唯一の空間であつたことは「述居」に述べられている。商余山中の世界は現実の社会との厳しい対峙によつて成立したものであつたら、商余山中においても彼は常に社会を見据えざるを得なかつた。この頃の元結の文学は、いわば憂愁と癒やしの構造としてとらえることができる。

「愚愚者」の視座は寓言の傑作を生み出した。商余山中にあつた頃に著された作品のうち、寓言としては、例えば「寢論」（巻四）がある。これは、寢言によつて主君を諫めた古代の奴隸の話の引いて、諫議大夫に対して、天子を遠回しに穏やかに諫めることを勧めるもので、シニカルな笑いのうちに現実への諷刺が展開されている作品であり、その寓意性は容易に把握できる構造となつている。一方、中唐の柳宗元も優れた寓言作品を残しており、それらは苦悩の中から生み出されたさまざまな思念と感情とを豊かな形象を伴つて語るものが多い。両者の寓言には、ともに現実の社会に対する沈鬱な思索の過程をうかがうことができ、ここに、現実を凝視する営みを伴わず教訓を述べるのみのものとは異なる、両者の寓言の特色を認めることができる。しかしながら、元結の寓

言はより直接に現実を諷刺し、あるいは戒め、忠告しようとする意識が強く表れており、動物寓話が見られないことなどからも明らかのように、象徴の度合いにおいては柳宗元に及ばなかったと言わざるを得ない。

ところで、これら寓言作品をはじめ、商余山に静養していた頃の元結の作品には元子を名乗るものが多い。元子は三人称的な一人称であるが、元子という自称がそのまま著書『元子』の書名になっていることからすると、この自称は、元結が自らを表現者として世に問うことを示すものであったと考えられる。元子という自称が用いられた作品にあつては、読者はあたかも元子という諸子の言葉に接しているかのごとく、社会に対する戒めや忠告、あるいは諷刺を読むということが生じている。元結の立場からすれば、元子と自称することによって、現実の社会に対峙する視座と強い自負を抱きつつ、忠告や戒めを述べることになるのであり、彼は自らを表現者元子として位置づけることなしに、諷諭の表現を紡ぎ出すことはできなかったといえることができる。

「愚愚者」の視座から著された詩編の多くには、唐王朝への強い求心的心情が表出している。例えば「引極三首」（巻一）には、「元極」、「仙府」、「潜君」に対する強い思慕の情と閉塞感の超克への情動が流露している。また、「演興四首」（巻一）は、太霊（天帝）を招き、饗し、精誠を訴える作品で、商余山にある太霊の祠を修復した際に制作されたものであるが、「招太霊」「初祀」「訴木魅」「閔嶺中」の四編を貫くのは、王朝に対する強い求心的敬慕の心情であり、当時の朝廷の妖怪とも言うべき李林甫等をはじめとする姦悪な者たちを滅ぼし、この世界を純朴なものになりたいという願いと、自らの至誠を王朝に伝えたいという切ないまでの願望であった。こうした心情や願望を作品として表出することによって、元結は自らの煩悶を癒やしたのである。

蘇源明をして「子居今而作真淳之語。難哉。然世自澆浮、何傷元子。（子は今に居りて真淳の語を作す。難きかな。然れば世は自ら澆浮なるも、何ぞ元子を傷なはんや）」と言わしめた説楚賦三編（「説楚何荒王賦」「説楚何惑王賦」「説楚何惛王賦」、各巻四）は、元子の視座から著された諷諭の作であった。この説楚賦三編は、玄宗を諷刺した賦であるとされている。しかし、少なくとも「説楚何荒王賦」に描かれた浮宮の造営の様子など

は、明らかに隋の煬帝の姿を髣髴とさせるものであり、この賦は、直接に玄宗を諷刺するのではなく、煬帝の嗜欲のすさまじさを想起させつつ、婉曲に君主を戒める規諷の作として読まねばならない作品である。

この説楚賦三編には、それぞれ「正士」、「在野の「直士」「忠臣」が登場する。そのうち「正士」は、原野でただ歎くのみであるが、「直士」と「忠臣」は、王を諭し悔悟させている。このことは、「説楚何荒王賦」が、悔悟することのなかった煬帝を描いたものであることの傍証となるであろう。説楚賦三編は、三編すべてが直接玄宗を想起させるように書かれているのではなく、何惑王と何惛王は、直接には昏虐を極めた過去の為政者の典型として描かれているのである。元結は、唐王朝が頽廢して繁榮する過程にあるものの、既に滅亡の危機を胚胎していると捉え、為政者は政の根幹を忘れて逸樂に耽り、己の欲望を恣にすることを慎まねばならないと考えていた。説楚賦三編は国家を衰亡に至らしめた典型的な王を描き、そのことを訴えたものである。そのうち「説楚何惑王」「説楚何惛王」の二編は確かに玄宗を念頭において展開されているが、両賦の主意は決して玄宗の非を指弾するということにあつたのではない。それは、両賦の何惑王と何惛王がそれぞれ在野の「直士」「忠臣」の諫言を聞き入れて悔悟する王として描かれていることから明らかである。

また、この在野の「直士」「忠臣」、そして野で嘆いた「楚の正士」に仮託されているのは、やはり商余山中にあつた在野の元結自らの姿であると考えることができる。王が在野の士の諫言を聞き入れ悔悟したことを描くことによって、元結は為政者と自身との邂逅を作品において実現させているということが出来る。この説楚賦三編にも表出している王朝への強い求心性は、元結の作品に共通する特色でもあつた。

元結は、すでに天宝一〇載（七五一）に、『詩経』以来の風雅の文学を継承するものとして、諷諭を含む歌謡「系樂府十二首」（卷二）を制作している。こうした歌謡が成立する背景には、歌謡の持つ社会的な機能についての確信があり、それは元徳秀の影響のもとに形成されたと考えられる。

元結は殊に歎びや哀怨の感情の流露に着目し、その極限の表出が詩歌の機能にとって重要な働きを果たすと考

えていた。「系楽府十二首」はいずれも歎怨の情を極めた作品である。また、この連作にも歌謡の社会的な機能への確信とともに、王朝への強い求心的心情が見られる。

例えば、「農臣怨」に描かれた農民は、宮殿のまわりを巡って自らの窮状を訴えようとし、「貧婦詞」の貧しい妻は主君に自らの窮状を訴えようとしている。また「去郷悲」に登場する老人達は人主に訴えるすべを持たぬまま故郷を捨てて去っていかうとしている。ここに描かれた、哀怨の限りを尽くす農臣、貧婦、流民らの形象はそのまま商余山中にある元結自身の姿に重なる。元結は彼らのうちに君主との邂逅を願う自らの姿を見ているのである。「農臣怨」に「謡頌若採之（謡頌若し之を採らば）」とあることからすると、「系楽府十二首」は採詩の官によつて採取され、君主に届けられるべきものであつた。楽府という様式において自らの志と情とを表出することによつて、その作品は君主に嘉納されると想定しているのである。元結にとつて楽府はいわば自らと君主を結ぶものであり、歎びや哀怨を尽くした叙述によつて、自らの誠意を明らかにし、君主を動かすことができる契機となりうるものであつた。商余山中にあつた元結にとつて、元子として制作した楽府こそが自己を実現する手段であつたのである。

第二編では、元結の諷諭の文学がどのように展開したかを考究した。

安史の乱が続く乾元三年（七六〇）、元結は、不遇な詩人七人の作品、わずかに二四首を集めた小集『篋中集』を編纂した。この小集は、元結ら尚古派の文学的主張を表すものとして高く評価されているが、その編纂の意図が尚古派の文学的主張にあつたか否かについては、なお検討すべき点が残されている。

編纂の意図を述べた「篋中集序」（巻七）には確かに風雅の文学が絶えていることについての言及はあるものの、むしろ不遇な詩友たちの文学への深い愛惜の情が序全体を覆っている。また序において元子ではなく、元結と名乗っていることから、沈千運以下の不遇な詩人達への真摯な思い、あるいは『篋中集』編纂という行為に対する真摯な態度といったものを読み取ることができる。

『篋中集』の作品には、悲哀や怨嗟、不遇感の述懐、隠遁の喜びが表出しているが、いずれも「歆怨の声を尽くす」ものであり、これらの作品は為政者を感動させ、あるいは教化の働きを持つものとして位置づけられていたと推測される。官にあった元結にとって、不遇な詩人達の作品を編纂して称揚し、世に伝えることは、時代の弊害を除こうとする真摯な営みであった。それとともに『篋中集』の編纂には、不遇な詩人達の作品が、やがては為政者に届けられて嘉納され、彼らがしかるべき評価を得てほしいという願いが込められていたと考えられる。「系楽府十二首」との相違は、哀怨や歆びを尽くした自らの詩歌が君主に嘉納されることを願うのではなく、今や官にある元結があたかも歌謡を採取する採詩の官のごとき位置にあることにある。

「大唐中興頌」（巻七）も元結を代表する作品の一つである。「大唐中興頌」は、安史の乱によって失われた両京が回復されてから四年後の上元二年（七六一）に制作された。後には顔真卿が揮毫し、元結が晩年居を定めた涪溪の摩崖に刻されている。この頌については、宋代以降、肅宗に対する批判が託されているという解釈がある。最近では楊承祖氏がこの立場から、上皇を西内（太極宮）に移した肅宗の不孝を諷った作品であるとする解釈を提示している。一方では、この頌は誇りを含んではないともされており、解釈が未だに定まっていない。

「大唐中興頌」が制作されたのは、宦官の李輔国が権力を専らにしていた時期であり、上皇が西内に移されてからすでに一年が経過していた。乾元二年（七五九）、肅宗に奉った「時議三編」（巻六）において、元結はこの頃の情勢について、王朝が上下ともに安逸に流れ、盛徳を称える言葉ばかりが献上され、賞罰も当を失し、まだ情勢は安定していないのに危機を忘れているとし、かつて中興を期していた時を思い起こすように訴えている。元結は、安史の乱のなかで唐の復興に君臣が心を一つにし、その結果として両京が回復されたことに国家中興のイメージを見ているのである。

また、「大唐中興頌」においては、李林甫や楊国忠が国権を弄んだことによって国家が崩壊したものの、肅宗のもとに人々が糾合し、両京が回復されたことが述べられ、賞罰が当を得ていることが称えられている。

これらのことからすると、「大唐中興頌」はかつての中興を称美することによって、それと対置される現実を浮かび上がらせ、李輔国のごとき奸臣を除き、両京回復の時を思い、君臣が心一つにし、賞罰が当を得るよう訴える諷諭の作として解釈することができる。

元結には「虎蛇頌」（巻六）という頌がある。この作は、安史の乱を避け、一族を率いて猗玗洞にあったおりに制作されたものであり、元結が猗玗洞に入ったとき姿を隠した王虎と均蛇をそれぞれ古公亶父と季札に喩えて、「恵讓」や「順讓」を失ってしまった当代の状況を浮かび上がらせている。「大唐中興頌」もまた「虎蛇頌」と同じく、対象を称美することによって現実を浮かび上がらせる諷諭の作であると解釈することができるであろう。

元結が道州刺史の任にあった時に制作された「春陵行」（巻三）と「賊退示官吏」（巻三）は、杜甫を感動させた名作である。彼は道州刺史着任後、「謝上表」（巻八）「奏免科率状」（巻八）を奉っている。この二編の文と「春陵行」の序及び本文は、相補完しあう関係になっており、「春陵行」本文に描かれた州民の悲惨な状況、中央からの徴税督促の厳しさの描写は、「謝上表」「奏免科率状」両編の文章の内容をより印象的にする役割を果たしている。と判断できる。「春陵行」は樂府の形式をとりながら、両編の文章を補完し、道州の黎民の窮乏を救い、民生を安定させることこそ刺史のつとめであるという自らの判断を、より印象的に朝廷に、そして天子である代宗に訴えようとしたものとして解釈しなければならない。一方、「賊退示官吏」は、道州の官吏たちに自らの胸懷を示した作であり、その制作時期は「春陵行」より三か月以上後であったと考えられる。この作品は、州民から収奪するかのごとき厳しい徴税を行う政策に対する憤りをもって、無自覚で州民を憂えることを知らぬ官吏に對峙したときに成立したのであり、「春陵行」のごとく、樂府として嘉納されることを意図したものではなかった。

「春陵行」「賊退示官吏」の二編は、数年後、夔州にあった杜甫のもとに届けられ、感動した杜甫は「同元使君春陵行」詩を作り唱和し、この二編を「比興体制」「微婉頓挫」の作として称え、元結を王朝の官吏として称

揚した。彼はこの二編によって、自らの内に王朝への強い求心性を確認することとなり、詩家としての営みを積極的に展開してゆくことになった。しかし、杜甫は元結の比興の体制にならって、楽府の形式によって下情を達する諷諭の方法を積極的にとろうとはせず、「夔府詠懷四十韻」のような、最も技量を求められる排律の形を用いて「春陵行」と同様の心情を吐露している。

また杜甫は「春陵行」の語り手が元結ではなく漫叟であったことについては、特に言及していない。

漫叟は、宝応元年（七六二）以降の作品に用いられている号である。元結は、乾元元年（七五九）に任官してから宝応元年に官を辞するまで、官吏としての常軌を逸した者として漫郎と呼ばれていた。士人からすると彼の行動は何ら規範とならないものであり、是非の判断に値するものでもなかった。「漫論」序（巻八）には「漫聚兵、又漫辞官……（漫に兵を聚め、又漫に官を辞し、……）」とある。この「漫に兵を聚む」とは、山南東道節度参謀として義軍を招集したおり、河南の高地部族高晃らが帰順したことを指し、また、「漫に官を辞す」とは、宝応元年、当然の恩賞を受けず官を辞してしまったことを言うと言推測できる。元結自身によれば、このような中央の官僚達にとっては常軌を逸していると判断せざるを得ない振る舞いが誹りを招いたのであった。

その後、樊水のほとりに隠棲するや、常軌を逸した振る舞いはますます顕著となり、やがて酒徒の語によって自らを漫叟と号することとなる。この漫叟の号は、法律や制度、慣習に従い、それを維持しようとする王朝の中枢にある官僚たちに対して自らを対峙させるものであり、人の話に一切耳を貸さない傲慢とも言える強い意志によって支えられていた。しかし、漫叟は決して世俗を否定して自らの徳を涵養することに終始するのをよしとする者ではなく、諷諭の営みを放棄してはいなかった。「春陵行」は、この漫叟の視座によって著されている。

第三編では、元結における怪異な水石への志向の意味を解明した。

元結には、これまで考察してきた社会派の詩人として理解したのでは捉え尽くせない一面がある。それは欧陽脩が「元結、好奇之士也。（元結は、好奇の士なり）」（『集古録』巻七）と指摘するところの怪異な水石に対

する志向である。

水石のたたずまいは、初唐期の宮廷詩人たちの作品において、華麗なあるいは清浄な山水の一部として詠じられることが多く、総じて初唐詩の水石の情景は、六朝以来の表現の伝統を受け継いだものであり、元結のような奇怪な水石のたたずまいを詠じる作品は見られない。

一方、元結は、顔真卿の撰した墓誌銘に「君雅好山水、聞有勝絶、未嘗不枉路登覽而銘賛之。（君雅より山水を好み、勝絶有りと聞けば、未だ嘗て路を枉げ登覽して之を銘賛せずんばあらず）」と述べられているように、殊に「春陵行」「賊退示官吏」の二編を制作した広徳二年（七六四）以後、自然の景物を題材とした詩や記銘の類を多く作るようになっていった。その山水を対象とした詩編や銘においては「異」「殊」「怪」といった語が頻繁に使用されている。また彼が水石の奇怪な形状のなかでも特に穴や洞に対して視線を注いでいたことにも注目される。さらに水石の世界を自らのものとして愛惜する意識が強く表れていることも大きな特色である。

このような水石を対象とした詩編や銘においては、水石の中に理想的な為政者の持つ特性が見出されていると解釈されている。ところが元結には、こうした例以外に、自然の中にあらかじめ存在している理想的な為政者の持つ特性を発見したのではなく、命名という行為を通して奇怪な水石が分節され、新たな価値を持つ世界が生じたというように解釈しなければならぬ場合が多く見られる。また、彼が命名を通して対象に生じた価値がすべて理想的な為政者の特性に連なるものでもないことも明らかである。

これらの水石は奇怪な形状をしており、そのあまりの怪異さゆえに天下の景勝としての価値を知られることなく、世に忘れ去られていた。怪異さは世人の賞玩の価値基準には合致しないのであり、怪異な水石は世人においては賞玩の対象とはなりえないものであった。元結も世俗と合致しない価値観を持つ、時流とは異なる存在として自らを位置づけていた。この元結自身の姿は、怪異であるが故に世人から賞玩されない水石のたたずまいと重なる。元結は怪異な水石の中に自らの資性に等しいものを見ていたのであり、彼が命名を通して水石に価値を賦

与する行為は、怪異な水石の中に自身との同質性を見た時に始めて可能となったと考えることができるであろう。また元結は、洞穴や凹状の岩石に対して、そこに現出する別乾坤に確かに注目している。その世界は時には蓬莱や瀛洲、洞天であり、騒々たる世俗の世界から隔絶されているものであった。その中に身を置き、その世界を自らの所有するものと意識することによって、彼の心は安らぎを得ていたのである。

元結は「春陵行」「賊退示官吏」以後、いわゆる諷諭詩を制作していないが、彼は自らの文学の理念、諷諭としての文学を放棄したわけではなかった。水石を主な対象として諷諭の意識に基づいた作品が制作されているのである。銘は対象の価値を顕彰し、それを己が戒めとするものであり、元結の場合、その対象の価値を世に顕彰し、世俗を戒めようとする規諷の意識が顕著に現れている。

しかし、一方で元結には戒めや忠告の意識を表明するというよりはむしろ怪異な水石とともにある喜びを述べる作品がある。これらの作品においては、自己の不遇な思いや社会への憂憤が怪異な水石とともにあることの中で癒やされている、ということに叙述の中心がある。自らが見出し、命名して自らのものとし、その怪異さ故に限りない賞玩の対象にまで高められた水石のたたずまいとともにあることの喜びが、元結の晩年の文学を特徴づけているのである。

元結は、大暦元年（七六六）、湖南省祁陽県の南、東西に流れる湘水の南岸の地にあった無名の溪谷を購入し、自らの所有する溪谷の意をこめて浯溪と名付け、亭や堂を営んだ。浯溪の地における作品としては、三吾と称される「浯溪銘」（巻一〇）「岨台銘」（巻一〇）「唐廩銘」（巻一〇）および「東崖銘」（巻一〇）が伝わっている。これらの銘において、浯溪の地は「殊怪」にして「尤異」なる空間として形象化され、世俗における不遇感や疲弊した心を癒やす自適の場として位置づけられている。

元結の銘に描かれた空間は、世俗との対峙において成立している。彼はこの自適の世界を世人に示したいと言う。そうすることによって世人を戒めようとしているのである。すなわち、自適の空間を銘によって称美するこ

とが、諷諭の営みとなっているのである。この自適の空間に諷諭の作である「大唐中興頌」が刻されたことは、元結において諷諭が単に方法として選択されたものではなく、いわば表現者元結のうちに内在化していること、そして諷諭によって世俗に対する忠告や戒めの意を尽くすという表現行為が憂憤や不遇感を癒やし、安らぎをもたらしていたことを表している。ここに元結の諷諭の文学の到達点があるのである。

(二)

このような元結の諷諭の文学は、中唐期の詩人たち、ことに白居易のそれとどのように重なり、そして相違しているのだろうか。その一端を新樂府の視点から確認しておく。

唐代の諷諭（風雅比興）の文学の展開において、元結の文学は中唐期の新樂府運動の先蹤であるとされている。既に孫望^{（注1）}氏は元結の詩歌に対する認識とその実践とが白居易に影響を与えなかったとは言えないとして、次のように述べている。

元結竭力提倡的、實質上是飽含着革新意義的「復古」、其指導思想無疑是進步的、特別在唐代古文運動中、他的先導之功、是不應低估的。章学誠曾說、「人謂六朝綺麗、昌黎始回八代之衰、不知五十年前、早有河南元氏為古学於举世不為之日也。元亦豪傑也哉。」（『元次山集書後』）同様、他對詩歌的見解和實踐、也不能說對白居易沒有影響。

元結が力を尽くして提唱したのは、實質的には革新の意義の横溢した「復古」であり、その指針となる思想は疑いもなく進歩的なものであった。とりわけ唐代古文運動において、彼の先導的功績は低く評価してはならない。章学誠はかつて「人は六朝の文章は綺麗なものであり、韓昌黎がはじめて八代の衰退をめぐらし

たと言うが、彼より五〇年前に河南の元氏が誰も見向きもなかった古学を実践していたことを知らない。元結もまた豪傑だったのである。」（『元次山集書後』）と言っている。同様に、彼の詩歌に対する見解と実践も白居易に対して影響がなかったとは言えないのである。

また、陶文鵬^(注2)氏も、元結が元稹、白居易らの新樂府運動、韓愈、柳宗元の古文運動を支えた理論を準備したことを指摘している。

但在当時、他的過激的文学思想、却有一定的針對性和積極意義、而且直接啓發了白居易、元稹倡導新樂府詩歌的理論主張、并為韓愈、柳宗元進一步把「古文運動」推向高潮、做了理論上的準備。

当時にあつて、彼の過激な文学思想には、相当の確さと積極的な意義があり、直接に白居易、元稹が唱道した新樂府詩歌の理論的主張を啓發し、韓愈、柳宗元が一步進めて「古文運動」を高揚させるための理論上の準備をした。

元結と白居易は確かに、『詩經』以来の風雅比興の諷諭の文学觀をとともに有していた。また、官にあつては「春陵行」「賊退示官吏」といった諷諭の作品を著し、晩年に祁陽の浯溪に自適の空間を営んだ彼の生き方も、表層的には白居易と重なる部分がある。この両者に影響關係を想定することは決して不可能ではない。しかし、小川環樹^(注3)氏は、白居易の新樂府を評する中で、すでに別の視点を提示している。

新樂府は作者自身のことばによれば、詩によつて人民の苦痛をうったえ、また政治の批判をこころみることが目的であつた。その角度から見ると、白居易以前に張籍と王建らの作品があり、……張王樂府と呼ばれ、

政治への諷刺をふくんだものであった。この系列は顧況（七二七―八一五？）元結（七二三―七七二）さらには杜甫までさかのぼることができる。それは盛唐末年から中唐初期へかけて、鋭敏な詩人たちの共同の感覚から、つぎつぎに生まれたのであり、決して白居易一人……のあたらしい試みではない。

小川氏は、諷刺を含む歌謡の試みが白居易一人の新たな営みではなかったと言う。新樂府に対する認識が時代の共通の志向であったとするこの指摘は、同時に元結と白居易等中唐の詩人達との関係の把握には慎重さが求められることも示唆している。

たしかに白居易は次に挙げる「与元九書」（『全唐文』卷六七五）において風雅比興の文学の伝統を語る際にも元結を取り上げてはいない。

唐興二百年、其間詩人不可勝数。所可举者、陳子昂有感遇詩二十首、鮑防有感興詩十五首。又詩之豪者、世称李杜。李之作才矣奇矣、人不逮矣。索其風雅比興、十無一焉。杜詩最多、可伝者千余篇。至於貫穿今古、覩縷格律、尽工尽善、又過於李。然撮其新安吏石壕吏潼関吏塞蘆子留花門之章、朱門酒肉臭、路有凍死骨之句、亦不過三四十首。杜尚如此。況不逮杜者乎。

唐興りて二百年、其の間の詩人勝げて数ふべからず。挙ぐべき所の者は、陳子昂に感遇詩二十首有り、鮑防に感興詩十五首有り。又た詩の豪なる者は、世に李杜と称す。李の作は才なり奇なり、人逮ばず。其の風雅比興を索むれば、十に一も無し。杜詩最も多く、伝ふべき者千余篇あり。今古に貫穿し、格律に覩縷たり、工を尽くし善を尽くすに至るも、又た李に過ぐ。然れども其の新安吏・石壕吏・潼関吏・塞蘆子・留花門の章、朱門には酒肉臭きも、路に凍死の骨有りの句を撮れば、亦た三四十首に過ぎず。杜すら尚ほ此のごとし。況んや杜に逮ばざる者をや。

ここでは、社会や人生についての感懷を詠じた陳子昂と鮑防の感遇詩、および社会の現状を鋭く描き出した杜甫の新樂府と詩句を唐代における風雅比興の文学として挙げるのみであり、李白の「古風五十九首」も敢えて挙げず、元結の「系樂府十二首」(卷二)や杜甫を感動させた「春陵行」(卷三)などは、白居易の視野には入っていないかのようなのである。伊藤正文氏が指摘するように、「系樂府十二首」は杜甫の新樂府に影響を及ぼした可能性がある作品である。また元結の刺史としての立場と道州の窮状を天子に伝えんとした「春陵行」にも『詩經』以来の風雅の文学の意識を明らかに窺うことができる。

無論、中唐期においても元結は名を知られており、例えば白居易と同時代の韓愈(七六八―八二四)は「送孟東野序」(『全唐文』卷五五五)において「唐之有天下、陳子昂・蘇源明・元結・李白・杜甫・李觀、皆以其所能鳴。(唐の天下を有つや、陳子昂・蘇源明・元結・李白・杜甫・李觀、皆その能くする所を以て鳴る)」と、不平のうちにあった表現者の一人として元結を挙げている。

白居易「新樂府五十首」(『白氏文集』卷三)の「道州民」^(注4)は、道州刺史であった陽城を称える作であるが、陽城もまた元結と同じく、民生を第一とし、中央の租税の徴収に応じなかった刺史であった。この作品はあるいは道州刺史元結の姿を意識したものであったのかも知れない。『旧唐書』卷一九二「陽城伝」の記述によれば、中央から差し向けられた判官が道州に至ると、陽城は州の獄中にあり、訝しんだ判官の問いに州の吏が「刺史聞判官来、以為有罪、自囚於獄、不敢出。(刺史判官の来るを聞き、以て罪有りと為し、自ら獄に囚はれ、敢て出でず)」と答えたという。この話は、「春陵行」序の「於戲、若悉応其命、則州県破乱、刺史欲焉逃罪。若不応命、又即獲罪戾、必不免也。(於戲、若し悉く其の命に応ぜば、則ち州県破乱し、刺史焉くにか罪を逃れんと欲する。若し命に応ぜずんば、又た即ち罪戾を獲んこと、必ず免れざるなり)」という叙述を彷彿とさせるものである。

これらのことからすると、白居易が元結を唐代の新樂府の伝統の中に含めなかったのは、両者の風雅の文学觀に隔たりがあるか、あるいはその位相が異なっている故であつたと考えられるであろう。以下、採詩の官に着目しつつ、風雅の文学における元結と白居易の徑庭を確認する。

(1)

『樂府詩集』卷九六は、元結の新樂府として「系樂府十二首」「補樂歌十首」の計二二首を採録している。聶文郁氏は、^(注5)「系樂府十二首」が白居易の新樂府と實質的に同じものであつたとして、次のように述べている。

在实际上海元結所說的系樂府与白居易所說的新樂府是一樣的。我們說新樂府的写作、是陳子昂・李白・杜甫等人就已開始了的、但他們還沒有提及新樂府之名。到白居易・元稹才把樂府的写作正式提出来加以倡導、并發展到高峰、元結是陳・李・杜与元・白之間一箇為新樂府斬荆劈棘的重要人物。

實際上元結が言う系樂府と白居易の言う新樂府は同様である。新樂府の制作は陳子昂、李白、杜甫等がすでに始めていたが、彼らはまだ新樂府という名称に言及してはいない。白居易、元稹に至ってはじめて樂府の制作を正式に提示、唱導し新樂府の制作はピークを迎えることとなつたが、元結は陳子昂、李白、杜甫の間にあつて新樂府のためにいばらの道を切り開いた重要な人物である。

はたして聶文郁氏のこの指摘は妥当なものであるのか。元結の「系樂府十二首」「春陵行」と白居易の新樂府について「採詩」の観点から比較する。

第一編第六章で取り上げた「系樂府十二首」其九「農臣怨」(卷二)には、「謠頌若採之、此言当可取(謠頌若し之を採らば、此の言当に取るべし)」という「採詩」についての言及が見られた。「系樂府十二首」には、

一二首の作品が採詩の官によって採取され、天子に嘉納されるという願いが託されており、それはまた唐王朝に対する元結の強い求心性を示すものでもあった。自らの意識を『毛詩』大序の文学観の構造のうちにおいて表現することで、いわば自己実現をはかったのが「系樂府十二首」であり、新樂府による表現は、商余山に閉塞状況に置かれた元結によって選ばれた様式なのであった。

さらに「春陵行」（卷三）においても、その最後の二句に「何人采国風、吾欲献此辞（何人か国風を采る、吾此の辞を献ぜんと欲す）」という採詩への言及があり、語り手漫叟が采詩の官に「春陵行」を献上しようとする思いを吐露している。

「春陵行」の語り手である漫叟は、中央の官僚世界に対峙し、放縦でなにもにも拘束されない「荒浪なる者」であり、中央の官僚体制の外にある者としての視座を持っている。

軍事と国政の需要に応える責任は官吏にあり、官吏は郡県に臨むと、ついには刑罰を科してまで軍国の需要を満たそうとする。「春陵行」において批判されているのは民生を憂えることを知らぬ中央の官僚たちである。漫叟は、こうした官僚たちを「規檢大夫持規之徒」（「漫論」卷八）と称する。彼はその一員としてではなく、安史の乱と西原の賊の侵入によって疲弊した道州の人々の苦しみ思い、民生を安んじることが第一とする刺史として道州に臨んだ。規則を遵守し、刑罰を加えることも辞さぬ官吏とは異なる者として自らを位置づけたのであり、それには体制の外側にある「荒浪なる者」である漫叟の視座が必要であった。漫叟は、道州の人々の窮状を描き、刺史としての自らの立場と意識を述べ、それを天子に伝えるべく、采詩の官に献上しようとしたのである。

采詩の官については、『漢書』『芸文志』に、

書曰、詩言志、歌詠言。故哀樂之心感、而歌詠之声發。誦其言謂之詩、詠其声謂之歌。故古有采詩之官、王者所以觀風俗、知得失、自考正也。

書に曰はく、詩は志を言ひ、歌は言を詠ず、と。故に哀樂の心感きて、歌詠の声発す。其の言を誦すれば之を詩と謂ひ、其の声を詠ずれば之を歌と謂ふ。故に古に采詩の官有り、王者風俗を觀、得失を知り、自ら考正する所以なり。

とあり、また「食貨志」には

行人振木鐸徇于路、以采詩、獻之大師、比其音律、以聞於天子。故曰、王者不窺牖戸而知天下。

行人木鐸を振りて路に徇へて、以て詩を采り、之を大師に獻じ、其の音律を比べて、天子に以聞す。故に曰はく、王者は牖戸を窺はずして天下を知る、と。

とある。こうした采詩の構造において元結は、あるいは布衣の士として、あるいは体制外の荒浪なる語り手として自らを位置づけているのであつて、決して自らを采詩の官の位置に置くことはなかった。

(2)

白居易が左拾遺の官にあつたときに制作された「新樂府五十首」の序は次のように言う。

序曰、九千二百五十二言、断為五十篇。篇無定句、句無定字。繫於意、不繫於文。首句標其目、卒章顯其志、詩三百之義也。其辭質而徑、欲見之者易喻也。其言直而切、欲聞之者深誠也。其事覈而実、使采之者伝信也。其体順而肆、可以播於樂章歌曲也。總而言之、為君、為臣、為民、為物、為事而作、不為文而作也。

序に曰はく、九千二百五十二言、断めて五十篇と為す。篇に定句無く、句に定字無し。意に繫けて、文に

繫けず。首句に其の目を標し、卒章に其の志を顕すは、詩三百の義なり。其の辞は質にして徑、之を見る者の喻り易きを欲す。其の言は直にして切、之を聞く者の深く誠しむるを欲するなり。其の事は覈にして実、之を采る者をして信を伝へしめんとするなり。其の体は順にして肆、以て楽章歌曲に播すべきなり。総じて之を言へば、君の為、臣の為、民の為、物の為、事の為にして作る、文の為にして作らざるなり。

朱金城氏^(注6)が「全体結構、無異一部唐代詩経。（全体の構成は唐代の『詩経』に異ならない）」と指摘するように、この五〇首は、明確に『詩経』の体裁に倣っている。その序は大序に相当し、「首句標其目、卒章顯其志、詩三百之義也。」とあるように、各編の首句を詩題としてそれぞれ序が附されている。各編の序は小序に当たる。そして各編の末尾にはその趣旨が示される。白居易は体裁においても「詩三百」と同一のものとして新樂府を位置づけているのである。

それに対して元結は「系樂府十二首」序（卷二）に、「天寶辛未中、元子將前世嘗可称歎者為詩十二篇、為引其義以名之、総命曰系樂府。古人歌詠不尽其情声者、化金石以尽之。其歎怨甚耶戲。尽歎怨之声者、可以上感於上、下化於下。故元子系之。（天寶辛未中、元子前世の嘗に称歎すべき者を將て、詩十二篇を為り、為に其の義を引きて以て之に名づけ、総て命づけて系樂府と曰ふ。古人は歌詠して其の情声を尽くさずんば、金石に化して以て之を尽くす。其の歎怨甚だしきかな。歎怨の声を尽くす者は、以て上は上を感じしめ、下は下を化すべし。故に元子之を系ぐ）」と言うように、根柢に『詩経』の構造を措定し、詩歌における歎怨の情を重視している。歌謡は歎怨の情を尽くすことによって、はじめて上を感動させ下を教化する働きを持つことができるのである。元結が歌謡の表現の持つ抒情性のあり方に注目するのに対して、白居易は元結よりも歌謡の理念としての側面を重視しているのであり、このことは彼が歌謡を諷諭の手段として明確に位置づけていることを示唆するものである。

「新樂府五十首」其五〇「采詩官」（『白氏長慶集』卷四）は次のように詠う。

采詩官

監前王乱亡之由也。

前王乱亡の由を監みるなり

采詩聴歌導人言

詩を采り歌を聴きて人言を導く

言者無罪聞者誠

言ふ者は罪無く聞く者は誠む

下流上通上下泰

下は流れ上は通じて上下泰し

周滅秦興至隋氏

周滅び秦興りて隋氏に至るまで

05 十代采詩官不置

十代 采詩に官置かず

郊廟登歌賛君美

郊廟の登歌は君の美を賛し

樂府艷詞悅君意

樂府の艷詞は君の意を悦ばしむ

若求興論規刺言

若し興論規刺の言を求めば

万句千章無一字

万句千章 一字無し

10 不是章句無規刺

是れ章句に規刺無きにあらざるも

漸及朝廷絶諷議

漸く朝廷諷議を絶つに及ぶ

諍臣杜口為冗員

諍臣は口を杜して冗員と為り

諫鼓高懸作虚器

諫鼓は高く懸かりて虚器と作る

一人負屨常端默

一人 屨を負ひ常に端默し

15 百辟入門皆自媚

百辟 門に入り皆自ら媚ぶ

夕郎所賀皆德音

夕郎 賀する所は皆德音

春官每奏唯祥瑞

春官 毎に奏するは唯だ祥瑞

君之堂兮千里遠

君の堂は千里遠く

君之門兮九重闕

君の門は九重闕つ

20 君耳唯聞堂上言

君の耳は唯だ堂上の言を聞くのみにして

君眼不見門前事

君の眼は門前の事を見ず

貪吏害民無所忌

貪吏 民を害して忌む所無く

奸臣蔽君無所畏

奸臣 君を蔽ひて畏るる所無し

君不見厲王胡亥之末年

君見ずや 厲王胡亥の末年

25 群臣有利君無利

群臣に利有り 君に利無きを

君兮君兮願聽此

君よ君よ 願はくは此を聴かんことを

欲開壅蔽達人情

壅蔽を開き人情に達せんと欲せば

先向歌詩求諷刺

先づ歌詩に向かひて諷刺を求めよ

この作品は、周代には置かれていた採詩の官が秦以後隋代まで置かれることがなく、奸佞の臣がはびこり、諫官も閑職となつてしまい、君主は下々の状態を知ることができなくなり、国家の滅亡が兆すようになったことを言う。そして、下情に達するためには歌謡に諷刺を求めること、すなわち自らが奉つた新樂府の諷諭の意を汲み取るようにと願つて歌いおさめている。

『大唐六典』卷八に「左補闕拾遺、掌供奉諷諫、扈從乘輿。凡發令舉事、有不便於時、不合於道、大則廷議、小則上封。若賢良之遺滯於下、忠孝之不聞於上、則条其事狀而薦言之。」（左補闕拾遺は、供奉諷諫を掌り、乘輿に扈從す。凡そ令を發し事を挙ぐるに、時に便ならず、道に合せざる有れば、大なるは則ち廷議し、小なるは則

ち上封す。若し賢良の下に遺滞し、忠孝の上に聞せざれば、則ち其の事状を条して之を薦言す」とある。「新樂府五十首」が左拾遺の官にあるときに制作されたことに注目すると、諫官が名ばかりのものとなっている時代にあつて、白居易はこの左拾遺の職掌である諷諫の役割を新樂府において実現しようとし、自らを朝廷の体制の側にある表現者として位置づけているのである。これは元結の元子・漫叟の視座とは大きく異なっている。

元結にとって諷諭は、「不能救時患、諷諭以全意（時患を救ふ能はずんば、諷諭して以て意を全くす）」（「酬孟武昌苦雪」巻二）というように、時代の持つさまざまな悪しき状況を救うてだてのない者が、自らの意、兼済の志を全うする、いわば自己実現の手段であつた。

一方の白居易にあつては、諷諭は、「時患」を救う位置にある者が兼済の志を全うする手段であつた。「与元九書」には、「僕当此日、擢在翰林、身是諫官。手請諫紙、啓奏之外、有可以救済人病、裨補時闕、而難於指言者、輒詠歌之。（僕此の日に当たりて、擢せられて翰林に在り、身は是れ諫官たり。手に諫紙を請ひ、啓奏の外、以て人病を救済し、時闕を裨補すべきも、指言に難き者有れば、輒ち之を詠歌す）」と明確に述べられている。

松浦友久氏^(注7)が、「かれにとつて、『兼済』諷諭詩」と『独善』閑適詩とは、我が身の窮達に応じた相補的な関係にある。左拾遺として天子に近侍し（三十七歳）、社会的な諷諭詩『新樂府五十首』や『秦中吟十首』を作つたのは、『達すれば則ち天下を兼済す』の実践であり、母陳氏の憂に丁つて渭村に退去し（四十歳）、内省的な閑適詩『効陶潛体十六首』を作つたのは、『窮すれば則ち独りその身を善くす』の実践であつた。」と述べるように、白居易にあつては兼済、独善と文学的営為とが不可分に結びついており、諷諭は兼済の觀念の具現化である。したがつて、下定雅弘氏^(注8)が「諷諭詩は、基本的に諫官時代の産物である。江州時代にも幾らかあるが、それは、諫官時代の活躍を訴えるための恨み節のようなもので、忠州時代にはまったく消滅している。諫官時代の特殊な時期の産物と見るのが現実になつてゐる。」と述べているとおり、諷諭詩は諫官と分かちがたく結びついており、その表現の場が失われたところに諷諭詩はなかつたとしてよいであろう。

こうした諷諭の文学のあり方は、第三編第二章、第三章で明らかにした元結の内在化した諷諭とは異なるものであった。

(3)

丸山茂氏^(注9)は、唐代詩人における諷諭について「『詩経』『大序』の文学観を背景とする諷諭詩は、彼らのためを表明するいわば『表芸』であった。」と言う。例えば白居易の風諭詩については、氏の言は首肯できるものである。しかし、本論で明らかにしたように、諷諭を内在化させた元結の場合、その諷諭の営みは彼の表現の本質そのもののなのであり、表芸という言葉は相応しくないであろう。

あるべき社会や政治のあり方について天下の公理をもって戒め、忠告し続けたこの詩人の根柢には著しい王朝への求心性がある。「春陵行」のごとき歌謡による刺史の立場の表明は、表現者の根柢に王朝への信頼がなければ成立しないものであり、王朝に絶対の信頼を寄せるが故に、時にはシニカルにあるいは激情的に規諷の表現が展開するのが、元結の文学なのである。市川桃子氏は盛唐の詩人達に共通する志向性を析出して、「社会の発展を具現していく朝廷と、個性の強い天子とは、当時の社会の精神的な支えであり、強い求心力を持っていたであろう。李白杜甫を初めとする盛唐の主要な詩人たちの作品を読むと、苦しい生活の中で不遇な境遇に不平を述べながらも、朝廷に対する強いあこがれを終生持ち続けていた様子を見て取ることができる^(注10)。」と述べている。氏の指摘は、元結が紛れもない盛唐詩人としての特質を有していることを示してくれるものであるが、その求心性は朝廷への強い憧憬というレベルに止まるものではなく、唐王朝の表象としての朝廷、その官僚と対峙しつつ、あるべき王朝の姿を示し続けることにおいて発現するものであった。それが彼の王朝への志向性であり、諷諭の文学の営みでもあったのである。

注

(1) 孫望「元結評伝」(孫望著『蝸叟雜稿』上海古籍出版社、一九八二年)一三七～一三八頁。

(2) 陶文鵬「元結和《篋中集》」(喬象鍾・陳鉄民主編『唐代文学史』人民文学出版社、一九九五年)五六九頁。

(3) 高木正一著『白居易』(中国詩人選集第一集、一二、岩波書店、一九五八年)二二四～二二五頁。

(4) 「道州民」(『全唐詩』卷四二六)は、次のような作品である。

道州民 美賢臣遇明主也(賢臣の明主に遇ふを美するなり)

道州民、多侏儒。長者不過三尺余。市作矮奴年進送、号為道州任土貢。任土貢、寧若斯。不聞使人生別離、老翁哭孫母哭兒。一自陽城來守郡、不進矮奴頻詔問。城云臣按六典書、任土貢有不貢無。道州水土所生者、只有矮民無矮奴。吾君感悟璽書下、歲貢矮奴宜悉罷。道州民、老者幼者何欣欣。父兄子弟始相保、從此得作良人身。道州民、民到于今受其賜、欲説使君先下淚。仍恐兒孫忘使君、生男多以陽為字(道州の民、侏儒多し。長者三尺余に過ぎず。市ひて矮奴と作し年ごとに進送し、号して道州の任土の貢と為す。任土の貢、寧ぞ斯くのごとくならんや。聞かずや人をして生きながら別離せしめ、老翁は孫を哭し母は兒を哭するを。一たび陽城來りて郡に守たりしより、矮奴を進めず頻りに詔問せらる。城云ふ臣六典の書を按ずるに、任土は有を貢し無を貢せず。道州水土生ずる所の者は、只だ矮民有りて矮奴無し。吾が君感悟して璽書下り、歳ごとに矮奴を貢すること宜しく悉く罷むべし。道州の民、老者幼者何ぞ欣欣たる。父兄子弟始めて相保ち、此れより良人の身と作るを得たり。道州の民、民今に到るまで其の賜を受け、使君を説かんと欲すれば先づ涙下る。仍ほ兒孫の使君を忘れんことを恐れ、男を生めば多く陽を以て字と為す)。

(5) 聶文郁注釈『元結詩解』(陝西人民出版社、一九八四年)一二三頁。

- (6) 朱金城著箋注『白居易集箋校』（上海戸籍出版社、一九八八年）一三八頁。
- (7) 松浦友久著『中国詩歌原論』（大修館書店、一九八六年）八六頁。
- (8) 下定雅弘著『白氏文集を読む』（勉誠社、一九九六年）一五五頁。
- (9) 丸山茂著『唐代の文化と詩人の心―白樂天を中心に―』（汲古書院、二〇一〇年）二三頁。
- (10) 市川桃子著『中国古典詩における植物描写の研究』（汲古書院、二〇〇七年）二六九頁。

【初出一覧】

各章の論文の初出時の表題、掲載誌、発表年月日を以下に掲げる。ただし、本論の執筆にあたり、大幅に加筆修正を行った。

第一編

第一章 元徳秀の受容―李華・元結における元徳秀像について―

（『千葉大学教育学部研究紀要』第四七巻 一九九八年二月 一六五―一七三頁）

第二章 元結の自述三篇について

（『千葉大学教育学部研究紀要』第五〇巻 二〇〇二年二月 四一―四一九頁）

第三章 元結における元子の意味

（『千葉大学教育学部研究紀要』第五一巻 二〇〇三年二月 四一―四一七頁）

元結の散文における寓言について

（『千葉大学教育学部研究紀要』第五八巻 二〇一〇年三月 四二三―四三二頁）

第四章 元結の初期詩編について

（『大久保隆郎教授退官記念論集 漢意とは何か』大久保隆郎教授退官記念論集刊行会 東方書店 二〇〇一年一二月 四七九―四九七頁）

元結詩小論―「演興」四首と「系楽府十二首」について―

（『中国文化』第六〇号 中国化学会 二〇〇二年六月 四四―五五頁）（「演興」四首に関する部分）

第五章 元結の詩文における煬帝の形象

（『千葉大学教育学部研究紀要』第六一卷 二〇一三年三月 五一―五二〇頁）
元結の初期作品における諷諭―王朝への求心性―

第六章 元結詩小論―「演興」四首と「系楽府十二首」について―
（『千葉大学教育学部研究紀要』第六二巻 二〇一四年三月 四一―四一八頁）

（『中国文化』第六〇号 中国文化学会 二〇〇二年六月 四四―五五頁）（「系楽府十二首」に関する部分）

第二編

第一章 元結の文学―「系楽府」と『篋中集』―

第二章 元結「大唐中興頌」の解釈をめぐって
（『千葉大学教育学部研究紀要』第五三巻 二〇〇五年二月 四二七―四三六頁）

第三章 元結の「春陵行」と「賊退示官吏」について
（『中国文化』第六四号 中国文化学会 二〇〇六年六月 三八―四九頁）

第四章 元結の新題楽府をめぐって―杜甫「同元使君春陵行」における元結
（『千葉大学教育学部研究紀要』第四五巻 一九九七年二月 一九三―二〇〇頁）

第五章 元結における「漫叟」の視座について
（『中国文化』第七四号 中国文化学会 二〇一六年六月 五四―六六頁）

第三編

第一章 初唐詩における石の描写と元結
（『千葉大学教育学部研究紀要』第五七巻 二〇〇九年五月 一一―一九頁）

(『文教大学国文』第一九号 文教大学国文学会 一九九〇年三月 一〇頁)

第二章 元結の詩文における水石への志向について

(『日本中国学会報』第四三集 日本中国学会 一九九一年一〇月 一二一―一三六頁)

第三章 元結の詩文における浯溪と「大唐中興頌」

(『中国文化』第六五号 中国化学会 二〇〇七年六月 一五―二七頁)

【参考文献】

〔テキスト〕

『元次山集』孫望(中華書局、一九六〇年)

『唐元次山集』(四部叢刊景印明湛若水校本、台灣商務院書館)

『唐故容州都督兼御史中丞本管經略使元君表墓碑銘』(拓本)

『大唐中興頌』(拓本)

『元次山集』(官版、一八二一年)

『篋中集』(文淵閣四庫全書)

『篋中集』(官版、一八二四年)

『唐人選唐詩十種』(上海古籍出版社、一九七八年)

『唐人選唐詩新編』傅璇琮撰(陝西人民教育出版社、一九九六年)

〔著書・論文・作品注釈〕

〔日本〕

赤井益久『中唐詩壇の研究』（創文社、二〇〇四年）

市川桃子『中国古典詩における植物描写の研究』（汲古書院、二〇〇七年）

市川桃子「元結社会詩考」（『東大中哲文学会報』二号、東大中哲文学会、一九七六年）

市川桃子「元結『春陵行』考―詩人の文学精神と政治理念との関わりを中心に―」（『東方学』六〇集、東方学会、一九八〇年）

伊藤正文「杜甫と元結・『篋中集』の詩人たち」（『中国文学報』一七号、中国文学会、一九六二年）

伊藤正文『建安詩人とその伝統』（創文社、二〇〇二年）

乾源俊「初盛唐期における復古文学史観の形成過程」（川合康三編『中国の文学史観』創文社、二〇〇二年）

入谷仙介『王維研究』（創文社、一九八一年）

植木久行「唐代詩人新疑年録（1）」（『文経論叢』弘前大学人文学部、二三卷三号、一九八八年）

植木久行「唐代作家新疑年録（4）」（『文経論叢』弘前大学人文学部、二六卷三号、一九九一年）

上田武「中国古代の隠逸思想と陶淵明（上）」（『人文学科論集』茨城大学人文学部、第二九号、一九九六年）

上田武「中国古代の隠逸思想と陶淵明（下）」（『人文学科論集』茨城大学人文学部、第三一号、一九九八年）

埋田重夫『白居易研究―閑適の思想』（汲古書院、二〇〇六年）

太田晶二郎「海陽泉帖考」（太田晶二郎『太田晶二郎著作集 第一冊』、吉川弘文館、一九九一年）

太田次男『中唐文人考』（研文出版、一九九三年）

小川昭一「唐詩における政治批判の態度」（『日本中国学会報』二六、一九七三年）

- 小川環樹『唐詩概説』（中国詩人選集別巻、岩波書店、一九五八年）
- 小栗英一「元結伝」（小川環樹編『唐代の詩人―その伝記』、大修館書店、一九七五年）
- 長部悦弘「元氏研究―北朝隋唐時代における鮮卑族の文人士大夫化の一軌跡―」（礪波護編『中国中世の文物』
京都大学人文科学研究所、一九九三年）
- 小野四平『唐代古文の源流―開元・天宝期を中心に―』（『宮城教育大学紀要』二五、一九九〇年）
- 小尾郊一『中国の隱遁思想―陶淵明の心の軌跡』（中公新書、中央公論社、一九八八年）
- 神楽岡昌俊著『中国における隱逸思想の研究』（ぺりかん社、一九九三年）
- 川合康三『中国の自伝文学』（創文社、一九九六年）
- 川北泰彦「杜詩「元使君春陵行」制作年代について」（『長崎造船大学研究報告』一〇、一九六九年）
- 川北泰彦「元結における文学的軌跡」（『目加田誠博士古稀記念中国文学論集』、竜溪書舎、一九七四年）
- 京都大学中国文学研究室編『唐代の文論』（研文出版、二〇〇八年）
- 齋藤茂『孟郊研究』（汲古書院、二〇〇八年）
- 佐藤一郎『中国文章論』（研文出版、一九八八年）
- 穴戸友紀「篋中集序 元結」（京都大学中国文学研究室編『唐代の文論』、研文出版、二〇〇八年）
- 静永健『白居易「諷諭詩」の研究』（勉誠社出版、二〇〇〇年）
- 下定雅弘『白氏文集を読む』（勉誠社、一九九六年）
- 清水茂『唐宋八家文 上』（中国古典選、朝日新聞社、一九六六年）
- 鈴木修次「陳子昂論」（鈴木修次『唐代詩人論 上巻』、鳳出版、一九七三年）
- 鈴木修次「柳宗元論」（鈴木修次『唐代詩人論 下巻』、鳳出版、一九七三年）
- 鈴木虎雄「春陵行」（鈴木虎雄『杜少陵詩集』続国訳漢文大成、国民文庫刊行会、一九二九年）

- 鈴木虎雄「賊退示官吏」（鈴木虎雄『杜少陵詩集』続国訳漢文大成、国民文庫刊行会、一九二九年）
- 高木重俊『初唐文学論』（研文出版、二〇〇五年）
- 高木正一「景竜の宮廷詩壇と七言律詩の形成」（高木正一『六朝唐詩論考』、創文社、一九九九年）
- 高木正一「陳子昂と詩の革新」（高木正一『六朝唐詩論考』、創文社、一九九九年）
- 高橋加奈子「元結「説楚賦」三篇詩論」（『大東文化大学漢学会誌』四一、二〇〇二年）
- 谷口真由実「狂夫」（後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ―唐詩を読むために』東方書店、二〇〇〇年）
- 陳明新「賊退示官吏」（前野直彬編『唐詩鑑賞辞典』、東京堂出版、一九七〇年）
- 都留春雄『王維』（中国詩人選集六、岩波書店、一九五八年）
- 鄧芳「元結樂府における「比興体制」とその新樂府に対する影響―「春陵行」を中心に―」（『東京大学中国語
中国文学研究室紀要』一三、二〇一〇年）
- 豊田穰『唐詩研究』（養徳社、一九四八年）
- 永田知之『唐代の文学理論 「復古」と「創新」』（京都大学学術出版会、二〇一五年）
- 橋本循「詩の比興について」（橋本循『中国文学思想管見』、朋友書店、一九八二年）
- 林田慎之助『中国中世文学評論史』（創文社、一九七九年）
- 東英寿「北宋古文復興運動への視点」（東英寿『歐陽脩古文研究』、汲古書院、二〇〇三年）
- 深谷周道『顔真卿』（風媒社、一九七四年）
- 星川清孝「大唐中興頌」（星川清孝『古文真宝（後集）』新釈漢文大系、明治書院、一九六三年）
- 前野直彬「大唐中興頌序」（前野直彬『文章規範（正篇）』新釈漢文大系、明治書院、一九六二年）
- 増田清秀「唐の皮日休の正樂府と時事批判」（『樂府の歴史的研究』、創文社、一九七五年）
- 松本肇『柳宗元研究』（創文社、二〇〇〇年）

松本肇・川合康三篇『中唐文学の視角』（創文社、一九九八年）

松浦友久『中国詩歌原論』（大修館書店、一九八六年）

丸山茂『唐代の文化と詩人の心』（汲古書院、二〇一〇年）

森博行「元結と邵雍―地上の仙界をめぐる―」（『大谷女子大國文』三二号、大谷女子大学日本語日本文学会、二〇〇二年）

山島めぐみ「杜甫における『遊び』―『狂』の用例を中心に」（『中国文化』六四、二〇〇六年）

横山伊勢雄「詩人における『狂』について―蘇軾の場合」（『宋代文人の詩と詩論』創文社、二〇〇九年）

吉川幸次郎『中国散文選』（筑摩書房、一九六五年）

好川聰「元結的叙景と叙情」（『中国文学報』第六四冊、中国文学会、二〇〇二年）

〔中国〕

『嘉靖魯山県誌』（天一閣藏明嘉靖刻本景印、上海古籍書店、一九六三年）

*

王運熙「元結《篋中集》和唐代中期詩歌的復古潮流」（『復旦大學報（社会科学版）』一九七八、第二期）

王曉「元結墓碑考」（『中原文物』一九八九年、第一期）

王啓興「評元結的復古主義詩論」（『武漢大學學報（社会科学版）』一九八六年、第三期）

何詩海「曉鷄誰唱第一声―論元結在新樂府運動中的地位―」（『求索』二〇〇二年、第四期）

姬沈育「試論元結的散文成就」（『河南大學學報（社会科学版）』三九、一九九九年、第三期）

許總「論元結及《篋中集》詩人的人生態度、文学思想与創作傾向」（『徐州師範學院學報（哲学社会科学版）』、一九九六年、第一期）

桂多蓀『浯溪志』（湖南人民出版社、二〇〇四年）

黃麗容『元次山散文及創作理論——唐代古文運動先驅者文學理念新探』（秀威資訊科技股份有限公司、二〇〇六年）

吳小林「春陵行并序」（『唐詩鑑賞辭典』、上海辭書出版社、一九八三年）

吳小林「賊退示官吏并序」（『唐詩鑑賞辭典』、上海辭書出版社、一九八三年）

湖南省文物管理局祁陽縣浯溪文物管理處編『浯溪碑林』（湖南美術出版社、一九九二年）

顧福生「篋中集序」（孫望·郁賢皓主編『唐代文選』江蘇古籍出版社、一九九四年）

顧福生「九疑山圖記」（孫望·郁賢皓主編『唐代文選』江蘇古籍出版社、一九九四年）

顧福生「右溪記」（孫望·郁賢皓主編『唐代文選』江蘇古籍出版社、一九九四年）

顧福生「大唐中興頌」（孫望·郁賢皓主編『唐代文選』江蘇古籍出版社、一九九四年）

顧福生「自箴」（孫望·郁賢皓主編『唐代文選』江蘇古籍出版社、一九九四年）

顧福生「惡円」（孫望·郁賢皓主編『唐代文選』江蘇古籍出版社、一九九四年）

顧福生「時規」（孫望·郁賢皓主編『唐代文選』江蘇古籍出版社、一九九四年）

顧福生「謝上表」（孫望·郁賢皓主編『唐代文選』江蘇古籍出版社、一九九四年）

周訓凡主編『浯溪詩詞』（浯溪詩社、一九九二年）

周嘯天「欸乃曲五首（其二）」（『唐詩鑑賞辭典』、上海辭書出版社、一九八三年）

蔣寅「關於《篋中集》」（蔣寅『大曆詩風』上海古籍出版社、一九九二年）

鍾振振「誦唐人元結《春陵行》小札」（『中華文史論叢』第七八期、二〇〇四年）

聶文郁『元結詩解』（陝西人民出版社、一九八四年）

蔣煉·蔣民主注『浯溪詩文選』（香港天馬圖書有限公司、二〇〇三年）

蘇雨恒「增訂注釈全唐詩卷二二九 元結一」（陳貽煥主編『增訂注釈全唐詩』、文化芸術出版社、二〇〇一年）
蘇雨恒「增訂注釈全唐詩卷二三〇年 元結二」（陳貽煥主編『增訂注釈全唐詩』、文化芸術出版社、二〇〇一年）

孫昌武「讀元結文札記」（『社会科学戰線（長春）』一九八五年、第三期）

孫望『元次山年譜』（古典文学出版社、一九五七年）

孫望「元結評伝」（『蝸叟雜稿』上海古籍出版社、一九八二年）

孫望「篋中集作者事輯」（『蝸叟雜稿』上海古籍出版社、一九八二年）

湯擎民「元結和他的作品」（『中山大學學報』、一九五七年、第一期）

陶文鵬「元結和《篋中集》」（喬象鍾・陳鉄民主編『唐代文學史』人民文學出版社、一九九五年）

傅璇琮「篋中集」（傅璇琮編撰『唐人選唐詩新編』陝西人民出版社、一九九六年）

方介「元結的聖人觀」（『故宮學術季刊』第一六卷第三期、一九九九年）

楊承祖『元結研究』（國立編譯館、二〇〇二年）

李建崑『元次山之生平及其文學』（台灣商務院書館、一九八〇年）

李建崑「元結詩詩論」（『文史學報』第一六期、一九八六年）

竜龔「詩人元結」（『文學遺產』增刊、二、一九五四年）

劉法綏「讀元結作品小識」（『文學遺產』一九八一、第三期）

*

王運熙「釈「河岳英靈集序」論盛唐詩歌」（『復旦學報』、一九五七年第二期）

王夢鷗「唐詩人孟雲卿生平試探」（『輔仁學誌』第一八期、一九八九年）

何文匯『陳子昂感遇詩箋』（學津出版社、一九七八年）

- 韓理洲『陳子昂研究』（上海古籍出版社、一九八八年）
- 韓理洲『陳子昂評伝』（西北大学出版社、一九八七年）
- 喬象鍾・陳鉄民主編『中国文学史』（人民文学出版社、一九九五年）
- 黄浴沂『唐代新樂府詩人及其代表作品』（学海出版社、一九八八年）
- 吳明賢『陳子昂論考』（巴蜀書舍、一九九五年）
- 徐文茂『陳子昂論考』（上海古籍出版社、二〇〇二年）
- 錢基博『中国文学史』（中華書局、一九九三年）
- 孫昌武『唐代古文運動通論』（百科文芸出版社、一九八四年）
- 趙昌平「開元十五年前後——論盛唐詩的形成与分期」（『中国文化』二、一九九〇年）
- 梅新林・俞樟華『中国游記文学史』（学林出版社、二〇〇四年）
- 彭慶生『陳子昂詩注』（四川人民出版社、一九八一年）
- 游国恩・蕭滌非他主編『中国文学史』（人民文学出版社、一九六三年）
- 李丹『唐代前古文運動研究』（中国社会科学出版社、二〇一二年）
- 劉遠智『陳子昂及其感遇詩研究』（文津出版社、一九八七年）
- 劉国盈『唐代古文運動論稿』（陝西人民出版社、一九八四年）